
アルビトリウム

新条満留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルビトリウム

【Nコード】

N8972T

【作者名】

新条満留

【あらすじ】

(第一部)

この世界には表と裏が存在していた。
それを知る者はいない。

ひとつのブローチが少女の命を奪う。

それに苦悩する主人公の前に、

少女の双子の姉が現れ少女の死の秘密を告げる。

そして、突然現れた謎の女性。

彼女たちによって徐々に明らかにされていく、

異世界アルビトリウムとは……。
やがて、意外な過去が明らかにされるにつれ、
苦悩していく主人公たち。
だが、アルビトリウムの戦乱の渦は主人公たちを容赦なく巻き込んでいく。

(第二部)

復活のステラ。崩壊した世界。
ワタマの強大な力の前に途方にくれる諸族。
いよいよ、サムン・マールムとの決戦が迫る。
そして、ステラはワタマに一人立ち向かう。
仲間たちの運命はどうなっていくのか。
世界を終焉させる月の天井とは？
ついに感動のラストへと向かう第二部が始まる。

* 第二部連載中

出会い

アルビトリウム

第一部

第一章 はじまりのとき

アルビトリウムの伝説

そこは世界の表

そこは誰も知らずに

ひっそりと静かである

それを持つ者は幸せである

夢の中 幻の内に

アルビトリウムの扉は開かれる

運命の丘

その町には大きな公園があり、その外周を取り巻く通りは道に沿って紅葉の木が植えられている。その通りは町の人々から紅葉通りと呼ばれていた。通りを挟んで公園の反対側にある海に面する小高い丘は若者たちには運命の丘と信じられていた。恋しい人に巡り会える場所。そして、結ばれる場所であると。

傷心の少年

今、一人の少年がゆつくりとした足取りで紅葉通りを歩いている。少年の名前は本条護^{ほんじょうまもる}。この少年の頭の中を占めているのはたつたひとつのことだけだ。一月ほど前に亡くなった最愛の女性、桜木香^{さくらぎかほる}のこと。その悲劇と謎のせいで立ち直ることが出来ずにいる。これからのことも考えられず、苦悩し続けている。

「なぜ・・・」これが、彼の思考の壁となり先に進めなくしていた。この散歩道が公園を周回するように、この疑問が彼の思考を巡り続けている。

「なぜ、俺を残して死んでしまったんだ。」そう思うやいなや、楽しかった彼女との日々の記憶があふれ返って彼の心を満たし、現実の悲劇と記憶の中の喜びの格差に居た堪れない気持ちになっってしまうのだ。

その時の彼は気付くはずもなかった。丘の上から悲しそうな目で彼を見つめる女性がいることに。

出会い

本条護が高校に通うようになってからの楽しみのひとつは同じ学年にいた桜木香に毎日会えることだった。入学式の日には彼女を一目見た時から彼にとって忘れられない存在になった。利発さを漂わせる切れ長の眉、一度見たら忘れられない大きく輝く瞳、愛らしい二重まぶたの輪郭は目尻が切れ上がり精神力の強さを漂わせ、均整の取れた鼻とその下にわずかに笑みを讃えたかのような小さな艶のよい唇、その面影が彼の脳裏に焼き付いて離れなくなっていた。学校生活における彼女は快活で、他の女子よりも輝いて見えた。護にとって彼女は正に理想の女性だった。誰が最初に彼女の心を射止めるか、ライバルの男子たちの間ではいつの間にか話題になっていった。理想的な女性を目の前にした男と言うものは何も出来なくなっ

しまつらしい。廊下で護が友達と雑談をしていた時に彼女が傍を通り過ぎ、何かアクセサリーのようなものを落としたことがあった。それが彼の足元に転がってきた。彼はそれを拾って、落し物に気が付くはずに廊下を進んでいく彼女の後を追って、

「あのこれ・・・」と、彼は彼女を呼び止めた。

彼女が護の方に振り返った時、彼は初めて近くで見る彼女の美しさに言葉を失った。

「ありがとう。」彼女は彼に微笑みながら言った。

そして、それを受け取ると言葉が継げない彼に対し、もう一度微笑むと再び廊下を進んで行った。

どれくらい呆然としていたのだろうか。さつき話していた友達から名前を呼ばれるまで自分の存在を忘れていた。

桜木香は自分は男に生まれた方が良かったと思うことがよくあった。それは、困った人を見ると誰でも助けたくなくなってしまふからである。

中学の時、不良グループにいじめられている男子を見て、黙っていられなくなり相手が男子であるにも関わらず、

「あなたたち、一人を大勢でいじめて卑怯じゃない。」と、挑みかかったことがある。

不良グループもまさか女性から挑まれて本気になるわけにもいかず、普段から美人で通っている彼女からの挑戦に対応に困ってしまった。そして、彼女の睨みが本気なのを悟り、しぶしぶとそこから離れて行った。

そのことが学校中に知れ渡り、香はその日から友達とクラスメイトから‘アネゴ’と呼ばれるようになった。

自分のこつした性質はどこから来るのだろうかと自分でも不思議に思ったことがある。焦っている人、困っている人、悲しんでいる人を見ただけで助けたい衝動に駆られる。彼女の気持ちもその人たちと同じような痛みを感じているように思えるのだ。ただ、こういう

人たちが溢れ返^{あふ}っている世の中でいつも助けている訳にもいかないので、とても見ていられないと感じた時だけしか助けられないようにしているのだった。

「好きな人でも出来ればそういう人たちの痛さを同じように感じないで済むようになるのかしら・・・」と、思ったりすることがあった。

そして、高校に進学した時に、

「これでやっとアネゴというレッテルから解放されるんだわ。」
と、彼女はひそかに喜んだ。

一学期も終わりに近づいた頃、桜木香は町の公園を愛犬と散歩していた。梅雨の蒸し暑さの中、海から吹いてくる生暖かい風がまとわりついてくる。

「こんなに暑いと犬もかわいそうね。」

そんなことを思いながら、夏休みはどう過ごそうかと考えを巡らしていた。

「おじさんの山の別荘に行くのもいいわね。それから、友達と海にでも行ってみようかしら。」

そんな計画を思い描いて楽しんでいると、道の向こう側から見覚えのある姿がこっちに向かってくるのが見えた。

「本条君じゃない。」

本条護は話かけられるまで、彼女に気がつかなかったらしく、驚いた様子だった。

「あ、こ、こんにちは。」

護は舌がもつれて変な言葉を発してしまった自分を恥じた。実際、彼は夏休み前に桜木香と友達になるにはどうしたらいいかを真剣に考えているところだった。そのせいで当の彼女が目の前にいることにさえ気が付かなかったのだ。

「こんにちは。」彼女は微笑みながら言った。

護は自分の言葉が笑われたのかと思つて、ばつが悪かった。

「奇遇ね。こんなところで会うなんて。」彼女は探るような目つきで訊いた。

「そうだね。」その目つきに少し戸惑いながらも彼は答えた。「今、本屋に行つて来たところなんだ。これから、家に帰るところさ。」

護はさっきの失態を取り返さなくてはと必死になっていた。これが彼女と交わした初めての会話なのに、不意打ちにあつたとはいへあまりにも格好の悪い展開のような気がして恥ずかしさを覚えた。

「本条君つて、この近くに住んでるの？」

「うん。」彼は落ち着きを取り戻して答えた。

「ふうん。」彼女は喜びを隠せないといった顔つきで相槌をうつた。「意外と近いかもしれないわね。」

「な、何が？」再びどもりながら護は訊いた。彼は彼女のきれいな目がジツと自分を見つめていることにうろたえた。

「なんてきれいな目だろう」と、彼は改めて思った。

すると、彼女は微笑をたたえながら答えた。

「私の家とよ。」

「エエッ!？」

「私の家はここから、歩いて十分位のところにあるのよ。」

「俺の家はそのこの橋を渡つて、すぐのところだよ。」小さい子が宝物を発見した時の喜びに似た気持ちで彼は答えた。

この偶然は護にとつて思いがけず、心臓が胸から飛び出してしまわないかと心配するほどの驚きだった。しかし、それを相手に悟られないように必死の思いで表情に出さないように努めた。

「何て偶然なのかしら。こんな近くに友達が住んでるなんて思わなかつたわ。」彼女がうれしそうに言った。「その大通りで学区が別れるから、中学校は別々になつちやつたのね。」

「俺もびつくりしたよ。こんなに近くだったなんて・・・」彼は友達と呼ばれたことに気を良くしながら答えた。

「こんなに近いなら、しょっちゅう遊びに行けるわね。」

「そ、そうだね。」彼は偶然の出会いに加え、これほど長い会話を交わせたことに感謝しながら答えた。

それから、二人は歩きながら学校のことやお互いの両親のことについて話を交わしてから別れた。

夏休み

退屈な終業式の儀式が終わると生徒たちはそれぞれの夏休みの計画に思いを馳せながら、喜びに顔を輝かせて学校を後にした。校門ではカップルたちがこの夏休みをどう過ごすかの相談をし、あるいは友達としばしの別れを惜しむ者たちもいる。そして、この学校で新たに誕生したカップルの中に本条護と桜木香がいた。二人は公園で別れた日から、それまでお互い友達でなかったことが不思議なくらい学校で会話を楽しみ、いろいろな行動するのにもお互いがどこにいるのか確認し合わないでは済まなかった。そして、そんな二人が付き合いはじめるのは、もはや当然の成り行きだった。意気投合というのだろうか、お互いに気持ちの接点がいくつもあることを知り、価値観の類似点を見出し、共感し合える仲になれることを確認していた。

護は知らなかったが、香は護を前から意識していたという。香もどうやって護と仲良くなれるかと悩んでいたらしい。お互いに契機を探しながらも、その機会に恵まれずに数ヶ月を過ごしてきたのだ。きっと、遅かれ早かれ二人は結ばれる運命であったのだろう。そして、今は二人ともお互いの幸福に浸っていた。もう、二人の間に割り込めるものはなかった。

夏休みに入ると二人は毎日のように会って散歩したり、海水浴に行ったり、宿題をやったりして過ごした。そして、初めてキスを交わしたのは八月に入って間もない頃のことだった。二人に言葉はいらなかった。お互いに初めてのことだったのでどきまぎしたりした

が、二人にとってそれはロマンチックな思い出というよりも通過儀礼のようなものだった。当たり前前のことを当たり前前にすると言ったほうがいいかもしれない。それくらい、二人の心は融合していた。一人でいることは考えられなかった。朝起きた時から、夜寝るまでお互いのことを考え合った。

そして、あと数日で夏休みが終わろうとしていたある日のことだった。護は紅葉通りの近くの浜辺で女性の死体が発見されたことを知った。その女性の名前が桜木香だということも・・・

秋の気配

夏の終わり

香の死体はおかしなところだらけだったという。外傷もなく、病気にかかった訳でもない。浜辺で発見された時には既に死んでいたらしい。第一発見者はその海水浴場に遊びに来ていた家族連れの旦那さんだったということだった。発見時刻は朝五時頃で、夫婦で朝焼けでも見ようかと海の近くの旅館から歩いて浜辺に出かけたところ、何か白いものが見えたので何かと思って確認出来る距離まで近づくと、どうも人間らしいので最初は放っておこうと思ったが、こんなところで眠っているのは風邪を引いてしまうのではないかと思い直し、一応声を掛けておこうと思いついて近づいたと言ったことだった。最初は眠っているように見えたので、起こそうとしたが声だけでは起きそうもないので体を揺さぶるうして触ったところ既に冷たくなっていたと言ったことだ。服装は散歩に行く時に良く着るような気軽な格好だったらしい。死亡推定時刻は十二時から二時にかけての間ということだ、その時刻になぜそんなところに一人で行ったのか家族にも分からなかった。誰かと待ち合せをしていたのではないかとと思われる、当然護も事情聴取されたが約束はしていなかった。死因は急性心不全ということになっているが、前日に護と会っていた時には体の不調を訴えていなかったし、何かおかしな様子も全然見られなかった。死体の状態から死に際して苦しんだ様子が見られず、発病から短時間の内に落命したと思われると言ったことだった。警察も事件性はないとして、捜査を早々に打ち切り、謎だけが残る形となった。

香は何故そんな時刻に浜辺になんか行ったのか、何が原因で死んだのかは永久に解けない謎になってしまった。

しかし、この時の護は知らなかった。これが後に起こる出来事の

幕開けでしかなかったことを・・・

秋の気配

夏休みが終わり新学期が始まると護と香が付き合っていることを知っている仲間たちは彼に慰めの言葉を掛けてはみたが、それ以上彼にどう接したらいいか戸惑っている様子だった。実際、彼の様子は夏休み前のそれとは全く別人のようだった。明るさは影を潜め、発する言葉は快活さを失っていた。そんな彼の周囲から仲間たちは同情しながらも少しずつ距離を置くようになっていった。

九月の終わり頃になって香の死が同級生の間で話題にされなくなっていた頃になっても護はまだ彼女の死のショックから立ち直れずにいた。毎日のように彼女と過ごした思い出の場所を訪れては一人で呆然と思い出に浸っていた。その場所にいるだけで、彼女が生き返ってくるような気がするのだった。そして、その場所を離れてみてやっとそれが幻想に過ぎないのだと気が付くのがだった。生きるというのはどうということだろう。今まで感じたことのないほど、そうした疑問が目の前に迫ってくる。息をして、食べて、活動をするという日常の繰り返しが無意味に思えた。俺は本当に生きているんだろうか。死んでしまったのは俺の方で、彼女はどこかに生きているんじゃないか、と思ったりもした。

「今の俺は死んでいる・・・そうだ俺は生きていない」そう思った。

彼は気が付くといつの間にか彼女と出会った紅葉通りを歩いていた。こんなふうにいる出の中に生きていることが本当に生きていることになるんだろうか。

「なぜ・・・」と、またそれまで何度も繰り返してきた同じ眩きが洩れる。「なぜ、俺を残して死んでしまったんだ。」

そうして、彼は気が付いたのだ。夏が本当に終わったことを・・・

香の姉

今年の紅葉はひときわきれいに思えた。こんな風に紅葉を感じたことは今までなかった。風景がきれいに感じたのも香と付き合い始めて、二人で一緒に出かけるようになってからだ。自然というものがかれほどに美しかったとは・・・なんて詩人のような気持ちになったものだった。そんなことを思いながら、紅葉通りを家に向かつて歩いていたら、今見ている風景の中に違和感のようなものを感じた。最初は錯覚かと思った。しかし、何かがおかしい気がするのだった。それを確認出来るまでしばらくかかった。そして、その違和感の正体に気が付いた。香が道から少し離れた丘の上に立って、こつちを見ているのだ。

「香・・・」と呟くや否や、護は走り出していた。丘に向かつてまっすぐに、歩いている人たちを押しつけながら彼は駆け抜けて行った。途中転びそうになりながらも、何とか態勢を持ち直しつつ彼女のいるところに急いだ。そして、彼女のいるところまであと数歩というところで彼は立ち止まった。それまで彼女と思えた人影がはつきりとするにつれて、彼はだんだんとそれが彼女ではないことに気が付き、失望の念が沸いてきた。そして、こつちを見ている女性の姿と向き合えばらく動けずじまつた。

「あなたは本条護さんですね。」その女性は言った。

「そうです。」彼は全力で走ってきて乱れた呼吸を整えながら答えた。

「私は桜木遙さくらぎ はるかといいます。」香と似ているその女性は答えた。「ここにいれば、あなたに会えると思って待っていました。」

護は今起こっていることが理解出来ずにただ呆然と立ち尽くしていた。

「あ、あの・・・」次の言葉をどうつないだらいいか分からず、

護は言葉を詰まらせた。

「あなたは私が香と似ているので驚いていますね。」と、彼女は言った。「私は彼女の姉です。」

「香のお姉さん・・・？」

そういえば、彼女は違う高校に行っている双子のお姉さんがいると言っていたことがある。詳しくは知らないが、学校が遠いので学生寮に入っていると言っていた。夏休みに何日間か家に帰ってきたことがあるらしいが、護はまだ一度も会ったことがなかった。その彼女の姉を今目の前にして、思わぬ出会いに不意打ちを食らわされた形になってしまった。そういえば、香と初めて会話を交わした時も同じような不意打ちを食らったような感覚に襲われていたことを思い出した。どうも、桜木姉妹とはこうした形で出会うことが俺の運命らしいと思った。

「香からあなたのことはよく聞いていました。」彼が言葉を失ってしまったている様子なので彼女は言葉を続けた。「妹は素敵な恋人が出来たことを自慢げに話していました。」

「そんなこと・・・ないです。」再び込み上げてくる香との思い出に胸が熱くなるのを覚えながら彼は答えた。

「実は今日あなたを待っていたのはあることを伝えるためなので。」

「伝えるため？」

「はい。」彼女は少し間をおいてから言葉を続けた。「あなたは妹が死んだ理由を知っていますか？」

それは彼女が死んだ日から今日まで彼が心の中で何度も問い返し、彼を苦しめてきた疑問だった。なぜ彼女はあの夜、一人で浜辺に行き原因不明の死を遂げたのか。その疑問が今初めて会った彼女の姉の口から出てきたことに驚きを隠せなかった。

「知りません。」彼は驚きの表情を浮かべたまま答えた。

「その理由を知りたければ、明日の夜もう一度ここに来てください。その時に真実をあなたに教えます。」

「明日ですか？」護は首をかしげながら聞き返した。

「はい。明日の夜全てが明らかになります。」それだけ言うと、彼女は夕焼けで紅く染まった町並みに向かって去って行った。

手紙

真相

次の日は朝から抜けるような青い空で、残暑も厳しかった。護は今日知らされるはずの香の死の真相について昨夜からいろいろ思い巡らしていた。警察の調べでも分からなかった香の死のなぞを彼女の姉が知っているという。一体それはどういうことなのだろう。香の死に彼女の姉が何らかの形で関わっていたと言ったことなのだろうか。それとも、彼女の死について手がかりが見つかったとでも言うことなのだろうか。あらゆる可能性を考えてみるが、結論が出る問題でもなかった。それが今夜はつきりとすることなのだから、それまで待てばいいのだと分かっている。だが彼の思考は気が付くと、そのことばかり考えていた。彼女の姉のことを始めて見たが、香に瓜二つだった。違ふところと言えば、香の髪は肩にかかるほどの長さだったが、彼女の姉の髪は肩甲骨まで伸びているというところくらいだ。印象で言えば、香は活動的な雰囲気を漂わせていたが、姉の方はどことなく落ち着いている感じがする。彼女の姉を見た時、香と見間違ったのは外見が似ているということだけではない。何か香と彼女の姉には共通する何かを感じられる。それは双子だからということから来ることなのだろうか。敢えて言葉にすれば、何か同じ魅力みたいなものを感じ取ったのだ。そんなことを考えているうちに時間が経過し、下校の時間を迎えた。学校からの帰り道に紅葉通りを通っている時、昨日の丘を見渡してみたが、誰もいなかった。今日の夜ということだから、ご飯を食べてから行けばいいかなと思った。

既に辺りは暗くなってきて通りには街灯が灯り始めていた。

覚悟

晩御飯を済ませた護は急いであの丘に向かった。外は既に真つ暗で星たちが夜空の宝石のように輝いていた。走る必要を感じなかったが、いつの間にか護の足は駆け足になっていた。

「真相を早く知りたい。」その思いが彼を駆り立てた。

丘が見えるところまで辿り着くと、護の視線は丘の上に見える人影だけを見ていた。昨日見た香の姉に違いない。駆け足を少し緩め、これから知ることになることが少し恐ろしく感じ始めていた。

「いざと言うときになると、人間は恐れを感じ始めるものなんだな。」そう思いながら、丘の上の人影に向かって足を進めた。

彼は人影が誰か見分けられる距離まで近づいた時、そこにいる人が香なのではないかという錯覚に再び襲われた。そして、片手を伸ばせば彼女に触れられる距離にまで近づいた時、

「来ましたね。」香の姉が落ち着いた口調で言った。「約束です。あなたに香の死の真相を教えましょう。」

護の心臓が高鳴った。これからやっと知ることが出来る。この数十日の間、いくら考えても知ることの出来ないまま、彼の心を苦しめてきたことをやっと知ることが出来るのだ。

「事実を話す前にあなたに訊いておきたいことがあります。」と、彼女は少し神秘的な口調で言った。

「何でしょう?」護は待ちきれない思いをしながら尋ねた。

「あなたは真相を知った後、おそらく苦しむことになるでしょう。」と、彼女は言った。「それでも知りたいと思えますか?」

「苦しむ?」彼はいぶかしげに問い返した。「一体、どういうことでしょう?」

「それをまず訊いておきたいのです。あなたが香を本当に愛しているなら、あなたが選ぶことになるであろう答えはひとつです。しかし、もし中途半端な思いなら、真相は知らない方があなたのためです。」彼女は少し強い口調で言った。

護は考えた。彼女の言っていることはどういうことなのだろう。真相を知ると俺が苦しむことになるって、一体どういうことなんだ。香の死が俺にこれ以上の苦しみを与えられると言うのか？既に俺の心は十分以上の苦しみを感じている。体と心の大部分をもぎ取られてしまったようなものなんだ。ここにいる俺はその欠片でしかない。彼女への思いは俺にとつてそういうものだったのだ。彼女が全てだった。これ以上俺を苦しめられるものなどありはしない。真相を知ったことで、その欠片さえ奪われてしまうというなら奪うがいいのだ。既に俺は死んでいるも同じなのだ。今存在している俺は過去に護と呼ばれていた男の残骸でしかない。そして、その残骸がなくなつたとしても既に失つたものに比べれば、僅かなものでしかない。いいだろう。真相を知ることでも苦しんだとしても躊躇ちゆうしゆはしないぞ。

「俺は真相を知りたい。それがどういうことであっても、それを知らない限り俺は先に進むことができないんです。」と、護は言い放つた。

「わかりました。では、教えましょう。」と、香の姉は喜びに顔をほころばせながら言った。

異世界からの使者

辺りは虫たちが秋の夜長を喜びながら歌っているように鳴いていた。海のさざなみがその鳴き声に応えるかのように規則的な波音を響かせている。しばらくの間、二人とも見つめ合いながら沈黙していた。

「あなたは思った通りの人でした。香があなたを好きになつた理由が分かるような気がします。」彼女は打ち解けた口調で言った。

「真相を言う前に私たち姉妹のことを話さなければなりません。」

「俺は香の全てを知っておきたい。例えばそれがどんなことであってもです。」と、護ははっきりとした口調で言った。

私たち姉妹は幼い頃、この浜辺で良く遊んでいました。そして、ある日あまりにも楽しく遊んでいて辺りが暗くなったことに気が付かずになっていたことがあります。そして、二人の姿がお互いに見分けがつかなくなつてからようやくとつくに門限が過ぎていることに気が付いたので。今日のように星がきれいな夜でした。そして、二人でどうやって両親に言い訳しようかと相談し始めました。

その時、海の方から何か光るものがこっちに向かってくることに気が付きました。それが近づいてくることに二人とも恐ろしさで身動きがとれませんでした。そして、その光が人の形だと分かる距離まで近づいて来ました。しかし、人とは少し違っていました。体からは光を放っていて、目は赤い輝きを帯びていました。背中には何か羽のようなものが見えました。そして、それがすぐ傍まで近づいてきた時、それが大人の女性のように見えました。そして、私たちに向かって

「アルビトリウムの世界にあなたたちを招く。」と彼女は言いました。

二人とも恐ろしさのあまり何も言えずにいました。そして彼女は言葉を続けました。

「十年後の今日、迎えに来る。それまでに準備しておきなさい。」それからその女性は目が開いていられないくらいに光り輝いたかと思うと、消えてしまいました。

そして、彼女がいた辺りに何か赤く光る物が落ちていました。妹がそれを拾いました。それはブローチにも見えませんでした。私たちは今起こった出来事の意味が分からないまま、恐ろしさのあまり急いで家に走って帰りました。家では両親にひどく怒られましたが、さつき起こった出来事のためにそのことさえ安心感を覚えました。

妹は拾ったアクセサリのような物を大切に肌身離さず持っていました。私はそんな物捨ててしまいなさい、と言ったことがあります。ですが、それでも彼女は持ち続けていました。

そして、それから十年後というのが妹の死んだ日だったのです。

しばらく何も言えずに護は立ち尽くしていた。今、香の姉の口から聞いた事が信じられなかった。そんなお伽話おとぎばなしのような話を信じろ言う方が無理だ。しかし、香の姉が嘘を言っているとは思えなかった。どう解釈したらいいのだろう。そんなことが現実にあるのだろうか。香はその幼い頃の出来事を確かめにあの日、浜辺に行った。そして、それが彼女の死に繋がったと言うことなのか？アルビトリウムの世界って一体なんだ？香はそこに連れて行かれたと言うことなのか？だとしたら、彼女はどこかで生きているのだろうか？あまりに現実離れた話に、思考の行き場をどこにしたらいいのか混乱していた。仮にそれが事実だとして、俺はどうすればいいんだろう。彼女を連れ戻すことが出来るのだろうか？これでは事実を知らされても知らない時と大差がない。確認のしようがないではないか。

「信じられない、と言った顔してますね。」彼女は探るような目つきで言った。「しかし、これは確かに起こったことであり、現に香は十年後にあたるあの日あの場所で死んでいるのです。」

「それはそうですが、そのことが全て真実だとしても、俺はどうすればいいのでしょうか？」的外れな質問と分かっていたが、彼の口が勝手に動いていた。

「実は妹から死ぬ前に手紙を預かっていたのです。」と香の姉は言った。

「手紙？」

「香からあなたに渡して欲しいと夏休みに私が家に帰っていた時に渡されていました。そして、その時に自分に何かあったらあの日
の出来事をあなたに伝えて欲しいと言われていました。」

すると、彼女はポケットからその手紙を取り出し彼に渡した。彼の目から涙が溢れてきた。彼女が最後に書いたと思われる手紙だ。それだけで胸が熱くなり、彼の心が再び思い出でいっぱいになってくる。

「私の話はこれだけです。」彼女はそう言うと、「これで妹との約束は果たせました。これから、どうするかはあなたにおまかせします。私も妹から別に手紙をもらっていて自分のやるべきことをしなければなりません。」

「わかりました。遙さん、正直な話、俺は今聞いた事を未だに信じる事ができません。そんなことが香の死の真相だったなんて、何か現実離れし過ぎていて感じがして考えの整理が出来ないでいます。」

「無理もありません。私だって、あの出来事がなければ、他人からこんな話されて信じると言われても、信じられないでしょう。」と彼女は言った。

そして、彼女は暗闇の中に向かって歩き始め護の視界から消え去った。

手紙

護は家に帰ると、早速さつき遙から受け取った手紙の封を丁寧に缺で切り、中の便箋びんせんを取り出した。そして、見覚えのある筆跡に懐かしさを覚えながら読み始めた。

愛する護へ

これを読む頃には私の姉から私たち姉妹に起こった幼い頃の出来事を聞いていることと思います。たぶん、信じられないでどうしたらいいか迷ってるんじゃないかな。でも、それは真実です。私たち姉妹はそのことのある後、二人でいろいろ話し合いました。このことは誰にも話さないようにしようってことにしました。たぶん、誰にも信じてもらえないだろうしね。でも、それは紛れもない事実です。私たち姉妹に何故そんなことが起こったのか、今でも分かり

ません。たぶん、誰にも・・・

ただ、私はその日拾ったブローチを今も大切に持っています。それが事実であることの証だから。姉には内緒にしていたんだけど、ブローチは不思議なことに毎年その出来事があった同じ日の夜になると赤い光を放つのです。そして、光った後にブローチの表面には一年経った証に宝石のような石がひとつ埋め込まれているの。そして、今はそれが九個になっています。今度来る同じ日に十個になるんじゃないかな。まだ、分からないけどね。

護にこのことを話さなかったのは、たぶん信じてもらえないだろうと言ったこともあったけれど、それよりもどんなことになるか分からないことにあなたを巻き込みたくなかったから。だから、内緒にしていたことを許してね。

そして、私はこのことが事実だったことをもう一度確かめるために十年後にあたるその日に同じ場所に行くつもりです。それがどんな結果を招くか分からない。今私を苦しめているのはあなたに会えなくなってしまうかも知れない可能性です。でも、私の心は行かなくてはいけなくて告げているの。だから、行くことにしました。

それから、もし私に何かあった時にはこの手紙を姉に託して護に渡すように頼んでおくつもりです。これを読んでる時がいつなのか分からないけど、姉には時間をおいてから渡すように頼むつもりです。もし、私がいなくなつてすぐに渡されても混乱しているかもしれないあなたが落ち着いて読めないような気がするからね。だから、その間苦しむことになつたとしても姉のせいではなく、私のせいでから姉を恨まないで欲しい。たぶん、護ならそんな心配はないだろうけど・・・

そして、最後にどうしても言っておきたいことがあります。それは世界中の誰よりも私はあなたを愛しています。私にとってあなたはかけがいのない存在です。あなたに出会えて本当に良かった。お別れの言葉を言いたくありません。だから、さよならは言わないことにします。それじゃ、またどこかで・・・

追伸 私がいなくなっても悲しみは最小限になることを願っています。もし、もう会えなくなった時にはあなたを幸せに出来る女性が早く見つかることを祈ります。

あ

あなたを愛する香より

護は自分でも分からないうちに涙が頬を伝っていた。溢^{あふ}れてくる涙で手紙が濡れてしまわないように慌てて手紙を離れた。彼女の思いが伝わってきて心が張り裂ける思いだった。再び彼女がいなくなつたあの日の痛みが心に広がってきた。

「くそっ」と、吐き捨てる言葉を誰にもなく発していた。自分が彼女の覚悟に気が付けなかったことに悔しさを覚えた。これほどの思いをしている彼女だったのに彼の前ではそんな様子は微塵^{みじん}も見せなかった。それがどんな思いだったか考えると、彼女の健気な思いが伝わってくるようで護の心に突き刺さって来る感じがした。

「お前以上の女性なんているものか・・・」と、彼は呟^{つぶや}いていた。

事件

事件

高校二年に進級した護がその噂を耳にしたのは夏休みが終わろうとしていたある日のことだった。浜辺で女性の死体が発見された、という話だった。名前が桜木遙ということを知ったのはそれから数日してからだった。近所の噂では一年前に死んだ彼女の妹と同じ場所だったらしい。そして、護だけはその死のその理由が何となく分かっていった。彼女は自分のやるべきことを果たしたのだ、と。桜木家ではこの一年の間に二人も娘を失った悲しみに暮れていることだろう。護には子供を失った親の痛みというものがあるのか想像がつかなかった。これは子供を持ったものにしか分からないのだろう。

護はこの一年の間に何度かその場所を訪れてみたが、これといった手がかりも見つからず、虚しさが増すばかりだった。香も彼女の姉もどこかに生きている、それだけは確かに思えた。彼が分かっていることはそこが今護が生きている世界とは違っている世界ではないということだけだった。そして、その世界の名前はアルビトリウムというのだ。

クラヴィス

高校に入ってから二度目の夏休みが終わわり、始業式を迎えた。式が終わわり、護はいつものように紅葉通りを家に向かって歩いていった。夕方と言つにはまだ早い気がする時刻だが日が傾き秋の夕暮れが近づいていることを思わせていた。護は誰かに見られているような気がして、その気配の方に目を向けてみると、白人の若い男性がいた。

彼は公園のベンチに座りながら、護を見つめていた。護は外人では言葉が通じないかもしれないと思い、無視することにした。そして家に向かって再び歩き始めた。しかし、何か後をつけられている気がしたので後ろを振り返って見ると、さっきの外人が護の後ろから付いて来ていた。何かやばいことになったのではと思い、足を速めた。橋を渡るところまで来た時、もう一度後ろを振り返って見るとさっきの外人がさっきより距離を縮めて付いてきていた。護は逃げることは諦めて、勇気を出してその男性に話してみることにした。

「何か用があるんですか？」その男性に近づきながら訊いてみた。彼は少し驚いた様子をみせたが、彼の質問に流暢な日本語で答えた。

「あなたが本条護さんですか？」

「そうです。」護も相手が日本語が分かることに安心しながら答えた。

「そうか。やはり、あなたが・・・」と、その外人は言った。

護は次の言葉を待った。

「実はある人から、これをあなたに渡すように頼まれたのです。」その外人はポケットに手を入れながら答えた。

最初、護はナイフでも出してくるのではないかと警戒したが、それが小さな宝石のように見えたので少し安心した。

「これは？」マモルはその外人の掌にあるものを見つめながら言った。

「クラヴィスです。」

「は？」護は聞き慣れない言葉にうろたえた。

「これをあなたに渡すように言われています。」外人は微笑みながら言った。「受け取ってもらえますか？」

「はあ。」それを受け取りながら護は答えた。

「確かに渡しましたよ。では、私はこれで失礼します。」そう言うとその外人は去って行ってしまった。

護は立ち尽くしたまま、遠ざかる外人の背中を見つめ続けた。

そして、今受け取ったものをよく見ると、それは十一個の石が嵌め込まれたブローチだった。

決意

ブローチを受け取った護はその夜ずっとそれを見つめながら考えていた。これは香が手紙で書いていたものに違いない。そして、これが香から彼女の姉の遙に渡されていたのだ。そして、経緯は分からないが遙がさっきの外人に、俺に渡すように頼んだのだ。そして、このブローチに嵌め込まれている石は香の手紙に書いてあった時は九個だったのに今は十一個になっている。つまり、石は増え続けている。十年を経て二人の命を奪った石が今俺の手元に来たのは遙が何かを俺に伝えたかったのに違いない。香は遙に手紙でこのブローチの秘密を伝えたのだろうか。そして、遙は俺に手紙を残していない。あの外人が手紙を渡すのを忘れていたのだろうか。いや、あの残さなかったのは、それは必要ないと思ったからだ。彼女と話した時、彼女は俺に言ったのだ。真相を話すと俺を苦しめることになる。でも俺は真相を知ることを選んだ。香への愛が俺の全てだったからだ。それを理解したからこそ、遙も俺に真相を話したはずだ。そして、彼女は秘密を知った上で死ぬことになるかもしれない場所に香との約束を果たすために同じ日にそこに行ったのだ。この石を俺に残していったということは、もし俺の気持ちが変わらなければ道を選べと言ったことなのだろう。苦しむことになるかもしれないということはそういうことなのだ。だが、俺の気持ちは既に決まっている。一年後、あの場所に行く。そして、香がいる世界と一緒に彼女と過ごしたい。アルビトリウムという世界がどういう世界なのか知らない。今生きている世界のようにではないかもしれない。恐ろしい世界なのかもしれない。それでも、香がいるならこの無意

味に過ごしているこの世界に比べればずっといいはずだ。

名残

これからの目標が決まってしまうと、不思議なことに精神が活動的になった。来年の夏休みまでに今生きている世界のことをもう少し知っておきたいとも思った。それから、現在の科学が知り得る異次元のことも調べておこうと思った。図書館に通ってその関係の書物を読み漁った。それから、伝説と言われている書物なども調べてみることもおもしろいなと思い始めて、その関連書物にも目を向けてみた。家ではインターネットを使って、その方面のサイトなども閲覧したりもした。しかし、アルビトリウムに関して分かるような情報は全く手に入らなかった。異次元についても数学的な抽象概念でしかなく学者たちが発見出来ていることは参考にもならないと結論した。世界には古代から語り継がれているさまざまな伝説が残っているが、どれも神話と宗教の融合した不確かな話ばかりで、アルビトリウムに関係していると思えるものはひとつも発見出来なかった。ただ、いろいろと調べていく内に護の思考方法はかなり磨きがかかっていった。護自身も自分が賢くなっているような気がするのだった。知識もかなり増えて、今まで知らなかった事柄について理解出来るようにもなり、この世界を新鮮な目で見られるようになっていた。生きていることについてもそれまで考えたことがなかったくらい考え始めた。魂というものが存在するなら、きっと香の魂は肉体から離れてどこかで生きているのではないかという可能性がある。魂と肉体については現在の科学でも解明出来ていない謎のひとつだ。きつと、俺はそれを知ることになるのだろう。もらったブローチに嵌め込まれた石が十二個になると同時に……

親友

「護、今日は図書館に行くのか？」真司が護のところ走りながら訊いてきた。

「そのつもりだ」

「あんまり読書ばかりしていると、精神が腐るぞ。」にやにやしながら真司が言った。「そんなに本ばかり読んで、何か調べてることもあるのか？」

「まあな」手を頭にあてながら護は答えた。

「まさか女性心理についてじゃないだろうな？」護の肩を叩きながらおどけた調子で真司が質問した。

「人生についてさ。」少し真剣な表情で護は答えた。

「おいおいそんな柄じゃないだろう。」真司が護の顔を軽く突っつけた。

「時間がないからな。」護は少し顔を空に向けた。

「時間がないって、どういう意味だ？」

「内緒だ。」少しおどけた口調で護は答えた。

「おいおい、親友にそれはないだろう。」真司はがっかりしたという口調で言った。

高校三年になった護はこの星野真司を本当の親友だと思っていた。二人が知り合ってからまだ数ヶ月しか経ってないが、知り合ったその日からお互いに何か惹かれ合うものを感じていた。きつかけも高校三年のクラス替えて、出席番号がひとつ違いのため真司の席が護の前になったことから、何となく話しをするようになったことからだ。同じ学年なので一年の時からお互いに顔を見知ってはいたが、それまで話したことはなくこの時に交わした会話が初めてだった。しかし、話し始めると何か共感するものをお互いに感じ始め、馬が合うことを確認出来た。同じ物を見て、同じことを考えていたり、同じ物に興味を覚えたりした。行きたいところや、やりたいことも同じものが多かった。そんな二人だから、一緒に行動をするこ

とが多くなり、学校から帰る時も家が離れているにも関わらず、毎日道が別れるところまで一緒に帰ったりしていた。そして、学校が休みの日にはお互いに彼女がいなかったことから、一緒に遊んだりしていた。

「まあ、いずれ分かるさ。」真司の方に顔を向けながら護が言った。

「ふうん。それなら、その時を待つとするか。」真司も問い詰めることを諦めた。

「これだけはその時が来ないと何とも言えないんだ。」独り言のように護が呟いた。

梅雨の日にしてはめずらしく青空が広がっていた。

十二年目の夏

十二年目の夏

あと数日で夏休みを迎えようとしていたある日、真司が海水パンツを買いに行こうと学校帰りに護を誘った。特に予定もないので、この誘いを護は承諾した。そして、一度家に帰って支度を済ませてから落ち合おうということにした。護が家に帰ると、両親から自分を訪ねて来た女性がいたことを告げられた。両親も見覚えのない女性だと言っていた。護も家に自分を訪ねて来るような女性に心当たりがなかった。二年前なら、香がよく来ていたが、あのことがあったからというものの、彼を訪れるような女性が他にいたかどうか覚えがなかった。そして、真司と待ち合せがあるから出かけて来ると両親に告げてから外出した。途中、紅葉通りを通った時に何気なく遙と会った丘に目を向けて見た。すると、そこからこつちを見ているような人影があることに気が付いた。少し離れていて顔ははっきり分からなかったが、それが女性であることは分かった。しかし、約束の時間に遅れてしまうので、特に気にも止めずに道を急いだ。

男の買い物というものは簡単なもので、あれこれ女性のように迷って買うようなことはない。行ったところにある物の中から一番気に入った物を探すといった感じだ。狙っている物があらかじめあるなら話は別だが、護も真司もそこまでこだわるとはなかなかなかった。そして、早々に買い物が終わらせるとデパートの喫茶店でコーヒーを飲むことにした。護と真司は味覚が似ているせいか同じものを注文する傾向にある。だから、敢えて違う種類のコーヒーを頼むように暗黙の了解があった。男二人で同じものを頼むのは抵抗を感じるのだ。コーヒーが運ばれてくると真司が口を切った。

「なあ、ちょっと訊いていいか？」

「ああ、いいよ。」と護は答えた。

「あのさ、訊きにくくて今まで訊けなかったんだけど、もう時間も経ってるしそろそろ大丈夫なんじゃないかなと思って・・・」少し遠慮気味に真司が言った。

「何のことだ？」護はきょとんとして言った。

「これは噂で聞いてたことなんだけど、二年前にお前と桜木香が付き合ってたというのは本当なのか？」声を落として真司が訊いた。
「ああ、本当だ。」護は少し古傷をいじられてるような感覚に襲われていた。

「そうか・・・それで彼女は病気で死んだって聞いたんだけど、どんな病気だったんだ？」

「心不全だった。」護は当時を思い出して答えた。

「そうだったのか・・・ごめんな変なこと訊いちゃって。」真司は護が考え込み始めた様子なので失敗したと感じ始めた。

「いや、いいんだ。もう時間も経ってるしな。昔のことだよ。」
護は心にあることとは全く違うことを言った。彼にはそのことが昔のことだと全然感じていなかった。それどころかこれから彼女に会うための準備さえしているところなのだ。だが、真司にこのことが分かるはずもなかった。自分の心の中だけで決心して計画してきたことなのだ。このことで真司を責めることは出来ない。

「ただ、お前がそれから彼女を作らないのは、そのことを引きずっているんじゃないかと心配だったのさ。」真司は相手を思い遣る口調で言った。

「かもしれないな。完全に忘れるというのは無理だ。あの時、付き合ってたということは事実としてあるわけだし、喧嘩して別れたと言っわけじゃないしさ。」

その時、護は真司になら真実を話しても構わないんじゃないかという衝動に駆られた。

「だよな。彼女は当時、誰が最初に付き合うことになるかって、噂にさえなっていたくらい美人だったからな。それがお前だったとはな。その噂が広まる前に夏休みになって、休みが明けてみたら

彼女がもういないってことで俺のクラスではどう反応したらいいか困ってそうなやつも多かったよ。「真司が苦笑いを浮かべながら言った。

もしかすると、真司も香のことを狙ってたんじゃないか、という疑いが護の心に沸いてきたが、今となってはどうでもいいことのようにも思えた。知ったところでどうなるものでもない。

「そんなやつもいたかもしれないな。ただ、あの時の俺は周りのことなんて、とても考えられるような状態じゃなかった。なんか世界がひっくり返ったような感じだった。」護は当時を振り返りながら言った。

「まあ、そうだろうな。俺がお前だったら、きっと同じだったと思うわ。」真司が護に同情の目を向けながら言った。

これでこの話題について二人とも続けようとしなかった。それから、二人はデパートをあとにして、二人の道が別れるまで夏休みの計画や好きな女性のタイプなど話し続けた。

最後の夏休み

「後少した。」と護は思った。「後一ヶ月もすれば、全てが変わる。あの浜辺で何か特別なことが起こるはずだ。」

終業式の日には仲の良かった友達に最後の挨拶の気持ちをこめてさよならを言った。言われた本人には、そのことが伝わるはずもなかったが、それは護自身がそう思ってるだけで十分だった。真司とはまだ夏休みにも会うことになっているので、まだ別れの言葉を言う時間は十分にあった。護は改めて今までの自分の十八年という短い人生を振り返ってみて何か思い残していることがないか考えてみた。「大丈夫だ。」護はそう思った。「やることは全てやったつもりだ。あとは香の死んだ日までこのまま待てばいいだけだ。」

まだ、梅雨の明け切らない空はどんよりとした黒い雲で覆われて

いた。雨粒が屋根を叩いて、けたたましい音を立てていた。

記憶

「これでほとんどの火炎系は思い通りに出せるようになったわ。」と、カオルは言った。「マオ様はかなり無理難題言うけど、言う通りにしていけば成長できることは間違いないわね。」

そう言っていると、香はコロシウムから出て外の空気を吸いに出かけた。アルビトリウムの空は青く澄み渡っていた。それから、呟くよう彼女と言った。

「マモル・・・」彼女の目から涙が溢れてきた。

「カオル！」コロシウムから彼女を呼ぶ声がした。「マオ様がお呼びです。」

「はあい。今行きます。」と、カオルは応えると涙を拭きながらコロシウムの中に姿を消して行った。

謎の美女

「おーい、護。」真司が手を振りながら護を呼んだ。「このイカ焼きうまいぞ。」

「おいおい。さつき昼メシ食べたばかりなのに、良く食べられるな。」真司に近づきながら護は言った。

「だってよ、いいニオイがして、我慢出来なかったんだ。」口の周りを醤油まみれにしながら真司は言った。

護は今日、真司と約束して二人で紅葉通りの近くの浜辺で海水浴をしに来ていた。雨の心配はいらないほどに今日の空は澄み渡っていた。男二人で行くのも悲しい気がしたが、護には真司と最後の思い出作りのつもりもあった。もうすぐ別れなければならなくなるこ

とが寂しく感じられた。こんなにいい友達に会えたことが、人生でこの上にない幸せだと思った。きっと、この先何もなかったら生涯の友となったことだろう。そんなふうに思ったりした。しかし、それは永遠に適わないはかない夢なのだ。俺はもうすぐこの世界から消え去ることになる。護はそう思いながら、真司に付き合っただけのようにイカ焼きをひとつ買い、口いっぱい頬張った。

その時に何気なく例の丘の上に視線を送ってみると、こっちを見ている人影が付いた。何か見覚えのある気がして、少し視線を止めて観察してみた。それに気が付いた真司が言った。

「知ってる人か？」

「いや、ただ何となく見覚えのある気がするんだけど、思い出せない。」と、護は答えた。

「じゃ、気にするな。」と、真司が言った。「それよりさ、また泳ぎに行こうぜ。」

「ああ。」護はその人影が気になりながらも真司と一緒に海岸に向かって歩き始めた。

それにしても夏の海と言うのはカップルと家族連ればかりで、二人でいるのは自分たちだけじゃないかと思えた。完全に浮いているような気がして、少し気が引けて来る。でも、真司はそんなこと全然気にしていないようだった。きっと、あいつは人目をはばかりと言った感じが無いに違いない、と護は思った。

「お前さ、男二人でいて恥ずかしい、って思ったりしないのか？」と、護が訊いた。

「なんでよ。全然いいじゃんか。お前と俺だけ。楽しければ、全然オツケーだよ。」

真司にあっけなく答えられて、それ以上護も何も言えなくなってしまう。

「何ていいやつなんだ。」と、護は感動を覚えた。

こいつと別れなければならぬなんて、ひどい損失のような気がしてならなかった。俺がいなくなったら、真司はどうするんだろう。

悲しむのかな。きつと、こいつなら俺がいなくなってしまうことを自分のことのように感じて悲しんでくれるんじゃないかな。そうに違いない。だとしたら、俺の秘密を打ち明けてしまってもかまわないんじゃないか、と思えてくる。

「真司。」泳ぎ疲れた体を休めようと浜辺に向かいながら、真司に向かつて護は言った。「あのさ、明日何か予定あるか？」

「明日はお盆になるし、親父の実家に行くことになってる。」と、真司が答えた。

「そうか。じゃ、その後、空いてる日ないか？」

「お盆が明ければ、特に予定はないかな。」

「帰って来たらさ、電話くれないか？」護は真剣な目になりながら言った。

「ああ、別にいいよ。何かあるのか？」真司は護の表情が少しおかしいことに気が付いて訊いた。

「とても大切な話だ。」護は空を見上げながら答えた。

それから二人は夕方まで泳いだり、岩場でカニ捕りをしたりして楽しく過ごした。真司が大きいカニを取り逃がしたことを悔しがったりしたが、それを捕って帰るわけにも行かないだろうと説得して諦めさせた。

護は真司と別れた後、あの丘にもう一度目をやったが、そこには誰も見当たらなかった。そして、紅葉通りを家に向かつて歩いていった時、公園の中からこつちを見ている女性に気が付いた。それが、さつき丘の上から護の方を見ていた人影だと気が付くのにそれほど時間は掛からなかった。そして、彼が彼女に気が付いたことを察したのか、彼女は彼の方に向かって歩いてきた。近づくにつれて、彼女の顔の美しさに護は驚かされた。今まで見た女性の中で香以外にこれほどきれいな顔を見たことがなかった。そして、彼女は護の手の届くところまで近づくと、

「本条護。」と彼の名前を呼び捨てた。

「え？」彼は驚いて呆気にとられながら言った。「どうして、俺

の名前を知ってるんですか？」

「私はあなたの全てを知っています。」と、その美しい女性は言った。「あなたが生まれた時から今まであなたが何をしてきたか、何を考え、何を感じ、何に興味を持ち、何を大切にしたらか、全てを知っています。」

辺りは夕暮れが美しい紅色に町並みを彩り、蝉の鳴き声がかだましていた。

アルビトリウムの影

異世界

しばらくの間、二人とも何も言わなかった。護は今彼の前に立っている美しい女性が言ったことの意味が理解出来ずにいた。彼女は何を言っているんだろう。俺の全てを知っているってどういうことなんだ。いつも俺を見ていたということなのか？ だけど、この女性はどう見ても俺より少し年上程度にしか見えない。それでも俺を観察してきたなんてあり得ない。

「俺の全てって、どういうことでしょう？」 護は少し警戒するように尋ねた。

「あなたをずっと見てきたと言うことです。」

「見てきたって言うても、あなたは俺とそれほど年が離れているようには見えませんが・・・」この女性は危ない人なんじゃないかと思いつつ、彼は尋ねた。

「あなたはクラヴィスを持っていきますね。」と、彼女は言った。

「クラヴィス？」と護は問い返した。

「あなたが持っているブローチのことです。」

なぜこの人はそのことを知っているんだろう。誰にもそのブローチのことを話したことはない。知っているのはこれを俺に渡した外人くらいなものだ。そうか、あの外人がこの人に話したに違いない。そして、それを聞いたこの女性はそれが欲しくなって奪いにやってきたのかもしれないぞ。

「あれがほしいんですか？ あれは渡すわけにはいかない。」と、彼は声を荒げて言った。

「いいえ。あれはあなたのものです。あなたに渡るように私が仕組んだのです。」と、彼女は言った。

「なんですって？ どういうことですか？」少し興奮気味になって

彼は言った。

「あなたにクラヴィスを渡した外人は私の使いです。」と彼女は言った。「そして、あのクラヴィスは異世界への扉を開くための鍵なのです。」

「異世界？」彼は少し警戒を解きながら訊いた。

彼女の話はそれから、その謎について護に語り始めた。

あのクラヴィスはアルビトリウムへの扉を開く鍵。アルビトリウムはこの世界の裏側あります。あなたが今生きている世界をあなたは全てと思っっているでしょうが、真実はアルビトリウムが表でこの世界は裏側なのです。アルビトリウムではこの世界をマテリアと呼んでいます。このマテリアの者はアルビトリウムへ行くことも知ること出来ません。しかし、アルビトリウムからはマテリアへ扉を使つて自由に来ることが来ます。しかし、帰るためには閉じられた扉を開くためのクラヴィスが必要になります。しかし、そのクラヴィスを持たずにこっちの世界に来てしまうと、アルビトリウムに帰るためにマテリアの者になって人間として一生を送らなければなりません。そのために多くのことを犠牲にしなければならないのです。アルビトリウムで持っていた姿を捨て、マテリアの胎児を探してそこに自分の魂を移すことになります。そして、アルビトリウムで持っていた力と記憶を失う。そうして、このマテリアで人間としての一生を送り、その肉体としての死が訪れるまで暮らすことになるのです。その後、やっとアルビトリウムに帰ることが出来るのです。

護はその話を聞いている間、この女性は頭がどうかしているんじゃないかという思いが湧いてきた。この話を信じると言われても無理だ。どう考えても現実離れし過ぎている。ただ、アルビトリウムという言葉は香たちから聞いていた名前と一致している。単なる偶然にしては言葉が珍し過ぎる。だが、こんな突拍子もない話をどう解釈したらいい。もう、走って逃げてしまおうか。

「あなたは私から逃げようと思っ
ていますね。」彼女は護の考
えを見抜いた。

「え？」護は驚いた。

「この話は今のあなたにとつてはと
ても信じられないでしょう。」
と、その美しい女性は言った。「し
かし、あなたに信じてもらうた
めにもう少し話しておきたいこと
があります。」

そう言ってから、彼女は再び話
し始めた。

あなたは桜木姉妹のことをご存知
のはずです。彼女たちは今アル
ビトリウムであなたのを待ってい
ます。彼女たちは元々アルビト
リウムの者だった。そして、あな
たもアルビトリウムの者なので
す。ある時、アルビトリウムで妖
獣たちを相手にした大きな戦い
がありました。そして、あなたはそ
こでは強力な戦士でした。あなた
は味方の敗勢を見て、単身で敵に
向かって行つたのです。とても一
人で勝てるような相手ではありま
せんでしたが、全身に傷を負いな
がらも善戦していました。しかし、
戦いの中マテリアへ通じる扉に
落ち込んでしまいました。そして、
クラヴィスを持っていなかった
あなたはアルビトリウムに帰るこ
とが出来ず、帰るためにこのマテ
リアで人間として一生を過ごすこ
とにしたのです。そして、この町
の本条家に胎児がいることを発見
し、そこに宿ることに決めた。そ
して、アルビトリウムの姿も記憶
も力も失って今ここにこうしてい
るわけです。

それから、桜木姉妹はアルビトリ
ウムであなたと一緒に戦っていた
魔道士とエルフです。あなたを追
つてこのマテリアに来ましたが、
既にあなたが本条家の胎児に宿つ
てしまったことを知り、連れ戻す
ことをあきらめた。そして、あな
たとここで過ごすために同じよう
に胎児を探した。彼女たちは本条
家からそれほど離れていないこ
ろに双子の胎児がいることを知り
、そこに宿ることにしたのです。
このマテリアで知り合うことにな
ることに全てを託して。

護の頭は混乱していた。今聞いている話は本当のことなのか、悪い冗談なのか、それともこの女性の作り話なのか判断することが出来ずにいた。そんなことがあり得るのか？悪い夢なら早く覚めて欲しかった。何もかもが分からなくなった。しかし、香もその姉の遙も現に不思議な死を遂げている。だが、それが今の話を信じるための材料だとしても証拠というにはとても弱いものでしかない。

「ひとつ訊いておきたいことがあるのですが、そのアルビトリウムという世界に帰るにはあのブローチがあればいいとしたら、どうして今まで連れ帰ろうしなかったのですか？もつと小さいうちに連れ帰っても良かったんじゃないですか？」護も自分で言いながらなかなかいい質問をしたことに喜びを覚えた。

「それはあなたが敵から狙われているからです。もし、小さいうちに連れ帰れば今あなたがこのマテリアで過ごしているそのままの姿で帰ることになります。老人で死んだ場合は老人のままアルビトリウムで出現することになります。そして、本来はここで一生を過ごさなければ帰れない者を強制的にアルビトリウムに帰す場合はクラヴィスを十年間この世界においておかなければなりません。この世界の持つ波長にクラヴィスを同調させるために十年が必要なのです。あまり早く渡してしまえば、身体的に劣っているあなたは妖兽たちの格好の餌食えじきになってしまおうでしょう。」と、彼女は答えた。護は降参した。彼女の話にはどこも欠点が見つからなかった。作り話にしては筋が通り過ぎている。今でつち上げたにしても、彼女には考える時間はほとんどなかったはずだ。

そして、彼は確認のため最後の質問をした。

「最後にもうひとつ訊かせて下さい。香たちはどうして俺を追ってきたんですか？アルビトリウムに俺がすぐに帰れないと分かった時点で、俺をあつちで待つことも出来たんじゃないんですか？」

彼女は護をじっと見つめていた。そして、こう言った。

「それは二人ともあなたを愛していたからです。」

既に辺りは暗闇が覆い、星たちが夜空に瞬いていた。

アルビトリウムの影

護は女性と別れて家に帰ってから、彼女の話をもう一度考え直してみた。しかし、話のどこにもおかしいところを見つけないことが出来なかった。嘘にしては筋が通り過ぎている。もし、俺がアルビトリウムの者だとしても、そこにいたという証拠はどこにもなかった。今、確かなのは手元にあるこのブローチと桜木姉妹が不思議な死を遂げたと言う事実だけだった。

そして、あの女性が最後に言い残した言葉を思い出していた。

クラヴィスは一人だけしかアルビトリウムに戻すことが出来ない。そして、力を取り戻すために一年かかります。ちょうど一年後の十二時から一時間しか鍵としての役目を果たしません。その日が今から二週間後になります。あなたは既にそれを持ってそこに行く覚悟を決めているようですが、その時に私も一緒にあなたと帰ることになりません。

でも、一人しか帰れないんじゃないですか？

私は一人ではありません。私はアルビトリウムではあなたの幻霊でした。つまり、あなたと私は契約を交わし、私はあなたの守護を司っていました。幻霊はその主と一体となり、絶えず傍にいて、主を守るのが役目なのです。しかし、この世界に来たと同時に引き剥がされ、私は主を失ってしまい、帰ることも出来ずにこの世界であなたを見守りながら彷徨っていたのです。アルビトリウムの者はこの世界では姿を自由に消すことが出来ます。だから、必要なとき以外は姿を現さず、あなたを見守っていたのです。そして、アルビトリウムに帰る時、私は再びあなたの幻霊となりあなたを守護します。

その日まで私はあなたの前から姿を消して見守り続けます。
そういつと、彼女の姿は闇に飲み込まれるように消えてしまった。

異界送り

二つのブローチ

それから数日経ったある日、護に真司から電話があった。

「元気だったか？」真司の声が受話器から聞こえてきた。

「ああ。なんとか。」力のない声で護が答えた。

「なんとかって、何かあったのか？」真司が心配そうに言った。

「まあ、いろいろありすぎてさ。頭が混乱してる感じだ。」

「そっか。困ったことあったらいつでも相談してくれ。一人で悩むのは体に毒だ。」

親友というのはありがたい。そんなことを思っていると、真司が続けた。

「約束だから、電話したんだけど、何か用でもあったのか？」

「おっ、そうだったな。」真司との約束などすっかり忘れてしまっていた自分に気が付きながら護は言った。

「おいおい、忘れてたな。ひでえな、自分から言い出しておいてさ。」真司ががっかりだと言った口調で言った。

「ごめんごめん。何かこのところ少し考え込んでたから、すっかり忘れてた。ところで、今日会えるか？」少し元気を取り戻しながら護は言った。

「ああ、別に構わんよ。久しぶりだし、その悩みってやつ相談にも乗ってやるよ。」

それから、時間と場所を決めて電話を切った。

外は残暑が厳しかった。歩いているだけで、体から汗が噴き出して来る。こうして、歩いている間もあの女性はどこかから俺を見ているのだろうか。そんなことを思いながら、辺りを見回して見たが、どこにもあの女性の姿は見つからなかった。あれほど美しい女性に

いつも見られてるかと思うと、何か恥ずかしい気もするが、悪い気はしなかった。そんなことを考えながら、真司との待ち合せの場所に急いだ。

「よつ。」待ち合せ場所で先に待っていた真司が手を上げながら声を掛けてきた。

「悪いな。約束忘れちまってて。」申し訳ない気持ちで護が言った。

「気にすんな。そんなこともあるさ。」

「そのサテンにでも入るか。」護が店を指差しながら言った。

「オツケー」

店はエアコンがほどよく効いていて、汗ばんだ体に心地よかった。奥の方にいくつか空いてる席があったのがうれしかった。話が話したので出来れば人がいないほうがよかった。二人ともアイスコーヒを注文した。暑いから仕方ないか。こいつと俺はどこまでも似たことを考えることになるらしい。ほどなく運ばれてきたアイスコーヒーでのどを潤すと、護は話を切り出した。

「お前、この間俺に香のこと訊いたよな。」護は言葉を慎重に選ぶようにして言った。

「ああ、悪いこと訊いちゃったよな。ごめんな。」申し訳なさそうな声で真司が言った。

「いや、いいんだ。実はお前に話しがあるっていうのはそのことなんだ。それから、俺の悩みというのもそれに関係がある。」

「どういうことだ？」真司は不思議そうな顔をして言った。

それから、護は出来るだけ真司が理解出来るようにこれまでの経緯を話して聞かせた。信じてもらえるとは到底思えなかった。仮に俺が真司からこんな話をされたら、きつと信じなかったに違いない。例えそれが親友だとしてもだ。話はできるだけ短くするつもりだったが、思ったより長い話になってしまった。それは、どういうわけかこの話に興味を持ちいくつか質問してきたためだった。

そして、話が終わった後、真司の反応が気になったが、意外な言葉が返ってきたことに護は驚いた。

「そうか、そういうことだったのか。あれにそんな秘密があったとは知らなかった。」

「え？」護はキョトンとした。

「お前に見せておきたいものがある。」

そう言っつて、真司はポケットに手を入れて、何かを机の上に置いた。

そこにはあのブローチが光っていた。

樹海

エルフィナ様から呼ばれたハルカはクリアフェザーをはばたかせながら空を飛んでいた。木洩れ日こもが美しかった。こんな日はグリモンたちと湖岸に行つて遊びに行くのもいいかも、そんなことを考えながら樹海城のエルフィナ様のいる大広間に向かった。そこでは既に長エルフィナと司士たちが円卓を囲んで会議の最中だった。ハルカは軽く一礼すると円卓に向かって進んで行つた。

「お呼びでしょうか？」とハルカは言った。

「よく来てくれました。実はあなたにうれしい知らせが入りましたよ。」エルフィナは微笑みながら言った。

「どんな知らせでしょうか？」ハルカは首をかしげながら訊いた。

「マモルがもうすぐアルビトリウムに帰ってくるという噂です。」

「本当ですか？」ハルカは笑みを浮かべた。

「後数日で戻るとい話です。」

「わざわざお知らせ下さりありがとうございます。」

そう言つと同時にハルカは大広間を飛び出し、城の外まで走つて行つた。そして、クリアフェザーで城の噴水の周りを飛び回つた。

「マモルが帰つて来る。マモルが帰つて来る。」と、彼女は繰り返す。

返した。

それから、樹海の中へ向かって飛び去って行った。

前夜

あの話を真司にした日、彼が同じブローチを持っていたことに驚かされた。真司の話によると、あのブローチを十年前に発見したらしい。彼の知らないうちに自分の部屋の机の上に置いてあったという。香たたちの場合は浜辺で光の女性から、メッセージを受け取りそこで拾った。しかし、真司の場合はメッセージをもらってないという。それはどういうことなのか。ブローチは護が持っている物と全く同じ物だった。違うところと言えば、護のブローチには石が十一個あるのに対し、真司の物は九個だということだけだ。俺の幻霊だというあの女性に訊けば何か分かるかもしれないと思って、あれから部屋の中で彼女を呼んだりしてみたが、空間に虚しく響くだけなんの反応もなかった。近くにいないということなのだろうか。明日はいよいよ最後の日だ。そんなことを思いながら、護は部屋の窓から星空を見上げていた。

異界送り

もう夜中だと言うのに外は蒸し暑かった。この世界で最後の日だというのに不思議と悲しくなかった。たくさんを経験したつもりだった。そして、いろいろな人と出会ってきた。しかし、それらに未練はなかった。今は香と再会出来るかもしれないという期待が、そうした悲しみに勝っているのかもしれない。

紅葉通りから丘に向かってゆっくりと歩いた。まだ、一時間の余裕があったのでその丘で少し星でも眺めてみようと思った。そして、

丘の頂きまで登って何となく物思いに耽^{ふけ}っていた。

どれくらいそうしていただろうか。浜辺のほうで何か動いたような気がした。一応確かめに浜辺に下りてみようと思ひ、丘から浜辺へ通じる階段を下りて行った。その辺りまで来ると、月明かりでこの間の女性だと分かった。彼女はそこに座って海の方を見ていた。護に気が付いてるはずなのに彼の方を見ようとしなかった。護は話しかけるのをためらった。そこに立ったままでいるのも変なので、少し離れたところに座ることにした。少し彼女の顔を窺って見ると、月明かりの中でも彼女の美しさが分かる。

「何てきれいなんだろ。こんな人が俺と契約を交わした幻霊なのか。」それが護には信じられなかった。

そんなことを考えていると、彼女が急に話し始めた。

「私はアルビトリウムに帰りたくない。」

「え？」護は思いがけない彼女の言葉に驚いてしまった。

「私はアルビトリウムに帰れば、あなたの幻霊としてあなたと一体になる。絶えず傍に付き添い、守護としての役目を果たさなければならぬ。」

「それがイヤなんですか？」

「私は幻霊である資格がありません。幻霊は常に主を守り、主とは契約に縛られる。」

「それって大変なことだと思います。」護は自分なりにそのことを想像してみた。

「幻霊は主に対し、特別な感情を持つことは許されない。」彼女はその時はじめて護の方に振り返った。

「私はその主を好きになってしまった。」その美しい瞳に涙を浮かべながら護の腕に顔を埋めた。

辺りは波音が全ての音を掻き消し、規則正しく響いていた。

どれくらいそうしていただろう。彼女が顔を上げた時、そのきれいな顔が護のすぐ近くに寄せられ、唇に何か触れたような感覚があ

った。しかし、一瞬のことだったのでそれが彼女の唇だったかどうかは確かでなかった。そして、彼女はすくつと立ち上がった。言った。「今のごときは忘れて下さい。私はあなたの守護幻霊。これからはあなたの傍を離れず、あなたをお守りします。」さっきの口振りとは全く異なる厳しい口調だった。

「さあ、時間が来ました。行きましょう。」彼女は護を促した。海の方を見ると、何か光るものがこつちに向かってくるのが見えた。それが近づくとつれてはつきりと人の形に見えてくる。そして、すぐ傍に来たかと思うと護の近くで止まった。

「お迎えに来ました。ソルジャー。これから、私が案内人となりアルビトリウムへの道標となります。クラヴィスをお渡しく下さい。これから、扉の鍵を開けます。」とその光に包まれた女性は言った。護はポケットからクラヴィスを取り出し、彼女に渡した。彼女はそれを月の方に向けてかざした。次の瞬間、まばゆい光が辺りを包んだかと思うと月に大きな青く光る穴のようなものが現れた。彼女は彼の手を取りその光に向かって飛び立った。

「待つて、彼女を連れて行かないと。」その女性に向かって言った。

「彼女？」

「今、一緒にいた女性です。」

「そんな人はいませんよ。」と、彼女は言った。

「だって、今俺のすぐ傍にいたじゃないですか。」

そして、護は下の浜辺の方に顔を向けた。

そこにある物を見て護は驚いた。そこにあつたのは自分の体だった。浜辺に寝ているような姿で、そこに転がっていた。しかし、近くに人影らしいものは他になかった。慌てて自分の体を確認したが、確かに自分の体だと思った。これは一体どうしたことなんだ。

「さあ、時間がありません。行きましょう。」

彼女はそう言つと護の手をきつく握つたまま、その光に向かって飛び続けた。

青い光が近づくとつれそれがだんだん大きくなり、護たちを包み込んだ。そこを通り抜けると彼は意識がだんだんと遠くなるのを覚えてきた。そして、何も分からなくなった。

アルビトリウムの光

第三章 アルビトリウムの光

夢のモノローグ

さあ目覚める

アルビトリウムの者たちが

お前の目覚めを待っている

一万年の危機が迫っている

封印が解かれた時

ステラは甦る

桜花村の案内人

マモルは気が付くとベッドの上に眠っていた。体を起こし、そのベッドの縁から足を落とした。部屋の中を見渡すと、見慣れない家具や道具が置かれている。そして自分の着ている物が変わっているのに気が付いた。青い綺麗な幾何学模様のあるローブを着せられていた。次にマモルは何か体がおかしいと感じ始めた。自分の身体を見渡してみると、全身がたくましくなっている。その上、体が軽く感じられる。

「どうということなんだ。」

マモルは自分の変化に驚き、部屋の壁に掛かっている鏡で自分の顔を確かめようと立ち上がった。鏡に写った自分はまるで他人のよう感じられた。髪と瞳がほのかに赤みを帯びていて、鼻筋が少し高くなっている。

「これが俺なのか？」

自分の身体の変化にとまどっていると、部屋の扉が開いた音がした。

「気が付きましたね。」民族衣装のような格好をした女性が入ってきた。

「あなたは？」とマモルは尋ねた。

「私は桜花村の案内人です。」と、その女性が言った。

「案内人という？」

「あなたが白仙城に辿り着くまで案内役を務めるように言われています。」と、彼女は言った。

「意味がわかりません。一体、俺はどうしてここにいるんでしょう？」と、マモルは尋ねた。

「では、少し今のことが分かるように説明しておきましょう。」と、言って彼女は話を始めた。

あなたは月の扉からこの世界に戻って来ました。あなたの今の姿はアルビトリウムにいた時のあなたの姿です。マテリアに行つてこの人間として過ごした者はその姿と力、そして記憶を失っています。でも、戻つて来た時に少しだけそれらを取り戻すことが出来ます。ソルジャーであつたあなたは今のあなたの数十倍の力を持っていましたが、今はその力の欠片を持っているに過ぎません。

そして、あなたはこれからその力を取り戻さなければなりません。残念ながら、記憶はほとんど戻ることはないでしょう。これは人によつて差も出ますが、完全に戻ることはありません。気が付いていると思いますが、マテリアの者であつた時の記憶をそのまま持っているはずです。そのマテリアの者であつた時の記憶が妨げとなり、元の記憶が出てこれないのです。しかし、力は修練を積むことによつて徐々に取り戻すことが可能なのです。これからあなたは元の力を取り戻し、この世界の危難を救うことが求められています。

マモルは彼女の言ったことが信じられなかった。しかし、ここに

来ている以上信じる他ない。ここは元の世界とは異質の世界、アルビトリウムなのだ。俺はこれからこの世界で生きていかなければならない。

「そうだ、カオルはどこにいるんですか？」と、マモルは急に思い出したように尋ねた。

「慌てることはありません。彼女はこの世界でちゃんと生きています。そして、いずれ会うことが出来るでしょう。」と、案内人が言った。

「じゃ、俺はどうすればいいんでしょう。」と、マモルは尋ねた。
「この桜花村の外は妖虫族の一派によって通行が妨げられています。その妖虫の巣を探し出し、殲滅する必要があります。しかし、この村は妖虫族によって戦士たちが全滅してしまつて他に戦える者がいません。ソルジャーであつたあなたなら妖虫たちを倒すことなど容易いことですが、今のあなたではおそらく苦しい戦いになるはずです。まずはその妖虫たちの巣を探し出し、奴らの首領を倒すことがあなたの任務です。」と、彼女は言った。

「いきなり戦つていつても、戦い方もわからないのにどうやって戦うんです？」と彼は少し困惑顔で尋ねた。

「あなたにこの剣を授けます。これはグラディウスという剣です。戦い方は剣を使っているうちに分かるでしょう。それに、もし危なくなつてもあなたには強力な支援があるはずですから、安心して行つて下さい。」と、彼女は笑みを浮かべながら言った。

妖虫族

マモルは案内役という女性の見送りを受けながら村を後にした。アルビトリウムの世界を見渡すと元の世界とはだいぶ違つていた。大自然が広がつていて、町というものが見当たらない。さっきの桜花村も集落という方が相応しい小さな村でしかなかった。

彼の向かう先は彼女の話しだと今歩いている道に沿って進めば辿り着くということだった。初めての世界で分からないことだらけなので、不安ばかりが先に立つ。

見慣れない草や花を見ながら歩いていると道の先の方で何かの生き物が動いていた。彼はゆっくりと近づいて行った。それは何か大きなクモのような形をしている。

「あんな大きいクモって化け物じゃないか！」

慌ててそこから逃げようとした時、そのクモがマモルの方にもものすごい速さで向かって来る。

「わあああああ。」叫びながらマモルは村の方に向かって走り出した。「なんだこれ。信じられない速さじゃないか！」

マモルは元々足は速かったのだが、今の走りは人間の足の速さとは違う。比較するものがあるとすれば吹き抜ける風か、弓から放たれた矢かもしれない。クモを引き離しながら、うれしくなつて前を見るとそこに信じられない光景が広がっていた。道いっぱい何か大きな甲虫のようなものが群れていたのだ。マモルは立ち止まった。その虫たちもマモルに気が付きマモルに向かって来る。後ろを見ると、さっきのクモが迫っていた。逃げ場を失ってしまったマモルは、ただ怯えて立ちすくんでいた。その時、突然声が聞こえた。

「グラディウスを抜きなさい。そして、虫に向かって振り下ろすの！」

考えてる時間はなかった。ベルトに差しておいた鞘からグラディウスを抜くと、その虫の群れに向かって無我夢中で振り回した。すると、剣から炎が飛び出し、虫を焼いていた。焼かれた後には何も残っていなかった。

「一体この剣は何なんだ。」

そう思いながら、残っている妖虫たちを剣の炎で次々と倒し、後ろから来ているクモにも振り向き様に剣で薙ぎ払った。クモは大きな炎の塊となり、やがて、焼失してしまった。

マモルは剣を見つめながら呆然と立ちつくしていた。

ファル

ファル

今起こったことは幻なのか。虫たちは跡形もなく焼き尽くされて、そこにいたという痕跡すらなかった。ただ、地面に残っている焦げ跡だけが今起こったことが現実だということを示していた。剣に触れてみたが、不思議と熱くなかった。これがこの剣の力なのか。

「ちょっと違うわよ。」と、またさっきの聲がした。

「誰だ？」マモルは辺りを見回した。

「ひどいわね。私のことを忘れるなんて。」と、その聲が再び聞こえた。「あなたを守護するって言ったでしょ。」

「あ、幻霊さんですか？」マモルはその声を思い出していた。

「幻霊さんって・・・」と、その声は言った。「私にはファルっていう名前がちゃんとあるのよ。」

「ファルさん。いい名前だ。」マモルはのん気な口調で言った。

「それで、どこにいるんです？」

「ファルでいいわよ。以前はそう呼んでたでしょ。」

「じゃ、ファル・・・どこにいるの？」

「ここよ。」

急に目の前にフェアリーを思わせる小さな姿が現れた。

再会の二人

マモルはその姿が小さいことと輝く翼が付いていることを除けば、あのマテリアで最後に会った女性に間違いなかった。彼の目からは喜びの涙が流れていた。

「ファル・・・」マモルは涙を拭きながら言った。「会いたかった。どこに行ったのか心配だった。」

「マモル・・・」ファルも涙を流していた。

二人は再会の喜びでしばらく見つめ合っていた。

「何も泣くことないでしょ。私まで涙が出ちゃったじゃない。」

「だってさ。あの時、急にいなくなつてびっくりしたんだ。」マモルはその時のことを思い出しながら言った。

「あの時にはあなたの幻霊に戻っちゃったから、姿が見えなくなっただけよ。」と彼女は言った。「だけど、ずっと傍にいるから安心して。」

「そうだったのか。よかった。」

「ところで、あんな戦い方して少しヒヤヒヤしたわよ。」と、彼女は叱り口調で言った。

「ああ、突然だったんで焦ったわ。あんな風に襲われたのは初めてだしさ。」マモルは道の焦げ跡を見つめながら言った。

「まあ、記憶がないから仕方ないけど、もう少し戦い方を覚えてからじゃないと妖虫の巣に行くのは厳しいかもね。」と、ファルは言った。

「どうすればいい？」

「そうねえ。私が戦い方を教えてあげるから言う通りにしてくれらる?。」

「ああ、分かった。言う通りにするよ。」と、マモルは言った。

「よしよし、いい子だ。」ファルはおどけた口調で言った。

「なんだとお。」マモルも調子を合せて、しかめっ面を作りながら言った。

「あははは。」とファルは笑った。

「もう、元の大きさには戻れないのか?。」と、マモルは真顔になりながら言った。

「戻るわよ。」と、ファルは言った。

「やってみてくれ。」と、マモルは言った。

「いいわよ。」彼女は何か念じるように目をつぶった。

次の瞬間、マモルの前にマテリアで見たあの美しい女性が現れた。そして、マモルは突然彼女の背中に腕を回したかと思うと、彼女を抱き締めた。

アルビトリウムの空は夕暮れが近づいてきたのか、少し涼しい空気が流れ込み空は赤みを帯び始めていた。

グラディウス

グラディウス

マモルはファルからグラディウスの力の秘密を教えられた。グラディウスはその持ち主の力に応じて強くも弱くもなる剣だという。そして、強い力を持つ者が手にした時、グラディウスはその力を吸収し、力を炎に変えて敵を焼き尽くす武器となる。ただし、吸収する力が大きすぎると持ち主の命を奪いかねない両刃の剣なのだ。そのため、マモルに与えられた課題はグラディウスへの力の送り方を制御することだった。

「だいぶ上達したと思うけど、もう少し力を加減しないとね。」と、ファルは言った。

「難しいんだな。振り回したただけで炎が出たり、出なかったりその時の状態が自分でも分からないから、やっかいだ。」マモルは剣を見つめながら言った。

「たぶん、まだ余裕がないのね。剣を振る時に無心になって、剣に念を送る。それから敵の規模と強さを剣から感じ取り、敵との距離を見極め、剣を振り下ろす。そうすると、敵に向かって適度な火力を発揮できる。」と、ファルは説明した。

「理屈はわかるけど、なかなか難しいな。」と、マモルは言った。「おそらく、マモルが剣の心を読みきれてないんじゃないかな。」と、ファルは言った。

「剣の心か。」と、マモルは呟いた。

「今日はもうこれくらいにしておきましょう。明日は実戦を通して訓練してみましょう。」と、ファルは言った。

「いきなり実戦と言うのも怖い気がするけど、前みたいな無様な戦い方にはならない気がするし、挑戦してみるよ。」と、マモルは言った。

「そうそう、その意気よ。」と、ファルは笑いながら言った。その日は近くの川岸でキャンプすることにした。ファルは翼から羽をひとつ抜き取るとそれに念を入れテントを張った。マモルはそれを始めて見た時、その力に驚いた。

「幻霊というのはすごいんだなあ」と、関心してしまった。

そのテントは中が心地よく暖かった。何かファルの心のようなものを感じた。

「なあ、ファル。」と、マモルはファルに呼びかけた。

「なに？」

「いつも俺の傍にいて大変じゃないか？」と、マモルは気になっていたことを尋ねた。

「それが幻霊の役目だし、特に嫌とも思ったことないわ。」と、ファルは言った。

「そうなんか。不思議に思ってることがあるんだけど、幻霊って俺以外の人間に付いているの見たことないんだけど、見えただけなのかな？」

「幻霊を授かるには資格が必要なのよ。」と、ファルは答えた。

「資格？」とマモルは人間の大きさになってテントの中を整えてるファルに向かって訊いた。

「そう。幻霊はテネレの称号を授かった者にだけ授けられる。」と、ファルは言った。

「テネレって何だ？」

「それは義であり、勇であり、仁であると認められ、そして妖獣の王を一人で倒した者にしか与えられない。」と、ファルは言った。

「妖獣の王か・・・」と、マモルは呟いた。

「妖獣の王はこの世界の特定の地域に棲息せいそくしている妖獣たちを支配している長のこと。このアルビトリウムにはそうした妖獣王がたくさんいるのよ。」と、ファルは説明した。「そして、どの王も強力一人で倒すことは並の戦士では不可能よ。」

「そうか。俺はそんなに強い戦士だったんだな。今はとても信じ

られないけど。」マモルは落ち込んでいた。

「でも、焦ることはないわ。これから少しずつ力は戻って行くから。ただ、修練を重ねることでそれを早めることが出来るの。今はこの世界に早く慣れることが大切よ。」

「そうだな。」

マモルはそう言っつてファルの用意してくれたマットに横になると、疲れのためにすぐに寝入ってしまった。

その寝顔を見ながらファルは呟いた。

「馬鹿ね。大変だなんて思うわけないでしょ。あなたが好きなんだから。」

そういうと、ファルは小さな姿に戻り、マモルの胸の上で眠った。

カオルの使命

白仙城では長老と導師たちが円卓を囲んで会議を開いていた。そこにカオルも長老の要請で列席していた。

「魔道士カオルの報告で、妖獣たちが煮炎しやえんの洞窟に集結して、総攻撃の準備をしているらしいと分かった。今日お集まり頂いたのはそのことで、皆さんと対策を練りたいと思ったからなのです。」と、長老は導師たちを見渡しながら言った。

「それが本当だとすれば、由々しき事態ですぞ。」と、導師マオが言った。「今、この城の戦士と魔道士を集めたとしても、とてもあの集団を倒せるほどの者はいない。」

「これはエルフ族と仙獣族に応援を頼まなければいけませんな。」と、導師テオが言った。

「そのためには誰かに使者を頼まねばならないでしょう。」と、導師マオが言った。

「適任者に誰か心当たりは？」と、長老は言った。

「長老は既に決められているようですが？」と、カオルを見なが

らテオが言った。

「あはは、これは一本とられましたな。」と、長老は笑いながら言った。

「そこで皆さんの意見をお聞きしたいのです。この任務をカオルに頼みたいと思っておるのですが、いかがですか。」と、長老は一同を見渡しながらか言った。

「異存はありませんな。私も同意見です。」と、導師マオが言った。

他の導師達も誰も異論を唱える者はいなかった。

「では、カオルを使者に立てることにしましょう。」と、長老はカオルを見ながらか言った。「それでは、カオルは密書を持って、早速旅立つてくれ。」

「分かりました。」と、カオルは言った。「謹んで任務を果たす覚悟です。」

「おそらくつらい旅になるであろう。連れを数人連れて行くことを許可しよう。人選はお前に任せる。必要な物資も城から持っていくといい。早速準備に掛かって欲しい。」と、長老は言った。

カオルは出席者たちに向かって一礼すると、円卓の間を後にした。「マモル、早く帰ってきて。あなたに会いたい。」と、思いながら自分の邸の方へ帰って行った。

妖虫のアジト

マモルは妖虫たちとの戦闘を何回か繰り返していくうちに戦闘のコツを飲み込みはじめていた。そして、妖虫たちの数がだんだんと増えてきていることにも気が付いていた。村を出てから、かなりの日数が経ったがだんだんと怪しい雰囲気が強くなってきている。妖虫の巣がすぐ近くにあることは確かだ。だが、そこで何が起るか全く予想が付かない。きつと、今までにない戦いになるだろうとい

うことは覚悟している。俺にはソルジャーだった時の俺を知っているファルが付いている。きっと、彼女はかつての俺といるいるなつらい戦いを経験し、どんな場面でどうすればいいのかを知っているはずだ。ファルがいなかったら、俺はどうなっていたんだろう。そんなことを考えると少し恐ろしく思う。今はこれから起こるであろう戦いに神経を集中しなければならぬ。ファルばかりに頼っていることは強くなることは出来ない。

林に入っていくと、目の前に変な形の木が生えていた。大人が四、五人で手を繋^{つな}がなければ木の幹を囲めないくらいの太さで、上に行くに従って左右に曲がっている。

「不思議な形をした木だな。」マモルはそう思いながら近づいて行った。

その時、木の根元から次々と黒く大きなクモがこつちに向かってきた。マモルはグラディウスを抜くと、クモたちに向かってそれを振り下ろした。炎が飛び出しクモが炎に包まれた。次々と襲って行くクモにマモルは体をかわしながら、グラディウスの炎を叩きつけて行った。襲ってきたクモは徐々に数を減らしていく。マモルはその木に向かつて炎をぶつけた。木は燃え上がった。するとその木が真っ二つ割れ、中から巨大なクモの体と、人の顔を持つ妖虫が現れた。マモルは剣の先をその巨大なクモに向けて構えた。驚いたことにそのクモは人の言葉を話し始めた。

「お前は何者だ？」

「俺はお前を倒しに来た。お前こそ、何者だ。」と、マモルは少し怯みながら訊いた。

「あはは、俺を倒しに来ただと、笑わせるな。」と、クモは不気味な声を響かせながら言った。

「試してみるか？」と思ってもない言葉がマモルの口からついでに出た。

「こしゃくな小僧だ。このラドクをなめるなよ。」
クモは口を開き緑の液体をマモルに向けて吐き出した。マモルは

地面を蹴って飛び上がった。木の先端が横に見えるほどの高さに飛び上がっていた。マモルも自分の反射神経と脚力に驚いていた。体が勝手に動いているような感覚だった。着地と同時にクモに向かつて、斬り込んだ。クモは上体を持ち上げてマモルを抱き込もうとする。彼はその前に剣を振り下ろし、炎を繰り出した。炎はクモの腹部に向かって行った。クモは全身炎に包まれ、苦しそうに身悶えた。

「お前は一体・・・」ラドクは苦しそうに呻きながら焼失した。マモルは戦いが終わって、自分の今の動きがまだ信じられないでいた。あの速さは一体自分の持っている力なのか。自分で思っている動きと実際のそれとの格差に頭が混乱していた。すると、ファルが言った。

「おめでとう、マモル。今があなたの力なのよ。今の力はかつて持っていた力のほんの欠片に過ぎない。でも、あなたは取り戻して来ている。かつての力を。ただ、今日の相手は少し弱すぎた。まだまだ、こんなもんじゃないわよ。だから、油断せずに修練に励まないかね。」

「あ、ああ。分かってるよ。」と、マモルは少し放心気味に答えた。

英雄

人族の城へ

帰り道は妖虫たちに襲われることはなかった。たぶん、首領がやられたことで虫たちも姿を隠してしまったのだらう。桜花村に帰ったマモルは村人たちの歓迎を受けた。みんな虫たちが姿を消したことで、その巢が殲滅されたことを知った。これで安心して村の外にも行ける、と村長から感謝された。

そして、村に伝わるといふ炎者鎧えんしゃがいというものを贈られた。それは服にも鎧にもなるらしい。身に着けて見ると思っているより軽かった。胸の辺りに六角形の赤いダイヤのようなものが嵌はめ込まれていた。まるで騎士になった気分だった。

案内人の女性は城まで案内すると言って、マモルと一緒に村を出発した。

「あなたは私が思っているより、早く力を取り戻しているようですね。」と、彼女は言った。

「そうなんですか？」と、マモルは言った。

「ええ。あのラドクに苦戦するかと思っていましたか、一撃で倒してしまっただ。」

「見てたんですか？」と、マモルは彼女の顔を覗きながら言った。

「私には二つの姿があるのです。」

マモルは驚いて口が半開きになった。彼女は白い鳩のような姿になってしまったのだ。そして、再び元の女性の姿に戻った。

「驚かせてしまいましたね。私は人族ではありません。私は仙獣族の者です。」と、彼女は言った。

「仙獣族？」

「そう。このアルビトリウムには何種類もの種族が存在しています。あなたが属しているのは人族といい運動性と魔力性に優れた者

たちがいます。私が属しているのが仙獣族といって力性と妖術性に優れた者たちで、成人すると二つの姿を持つようになります。あなたが戦った妖虫族は妖獣族という種族の支族です。妖獣族はこの世界で最も数の多い種族です。妖獣族にはあなたが戦った虫型の他に獣型もいます。他にもいくつかの知られている種族もいますが、この世界はあなたが来た世界と比べると広大で種族もまばらに存在しているのです、その全貌を知っている者はいないと思います。」と、彼女は歩きながら淡々と話した。

「それで少しこの世界のことが理解できました。」と、マモルはうれしそうに答えた。

「でも、変な感じもしますね。あなたも元々はここの住人で、しかも優秀なソルジャーだったのに、その人に私がこの世界のことを教えてるなんて。」と、彼女は和やかな笑顔で言った。

「かもしれませんか。」と、マモルは言った。

辺りは春のような陽気で、気持ちのいい風が吹いていた。

英雄

数十日の道のりの間、平穏な旅が続いた。人族の城が近く、その防御ライン内は妖獣族でもうかつに近づけないという。旅の間、案内人からこの世界に関して多くのことを教えられた。

妖獣族は他のどの種族とも相容れない種族だという。そして、他の種族を支配下におくために時々結束して大規模な戦闘をしかけてくることがある。しかし、支族間のまとまりを欠き同族同士でも争いが絶えず襲撃が成功することはまれであるという。だが、圧倒的な数にものを言わせて他種族も劣勢に立たされつつある。それに対抗するため、人族を始めいくつかの友好的な種族はお互いに同盟を結び、防衛戦を展開したりしている。それが、今のアルビトリウムの情勢だということだ。

そして、人族の中でもエリート戦士であったマモルは他の種族間でも英雄として名を馳せていた。その存在は妖獣族にも知られており、恐れられていた。しかし、彼がマテリアに落ち込んでから妖獣族は勢いを盛り返して堂々と戦闘をしかけてくるようになったということだ。

そして、もうひとつアルビトリウムでのかつてのマモルの名前も教えられた。

ルーベラ・ステラ・テネリクス

白仙城

白い城砦しろいしろ

「あれが人族の主城である白仙城です。」と、案内人の女性が言った。

彼女が指差している方を見ると、中央に白く高い尖塔が山の頂に建っているのが見えた。

「かなり大きそうですね。」と、マモルは言った。

「あの城砦には三万人ほどの人々が住んでいます。そして、山全体に城壁が張り巡らされていて、城壁の内側に居住区があります。全部で二十万人程の人々が生活している人族の重要拠点です。」と、彼女が説明してくれた。

「すごいんですね。あんなに大きな建物見たことない。」と、マモルは感心しながら言った。

「着くまでにはまだ時間も掛かるし、もう夕暮れも近づいていきます。行くのは明日にして、今日はどこかでキャンプしましょう。」と、案内人は言った。

案内人は夜になると鳥に姿を変えて木の枝で夜を明かすのだった。その方が余計な荷物を持たないで済むから、と言っていた。

「便利だな」と、マモルは少し羨ましく思った。

その夜、マモルはテントの中でファルと語り合った。

「いよいよね。あの城に着いたら、長老たちに会うことになるけど、あなたのことを待ち望んでいるはずよ。でも、今のあなたの状態がかつてのようではないから、どんな反応があるか分からないわ。ただ、あなたに期待している人々はたくさんいるからどんなことがあっても挫けないでね。」と、ファルは言った。

「分かった。俺はこの世界がだんだんと好きになり始めてる。今

は目標みたいなものもちやんと持つてる。そのためには自分がもつと力をつけないといけないうて、そう思ってるよ。だから、ファルと一緒にがんばるよ。」と、マモルは言った。

「うん。がんばってね、マモル」

そして、マモルはマットに横になつて思った。

「カオルはどこにいるんだろ。いつ会えるんだろ。」

マモルの胸の上で眠った振りをしていたファルは考えていた。

「マモルはもうすぐ知ることになる。あの城にカオルがいることを。」

テントの近くの森の中では虫たちの鳴き声が音楽のように心地よく響いていた。

白仙城

朝になると、マモルたちは城に向けて出発した。城が近づくににつれて、マモルは思っているより城砦が大きいのに驚かされた。城門に着くと、衛兵たちに呼びとめられたが、案内人の持っている通行証のおかげで難なく城内に入ることが出来た。

城門を入ると居住区の町並みが広がっていた。建物は平屋根が多く壁の色もさまざまだった。

城門から山の頂に向かつてまっすぐ広い道が続いていて、通りはたくさんの人々で賑わっていた。道の両側には露店と思われるテントが道に沿って開かれていて、人々が買い物を楽しんでいた。人々の外見はさまざまで髪の色も身長も顔立ちも違っていた。明らかに人間と思われる者もいれば、翼を持つ者、獣のような顔立ちの者、四足歩行で獣にしか見えない者たちもいた。マモルはこれほど多様な種族と人種がいるとは思っていなかった。彼は物珍しそうに辺りを見渡しながら案内人の後を付いて行った。

山の頂に近づくと、また城門のようなものが見えてきた。そこに

はさつきよりも重装備の衛兵がいた。案内人はさつきとは違う通行証を見せた。衛兵たちは城門を開いて、中に入るようにマモルたちを促した。そこは驚くべき光景が広がっていた。城の中央と思われる場所に城外から見たあの尖塔が空高くそびえ立ち、居住区と比べると建造物はどれも大きく高く彩りも鮮やかだった。鎧を身に付けた戦士と思われる者たちやローブを羽織りとんがり帽子を被り不思議な輝きを放っている者たち、訓練をしているのか剣で戦っている者や手から不思議な炎を出して相手に向かって放っている者など少し殺伐とした様相を呈していた。

案内人は慣れているのかまっすぐ尖塔の方に向かって進んで行く。マモルもその後をキョロキョロ周りを見ながら付いて行った。

案内人は尖塔の近くまで来ると、急に立ち止まりマモルの方に振り返った。

「ここが大尖塔と呼ばれている城の中枢です。これから、この城の長老のところまであなたを連れて行きます。長老はこの城では最高責任者です。失礼のないように気をつけて下さい。私の役目はあなたを長老のところまで無事に送り届けることです。あなたにはここでお別れを言っておきます。あなたはよく頑張ったと思います。あなたは私が知っている最高の戦士です。おそらく、これからかつての力を取り戻すことになるでしょう。そして、また会うことにもなるでしょうが、ひとまずここでお別れです。では、元気で頑張ってください。」と、案内人は言った。

「今までいろいろありがとうございます。あなたのおかげでいろいろ知ることが出来ました。また是非お会いしましょう。」と、マモルもお別れを言った。

それから、大尖塔の中に入り、広い廊下を進んで行った。それにしてもこの大尖塔の中は何もかもが巨大だった。廊下の両側に立っている柱は大人が数人手を繋いでやっと一回り出来るくらい太かった。彫刻も像もどれも巨大で天井は遥か頭上にあった。そして、廊下の突き当りに大きな扉が立っていた。そこにいる二人の衛兵たち

がマモルたちを見て、あらかじめ報告を受けているらしくすぐに扉を開いてくれた。

扉の中は大広間が広がっていた。広間の中央に丸い石造りのかなり大きいテーブルが見えた。そこに一人の長い白髪白髭の老人が椅子に腰掛けていた。マモルたちはそこに向かって歩いていくと、老人は立ち上がりうれしそうに彼らに微笑みかけた。

「長老、マモルをお連れしました。」と、一礼しながら案内人の女性が言った。

「おお、おおご苦労であった。」と、その老人は言った。「長旅で疲れておるじゃろう。そなたの任を解く。」

「はっ、ありがとうございます。」と、案内人は言うつと広間から出て行った。

しばらく長老はマモルを懐かしんでいるような目で見つめていた。

「久方ぶりじゃのう。」と、その老人は言った。

マモルはどう答えていいのか迷ったが、調子を合わせることにした。

「お久しぶりです。」と、彼は一礼しながら言った。

「マモルと言う名前はわたしにはまだ馴染まんでの、そなたのことをかつてのようにステラと呼ばせてもらいたい。」と、老人は微笑みながら言った。

「その名前も案内役の女性から聞きました。長老のお好きなようにお呼び下さい。」とマモルは答えた。

「うんうん。」と、長老はうれしそうに頷いた。^{うなづ}「まあ、そなたもここまでの長旅ご苦労じゃった。大変であつたらう。」

「私は未だにかつての記憶を取り戻していません。ここも初めて来る気がしています。ここまで案内人にいろいろ教えられながら、この世界のことを少しずつ理解出来るようにもなりました。それから、戦い方もファルに教えられながら、自分なりに力を取り戻せるように頑張つたつもりです。」と、マモルは言った。

「そうか。それは良かった。わしがそなたに供を付けなかったの

は、この世界に戻った時、それに頼り過ぎて甘えてはいかんと思っ
たからじゃ。本来なら従者を付ける資格は十分にあるそなたじゃが、
敢えて付けずに案内人だけにその役目を果たすように頼んだのじゃ。
そうすることでかつての力を早く取り戻して欲しいと思っただのじゃ。
」と、老人は言った。

「それはきつと最良の選択だったと思います。おかげで自分の力
にわずかながらも気付けるようにもなり、ファルに助けられながら
も自分の力で戦うことも出来ました。」と、マモルは言った。

「それはわしにとってもうれしいことじゃ。そなたの心掛けはか
つてのステラと同じじゃ。」と、老人はうれしそうに言った。

「お褒めに預かり、ありがとうございます。」と、マモルは頭を
下げながら言った。

「おっほん。そなたにひとつ頼みたいことがある。」

「何でしょうか？」

「そなたを抱きしめさせてほしい。」そう言うと老人はマモルに
歩み寄り強く抱きしめた。

マモルは驚いたが老人の思いが暖かく伝わってきて、彼も老人の
背中に手を回していた。

「おかえり。」と、長老はマモルに囁いた。

樹海城

樹海城

カオルはエルフ族の主城、樹海城の大広間でエルフ族の長エルフィンに会っていた。

エルフィナは人族の長老からの書状を読むと、

「人族からの依頼を承諾しましょう。人族の危難は我らの危難も同じこと。かつてそうであったように、我が種族は人族と同盟し援軍を送る。早速、一個大隊を組織し人族の居城へ向かわせましょう。」と、エルフィナは言った。

「ありがたき幸せ。」と、カオルはエルフィナに頭を下げた。

「あなたも長旅でお疲れでしょう。この城内で少し休息をとっていくとよい。」と、エルフィナはカオルに言った。

「ありがとうございます。」と、カオルは言った。

それから、エルフィナは声を落として彼女に言った。

「ハルカに会って行くがいい。そなたも久しぶりで会いたかろう。」

「はい！ありがとうございます。」と、カオルは笑顔で答えた。

ハルカの住居は城内に生えている奏鈴樹まじりかねという大木の上にある。

カオルはその木の下に立ち、ぶら下がっている蔓つるを引っ張った。すると、木の上に建っている家の中からハルカが顔を覗かせた。カオルの顔を確認するとハルカは喜びに顔を輝かせた。

少しして木から飛び降りて来たハルカはカオルを抱きしめた。

「カオル、久しぶり。」と、彼女は言った。

「ハルカ・・・」カオルは涙を溜めながらハルカを抱きしめた。

「お互い辛かったね。」

「そうだね。本当に大変なことになってしまったね。」

「記憶はどう？」と、ハルカは尋ねた。

「まだ全然。ハルカは？」

「私もよ。」

「じゃ、姉妹のままで大丈夫だね。」と、カオルはうれしそうに言った。

「うんうん。」と、ハルカは頷いた。

顔立ちはマテリアにいた時と同じ瓜二つだった。

ただ、ハルカの目も髪も青くなりエルフ族の特徴である背中に翼を持ち、額に星型の紋章があった。カオルの方はほとんど前のままだった。ただ、魔法を使う時に髪と目が赤く光りを帯びることを除いて。

「あのクラヴィスが二つあったなんて思わなかったわ。」と、ハルカは言った。

「あれを拾った日の夜、自分の部屋でいじくり回してて、なぜ表裏同じデザインなのかなって思ったの。それで何となく指でクリクリしてたら二つに分かれちゃったの。最初は壊しちゃったと思ってすぐ怖かった。でも、少し考えて元々二つだったんじゃないかって思ったの。そして、ひとつはハルカのもかもしれないなって思ったんだけど、ハルカは怖がってたから、言わずに二つとも私がずっと持ってたの。でも、十年後のあの日の前にもうひとつはハルカの物なんだから返さないと思ってた。だから、手紙の中に一緒に入れておいたのよ。」と、カオルは説明した。

「私はあれをもらってから、どうしたらいいか分からなかった。手紙にはお別れの言葉しか書かれてなかったし、あなたがいなくなつて悲しくて体の半分がなくなったようだった。でも、ある人から一年後にあそこにクラヴィスを持って行くように言われたの。そうしたら、本当に月の案内人がやって来てびっくりだったわ。本当に怖かった。」と、当時の恐怖を思い出したようにハルカはぶるつと震えた。

「ある人って知ってる人だったの？」と、カオルは尋ねた。

「うん。初めて会った人。」と、ハルカは答えた。

カオルは少し首をかしげてから、

「そうだ！マモルが帰ってくるのよ。」と、カオルははしゃいだ。
「うん。そうみたいね。」と、ハルカは少し真顔になりながら言
った。

「え！知ってるの？」と、カオルは意外そうに尋ねた。

「エルフィナ様から聞いたわ。」

「そうか。マモルはこの世界では英雄だったからね。噂も早い
ね。」と、カオルは言った。

「そうね。」

だが、ハルカは心の中で思っていた。

「ごめん、カオル。あなたにひとつだけ嘘を言ったの。私は思
い出してしまった。マモルを愛していたことを。」

だが、この事実を知っているのはハルカの他にはエルフィナ
だけだった。

甦る力

猛禽もつきんの草原

長老修道会という人族の最高機関からマモルは二つの名前を名乗ることを推奨された。それは、かつて呼ばれていた「ルーベラ・ステラ・テネリクス」であり、もうひとつはマテリアで呼ばれていたマモルの名をとって「ルーベラ・マモル・エクリクス」である。そして、本来の力を取り戻すまでの間、マモルの方を名乗った方が賢明だろうと言うことだった。それはステラの名前は敵の標的として狙われているからだと言うことだった。そして、白仙城のどこに行っても良いと言う自由通行権、兵士を自由に招集出来る集兵権を戴いた。これは異例のことであったが、かつてのマモルの功績を思えば当然の措置であるということになった。

その後、長老修道会は銀狼族という妖獣族の一派が人族の村の襲撃を計画しているという情報を得た。早速、対策会議が召集され、マモルをリーダーとして小隊編成で出撃させた。作戦指示は銀狼族の本拠ある猛禽もつきんの草原を急襲し、敵を殲滅すると言うものだった。マモル隊は思慕川しほがわという川に沿って行軍した。途中、数回のキャンプを経て、猛禽の草原まであと一日というところまで来た。その夜張ったテントの中でマモルはファルに尋ねた。

「作戦行動は七人編成が普通なのか？」

「そうだよ。何か不満でもあるの？」と、ファルは言った。

「よく分からないんだけど、敵はどれくらいいるのかなって思ってたさ。」と、マモルはテントに寝そべりながら言った。

「そうねえ。情報が少ないからよく分からないけど、数百はいるんじゃないかな。」と、ファルは言った。

「なに！数百だって？」マモルは大声で叫んだ。

「シッー。」ファルは人差し指を口に当てながら言った。「みんな

なが起きちゃうでしょう。」

「あ、ごめんごめん。ちょっと、びつくりしたからさ。」

「まあ、数は多いけど雑魚獣だから大したことないと思うよ。」
と、ファルは平然と言った。

「雑魚か。」と、マモルは呟いた。「前の妖虫族と比べるとどうなんだ？」

「妖虫族よりはずっと強いよ。」ファルはあっさりと言った。

「うーむ。それでも雑魚なのか。」

「この小隊はみんな中級兵だから、死ぬことはないと思うよ。」
と、ファルは言った。

「そうなんだ。だったら、安心なのかな。」マモルは少しほつとした。「一応訓練受けたり、リーダーの権限とか勉強させられたけどさ。いまいち、パツとこないんだよなあ。」

「まあ、初めての時は誰でもそうだよ。リーダーって言っても、特に何をしなくちゃいけないって言うのはないしね。その時々で仲間の安全確保や規律の乱れを正したりとか物資の確保とかかな。危急の時以外は何もなくてもみんな役割は心得てるから大丈夫よ。」
と、ファルは言った。

「まあ、そんなもんなのかな。」

マモルは目を瞑りながらそう言うのと、間もなく寝入ってしまった。その寝顔を見ながら、ファルは思った。

「カオルはどこにいるんだろう。城に行けばマモルと会うことになると思ってたけど、どこにもいる様子はなかった。でも、いずれ会うのは間違いない。マモルはまだそのことを知らないけど、私はどうしても言えなかった。教えてあげれば、どんなに喜ぶだろう。でも、もう少しこの幸せを味あわせて欲しい。マモルがカオルと再会したら、私は気持ちを決める。私は幻霊なんだもの。」

銀狼族は不意を突かれてあつという間に総崩れになった。マモルを始め七人の戦士は中央突破をやつてのけた。マモルが驚いたのは仲間の戦士たちの攻撃の早さだった。次々と銀狼族を倒していく、中には範囲攻撃を繰り返して一気に複数の敵を倒している者もいた。そんな攻撃の仕方を始めて見た。あれは一体何なんだ。人族ってあんなに強いのか。俺は一体ずつ倒していくのがやっとだというのに。

銀狼族があと数十匹しかいなくなったところで、ファルが言った。

「マモル、グラディウスを天にかざしてその剣先に意識を集中させて。」

「わかった。」マモルは言う通りに構えた。

その時、剣が赤い光を帯びた。剣が炎に包まれ始めた。

「マモル！そのまま敵に斬り込んでいきなさい！」と、ファルが叫んだ。

マモルは敵に向かって突進した。足で地面を一蹴りしたと同時に周りの草が一斉になびく。遠くにいた敵に数歩で接近する。その真ん中にある一体目掛けてグラディウスを薙ぎ払った。一瞬の出来事だった。剣から渦巻く炎が飛び出したかと思うと一気に数匹の敵が焼失する。残った敵に向かって同じように剣を振り回すと火炎の渦が敵を飲み込んでいく。マモルは無我夢中で全部の敵に向かって横に縦に剣を振り回した。敵は反撃など出来なかった。マモルの速さに付いていけない。それほど時間が掛からないうちに、そこには最初から何もなかったかのように敵がいなくなった。マモルが炎に包まれた剣を構えて立っているだけだった。マモルは気が付かなかったが、目は赤く光輝を放ち、髪は炎のように赤く逆立っていた。これがソルジャーの姿なのだ。

この戦い方を見ていた小隊の他のメンバーは驚いていた。導師テオから今回のパーティーリーダーはマテリアに行つて力と記憶を失

ったソルジャーだということを知っていた。しかし、メンバーの誰もソルジャーというものを見たことのあるものはいなかった。

白仙城の伝説ではこういう話が伝わっていた。

二十年近く前、アルビトリウムには伝説のソルジャーがいた。赤い目と髪を持ち全身が燃えるように光を放つ戦士。一振りのエクリクスクリクスの剣を持ち、剣をかざすと剣の雨を降らせて敵を殲滅する。剣を振えば、火炎の渦で敵を焼き尽くす。妖獣族の王たちを何人も倒し、封印した者。

諸族の城で特殊部隊ポルソアメオに属し、いくつも戦功を立て続けた無敗の戦士。そして、栄光の最高敬称ソルジャーと最高称号テネレいただを戴いた。その力を恐れた妖獣族の皇帝サムン・マールムが妖獣族を集結し、諸族の城を襲撃した。しかし、善戦虚しく月の扉に落ち込み姿を消した。

今ここでその伝説のソルジャーがその力に目覚めたということなのだろうか。こんな戦い方を見たことがなかった。あつという間に数十匹の敵を跡形もなく焼き尽くしてしまうなんて、すご過ぎる。そして、そこにいた全員が同じことをし始めた。片膝を付き、頭を下げ、声をそろえて言った。

「おめでとうございます、ソルジャー。」

凱旋のソルジャー

凱旋がいせんのソルジャー

凱旋したマモルたちは白仙城で大歓迎を受けた。長老自ら出向かえるというほどの歓迎振りだった。あらかじめ勝利の報告が伝わっていたのだろう。そして、マモルの戦い振りも。

城の大通りの両側は喜びいっぱいの群集で埋まっていた。その夜、大尖塔では凱旋パーティーが開かれた。マモルは長老の隣席に座る栄光を許可された。そのパーティーは深夜まで続いた。そして、マモルは導師たちをはじめこの城の主だった人々に紹介され、既に有名人になっていた。

そして、その席上隣に座っている長老はマモルに向かってこう耳打ちした。

「あと数日もすればカオルが帰ってくるじやろう。」
白仙城の夜はいつになく賑わいをみせていた。

ファルの涙

ファルはマモルの前にその夜は姿を見せなかった。ファルは自由に姿を消すことが出来る。姿を見せていない間はマモルと融合している。ファルは意識体として存在出来るのだ。そして、その状態でもマモルに話したりも出来る。しかし、ファルは今マモルと話す気になれなかった。マモルはきっとカオルのことしか考えていないのが分かるからだ。カオルが帰ってきた時、私はどうすればいいんだろう。はじめを付けることが出来ると思っていたが、今はその自信も揺らぎ始めていた。形のない涙がファルの頬を伝った。

仙獣族の王

カオルは仙獣族の場合は使者として一番大変な役割になることは分かっていた。仙獣族と妖獣族は同じ獣族で似ているところがある。王政で民衆を統治し、王の権力は強力だった。そして、身分制も存在している。プライドも高く他種族に馴染なじもうとしないところがある。

仙獣族は大きく二つの支族がある。力性と耐性に優れた獣型、妖術と召喚術を駆使用する人型である。そして、仙獣族の共通の特徴は二つの姿を持つことである。

主城は険しい高原にあった。大きな城壁の中は獣らしく自然に溢れていた。それらを上手に加工して住み易くしていた。その中央に位置している大きな建物が王の居城である。

カオルは王がなかなか人族の要請を承諾しない様子なので、仕方なくこう言った。

「妖獣族は人族を倒した後、いずれは仙獣族にもその牙を向けるでしょう。人族の要請を断ったことから、エルフ族は仙獣族には味方しないでしょう。その時、王は単独で妖獣族と戦わなければならなくなりますよ。それでもよろしいのですか？」

この説得はすぐに効果があった。

「いや、実は人族を助けるのが嫌なのではない。我々仙獣族の中には人族を良く思わない者も多い、その上人族の地からは離れて辺境に位置している。それで行軍の難、物資の供給量、民心が離れてしまわないかと心配しておるのじゃ。」と、仙獣族の王は言った。

「その点ならご心配に及びません。長老から行軍と物資の支援は十分出来る用意はあると言われています。民心についても人族は仙獣族と同盟を交わし、相互援助を惜しまない覚悟であると伝えれば安定するものと思われませう。」と、カオルは自信に満ちて言った。

「おお、それはありがたい。それならば、異存はない。早速、一

個中隊を送るとしよう。」と、仙獣族の王は言った。

「ありがたき幸せにございます。」

「ところで風の噂で聞いたことなんじゃが、ソルジャーが帰ってくると言うのは本当なのか？」と、王は尋ねた。

「はい。それは確かなようです。間もなくアルビトリウムに帰還し、諸族の期待に応えてくれるものと思います。」

「そうであったか。帰ってくるのか。それはうれしい知らせじゃ。もし、帰ってきた暁には是非一度会いたいものじゃ。」

「彼には王のお言葉をお伝えしておきます。」と、カオルは言った。

そうした仙獣族とのやりとりを思い出しながら、カオルは道を急いだ。しかし、出発した時には九人いた従者が途中の妖獣族との戦闘を経て、今は五人にまで減っている。後どれくらい生き残れるだろうか。予定よりも時間が掛かってしまった。城に辿り着くまであとどれくらいかかるだろう。それにマモルはもう帰っているのだろうか。早く会いたい。彼はどんな風になっているのかしら。マテリアでの姿しか知らない。しかし、例えどんな風になつていようとマモルはマモルよ。それに私だつてマテリアにいた時と同じじゃない。魔法を駆使し、赤い目と髪になつて光ったりする。だから、外見なんて気にしないわ。問題は中身よ。それに、この世界では彼は英雄として讃えられている。それが私の愛する男性なのよ。すぎ過ぎて言葉に出来ない。会ったら、彼を抱きしめよう。そして、あの日のように口付けを交わしたい。ああ、どうして私は飛べないのかしら。足が速くならないのかしら。ハルカのように飛べれば、今すぐ会いに行くのに。

白仙城では伝令蝶という蝶々から、カオルから報告が逐一知らされてきた。エルフ族からの援軍が今白仙城のすぐ近くまで来ているとの伝令からの報告もあった。七千人に達する一個大隊だという。エルフ族からこれほどの大軍が送られてくるとは誰も予想していなかった。これはエルフ族の人族に対しての友好の度合いを示すものだった。そして、数日前に仙獣族との同盟も成ったとの報告が届いていた。あの種族を説得するとはカオルも大したものだ、と長老は思った。そして、七百人の一個中隊が既に仙獣族の城砦である安獣城を出発しているという。

長老修道会が召集され、援軍に対する支援助物資の補給の指示、人族の軍編成、作戦の展開の仕方が決定された。情報収集に三個小隊が結成され、敵の動静を探っていた。

しかし、肝心のカオルたちはいつまで経っても帰ってこなかった。報告も途絶えてしまっていた。緊急の事態でも起こったのではないかと予想され、搜索隊が結成された。通る可能性のある道程は隈なく探索された。そして、ある搜索隊の一隊がカオルたちの物と思われるキャンプあとを発見した。しかし、そこは人影もなく放置されていたという。この事態に対し、再び会議が召集され救援隊を組織することになった。だが、妖獣族の動きが活発化しているために人数を割くことが懸念されたこと、機動性に優れた方がいいということから白仙城でも選り抜きのエリートたちで一個小隊を結成することになった。そして、マモルをリーダーとした七人はすぐに白仙城を出発しキャンプ跡の付近をはじめ広範囲にわたる搜索を開始するよう指示された。

六人の兵士たち

マモルはこの救援隊のメンバーになることを自分から買って出た。「カオルは俺が守る。」と決意し、マモルは居ても立ってもい

れなかった。

一人でも救いに出かけたかった。マモルは妖獣族だろうが何だろうが、倒す自信があった。この間の戦闘から自分の力に目覚め始めていた。修行を重ね、自分の力を制御出来るまでになっている。魔剣グレイウスの心が徐々に分かり始めている。

メンバーには戦士の他に魔道士が三人入っていた。しかし、今までマモルが見た戦士たちとは様子が少し違っていた。共通しているのは目つきが鋭いということだ。何か殺気のようなものが漂っていた。

長老から今回のメンバーは白仙城でも特別な力を持つメンバーだということを知っていた。

「きつと、このメンバーはおそらく白仙城で最高の兵士たちなのに違いない。」とマモルは思った。

だが、皆無口で無愛想な感じがする。何か近寄り難いものを持っていた。

「あまり仲良くなれそうにない感じがするな。」と、マモルは思っていた。「どんな力を持っているのだろうか。それに持っている武器もさまざまだ。」

緑の目と髪を持つ戦士ウヌスは短斧たんぶ

茶色の目と黒髪の戦士ドウオは長槍

黄色の目と髪の戦士トレスは金属の手袋

藍色の目と髪の魔道士カトルは金属の長杖

水色の目と髪の女魔道士クインクは金色の円形法具

灰色の目と銀髪の魔道士セクスは銀色の法剣

カオルたちのキャンプ跡に辿り着くまで彼らの行動を観察したりして見たが、どこにも隙がなかった。本当のプロ集団といった感じがした。しかし、カオルたちのキャンプ跡に辿り着くまで必要以外の言葉を交わすことはなかった。マモルもカオル以外のことので気を逸そらされなくなかったので敢えて話しかけようとも思わなかった。

目的地に到着すると、マモルはキャンプ跡のテントの中や遺品を

調べながら何か手がかりがないか必死に搜索した。そこにカオルがいたと思うだけで懐かしさで涙が溢れそうになった。早く会いたいという思いがマモルの心を締め付ける。ファルもマモルの周りを飛び回りながら一緒になって搜索してくれた。他のメンバーも手馴れた感じで搜索している。そして、キャンプからだいぶ離れた森の中でメンバーと思われる残体が発見された。アルビトリウムでは魂が抜けた体を死体と言わず残体と呼んだ。マモルは報告を受け取るとカオルだったらどうしようかと思いつつ、急いで駆けつけた。しかし、それが男性の残体だと分かるとほっとした。そして、全員でその森を中心に他の証拠を搜索し始めた。全部で五人の残体が発見された。だが、その中にカオルはいなかった。

「カオル、一体どこにいったんだ。」マモルは心が張り裂けそうな思いだった。

開戦

開戦

白仙城では既に妖獣族の大軍が白仙城に進軍中との報告がもたらされ、全軍の出撃指示が発せられていた。敵は三万余に及ぶだろうと推測された。対する人族を中心とした同盟軍は二万を若干超える程度だった。苦戦が予想されていた。進軍速度から戦場は白仙城から北方の夢幻の台地あたりであろうと推定された。

夢幻の台地は朝夕になると濃い霧が立ち込めるため、速戦速決が勝利への鍵となる。戦闘が長引けば不利なのは数で劣る同盟軍の方だった。濃霧でも目が利く者が多い妖獣族は夜襲を仕掛けてくる可能性があった。そのため、早朝に戦場に到着するように進軍速度が調整された。

先に戦場に辿り着いた同盟軍はエルフ族の弓隊を最前列に配置した。先制攻撃を仕掛け敵が怯んだところで、人族の騎乗隊を突入させ敵を蹴散らしたところで人族の歩兵隊と仙獣族の混合部隊を繰り出す三段構えの作戦だった。

一方、妖獣族は肉弾戦を得意とする魔狼族と妙術を駆使する大ムカデのトビズ族という部隊が主力で最も手ごわいのは後方にいる巨大狼の妖獣王バンロウを中心とした本隊である。部隊構成からして接近戦を中心に攻撃をしかけてくると思われた。

霧が晴れてくると妖獣族の大軍が進軍してくるのが見えた。彼らの進軍が止まった。エルフ族の弓隊が一斉に矢を放った。それを合図に妖獣族が突撃を開始した。矢によって次々と倒されていく魔狼族とトビズ族の先方隊。しかし、妖獣族は後から後から部隊を繰り出してくる。そして、人族の騎乗隊が突撃を開始した。双方激しくぶつかり合った。血しぶきがあたり一面に飛び散る。騎乗隊は妖獣族を蹴散らし、戦闘は同盟軍に有利に展開していた。魔道士隊の放

つ火炎弾と岩石弾が妖獣族に襲い掛かった。数百の残体が転がる。そして、歩兵隊が突撃を開始した。もはや、同盟軍の圧倒的有利に戦闘が展開されていた。

今回の同盟軍の総指揮者導師テオは後方の本隊で細かく作戦の指示をしていた。そこに偵察部隊からある報告がもたらされていた。同盟軍の左翼から敵の数百匹の別働隊がここに向かって進軍中ということだった。導師テオは思わぬ凶報に焦燥を隠せなかった。今側面を突かれたら、部隊が総崩れになることは明らかだった。急いで本隊の一部を左翼に回すように指示したが、時は遅かった。既に敵がそこまで近づいていた。間に合わない。魔狼族が本隊に襲い掛かる。不意を突かれあつという間に数十の味方がやられた。導師テオの精鋭部隊が火急の事態にも冷静に対処し始めた。すぐに戦陣を整え、敵を押し返し始めた。押しつ押されつの展開になった。本隊が混戦している間、同盟軍の先方隊が敵の本隊を攻撃し始めていた。戦闘はどちらに軍配が上がるか分からなくなった。

赤光の戦士

本隊は苦戦し始めていた。敵の攻撃の激しさに精鋭部隊も押し返され始めた。導師テオも参戦し始めた。導師の剣は数匹の敵を一撃で倒した。その時、敵の後方で何かが起こり始めているようだった。急に戦列が乱れ始めていた。その時、ものすごい速さでこっちに近づいてくるものが見えた。敵はその物体によって後方が焼き尽くされている。火炎が舞い上がっていた。その物体は導師テオに向かって近づいてくる。何か光の塊のように見える。そして、それと数匹の敵を隔てたところでそれが人だと分かった。その赤い光に包まれた人間が炎の剣を一振りをする。数十の敵が炎に包まれた。それは導師テオとその精鋭部隊のすぐ近くに迫った。敵は既に全て焼失しまつていた。しばらくの間身動きする者はいなかった。その光の人

間は敵を殲滅すると動きを止め、炎の剣を構えたまま動かなくなつた。目は赤い光を放っていた。その時、その後ろから六人の人間がこつちに向かつて走ってくるのが見えた。そして、それがカオルたちを救援に向かったメンバーたちだと分かった。だとすると、この光に包まれた人間はマモルなのだろうか。しかし、少し様子がおかしい。その目はどこを見ていると言うわけでもなく、ただそこに立っている。しばらく経ってから、徐々に光が薄くなり始め、やがて消えてしまった。それは徐々に普通の人間の姿に戻っていく。そばにいる幻霊が心配そうにそれを見ていた。それは間違いなくマモルだった。彼は意識を取り戻したようだった。目の赤い光が消え、元のうち赤い瞳に戻った。剣の炎も消えていく。マモルはようやく口を開いた。

「すみません導師テオ。まだ、力を出し過ぎると制御がうまく出来ないうです。」

「おつ・・・そ・・・じゃが、そなたのおかげで助かったぞ。」と、導師はやつと自分の存在を取り戻したという口振りで言った。

「驚いたぜ。急にものすごい速さで行っちまうんだから。」やつと到着した救援隊のウヌスが言った。「追いかける身にもなってくれよ。」

その言葉にそこにいた全員が笑った。

「始めて見たわ。あんな戦い方。もうびっくりよ。」と、クインクが言った。

「しかし、そなたたちどうしてここに来たんじゃ。カオルはどうした？」と、導師が尋ねた。

「カオルを探してたら、この集団と出会ったんです。何か急いでどこかに向かっているようだったので、後を付けて様子を窺うかがっていたらここに来てしまったというわけです。任務になかったのは分かっていたんですが、苦戦しているように見えたので助けに上がりました。余計なこととしてしまい、申し訳ありませんでした。」と、マモルは言った。

「いやいや、謝るには及ばん。おかげで助かったわい。」長老は喜びながら言った。

「これから任務に戻ります。それでは失礼します。」マモルは立ち去ろうとした。

「ちよつと待て。せつかく来たんじゃ、ここで戦争と言うものを経験しておくのもいい勉強じゃ。長老にはわしからとりなして置くから、少し手伝ってくれんかの。」と、導師は言った。

「私はカオルのことが心配で居ても立ってもいられないのです。」

「そなたの気持ちも分かるが、何か手がかりでもあるのかの？」

「いえ、今のところ全くです。」マモルは唇を噛みしめていた。

「それなら、急ぐこともあるまい。案外、ここで手がかりが見つからないとも限らんぞ。手伝いながら、カオルの消息を探すのもいい手じゃ。」

「そういうことなら、おっしゃる通りにします。」

「今、味方は優勢じゃが本隊がなかなか手強い。少し攪乱を仕掛けてみたいところじゃ。そなたたちで本隊の側面を突いてくれると助かる。そなたたちに一個中隊を授けるから、少し当たってみてくれんかの。敵はまさか別働隊が全滅してると思わず、こっちの裏をかいたつもりで喜んでおるところじゃろう。今度は逆にこっちが敵の裏をかくという作戦じゃ。そなたたちなら、きっと成功するじゃろう。」

導師はそう言うのと近くにいた兵士に何か指示を出した。

「了解しました。では、早速敵の本隊の側面に回ります。」

マモルは仲間とともに今来た方に向かって去って行った。そして、その後を兵士たちが追いかけて行く。

同盟軍は敵の本隊との本格的な戦闘に入っていた。日は高く上り、戦場を照らしていた

激戦

激戦

マモルたちは敵の本隊と思われる部隊の側面から様子を窺っていた。遠くからも本隊は手強そうな妖怪だと分かる。猛牛のような頭を持ち、首から下は人のような体つきをし、マモルが手を上げても顎に触れるのがやっとくらいの大巨体だ。そんな兵士が数千の群れをなしている。まだ、こつちには気が付いていないようだ。

「ファル、行くよ。」と、マモルは言った。

「うん。マモル、今までの敵とは違うから気を付けてね。」と、ファルは言った。

「分かってる。」

マモルはグラディウスを抜き意識を剣と同化させた。剣から炎が吹き上がる。目が赤い光を帯び始め、赤い髪が炎のように逆立つ。そして全身が赤く光っている。それを見ていた仲間たちは驚いた。

「すごい。これがソルジャーなのか。」

そして、マモルは剣を掲げ敵に向かって振り下ろした。それが突撃の合図だった。

マモルは地面を蹴り敵に向かって突進した。一蹴りで土埃が辺りを舞う。仲間は追いつけない。メンバーの一人ウヌスは六人の中では最速の足を持っていたが、マモルはそれをどんどん引き離していく。後ろから付いてくる仲間はウヌスに付いてこれないのに、マモルはそれを上回っていた。

「なんて速さだ。風みたいだ。」と、ウヌスは思った。「しかし、俺たちだつて白仙城の特選部隊ソールなんだ。負けるものか。」

ソールは六人で構成される白仙城の特選部隊だ。三人の戦士と魔道士が選抜され、特殊任務を遂行する。白仙城の兵士たちは誰でもそこに入ることを目標にする。メンバーは城では英雄となり、羨望

される。力も技も他のどんな兵士よりも勝っているエリートたちなのだ。

「それがこうもあっさりと上回れるというのか。桁違いの強さだ。ソルジャーって一体何なんだ！」ウヌスは口惜しがった。

既にマモルは敵の一角を蹂躪していた。ウヌスが敵に突撃した時には数百の敵が焼き尽くされていった。敵は反撃も出来ずに総崩れになっていった。正面から当たっていた同盟軍の先方隊は敵の戦列の乱れに乗じて総攻撃を掛け始めた。ソールのメンバーも白仙城屈指のエリートたちだけあって善戦していた。しかし、この戦場で無人の野を行くように敵を蹴散らしていくソルジャーの前にどの部隊の活躍も影が薄かった。

その時、マモルは意識が遠くなるのを感じていた。このままではだめだ。グラディウスの力に飲み込まれる。少し力を抑えなくてはそう思った時、一瞬その目を疑った。目の前に巨大な狼のような物体が見え始めた。

「何だ、あれは!？」

「あれが妖獣王バンロウよ。」と、マモルの肩に乗っているファルが言った。

「妖獣王・・・」

「そう、あれが敵のボスよ。雑魚獣とは比べ物にならないほど強いから、気を付けて。」

「あんなに大きいのか。」マモルは少し怯えた声で言った。

「でも、あれは力が強く、大きいだけよ。」

「だが、どうやってやつつける？」

「もつと、自分を信じて。ステラであつた時のあなたなら、敵じゃないわ。」と、ファルは言った。

「マジかよ。俺ってそんなにすごかったのか。」マモルは驚いて言った。

「そうよ。あなたは一人でもつと強い敵とも戦えた。」ファルは誇らしげな口調で言った。「本当にすごかった・・・」

「だつたら、やるしかないな。」
マモルはそういうと、目の前の敵を薙ぎ払いながらボスに向かって行った。

戦場には妖獣族の残体の山が築かれていた。同盟軍の勝利はもう目の前にあつた。

再会

カオルは手足が鎖よりも頑丈な蔦に縛られて身動きがとれなかった。カオルは襲われた時のことを思い出していた。

キャンプしていた夜、妖獣族の急襲を受けた。みんなあわてて森の中まで逃げた。カオルは力を使って敵にダメージを与えながら逃げることが出来たが、従者にはまだ満足に戦えない者もいた。何人かがやられているのが分かった。だが、暗闇の中、逃げるので精一杯だった。その上、相手が強すぎた。相手はブルキングという猛牛の頭と人の体を持つ強敵だった。相手は強力な物理攻撃を使い、一撃で倒せる相手ではない。魔道士の耐性では倒すまでに私の方がやられてしまう。どれくらい走つただろうか。喉の渴きを覚え、近くにあつた泉で喉を潤した。暗闇の中、手探りしながら進んでいると、何かに足をとられて下に落ちていくの感じたところで意識を失っていた。気が付くと妖獣族のアジトと思われる洞窟に縛られていた。

そして、今戦場に連れられてきている。私を人質として使つつもりだろうか。だが、こんなことをしても無駄だ。白仙城の兵士たちは一人の人質ために攻撃の手を緩めはしないだろう。それにしてもなんて大きな狼だろう。人の数倍の大きさだわ。これと戦える戦士なんているのかしら。

そんなことを思っていると、何か右の方で騒ぎが起こっているよ

うだった。何かしら・・・炎が上がってる。兵士たちが焼かれています。何が起こっているのだろう。人族がここまで突撃してきたのかしら。だとすれば、私ももうすぐ死ぬんだわ。ああ、マメルと会う前に死ぬことになるなんて。マメル、ごめんなさい。こんな風に死ぬことになるなんて。涙が頬を伝った。さっきの炎がこっちに近づいてきている。何あれ・・・炎が通ってきた後方には何も残っていない。最初から何もなかったように空間が広がっている。兵士たちは消えてしまっている。しかし、何て速さだろう。兵士たちは動きが追い付いていない。何か新しい武器なのかしら。それが近づくと、人らしい姿をしているのが分かった。カオルは呆気にとられてその人のような物体に見とれていた。赤い光に包まれ、炎の剣のようなものを振り回している。あんなに見事な剣捌きをカオルは見ることがなかった。その人のようなものがすぐ近くに迫ってきた。赤く光る目と燃えるような赤い髪が見える。何か鎧のようなものに身に着けている。急に頭上高く飛び上がった。兵士たちの頭を飛び越えこっちに向かってくる。殺される。そう思って目を瞑った。しかし、何も起こらなかった。恐る恐る目を開けた。全身が赤く光っている人のようなものが、こっちを見ている。カオルは何も出来ず、凍りついたように身動き出来なかった。

「久しぶり。」その赤く光る瞳の人が言った。

「え？」カオルは驚いていた。

「忘れちゃったのか。ひどいなあ。ずっと探してたんだぜ。」

「マ、マメルなの？」カオルは泣き声になっていた。

「カオル、会いたかったよ。」マメルは微笑んだ。

カオルは涙が目から溢れるのを感じた。今ままでこんなに泣いたことはなかった。喜びのあまり言葉が出てこなかった。感動で心が震えている。

その時、同じように身動きが出来ないでいた妖獣族の残兵たちが思い出したようにマメルに一齐に襲い掛かった。マメルは何もなかったかのように振り向き様、剣を横に振るった。炎が剣から飛び出

し、渦を巻いたかと思うと敵を一掃した。敵は炎に包まれて焼失した。

「なんて強さなの。これがあのマモルなの？」カオルは見とれていた。

「ちよつと、待っていてくれ。少し掃除してくる。」

マモルはそう言うと敵の残兵に向かって斬り込んで行った。

すご過ぎる。カオルもアルビトリウムに来てから、いろいろな戦い方を見てきたが、これほどの戦い方をする人を見たことがなかった。速さ、力、技、全てが抜きん出ている。これが私のマモルだなんて。

「かつこいいよ。素敵だよ。」カオルは感動で言葉が勝手に出てきた。

わずかな時間の内に敵は全滅していた。

残っているのはカオルの横にいる巨大な狼だけだった。マモルが戦っている間、ほくそ笑むようにしてその戦い方を眺めていた。

戦場の二人

妖獣王バンロウ

妖獣王バンロウの前方に同盟軍は戦列を整え始めた。本隊も前衛の後方に軍を動かしてきていた。導師テオが戦列の前に単騎で出てきている。もはや、妖獣族で残っているのはバンロウだけだった。テオは叫んだ。

「もはや、お主の負けじゃ。降参したらどうじゃ。」

「ここまでは見事だと褒めてやるう。」と、妖獣王は言った。

「どう考えてもお主に勝ち目はない。」

「あははは。ワシを甘く見るなよ。せめて、お前たちの半分くらいは道連れにしてくれるわ。」バンロウは笑いながら答えた。

「それでは仕方ないの。全軍突撃じゃ。」導師はそう叫ぶと剣を振り下ろし、突撃の合図を送った。

「おっと、待った。」と、バンロウは言った。「この魔道士の娘が死ぬことになってもいいのか。」

「全軍止まれ。」導師は軍隊を押しとどめた。

「お前たちを食らう前に、この女を食らうことしよう。」と、妖獣王は言った。「どうもこの娘はその戦士と恋仲のようだ。この女が死ぬことになると、困るのではないか？」

「卑怯じゃぞ。」と、導師は叫んだ。

「卑怯も何もあるものか。戦は勝てば良いのじゃ。」バンロウは笑いながら言った。

導師は齒噛みしながら、どうすることも出来ずにいた。

「バンロウ！俺と果たし合おうぜ。それなら、文句ないだろう。」と、マモルは叫んだ。

「なんだと、ワシと一対一でやるといのか。笑わせるな。多少強いくらいで自惚れるな。」と、バンロウは言った。

「怖くて戦えないんじゃないのか。」と、マモルは言った。

「なに！」と、妖獣王は目を剥いた。「よかるう。ならばまず、お前から食らうてやるわ。」

「ファル、あの技で倒せるかな？」

「力の加減に気を付けてね。あまり力を入れると、カオルにも当たっちゃうよ。」ファルはマモルの耳元で飛びながら言った。

「あの妖精みたいなのは何だろう。」カオルはマモルの近くで飛んでいるファルを見て思った。

「じゃ、行くぜ。バンロウ。」と、マモルは叫んだ。

「おお、いつでも掛かって来い。」バンロウは薄笑いを浮かべていた。

「バゼラード！」マモルがグラディウスを天に向けて叫んだ。

すると、バンロウの頭上で閃光が光ったかと思うと炎を帯びた剣の雨がバンロウに襲い掛かった。

バンロウは炎に包まれながら、悶え苦しんだ。

「なんだこれはあああ！ぎゃあああああ！」バンロウは悲鳴を上げながら焼失した。

今見た光景に誰もが啞然としていた。戦場は静まり返り、ただ風が通り過ぎる音だけが戦場に響いていた。

戦場の二人

戦場に勝利を喜ぶ雄叫びが上がった。兵士たちは誰もが抱き合いながら喜んでいた。導師テオもマモルに向かって馬を進め、そして言った。

「よくやったの。おめでとう。」

「ありがとうございます。」マモルは頭を軽く下げた。

「礼を言うのはこっちの方じゃ。そなたがいなかったら、これほどの大勝利にはならなかったであろう。ありがとうございます。」

口髭を撫でながらテオは満足そうに笑った。

マモルはカオルの方に向かって行った。その顔が近づくにつれ、マモルの頬を涙が伝った。カオルがいなくなつてからの長かった日々を思い起こした。マテリアで悩み苦しんだ日々、アルビトリウムへ帰るために準備したこと、そして、この世界で過ごしカオルを捜し求めた月日がマモルの脳裏に次々と浮かんできた。そして、短かったがカオルと過ごした楽しかった思い出が胸を締め付ける。

「いろいろながあつた。そして、やっと会えたんだ。」マモルは思い出を噛み締めながらカオルの方へ歩き続けた。

カオルも近づくマモルの顔を見つめていた。懐かしかった。会いたかつた。抱きしめたかつた。もう、離れない。絶対に。あなたの傍にずっといる。もう、恐れるものは何もない。二人だけの時間を過ごしたい。私はあなたについて行く。いつまでも、永遠に。

マモルはカオルを縛っている蔦を力で吹き飛ばした。そして、どちらからともなく抱き合つた。強く熱い抱擁だった。言葉はいらない。お互いはひとつ。別々ではあり得ない。お互いの他に何も必要ない。

「ただいま。」と、マモルは一言囁いた。

「おかえりなさい。」と、カオルは優しく言った。

二人とも顔を見つめ合い口付けを交わした。終わることのない熱いベーゼだった。

二人の再会を妨げないように、いつの間にか兵士たちは二人を残していなくなつていた。

霧が少しずつ台地を覆い始め、やがて二人を包み込んだ。

休息の時

第四章 過去

休息の時

白仙城はお祭り騒ぎだった。マモルたちが帰って来ると城門の外まで人々が集まる歓迎振りだった。これほどの騒ぎは数十年ぶりのことだ。その中に長老も混じっていた。こんな長老を見たのは誰も始めてだった。導師たちも隠れて混じっていた。城の外でキャンプしていたエルフ族と仙獣族の軍隊も城外でマモルたちを自然と取り囲み歓喜していた。

大尖塔ではパーティーが開かれ、異例の公開パーティーだった。一般の民衆やエルフ族、仙獣族の軍隊までが参加を許された。マモルはパーティーの最中もカオルのことばかり考えていた。早く二人で再会の喜びに浸りかった。しかし、次々と浴びせられる祝辞と歓喜に応じない訳にいかなかった。パーティーは深夜に及びようやくマモルは解放された。

マモルはカオルと二人で長老修道会からマモルに与えられた紅星の館と呼ばれる屋敷にいた。二人は大広間を通り三階にあるマモルの部屋に向かった。階段を登りながらカオルは言った。

「ずいぶんと広い邸ね。」カオルは周囲を見回しながら言った。

「うん。俺にはもつたいないくらいだよ。」マモルは少し照れくさそうに言った。

「そんなことないんじゃない。あの戦い振りは本当にすごかったもの。まさに英雄って感じ。」

「何かカオルから言われると照れくさいな。」

そう言うとマモルは部屋の扉を開けた。

「うわあ、なんて広い部屋なんだろう。」カオルは部屋の中を見

渡しながら言った。

「何かまだなじめてないんだ。広すぎるし、任務でここで過ごすこともあまりないしね。」マモルはテラスに向かいながら言った。

「そっか。そうだよね。」カオルもマモルの後に続いてテラスに出た。

「お疲れさまでした。英雄さん。」カオルはマモルを背中から抱きしめた。

「ありがとう。カオルもお疲れさま。やっと会えてこんなにうれしいことはない。」

マモルはカオルに向き直り抱きしめながら言った。

「私もあなたと離れてから、どんなにこの日を待ってたか。うれしくて、うれしくて。」

カオルは彼の抱擁に身をゆだねたまま、涙を流していた。

そして、お互いを確認し合うように口付けを交わした。

それから、しばらくお互いを見つめながら存在を確認し合った。

その時、

「二人ともいつまでそうやってるつもり？」ファルがマモルの頭の上ではばたきながら言った。

「え？」マモルもカオルも声を揃えて驚いた。

「はじめまして。ファルと言います。」ファルはカオルに向かって少し頭を下げながら言った。

「エエツ！マモル、これ何？」カオルはファルを見て驚いていた。

「あ、そうだ。まだ、紹介してなかったね。」マモルは慌てていた。「彼女は幻霊のファル。俺の強力なパートナーだ。」

「ゲンレイって何？」と、カオルは尋ねた。

「俺もよく分かってないんだけど、テネレという称号をもらうとその兵士はファルのような幻霊を授かるらしい。」と、マモルはファルを見ながら言った。

「これって呼ばれるのも心外だけど、初めてみたいなものだし、許してあげます。私はマモルの守護を司る幻霊。マモルと契約を結

び、絶えず傍に付き従い、守るのが役目なの。」と、ファルが説明した。

「あ、ご、ごめんなさい。少し驚いてしまって。でも、悪気はないので許して下さい。それから、はじめまして。」と、カオルは慌てて言った。

「いえいえ。どう致しまして。実を言うと、あなたと私は初対面じゃないんだけどね。」と、ファルは言った。「あなたが、以前この世界にいた時には毎日のように会ってたのよ。」

「えっ、そうなの？」と、カオルは驚いた。

「なぜなら、あなたもマモルと同じポルソアメオのメンバーだったからよ。常にマモルと行動をともしていたのよ。」と、ファルは言った。

「ポルソアメオ？」と、マモルが訊いた。

「そう、ここから遙か南方にある諸族の城で組織され、全ての種族から二人ずつ最高の兵士を選抜した特殊部隊のことよ。この世界の平和と安定のために組織されたの。マモルもあなたもそのメンバーだった。」と、ファルは説明した。

「エエエ。そんなに私すごかったの？」カオルは驚いていた。

「そう。あなたは最高の魔道士だったの。それは私が知っている。でも、今のあなたはまだその力のほとんどを失っている。」と、ファルは言った。

「そうなんだ。私、頑張らないといけないのね。」カオルは少し落ち込み気味に言った。

「でも、マモルも同じよ。彼はあなたよりは大分力を取り戻しているけど、まだ半分にも達していない。」と、ファルはマモルを見ながら言った。

「あんなに強いのに半分にもなっていないなんて。どれだけ強かったのよ、マモルは。」と、カオルは不思議そうにマモルを見た。

「そうねえ。例えば、あの戦争を一人で戦っても勝てる可能性はあるわ。」ファルは右の人差し指を立てながら言った。

「なんだってえ！」マモルの方が驚いた。

「まあ、私の助けが必要だけどね。」ファルはおどけた口調で言った。

「うーむ。」マモルは上目遣いで考えるようなそぶりで見つめた。カオルは少し羨んでいた。何となくマモルとファルの息がぴったり合ってる感じがした。もしかして、彼女もマモルのことが好きなのかもしれない。そんな感じを受けた。

「ファルさん。少し訊いてもいいかしら。」と、カオルは言った。「私のことはファルと呼んでくれて構わないわ。以前はそう呼んでいたのよ。」と、ファルは言った。

「じゃあ・・・ファル、あなたたち幻霊って姿を消したり出来るみたいけど、消えてる時はどうしてるの？」

マモルも興味を持ったようにファルを見つめた。

「姿を消している間はマモルに融合して、意識体となってる。」と、ファルは言った。

「その時って、外のことは分かるの？」と、カオルは訊いた。

「外のことはほとんど認識出来ないかな。ただ、マモルの意識に語り掛けることは出来たりするの。融合している間は睡眠と似てると思ってくれて構わないわ。」と、ファルは言った。

「そっか。何か羨ましいな。いつもマモルと一緒にだなんて。」と、カオルはしみじみした口調で言った。

「そうとも言い切れないわ。辛い時も・・・あるのよ。」ぼそつとファルは言った。

「そうよね。マモルは手が掛かるからね。」と、カオルはちらつとマモルを横目で見ながら、おどけた口調で言った。

「なんだとお。そんなに苦労はかけてないつもりだ・・・たぶん。マモルは声音がだんだんと小さくなっていく。」

「あははは。」と、カオルもファルも笑った。

その後も、三人で今までにあったことや思い出話を楽しんだ。しかし、マモルもファルも二人の間にあった出来事に触れることはし

なかった。

カオルを邸に送り届けて、自分の部屋に戻ると、マモルはでベッドに横になりながら考えていた。

「マテリアの最後の夜に俺とファルの間にあったことはカオルに言わないほうがいい。ファルも今では気持ちの整理がちゃんといっているだろう。ファルが俺にキスしたのかどうか、今でもはっきりしない。仮にキスだったとしても、きつと間違いだっただろう。カオルがそのことを知ったら、傷つくのはファルだ。彼女は自分が幻霊だということ、俺を好きだという気持ちをあきらめたのだ。それがどんなに辛いことか、俺には分からない。だが、彼女は俺より大人だ。気持ちもちゃんと整理出来ているはずだ。それをかき乱すようなことはしたくない。この世界に来てからファルを抱きしめたことにしても、あれは生きていてくれた喜びからそうしたに過ぎない。それはファルも分かってくれているはずだ。だから、俺とファルの間には何もなかったということにしたほうがいいのだ。」

ファルは意識体になって考えていた。

「マモルは私とのことをカオルに話さなかった。マモルはきつと話せないんだわ。私の片思いに過ぎない。話してしまえば、私が傷つくと思ったのだわ。でも、この世界で再会した時、マモルは私を抱きしめた……。でも、あれはきつと、この世界に來たばかりで、マモルも不安だった。私がいなくなってしまうかと思っていた。そして、生きていることを知ってうれしくてそうしたんだわ。でも・・・私は今でもマモルを忘れられない。今だって、二人きりにしてあげようと思しながら、気持ちを抑えられずに二人の邪魔をしてしまった。カオルが私を羨ましいって言ったけど、私はカオルが羨ましい。だって、マモルを自由に愛することが出来る。私は幻霊として、彼を愛することは許されないのだ。マテリアでの最後の夜にキスしたのは、自分の気持ちにけじめを付け、断ち切るためだった。でも、

あれだけでは十分じゃなかったのだわ。」

カオルは自宅のテラスから星を眺めていた。

「なんて美しいんだろう。この世界はマテリアとは比べ物にならないくらい美しい。ただ、今回のような戦いはこれからも続くに違いない。マモルと一緒にいるためにもっと強くならないといけない。噂ではいろいろ聞いていたけれど、あれほどの強さを持っているとは思わなかった。このままじゃ、私はお荷物になってしまう。そんなの嫌だ。私は彼を助けてあげたい。彼の傍にいて彼を見続けて行きたい。私も自分が強かったなんて知らなかった。だとすれば、元々あつた力を取り戻せるはずだわ。」

それから、自分のベッドに入りながら思った。

「それにしても、ファルがマモルを見る時の目は恋をしている女の目だったわ。」

再会の友

再会の友

エルフ族は戦争終結後も、しばらくの間、人族の地に留まっていた。人族の地の安全が確認されたら、引き上げるらしい。それほど人族とエルフ族は友好関係にあった。マモルは他の種族のことも知りたくて、そのキャンプ地を訪れる許可を得た。エルフ族たちは英雄が来てくれたということで、皆歓迎してくれた。そこは何もかもが整然としているのに驚かされた。

エルフ族にも支族が二種類あった。霊力性に優れた霊型と瞬発性に優れた射型である。翼で飛ぶことができ、目も髪も青系が多く額に星型の紋章があるのが特徴である。

マモルはエルフ族の人々の美しさに目を奪われた。誰もが仄かに透明な光を放っているように見える。マモルが通り過ぎるとみんなが微笑み掛けてくれた。きつと平和を愛する種族なんだろうな。ここには争いごとがないように感じた。

服装はトーガという長衣を羽織り、その上に胸当をつけた軽装備の者が多かった。

マモルの右手の方で何かが光った。見ると、手を額の星にあてがい何かの文句を唱えている人がいた。そして、その体から光が放ち始めた。次の瞬間マモルの体が金色に光り始めた。

「な、何だこれは!？」と、マモルは思わず叫んだ。

「それはラーボという魔法です。掛けられた者の力を増幅します。時間が経つと効果は消えてしまいますが、今のあなたは普段より強くなっているはず。私からの祝福の意味でかけました。驚かせてしまったことをお詫びします。」その男性は穏やかな口調で言った。

「いえ、少し驚いただけです。謝るには及びません。むしろ、お

礼を言わせてください。ありがとございました。」と、マモルは丁寧に行った。

「いえいえ、どう致しまして。」と、彼は言った。

「すごいんだなあ、エルフ族って・・・」マモルは感心した。「それにとても穏やかな感じがする。」

その他にもいろいろ観察した後、マモルはそろそろ帰ろうかと思つた時、遠くで自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「おい。こっちだ。」と、男性の声が叫んでいた。

マモルがその声の方を見ると、そこに信じられない姿を発見した。シンジだった。マモルは幻かと思った。しかし、姿は大分変わっているが間違いなかった。あのシンジの顔だった。翼を使つてこっちに向かつて飛んできた。

「よお、ひさしぶりだな。」と、シンジが言った。

「シンジ・・・どうしてここに？」

「俺もクラヴィスを使ったのさ。」と、彼は言った。

「そうだったのか。やっぱりあれはクラヴィスだったんだな。」

と、マモルは喜びながら言った。

「そうだったみたいだ。俺も部屋の中に月の案内人が来た時は焦つたよ。」と、シンジが言った。

「部屋の中？」と、マモルは訊いた。

「うん。俺はそこから案内人に連れられてここへ戻つたんだ。夜中だったんで、寝ぼけてて良く覚えてないけどな。」と、シンジが言った。

「相変わらずだな。お前らしいよ。」と、マモルは笑いながら言った。

「あの話を聞いてたから、たぶんこっちでいつか会えるんじゃないかと思つてはいたが、こんなに早く会えるとなは。運が良かったよ。」シンジはうれしそうに言った。

「お前もこっちの住人だったとはな。」

「ああ、そうだったみたいだ。会いたかったよ。お前のいない世界は寂しくてさ。本当に死んじゃうんだもんな。」

「そ、そうだったな。死んだ実感はないけどな。」と、マモルは笑いながら言った。

「あははは。全くだ。俺も同じさ。」と、シンジも笑った。

「こつちへはいつ来たんだ？」

「まだ、それほど経ってない。お前がいなくなってから、俺は大学まで行ったんだ。その年の五月のことだったよ。」

「そうだったのか。人によって違うんだな。俺はあの日じゃないと行けないのかと思ってた。」と、マモルが言った。

「こつちに来てからいろいろ聞いたんだが、あのクラヴィスは前とカオルさんとハルカさんには同じ日に渡されたらしい。そして俺の場合は発見がだいぶ遅れたらしい。お前の家とは離れてたからな。」と、シンジが説明した。

「同じ日って、どういうことだ？」と、マモルが不思議に思っ
て尋ねた。

「つまり、お前は勘違いしてたのさ。あのクラヴィスは四つあったってことさ。」

「そうだったのか。俺はファルから白人の男性を介してもらったんだけど、俺のは最初から俺のものだったのか。」

「ファルって誰だ？」と、シンジがキョトンとして訊いた。

「お、そうだ。紹介するよ。ファル、出てきてくれないか？」と、マモルはどこへともなく呼びかけた。

「さつきからここにいますけどお・・・」と、ファルはグラ
ディウスの剣鐔を背もたれにしながら座っていた。

「わああああ！何だこれ。」と、シンジは驚いていた。

「彼女は俺の幻霊だ。」と、マモルは微笑みながら答えた。

「ゲンレイって、何？」と、シンジはファルを見つめながら答えた。
た。

「うーん。簡単に言えば、俺を助けしてくれる大切な存在ってこ

るかな。」と、マモルもファルを見ながら言った。

「ちよつと、よく見せてくれないか。」と、シンジは興味をそそられていた。

「ファル、俺の手に乗ってみてくれ。」マモルはファルに手を差し伸べながら言った。

ファルはパタパタとはばたいてマモルの掌にちよこんと腰を下ろした。

マモルは掌をシンジの顔に近づけた。

「へえ。かわいいなあ。それにすごい美人だ。」と、シンジはまじまじとファルを見つめた。

「あら、シンジさん。うれしいわ。あなたもかっこいいわよ。」と、ファルはうれしそうに言った。

「いやあ。そんなことないですよ。マモルに比べたら俺なんて」と、シンジは頭に手を当てるように照れていた。

「ほんとよ。それにマモルなんて、私を褒めてくれたことなんて一度だつてないのよ。ひどいと思わない？」と、ファルはマモルを横目に見ながら言った。

「な、何だよお。そんなこと照れくさくて言えるかよお。」と、マモルは本心を言ってしまったことに「しまった」と思った。

ファルは不思議そうにマモルの顔を見つめていた。

「なんだよ。いきなりのろけるのか。」

「そ、そうだ。シンジ、さっきハルカさんって言ったけどさ。カオルのお姉さんのこと知ってるのか？」マモルは慌てて話題を逸らした。

「そうだ。それを言おうとも思ってたんだ。彼女はここに来てるはずだ。」と、シンジは言った。

「え？」マモルは辺りをキョロキョロと見回した。

「うーん。配属部隊が違うから、まだここでは会ってないけどどこかにいるはずだ。」と、シンジは言った。

「そうか。少し探してみようかな。」と、マモルは言った。

「そうだな。お前にとっては恩人みたいなものだからな。彼女がカオルさんの手紙を渡してくれなかったら、ここに帰ることも出来なかったかもしれないな。」

「そうだな。」と、マモルは当時を思い出しながら言った。

「そう言えば、カオルさんはどうした？」と、シンジが訊いた。

「彼女はこここのところ修行に一生懸命なんだ。」マモルは顔を曇らせながら言った。

「そうか。放っておかれてるのか。色男も台無しだなあ。」シンジがおどけて言った。

「少しやりすぎじゃないかって、思ってるんだけどな。彼女は何か思いつめてるようだったから、止めるのも気が引けてるのさ。」と、マモルはしみじみと言った。

「そうか。だったら、仕方ないか。まあ、お前たちにしか分からないところもあるだろうから、自分たちが壊れない程度に頑張れよ。」

「と、シンジは言った。「だけど、あとで紹介はしてくれよな。」

「ああ、もちろんさ。」と、シンジの顔を見ながら言った。

「そうだ。もうひとつお前に言っておきたいことがあったんだ。」と、シンジは真顔になりながら言った。「おめでとつ、親友。お前の活躍はすごかった。あの戦争の英雄が俺の親友だと思うと、マジにお前が誇らしい気持ちだ。」

「そんな改まって言われると、なんか照れるわ。あれは皆が頑張ったから勝ってたのさ。死んで行った兵士たちのためにも負けるわけにいかなかったしな。」と、マモルは言った。

「そうだな。きっと、そういう気持ちがお前の強さの秘密なのかもしれないな。これから活躍期待してるぜ。また、きっと会おう。」と、シンジはマモルの肩を叩きながら言った。

「ああ、絶対にだ。」と、マモルはシンジの手に自分の手を重ねた。

ファルは二人の熱い友情に涙していた。

秘密

秘密

シンジと別れてから、いろいろとテントを見回ったがハルカらしい姿は見当たらなかった。エルフ族は炊事の支度に掛かり始めたので、キャンプ地を後にした。城に帰る前に思慕川を見たくなった。川の方に向かう道の両側にはたくさんの花が咲いていた。この世界に来て本当に良かった。しみじみとそう思った。川に近づくと、向こう岸に女性と思われる人影が見えた。こうやって自然を楽しんでいるのは俺だけじゃないんだな。これだけきれいなところなんだから、当然か。

ファルはいつの間にか人間の姿になって近くの花を摘み始めていた。天使みたいだな。本当にきれいだ。こうして見ていると、何だかファルは俺にもつたいたい感じがする。そうだ、ファルに確認しておきたいことがあったんだ。そう思って、ファルに話しかけた。

「ファル、少し訊きたいんだけどさ。」

「なに？」ファルは白い花をいくつか持ち、その香りをかぎながら言った。

「シンジは鍵が四つあったって言ってたけど、どういうことだ？」

「その通りよ。」と、ファルはマモルに背中を向けたまま言った。

「それじゃ、わからないよ。四つあったってことはさ。カオルとハルカのことはいずれにしても、俺のクラヴィスってどこから来たんだ？あの時、お前言ったよな。自分があの外人に頼んだって。それはお前が持ってたってことだろう？だったら、それはどこで手に入れたんだ？」と、マモルは不思議そうな顔をしながら訊いた。「俺はてつきりカオルからハルカ、そして俺って渡ってきたと思ってたけど、四つあったってことはさ、俺の分っていつからあったんだ？あのクラヴィスは石が十一個あった。そして、十二年目に俺が使

った。でも、四つあったなら十年で帰れるんだから、カオルと俺は一緒に帰れたんじゃないかって、思えるんだけど・・・何かあったのか？」

しばらくの間、沈黙が続いた。気が付くと、ファルはマモルの方に鋭い視線を投げかけていた。

「そこに気が付いちやったのね。気が付かなくても良かったのに。ファルは目に涙を溜めていた。」

「何か・・・あったのか？」マモルはただならぬファルの様子に戸惑った。

「これから言うことは、あなたにとつてとてもシヨクなことだと思う。この話を聞いたら、きつとあなたは私を憎むでしょう。でも、もう隠すこともないわ。」ファルは少し声を荒げながら言った。そして話し始めた。

私たち幻霊族はアルビトリウムの果てに住んでいる種族で、その主が見つかるまではあなたたちと同じように自由に生活している。幻霊族の地から他種族の地はあまりにも離れているために歩いてはとても辿り着くことが出来ない。ただ、その主を見出した時に通る時の扉という諸族の城に通じている通路を通ることで短時間で行き来出来るの。しかし、それは主と契約を交わした時だけしか通ることとは許されていない。でも、私は他の世界を見たくて内緒でその扉を通り、諸族の城に遊びに来たことがあるの。私たち幻霊族は契約を交わすまでは姿形はあなたたち人間とほとんど変わらないために怪しまれることはなかった。でも、すぐに帰るつもりだった。あなたに会うまでは。あなたは諸族の城では既に有名な戦士だった。そしてテネレの称号をもらうのは時間の問題だという噂を耳にしたの。そんな噂を聞いてそれがどんな人なのか見てみたくなった。城中を探し回って、やっとあなたを見つけたの。そして、こっそり後を付け回っていた。その時はただ興味本位だった。そして、その時にたまたま襲って来た妖獣族の集団がいたの。少し戦い方を見てから帰

ろうと思った。あなたは単身で敵に突入して行き、妖獣族の集団をわずかな時間で全滅させてしまった。その時は目を疑ったわ。こんな強い人がいるなんて信じられなかった。だけど、幻霊族の長にこっさり来たことがばれてしまうのが怖くて、そこで帰ることにしたの。帰ってからはそのことが頭から離れなかった。でも、その時は自分の気持ちには気が付いていなかった。

しばらくして、幻霊族に知らせが届いた。数年ぶりにテネレの称号が与えられた兵士がいると。そして、長は契約者を募った。私はそれがあなただとすぐ分かった。私は迷わず選考メンバーに加えてもらった。そして、私は合格し再び諸族の城に行くことになった。そして私が思った通り、契約者はあなただった。私はうれしかった。あなたの守護が出来ることが自分の名誉に感じられた。あなたは契約してから、私に言ったの。

「そんなに一生懸命にならなくてもいい。お互い仲良く楽しく行くこう。」って。

私はうれしかった。義務感以外の感情を感じたのはその時が最初だった。でも、それが恋だって自分でも思ってたなかった。

しばらくして、妖獣族が脅威になり始めたこと、諸族間にも争いが増えてきたためにポルソアメオという組織が結成されることになった。あなたはその組織のリーダーに選ばれた。そして、その中にカオルとハルカ、そしてあなたの親友シンジがいた。

「何だって！シンジもメンバーだったのか？」と、マモルは訊き返した。

そう、彼はエルフ族の中でも最高の射族だった。弓を放つ技では右に出る者はいなかった。

ポルソアメオは全部で七人の小隊編成だった。誰もが戦うことに掛けては抜きん出ていた。そして、メンバーの結束は固かった。あなたはその中でも抜きん出ていたわ。私は幻霊として光栄に感じて

いた。あなたの傍にいただけで自分も強くなった気がした。そして、幸せだった。共に戦って、共に悩み、共に悲しみ、そして楽しみも分かち合った。

ある時、こんなことがあった。

「なあ、ファル、今日は疲れた。いつものやつ頼むよ。」と、ステラが言った。

「はいはい。ご主人様。仰る通りに致します。」と、ファルがおどけた口調で言った。

「まったく、何改まつてるんだ。何か言いたいことでもあるのか？」と、ステラが目を細めて言った。

「いいえ、たまにはお風呂でも入ったらいいんじゃないですか？」ファルは少し横目でステラを見た。

「だってさ、浄化されると体の汚れも疲れもとれて、すごく気持ちいいんだ。いいじゃないか時間節約も出来て。」

「私は便利な道具じゃないんだからね。」ファルは少し怒り口調で言った。

「道具なんて思ってないさ。俺とお前は一心同体。お前なしの生活なんて考えられないよ。」ステラが真面目な口調で言った。

「そ、そんな言葉にごまかされませんよーだ。」ファルは少し顔を赤らめながら言った。

「ほんとのことさ。」ステラがファルを見つめながら言った。

「ほら、ふざけてないで立ち上がりなさい。」ファルは照れてしまった。

「はいはい。」と、言いながらステラは立ち上がった。

ファルが手を組み念じると、光がステラを覆った。たちまちステラの体は浄化された。

「ああ、気持ちよかった。ありがとう、ファル。」と、ステラは言った。「さて、寝るとするかな。」

そう言うと、ステラはベッドに入り横になった。

「ファルも早く寝ろよ。明日は早出なんだから。」
ステラは間もなく寝息を立てて眠ってしまった。

「困ったご主人様だわ。」その寝顔を見つめながら、ファルはその胸の上で横になった。

しばらくすると、何か話し声が聞こえてきた。ファルは起きてその声のする方にパタパタと飛んでいった。廊下を進んで行くと、女性の声だというのがはつきりして来た。少し興奮気味な声だった。それはカオルとハルカの声だと分かってきた。部屋の扉が少し開いてるので、ファルは気になって中を覗きこんだ。

「なんで好きっていつてはいけないのよ!？」ハルカが興奮気味に言った。

「当たり前でしょう。ポルソアメオの掟を忘れたの?」カオルも負けずに言い返した。

「個人的感情で任務に支障をきたしてはならない。ってやつ?」と、ハルカが言った。

「そうよ。もし、言うことで結束がおかしくなったらどうするの?」

「そんなことにはならないんじゃない。ステラは強い人だもの。」

「そんなこと言って、ステラの性格知ってるでしょ?彼はあなたのことを好きであるにしろないにしろ、メンバーの結束を第一に考えて、悩むことになるわよ。」と、カオルは言った。

「そんな都合いいこと言っても、私分かってるんだから。」と、ハルカは言い返した。

「なんのことよ?」

「あなただって、ステラが好きなんですよ。」ハルカはカオルの目を見つめた。

「そ、そのことはこの件に関係ないでしょ。」カオルは目を逸らした。

「関係あるわよ。私はあなたに先を越されたくないだけ。」

「私は言つつもりはないわよ。ステラが困ることになるもの。」
「じゃ、いつになったら言つつもりなのよ？」ハル力はカオルを睨んだ。

「それは言っても大丈夫だと思った時よ。」カオルは俯きながら言った。

「大丈夫な時っていつなのよ？」

「それはポルソアメオのメンバーでなくなった時・・・なんじゃないの。」カオルは顔を上げて言った。

「じゃ、それまで言わないって約束できる？」と、ハル力は訊いた。

「出来るわ。」カオルはきっぱりと言った。

「約束よ。」

「分かった。約束する。」

私はその場から慌てて離れた。そして、マモルの部屋に戻って考え始めた。自分の気持ちがおかしいのに気が付き始めた。それまでに感じたことのない感情だった。それから、気が付いたの。それが嫉妬だと言つたことを。

マモルは何も言えなかった。自分でも覚えのない昔の話が自分に直接関係しているというのは妙な感じだった。マテリアで覚えている昔話が実は自分のことだった。そんな感覚だった。俺にはそんな過去があつたのか。だが、いくら思い出そうとしても思い出せなかった。

それから、しばらく経ってからマテリアで少し話した通り妖獣族との大きな戦争があつた。それまでにアルビトリウム起こったどの戦争よりも大規模なものだった。妖獣皇帝サムン・マールムを中心とした数十万の大軍だった。開戦後、数日で諸族の連合軍はもう戦う力がほとんどなかった。あなたも数十回の出撃を繰り返し、疲れ

果てていた。しかし、意を決して単身で最後の突撃をかけた。その戦いぶりはそれまでのどれよりもすごかった。次々と敵は焼き尽くされ、その主力軍のほとんどが消え去っていた。そして皇帝と戦いを交え、疲れきったあなたはその魔力に圧倒され掛けていた。その時、皇帝は月の扉を開きあなたをそこに吹き飛ばした。落ちると同時に私たちは引き剥がされた。アルビトリウムの契約が解かれた。あなたは全身傷だらけだった。弱りきってあの浜辺で倒れていた。私の姿は幻霊族のところに戻っていた。そして、ここで私は気が付いた。今なら自分の気持ちをカオルやハルカより先に言える。でも、傷ついたあなたにそれを言うことは出来なかった。あなたには休息が必要だと思った。そして、私はあなたをあの公園に運びこんだ。クラヴィスを持っていないし、帰ることが出来ない。だから、あなたを人間としてこの地で休息させるのが一番いいと考えたの。力を使って急いで胎児を探し、あなたの魂をそこに送り込んだの。

あなたを送り込んだ後、私はあなたを見守ることにした。そして、浜辺でこれからのことを考えていた時、カオルとハルカが月の扉から落ちて来た。彼女たちも傷だらけだった。あなたの行方を訊かれ、私は経緯を話した。すると、彼女たちは自分の力を使ってあなたの家の近くに双子の胎児がいることを探し当て、そこに自分たちの魂を送ってしまった。

私たちアルビトリウムの者はマテリアの人間よりも年をとるのが遅いの。数百年続く寿命がこの時に役に立ったわ。クラヴィスを持っていない私はあなたたちが年を取る前に帰す手立てを必死に考えた。そうしながら、あなたたち三人を見守り続けたの。そして、やがて気が付いた。ポルソアメオであるあなたたちをアルビトリウムの者たちが放っておくわけがないことを。そして、あなたたちが落ち込んだ場所に月の案内人が来るのを待った。ある時、案内人を待ちながら浜辺にいと、偶然桜木姉妹が遊びに来ていた。いつまでも遊んでいるので誰かに襲われはしないか見張っていると、月の案

内人がやって来た。その時のうれしさは言葉に表せない。月の案内人は桜木姉妹にクラヴィスを二つ残して行った。彼女たちは恐ろしさで、クラヴィスを捨つとすぐに行ってしまった。案内人は私がいることに気が付き戻ってくる、私にあなたとシンジの行方を訊いたの。私はシンジがどこに行ったのかは知らなかった。彼がマテリアに落ちていたことは、その時始めて知ったの。カオルとハルカが月の扉に落ち込んだ後、シンジもあとを追って来たということだった。たぶん、落ち込んだ場所がずれて離れたところに落ちてしまったのね。案内人は私にクラヴィスを渡すとシンジを探しに行ってしまった。

その後、あなたたちを見守りながら時が来るのを待った。成長したあなたたちは姿こそ変わっていたけど、顔立ちや性格はアルビトリウムの面影を留めていた。懐かしかった。徐々に元の姿に似てくるあなたを見て、話しかけて自分の気持ちを伝えようと思ったことは何度もあったわ。でも、いずれは私も幻霊に戻る時が来ることを考えると、どうしても言えなかった。けどまさか、カオルとあなたが会うことになるとは思っていなかった。アルビトリウムの者同士は異世界でも引き合うとは聞いてたけど、愛し合ってしまうなんて思ってもみなかった。正直にいうわ。私は愛し合うあなたたちを見て、カオルより先に自分があるあなたに近づいて、自分の気持ちを告げられなかったことを後悔したわ。悔しかった。幻霊でない私を見て欲しかった。でも、それはハルカも同じはずよ。彼女はあなたとは違う高校に行っていて、マテリアでは知り合うことすら出来なかった。あの手紙を渡した時に始めてあなたに会い、それでその記憶を持ってこの世界にいるんだもの。今でもかつての感情は忘れてしまっているはず。彼女はかわいそうだね。

私は十年目にあれを渡そうと思っていた。でも、カオルとハルカがどうするつもりなのか分からなかったので、彼女たちの気持ちを確かめる方を先にしたの。私はあなたの幻霊だし、あなたと一緒に帰ってしまうたらマテリアで彼女たちを導ける者がいなくなる。

月の案内人は約束の場所にしか来ないことも知っていた。

カオルはあのクラヴィスを大切にしている、あの場所に来るつもりだと思えた。でも、もうひとつのハルカのクラヴィスもカオルが持っていた。それをハルカに渡さない理由は分からなかった。たぶん、彼女は怖がっていたので渡せなかったんじゃないかと思った。三人一緒に帰らせるのは無理かもしれないと思った。私がハルカに会ってそのことを告げた方がいいかもしれないとも考えた。でも、彼女の性格を考えると信じてくれそうにないと思った。十年目の約束の日が近づいていたある日、カオルがハルカに手紙とクラヴィスを渡す用意をしているのが分かった。私はほつとした。カオルとハルカが帰ることを確認してから次の年にあなたを帰した方が確実かもしれないと思った。

だけど、あの日来たのはカオルだけだった。そして、カオルは一人でアルビトリウムに帰って行った。ハルカはあなたへの手紙を渡すように頼まれていたのを知ったのはその後だった。予定を変更してハルカに私から直接言うしかないと思った。そこでカオルがいなくなつて間もなく、彼女の前に姿を現し何故来なかったのかを問いただした。彼女は驚いていた。そして、次の年には来るようにと念を押しておいたの。さもないと、大変になるって言うって少し脅してしまった。まんざら嘘でもないわ。怯えていたけど、仕方なかった。

でも、何よりも私が気にかかったのはカオルがいなくなつてからのあなた。カオルが死んだと思ひ込んで、落ち込んで生きているのか死んでいるのか分からないかつての英雄。あなたをそこまでにしたのはあの恐ろしい妖怪たちじゃない。たった一人の女性の死。私はショックだった。そこまであなたに愛されていたカオルが恨めしかった。そして、あなたを恨んだ。そこまで愛していたなんて、私は心が張り裂ける思いだった。

そして、十一年目の夏が来た。そして、ハルカは約束を果たした。でも、本当は彼女とあなたと一緒に帰すことも出来た。だけど、私

はそれをしなかった。最後の一年をせめて二人で過ごしたいと思っ
た。あなたにそれが分かるはずもなかった。でも、私はあなたを見
ているだけで幸せだったよ。いずれは分かることだと思ってた。で
も、少しだけの間、わずかな安らぎが欲しい、そう思ってたよ。だけ
ど一年は瞬く間に過ぎた。あとの経緯はあなたも分かっている通り
よ。

それから、もうひとつこの世界に帰ってきてから白仙城にカオル
がいるだろうってことも分かった。でも、それも黙ってた。どう
しても言えなかった。あなたの思いがそのことに行ってしまうこと
が怖かったから・・・

「はつきり言う。私はあなたのことが今でも好き！大好きなのよ
！」
ファルは手で顔を覆い声を上げて泣いていた。

既にあたりは暗闇が覆い始めていた。きらめく星の下、虫たちの鳴
き声が静かに音楽のように響いていた。

思惑

思惑

ハルカはその日、エルフ族のキャンプ地を少し離れて人族の地を散策してみようと思った。そして、思慕川の川岸で花を摘みながら遊んでいた。

「人族の地もエルフ族の地に負けなくらいきれい。」と、ハルカは思った。「ここにマモルと一緒に来れたらどんなに楽しいだろう。」

しばらくそうして楽しんでいると、川の向こう岸に男性らしき人影が現れた。

「折角一人で楽しんでいるのに、少し気を削がれちゃったな。」と、ハルカは思った。

エルフ族は人族よりも視力がいい。その人影が近づくと連れて、それがマモルであることに気が付いた。

「マモルだわ。ああ、なんて偶然なんだろう。こんなところで会えるなんて、うれしすぎる。そつと、近づいて彼を驚かせてやろう。」と、ハルカは思った。

少し高めに飛び立った。マモルはこつちを気にも止めてない。よし。上空から飛び降りて驚かせてやろう。そして、羽音の静かなクリアフエザーをはばたかせてマモルの頭上高くから少しずつ近づいた。

その時、マモルの近くで何かが光ったかと思うと美しい女性が現れた。

「何これ。でも、どこかで見たことあるような女性ね・・・」ハルカはあわてて近くの草の生い茂っている木の中に隠れた。

「よかった。こつちには気が付かなかったみたいだ。」ハルカはほっとした。「でも、なんてきれいな人だろう。エルフ族ではなさ

そうだけど、背中から光の翼が生えているわね。思い出した、あの人はあの時の・・・少し様子を見てみよう。」

カオルは修行を終えてからマモルの邸に行ったが、まだ帰ってないということだった。少し待とうかとも思ったが、特にやることもないので探すことにした。城門の衛兵の話ではエルフ族のキャンプの方に向かったと言ったことだった。しかし、そこを訪れてもマモルらしい姿は見当たらなかった。仕方ないのでもう少し城外を散歩しながら彼を探すことにした。

「たまにはこういうのもいいかもしれない。マモルと一緒にだったらどんなに楽しいかしら。」などと考えながら、散歩を楽しんだ。

思慕川の近くまで来ると何か話し声が聞こえた。こんなところで誰かしら。そう思いながら声のする方に向かって歩を進めた。

話し声の主はマモルだった。声を掛けようかとも思ったが、何かマモルの表情がおかしい。出来るだけ近づき、木の陰から様子を窺うことにした。

「あの女性は誰かしら。なんてきれいな人だろう。」カオルはマモルの前で俯きながら座っている女性の姿に見とれた。

「あの人はファルなの？」と、カオルは思った。

カオルとハルカは二人ともそれぞれの思惑でそれほど離れていない木にしながら、お互いに気付かずマモルとファルの様子を覗いていた。彼女らはマモルとファルの話を聞いているうちに途中声を上げそうになりかけながらも、黙って聞いていた。次々と耳に入ってくる知り得なかったお互いの過去が明らかになるに連れ、手に力が入って握り締めたり、目から涙をこぼしたりした。

そして、マモルを巡る彼女たち三人の思いは全く思いがけない秘密を孕んでいたことを知った。

最もショックを受けたのはカオルだった。自分だけのものと思っていたマモルが意外な過去の渦の中に飲み込まれ、遠い存在になっ

て行くのを感じた。自然と涙が頬を伝っていた。

「マモル、マモル……」心の中で彼の名前を唱えながらそこに泣き崩れてしまいそんな自分を必死にこらえた。

決心

決心

マモルとファルはしばらくそこにじっと動けずにいた。最初に沈黙を破ったのはマモルだった。

「そんなことがあったのか。」マモルは静かに言った。「ありがとう、ファル。全部話してくれて、辛かっただろう。」

「嫌いになつたでしょう。私は嫌な女よ。あなたの傍にいる資格なんかないのよ。」ファルは涙をこぼしながら言った。

「そんなことない。ファルのおかげで俺たちはここに帰ることが出来たんだ。例えそれがどんな形だったとしても、俺はお前に感謝するよ。もし、ファルがいなかったら、みんな戻れたかどうか分からない。誰かが欠けたとしたら、それは不幸な結果になっていたと思う。でも、お前は辛い自分の気持ちをこらえながら、ちゃんとみんなをここに連れてきてくれたじゃないか。それだけで十分だよ。俺はお前に感謝してる。だから気にするな。そして、ありがとう。」マモルはファルの涙に溢れる目を見つめた。

ファルはマモルの胸の中に顔を埋めて声を上げて泣いた。

「ごめんなさい。ごめんなさい。」ファルは何回も言い続けた。

「大丈夫だよ。これからもよろしくな。」マモルもファルをやさしく抱きしめた。

マモルは城に戻るとカオルの邸に向かった。だが彼女は帰っていなかった。心配になってコロシムに行ってみたが、そこにも見当たらなかった。城門で衛兵に尋ねてみたら、城外へ一人で歩いて行ったという。彼はこんな遅くなっても戻らないのは何かあったのかもしれない。そう思っ慌ててそこから探し続けたが、どこにも彼女はいなかった。

さつきの川岸にも行ってみたが、誰も見当たらなかった。

「どこに行つたんだ。カオル」マモルは心で叫び続けた。

心当たりのある場所は全て探したが、見つからなかった。仕方がないので一度城に戻ることにした。もう一度カオルの邸を訪ねてみた。すると、もう寝てしまったということだった。マモルは安心して、自分の邸に帰った。訓練で疲れてしまったのだろう。今日は会うのはあきらめよう、と思った。

ファルもその夜は姿を見せなかった。あんな話を打ち明けたんだ。しばらくそつとしておいてあげよう。

それから数日間、マモルはカオルと会うことが出来なかった。邸を訪ねても病気で安静にしなくてはならないから会えない。そういう理由で見舞いも許されなかった。マモルは長老修道会での会議に出席したり、単独で訓練をしたり、散策したりしながら毎日を過ごした。

エルフ族の派遣軍が故郷に帰ることになった。人族は長老始め多くの人々がそれを見送った。マモルはとうとうハルカとは会えなかった。せめてお礼だけは言っておきたかった。マモルはエルフ族を見送るとなんとなく城に帰りたくなかった。その辺を少し散歩でもしてみようと思つて近くの少し小高い丘を目指した。

その丘の頂から人族の地を見渡し、きれいな景色に見とれていた。ファルもいつものように花を摘んだり、景色を見つめたりして楽しんでる。

その時、声を掛けられた。

「お久しぶりです。」と、後ろから女性の声が出た。

マモルは声の主の方に顔を向けた。そこには青い目と髪の色がハルカがいた。マモルは突然のことに言葉が出てこなかった。少しの間、沈黙があった。

「あ、お久しぶりです。」マモルはやつと言葉を発した。

それから、マモルは思い出したように、

「あの時はありがとうございました。」と、言った。

自分でも何か不自然な感じになってしまったことに気が付いたが、礼を言うことが出来たのでうれしかった。

「うふふ、何も改まらなくてもいいのよ。私は言われたことをやっただけなんだから。」ハルカは微笑みながら言った。「そしてファルさん。あの時はありがとうございました。」

「え？」マモルとファルが同時に驚いた。

「どういうこと？」とファルは言った。

「あなたのことはよく知っているつもりです。」ハルカは少し真顔になりながら言った。

「どういうことなの？」とファルが心配顔で言った。

「あの話を聞いてしまったの。」ハルカはもう笑っていなかった。

「あの話って？」

「あの川原で話していたことよ。」

しばらく沈黙が続いた。ファルは事態を察したのか俯き加減になっていた。

「そう。聞いていたのね。」ファルは小さな声で言った。

「そうよ。聞くつもりなかったけど、成り行きで聞いてしまったの。」

「じゃあ、何も言うことはないわ。話していた通りのことよ。」ファルは顔を上げて言った。

「私はあなたに感謝してる。」とハルカは言った。

「え？」ファルは驚いた。

「だって、私はあなたのおかげでここに戻れたようなものよ。あの話をしてくれなかったら、私は十一年目のあの夜、あそこに行くことはなかった。それでお礼を言いたかっただけ。ありがとう。」ハルカは頭を少し下げた。

「そんな、お礼だなんて・・・」

「おかげで自分の知らなかった過去を知ることが出来た。それに私はここに帰ってきてから間もなく、自分の気持ちを思い出すこと

が出来たの。」ハルカはマモルを見ながら言った。

「え？」マモルとファルが同時に叫んだ。

「私はマモルを好きだったってこと。」と、ハルカは言った。マモルとファルはハルカを見つめた。

「でも、私はあなたとはマテリアで知り合うことが出来なかった。それが過去の私の誤算だったのね。」ハルカはマモルを見つめながら言った。「かわいそうなのは、カオルの方ね。彼女は自分だけがあなたを好きだと思ってる。今でも。でも現実はそうではなかった。私もそしてファルさん、あなたもマモルのことが好きなんだから。」ハルカはファルの方を見つめた。

「それを言いに来たのか？」マモルはカオルとそっくりな顔立ちのハルカに言った。

「ううん。今日は私の決心を言いに来たの。」ハルカはマモルを見て言った。

「決心？」

「そう、私は二人に比べるとずっと出遅れてしまっている。アルビトリウムでもマテリアでもあなたに自分の気持ちを伝えられずに今まで来てしまっているから。」

「仕方ないことじゃないか。こういう事態は誰も予想出来なかったんだから。」マモルは興奮気味になって言った。

「だからよ。だから、私はあなたに言う。私もあなたが好き。あなたを誰にも渡したくない。今のあなたは私なんかカオルの姉で手紙を渡してくれた人くらいにしかならないでしょうけど、あなたに最初に好きだと言うはずだったのは私なのよ。昔のカオルに止められて、言えずにここまで来てしまった。でも今は違う。ポルソアメオでもカオルの姉でもない。ただのあなたを愛する一人の女なのよ。だから、ずっと言えなかった私の気持ちを今こうして伝えに来たのよ。」ハルカは涙を流しながら言った。

マモルは何も言えなかった。ファルは顔を斜め下にして俯いている。

「どうして、私だけが言っちゃいけないの。私だって言う資格あるでしょ？」ハルカの青い目から涙がほとばしり出ていた。

「ああ、あるさ。君に好きだって言っちゃいけないなんて誰も言えないさ。ただ誰の力も及ばない運命でこうしてお互いの記憶の糸が絡まってしまっているだけだよ。」

「よかった。よかった・・・うっ・・・」ハルカは泣き崩れた。

マモルはハルカに近寄りそっと抱き起こした。その瞬間、ハルカはマモルの胸に顔を埋め抱きしめた。マモルは驚いたが、そのまま何も出来なかった。

「今だけはこうすることを許して。お願いだから。」ハルカは涙を流しながら言った。

日は高く上り、丘に静かな風が通り抜けていた。

ハルカは別れ際に言った。

「今日のところは故郷に帰ります。今の私にはこうする以外他なかった。あなたに気持ちを伝えられて、本当によかった。カオルには怒られるかもしれない。彼女のことを裏切っているから。彼女には悪いと思ってる。でも、自分の気持ちに嘘をつくことは出来ないの。それはファルもきつと同じはず。これからはただの一人の女。あなたの心をいつか私に向けさせてみせます。でも、今はあなたをこれ以上苦しめたくない。だから、少しの間お別れします。また会いに来るつもりです。いつか、きつと。」

そう言っただけで彼女は仲間のところに帰って言った。

マモルは彼女の背中を見えなくなるまで見つめ続けていた。ファルはそんなマモルの横顔を悲しそうに見つめ続けた。

それから、マモルはカオルと会えないままに数日を送っていた。ファルはマモルの世話をしながらも何か思いつめている感じだった。ファルはきつと一番辛いかもしれない。どんな状態であれ、マモルの傍にい続けなければならぬから。彼女はきつと一人で考えたい

時もあるんだろうな。でも契約に縛られてそれも出来ない。ステラであった時の俺はファルをどう思っていたんだろう。単なる幻霊としか思ってたなかったんだろうか。そして、カオルとハルカに対 shouldn't 思いを抱いていたんだろう。それを知るとは今はもう出来ないのだ。だったら俺はどうすべきなんだろう。今の俺はカオルを愛している。それは動かせない事実だ。だが、ファルのことはどう思っているんだろう。彼女を美しくきれいだといつも思っている。だが、それは好きだと言うことに繋がるのだろうか。それに彼女が俺に尽くしてくれていることも知っている。それは単なる義務で契約をしている以上、彼女の役目なんだろう。しかし、それだけで割り切れることなんだろうか。そこには俺に対してもっている気持ちみたいなものが影響したりしないのだろうか。

「なあ、ファル。」マモルはファルを呼んだ。

「なに？」ファルはマモルのほうに顔を向けた。

「たまにはさ。一人で散歩して来てもいいぞ。」とマモルは言った。

「何言ってるの。そんなこと出来ないわ。私は幻霊なのよ。」ファルは仕事に手を戻しながら言った。

「よく分からないんだけど、幻霊って主から離れないのか？」

「何？どこかに行つて欲しいの？」ファルはマモルから顔を背けた。

「そうじゃないよ。気晴らしに出かけて来たらどうかって行つてるのさ。」

「そんな必要はないわよ。私はこれで満足よ。」ファルはテーブルの花の香りをかきながら言った。

「そうか。それならいいんだけど。少し心配になつてさ。」

「心配？」ファルは不思議そうにマモルのほうを見た。

「お前見てると、いつも俺のためばかりに働いてるだろう。疲れないのかなつて。」マモルはファルを見ながら言った。

「そんな心配いらないわ。私は幻霊なんだもの。」ファルはテー

ブルの上にある花瓶を持ち上げた。

「そんなものなのか。まあ、そんなに一生懸命にがんばらなくても、楽しくやるうぜ。」とマモルは言った。

「え？」ファルは手に持っていた花瓶を落とした。

「大丈夫か？」マモルはその音に驚いた。

「今なんて・・・」ファルはマモルを見つめた。

「だから、そんなに頑張らなくても、仲良く楽しく行こうって言ったのさ。」マモルはファルが怪我してないか心配になって、彼女に近づいた。

ファルはマモルの顔を見て驚いていた。それはステラの顔だった。

カオルはマモルに会うことが出来なかった。顔を見たら、きつと泣いてしまう。彼にすがり付いてしまいそうで怖かった。そんなことにはなりたくなかった。これからは二人でずっと一緒に過ごせるそう思っていた。でも、それは足元から崩れ去ろうとしている。ファルはやはりマモルを愛していた。それは予想していたことだ。でも、私の方が先にマモルと愛し合っていたと言う事実があつての優越感みたいなものがあつて、どことなく安心している自分がいたのだ。でも、現実はそのようではなかった。ファルは私よりも先にマモルを愛していたのだ。そして、ハルカも同じ思いだったなんて。そんなのひどすぎるよ。何でなのよ。なんで私一人のものじゃないの。自然と涙が頬を伝った。でも、過去はどうあれ今は私のマモルなんだ。彼もそう思っているはずよ。でも怖いわ。それがどこで壊れるのか恐ろしい。いつまでも今のままでいて欲しい。記憶なんて戻らないで欲しい。私が忘れられてしまう未来の可能性なんていらなくても彼はもう知ってしまったている。過去の事実を。彼を愛する三人の存在を。そして、もし彼の記憶が戻った時、私への思いまで消えてしまったら私はどうすればいいのだろう。時間はどうして前に進むことしか知らないの。後ろを向いて進んでくれないの。それでも私の思いは変わらない。永遠に。怖いのはハルカが彼への、思い

、を思い出してしまふことだわ。

彼女が記憶を取り戻したら、私はどうすればいいのだろう。姉妹としての私たちの関係は破綻してしまうのだろうか。そんなの嫌だ。私たちは仲のいい双子でずっと来たんだ。姉がライバルだなんて、そんなことあってはいけない。でも、いざとなったら覚悟を決めるしかない。マモルへの思いは断ち切ることは出来ない。

今はこの話は聞かなかつたことにするしかない。そして、マモルといつものように楽しく過ごそう。そうよ、それが一番いいわ。あれを聞いたのは事故みたいなもの。少し擦りむいたけど、大して問題にならない傷よ。記憶が戻ることなんて、飽くまで可能性の問題だわ。時間の流れは私たちの船をこのまま運んでくれるはずよ。

カオルの力

第五章 旅立ち

凶報

白仙城の長老の元にひとつの知らせが届いた。仙獣族の地域に妖獣族が攻め込み始めているということで仙獣族からの救援要請が届いていた。早速、長老修道会は先の戦争での仙獣族との同盟の盟約により人族から一個中隊を送ることになった。そして、マモルもその派遣軍に加わることになった。ただし、マモルについては中隊の指揮下に入らず、独断での行動が許可された。それはソルジャーであり、テネレを戴いていること、そしてポルソアメオに所属していた彼への配慮からであった。

そして、カオルもポルソアメオに所属していたことからマモルの指揮の元で行動することになった。そして、マモルたちには他に五人の戦士と魔導士が付けられた。

カオルの力

カオルはあの決心した日からマモルとは何もなかったかのように会っていた。ファルの存在を気にしながらも不自然にならないように心掛けた。マモルはそのことを知らなかったが、カオルの様子に少し変化がみられることには気が付いた。だが、それはカオルが魔導士として成長しているためなのかもしれないと受け取っていた。

マモルたちは地理に明るい中隊とともに行動した。仙獣族の地は辺境に位置しあまり諸族の行き来がなかった。険しい道を行軍しな

ければならず、奇襲攻撃が警戒された。案の定、途中妖獣族の攻撃を三回受けたが、どれも小規模のもので大した被害は出なかった。

マメルとカオルは二人だけで周辺の偵察に出かけた。

「この辺りはかなり険しいな。ここで襲撃受けたら少してこずりそうだな。」と、マメルは言った。

「そうね。」カオルが答えた。

二人は高いところから周辺の様子を窺おうと岩場を登り始めた。

「カオル、上れるか？」と、マメルは言った。

「私のことは気にしないで。あなたにどこまでも付いて行くわ。」

「そんな大げさな。」マメルはカオルの言葉に不自然なものを感じた。

「ううん。あなたの足手まといにはなりたくないの。そのために今まで苦しい訓練してきたんだもの。」カオルは真剣に言った。

「分かった。足元に注意だ。」マメルは先に進んだ。

ファルはマモルの傍を飛びながらカオルの視線が自分に注がれていることに気が付いた。

「何かあった。」と、ファルは思った。

頂上に達して、中隊を見下ろせる位置に立つと、ずっと先の方が谷間になっていることに気が付いた。絶好の待ち伏せ場所だ。

「あそこで待ち伏せされたらひとたまりもないな。」マメルはそこを指差しながらカオルに言った。

「すごいなあ。どうしてそんなこと分かるの？」と、カオルは訊いた。

「谷間では伏兵に注意すべしさ。逃げ場を失って一番被害が出易いのさ。」と、マメルは言った。

「あんまり遠くに行かないでね。」と、カオルは呟くように言った。

「えっ。何て言ったんだ？」マメルはカオルを見た。

「ううん。こっちの話よ。」と、カオルは言った。

マモルはカオルの様子がやっぱりおかしい、と思った。何か思いつめてる感じた。

「明日は中隊とは別行動をとることにしよう。俺たちはあの山上から中隊と平行に進もう。」

「分かったわ。」と、カオルはうなずいた。

マモルたちはキャンプ地に戻ると、夕食を取り始めた。ファルはマモルに栄養が豊富なポコの実を取って彼の皿の上に乗せてあげた。

「それを食べておくといいわ。とっても栄養あるのよ。」と、ファルは微笑みながら言った。

それを見ていた。カオルは

「私が食べさせてあげる。口を開けて、マモル。」と、その実をマモルの口に運んだ。

ファルはそれを呆然と見ていた。マモルは少し照れくさそうに口を開けた。

「いいですなあ。美女二人に囲まれて。実に羨ましい光景だ。」と、戦士の一人が言った。

「はあ。」とマモルは少し困り顔で答えた。

「英雄も美女には形無しってことですか。」と、もう一人の戦士が笑った。

「そんな、からかわないでほしいな。」と、マモルは顔を赤らめた。

皆がその様子を見て笑った。

翌日は朝から曇り空だった。雨の降りそうなたちこめた雲の中、マモルとカオルは二人だけで昨日の打合せ通り軍が谷間に差し掛かる前に山を登り、軍と平行に進んだ。他の者には中隊の指示に従うように言っておいた。しばらくすると山の中腹辺りから何か煙のようなものが立ち上がっていた。

「あの煙なんだろう。」と、カオルが言った。

「ちよっと、近づいて見るか。」

「オツケー。」

「少し変だ。何か動いてるぞ。もしかすると、妖獣族かもしれない。カオル、注意だ。」と、マモルが言った。

「了解。」

人族の軍隊を挟んで反対側の山の斜面から何か大きな黒い塊が動き始め、こつちの山からも同じようなものが動き出した。

「しまった。奇襲だ。」と、マモルが叫んだ。「カオル、ここで待つてろ。俺が行つてくる。」

「いやよ！私も行く。」

「何言つてるんだ。敵の襲撃だぞ。何かあつたらどうするんだ。」と、マモルは言った。

「言つたでしょ。どこまでも付いて行くつて。」カオルは真剣だった。

「よし、一緒に行くぞ。」マモルはそう言うとカオルをさつと抱き上げた。

「きゃっ。」カオルは叫んだ。

「少し我慢してくれ。」マモルはそう言うと辺りに土煙をまき散らして走り出した。

風のようにだった。これがマモルの力。すごい。これじゃ、とても付いていけない。でも、気持ちいい。マモルの目を見ると赤く光っていた。髪は赤く逆立っている。あの時見た戦士だ。すごいよ。最高に心地いい。

あつという間に敵に近づいた。マモルはカオルを下ろした。敵はマモルたちに気が付いた。

「あれはブルキングだわ！」と、カオルは叫んだ。

「ブルキング？」と、マモルは訊いた。

「そう、奇襲を得意とする妖獣族の支族よ。」

「強いのか？」

「ものすごく。あの時、私をさらつたのもあいつらよ。」

「ならば、リベンジといこう。カオルをひどい目に合わせたやつ

は許すわけにいかないからな。」と、マモルは言った。

カオルはマモルを見つめた。

「かつこいいよ。マモル。」

「えっ、何？」

「ううん、なんでもない。」

「じゃ、行くぜ。」と、マモルは叫んだ。

「はい。」

マモルはグラディウスを抜くと斬り込んだ。たちまち数十匹が炎に焼かれている。敵はマモルを取り囲もうとした。

「まずいな。ここであまり炎を使うと山の木に燃え移って大火事になるぞ。」と、マモルはファルに言った。

「そうね。少し敵を引き寄せる必要があるね。」と、ファルは言った。

「マモル、私に任せて。」と、カオルが後ろの方で叫んだ。

マモルはカオルの方を振り返ると、彼女は目を瞑って念じている。そして、次の瞬間、

「コキユートス！」と、カオルが叫んだ。

マモルは驚いた。自分を取り囲もうとしていた敵が凍りついた。カオルが腕を円形に振り回すと次々と敵が凍り付いていく。敵は全て凍りついてしまっている。最後にカオルは大きく腕を広げた。すると凍りついた敵が砕け散った。マモルはカオルを見つめていた。

「す、すごい。」マモルは目を丸くした。

「どう、私の魔法も捨てたもんじゃないでしょ。」と、カオルは得意げに言った。

「すごいなんてもんじゃないだろう。これは。」マモルは砕け散った敵を見つめながら言った。

「わたしも、修練で力を取り戻してるのよ。」カオルはうれしそうに言った。

「そうか、あの訓練はそういうことだったのか。」マモルはカオルに微笑んだ。

「うん。」カオルはにこにこしていた。

「おめでとう、カオル。」

「ありがとう。」カオルは微笑んだ。

「おつ、こうしてはいられない。話はあとにしよう。」マモルは山向こうの敵を見つめた。

「了解、隊長。」カオルはマモルにウィンクした。

「なんてことだ。」マモルはカオルに少し困り顔を作って見せると、彼女を抱き上げた。

「いくぜ！」マモルは地面を一蹴りした。二人の体は宙高く舞った。

「マモルもジャンプ力が前よりも上がったんじゃないの。私を抱きながらこんなに飛べるなんて。」と、カオルはマモルに言った。

「すごく気持ちいいわよ。」

「それはよかったじゃん。お姫様。」マモルはおどけた口調で言った。

マモルは谷間に差し掛かっても躊躇せず、谷向こうの山に向けてジャンプした。

「きゃああああ。」カオルは目を瞑って叫んだ。「こわすぎるうっうっ。」

「しっかり掴まってるよ。」マモルは体が赤く光りさらに高く舞い上がった。

「ひいひいひい。」カオルは怖さのあまり叫び続けた。

「さあ、着いたよ。」そう言っつてマモルはカオルを地面に下ろした。

「ちょっと、何なの今は。あんなの見たことないわよ。一体どうなってるのマモルは。」カオルはお尻に手を当てながら言った。

「もらしちゃったのか？」マモルはふざけた調子で言った。

「何よ。失礼ね。ちょっとだけよ。」カオルは顔を赤くして言った。

「それはあとで何とかしてくれ。今はやつらを片付けることが先

だ。」

マモルは敵に突進して行った。彼は敵をグラディウスで撫斬りにしている。

「行くわよ、マモル！」念を終えたカオルが言った。

「よし、まかせた！」マモルは叫んだ。

「次はこれよ。アダマント！」カオルが叫ぶと敵の上空から大きな岩が現れ敵を押しつぶした。

カオルが両掌を体の前で上下に重ねて切ると岩が次々と敵の上に落ちていく。マモルはわが目を疑った。

「これが魔道士なのか。」マモルはカオルをじつと見つめていた。「でも、これはマモルがいてくれないと出来ないわ。念じるのに時間が掛かるのよ。その間、敵を引き付けておいてもらわないとならないから。私たち魔道士の弱点は耐性の弱さと念に時間がかかることなの。」と、カオルは説明した。

「そうなのか。でも、カオルの魔法はきつとこれから必要になるな。」と、マモルは言った。

「私ももつと強力な魔法を出せるようにがんばる。」カオルは手を握り締めた。

「でもよくがんばったな、カオル。」マモルはカオルを意味ありげに見つめて言った。「そうだ、戦いは終わったんだから、行って来ていいよ。」

「もう、マモルなんか知らない！」カオルは顔を赤らめながらどこかに行ってしまった。

「あははは。カオルはやっぱりかわいいな。」

ファルは戦いが終わるとすぐ姿を消した。カオルに嫉妬している自分が嫌だった。こんなことじゃ、幻霊の役目が果たせない。マモルにはこれから私が必要になるだろう。これからの敵はこんなもんじゃない。そんな時に私がこんな調子ではマモルを助けられないわ。本当の戦いはまだこれからなのよ。

マモルとファル

マモルとファル

伏兵を倒したことで、マモルとカオルは中隊長から感謝され、その夜は兵士たちも飲酒が許され、キャンプは賑わった。マモルとカオルも心から楽しんだ。一人ファルだけは皆から少し離れた場所に行ってしまった。長い行軍の疲れと飲酒のため、兵士たちも夜が更けると間もなく眠ってしまった。カオルも魔力を使った疲れから自分のテントで早めに眠りに就いた。ファルを探してマモルは辺りを歩いていった。そして、誰もいないところで一人で月を見ているファルを見つけた。この時のファルをマモルは後で何回も思い出すことになった。

月明かりの下で岩の上に座っていたファルは全身が光に包まれてるように見えた。マモルは彼女の容姿をこの時、改めて見直した。艶の良い白い肌と緩やかなカーブを描く美しい顔の輪郭。どちらかというと小さめのその顔に大きくはつきりした目の中に輝く水色の瞳、細く長い眉がその上にまっすぐ伸びている。高く細めの鼻の下に桃色の小さい唇。顎の線は女性らしい緩やかな曲線を帯びている。長い銀色の髪が背中にまっすぐ伸び、光り輝く長い翼と交差している。

「なんてきれいなんだろう。」マモルは声を掛けずにしばらく見とれていた。

ファルがマモルのほうに振り向いた。

「なんだ。いたのね。声掛けてくれればよかったのに。」ファルは静かな口調で言った。

「ご、ごめん・・・どこ行ったのかと心配して探しに来た。」と、マモルは言った。

「ありがとう。急にいろいろと思い出しちゃって、一人になりた

「かっただけ。」そう言うと、ファルは月を見上げた。

「何を思い出した？」マモルはファルの隣に座った。

「幻霊族のところに行った頃のこと。」と、ファルは言った。

「どんなところなんだ？」マモルはファルを見つめながら聞いた。

「一年を通して花が咲き乱れて、木々が生い茂り、人々は平和に暮らしている、この世界の楽園のようなところだった。」ファルはうれしそうに言った。

「一度行ってみたいな。そんなところ。」

「とても遠くて歩いて行けないわ。」

「そうか・・・残念だな。」

「マモル、訊いてもいいかな。」ファルはマモルのほうを見た。

「何だ改まって？」

「ステラだった時のこと、何か思い出せた？」

「そうだな。実を言うと、少しだけ思い出したことがある。」と、

マモルは言った。

「どんなこと？」

「ちよっと、まだ言えない。」マモルは思案顔で言った。

「気になる言い方ね。」ファルは少しむくれ顔になった。

「もう少し待ってくれ。まだ言っていない時じゃない。」マモルは頬を指で掻きながら言った。「でも、時が来たら最初にファルに話すよ。」

「約束だよ。」

「ああ、約束する。」と、マモルは言った。「少し一緒に居てもいいかな？」

「いつも一緒にいるじゃない。」と、ファルは言った。

「そうなんだけども。」

「お好きにどうぞ。」ファルは再び空に顔を向けて言った。

暖かいそよ風が谷間を吹き抜け、穏やかな夜は更けていった。

仙獣族の危機

仙獣族の危機

仙獣族の風谷国という属州に妖獣族の一派が襲撃をかけた。ここを突破されれば仙獣族の主城である安獣城までは目と鼻の先になる。仙獣族の王バンライは早速主力軍を投入した。しかし、妖獣族の猛攻の前に仙獣族は苦戦を強いられた。

「人族からの援軍はまだ来ないのか？」バンライは怒気を含めて言った。

「はっ、途中妖獣族の襲撃にあったようで進軍が遅れているようです。」と、斥候兵が言った。

「うーむ。妖獣族め。小癪なことをしおるわい。」と、仙獣族の王は歯噛みした。

「到着まであと数日の辛抱です。」と、斥候兵は言った。

「エルフ族の援軍はどうじゃ。いつ到着する？」

「エルフ族もやはり妖獣族の襲撃に合い、こちらは兵の大半が壊滅したとの報告が入っています。今、確認に別の者を向かわせておきます。」と、斥候兵が答えた。

「何ということだ。援軍を割くほどの余裕はわが軍にはもうない。」

バンライは少し考えてから、

「人族に期待を寄せるしかないの。今の現状を人族の援軍に知らせよ。そして敵の後方から襲撃を掛けて欲しい。そう伝えてくれ。」と、言った。

「はっ！早速、出発致します。」と斥候兵は言つとそこから立ち去った。

「一刻も早く来てくれ。もう時間がない。」と、バンライは一人

眩いた。

「後少しで仙獣族の地に到着するはずよ。」と、カオルは言った。
「こんなに険しいところにあるんだな。仙獣族の住処って。」マモルは険しい岩場を中隊の後から付いて行きながら言った。

「うん。仙獣族は辺境に位置しているためにあまり他種族との交流がないの。」と、カオルが言った。

「なるほどな。こんなに険しいんじゃ、誰も来たくなくなるよな。」

その時、中隊長の使者がマモルの元にやって来た。

「中隊長がお呼びです。」と使者が言った。

「すぐに行きます。」と、マモルは応えた。

使者はそれだけ言うと、戻って行った。

その頃、エルフ族の仙獣族への救援軍は妖獣族の襲撃によって壊滅しかけていた。部隊は樹海城発時の半分以上になっていた。その部隊の生き残りにハルカとシンジがいた。二人は同じ部隊に配属されていた。

「シンジ、大丈夫？」ハルカは傷ついたシンジにエイレネという回復魔法を掛けながら言った。

「ああ、すまない。おかげで痛みが治まったよ。」シンジは傷口を押さえながら言った。

二人は同じエルフ族ということもあって、マテリアから帰ってきた者同士すぐに仲良くなった。しかも、どちらもマモルを知っているという共通の記憶がさらに結び付きを強くした。

「マモルは大丈夫かな？」と、シンジが言った。

「人族の派遣軍も襲撃されたって噂だけだね。マモルが軍にいるかどうか分からないわ。」ハルカは人族の地の方角を見つめながら言った。

「あいつは来てるさ、きっと。そして、生きてるよ。」シンジは

確信を持っていた。

「そうね。人数を減らすためにマモルも加えられてるかもしれないね。」

「俺たちも密命を受けてる。ここで死ぬわけにはいかない。」と、シンジは言った。

「うん。もう少しで仙獣族の地に入るわ。苦しいけど頑張りましょう。」

エルフ族のキャンプでは負傷兵たちが苦しそうに呻いている。彼らを霊族の者たちが治療に当たっている。

「マモルに今度会ったら、私はマモルについて行くわ。そして離れないわ。ずっとそばにいる。」と、ハルカは決心していた。

妖獣王ハイロウ

妖獣王ハイロウ

風谷国の守備隊長は戦況が苦しい中、よく善戦していた。今回の襲撃はどこがおかしいことも分かっていった。今ここにいる部隊はほぼ壊滅に近い状態で、次に総攻撃をかけられたらおそらくこの国は滅ぶことになるだろう。そう思っている。だが、いつまで経っても妖獣族は総攻撃をかけてくる様子がない。

「一体何を企んでいるのだ。」と、守備隊長は言った。

「隊長、また来ました。」と、伝令兵が伝えてきた。

「またか。案内しろ。」

そう言つて、守備隊長は伝令兵の後をついて行つた。東の城壁に上ると、そこから城外を見渡した。

「あれか・・・また単身で来ている。」と、守備隊長は呟いた。守備隊長が見ていたところには単身で風谷国の軍隊を相手に戦っている妖獣族の王ハイロウだった。最近はこんな攻撃ばかりしてくるようになった。それが何のためなのか全く狙いが読めない。

「しかし、単身である軍隊を相手にするとは何という強さだ。動きも相当なものだ。」と、隊長は呟いた。

仙獣族の獣型の部隊が妖獣王ハイロウに攻めかかっていた。

「相手は一体だ。早く討ち取れ。」部隊長が号令すると狼の姿に変身した者たちが一斉に妖獣王に襲いかかる。ハイロウはそれらに向けて、両手を持ち上げ掌から石つぶてを放つ、それらが仙獣族の隊員たちの体に食い込む。獣型は諸族の中で最も硬い肉体を持つ。しかし、その石つぶてはその肉体を簡単に撃ち破った。ハイロウは同じ獣型の妖獣族である。ハイロウは黄色い体を持つ狼に変身し、足で地面を蹴る。白い体の仙獣族部隊の上を飛び越え、後ろに回っ

たと同時に、動きに追いつけていない仙獣族部隊の背後からすかさず口から黒い炎を吐き出す。それが当たった数体の仙獣族兵が黒い炎に包まれる。残って怯えている兵隊たちに刃物のような爪が襲う。一撃で三、四体が切り刻まれる。残った兵たちは急いで後退を始める。それを追い掛けるハイロウの俊敏な足が、走りながら踏み付けていく。体は大きくないがその強力な足は兵を次々と押し潰して行く。

獣型が後退を始めたのを見て人型の女性を中心とした部隊が召喚術で炎の鳥を虎を或いは水の大蛇を繰り出す。ハイロウは振り向き様に、それらを爪でなぎ払うと同時に彼女たちに向かって行く。かなりの距離を数回地面を蹴るだけで近づいてしまう。逃げる暇はなかった。彼女たちの悲鳴が辺りにこだました。終わってみると、そこには残体の山が築かれていた。ハイロウはそのまま颯爽と引き上げていった。

「フフフ。ワシの狙いが分からんだろう。ワシは弟の仇を討つために仙獣族を襲っているのだ。マモルとかいう小僧に殺されたバンロウのためにな。こうすれば、人族はあいつを必ず救援にここに向かわせるだろう。ついでに仙獣族の地はこのハイロウ様が頂く。早く来い。このワシは弟より遙かに強いぞ。」と、ハイロウは呟いた。

挟撃

挟撃

マモルたち派遣軍は風谷国の攻撃軍の背後に陣を敷いていた。敵はまだ気づいた様子がない。斥候からの知らせによると相手は一万ほどの大軍だという。派遣軍はこれを風谷国と安獣城の主力軍とで挟撃する手はずになっている。人族の派遣軍は仙獣族の攻撃がはじまるのを待っていた。マモルたちは攻撃開始までの間、戦闘設備のまま待機することになった。

「なあ、ファル。今度の相手はどんな相手か分かるか？」と、マモルは訊いた。

「ううん。私もそこまで分からないわ。ただ、バンロウより強いのは確かよ。」と、ファルは言った。

「どうしてそんなこと分かるんだ？」と、マモルは問い返した。

「なぜなら、妖獣王の中で一番弱いのがバンロウだから。」ファルはあっさり言った。

「何だつて！あれで一番弱いのか？」と、マモルは驚いた。

「そうよ。じゃなかったら、あんなに簡単に倒せないわ。」

「なるほどお。」

「これからはいくらあなたでも単独で戦うのはきつくなってくるわ。」

「ファルは厳しい口調で言った。

「じゃ、どうすればいい？」マモルは不安になって言った。

「これからはあなたにも同志が必要よ。」

「同志か・・・」マモルは呟いた。

「他種族にもあなたのように秀でた力を持つものがあるはずよ。

そういう者たちを仲間にしていく。特にエルフ族や仙獣族には人族にはない能力があるから、その中で最も強い者たちを探すようにしていかないとならない。」と、ファルは言った。

「ポルソアメオ再結成ってことか？」

「そう。たぶん、ハルカやシンジもいずれは力を取り戻すはずよ。彼らの力が必要になってくる時がいつかはくるはず。私も長いことアルビトリウムを離れていいから、今のことはあまり分らないけど、ずっと遠くにある諸族の城には各種族のエリートたちが集まっているわ。そこにもあなたの力になる者たちが、きつといると思うわ。」と、ファルは言った。

「諸族の城か・・・一度行ってみたいな。」と、マモルは言った。「あわてなくてもこのまま戦っていくうちにいずれ行くことになるわ。」

「そつか。それは楽しみだ。」と、マモルは嬉しそうに言った。

「何の話してるの？」と、用事から戻って来たカオルが尋ねた。

「これからの戦いのことでファルに少し相談してたんだけ。」と、マモルは言った。

「そつか。これからどうなるのか私も心配だわ。」カオルは少し顔を曇らせた。

「いずれにしても、まだまだこれからだってことだ。今は目の前の敵をなんとかしないと。」マモルは敵の陣地の方角に顔を向けて言った。

「そうね。この一戦、厳しくなりそうだな。」カオルも真剣な顔になった。

人族の陣地から少し離れた山の頂きからこの戦争の行方を窺っている三十人ほどの人影があった。

「なるほど兄貴の言う通りだ。ここからだと言ったと戦場がよく見えていいや。」と、一人が言った。

「でも、あそこにあいつは本当にいるのか？」と、もう一人が言った。

「ああ。それは間違いない。諸族の城ではこの戦争の噂で持ちきりだ。」そのグループのリーダーと思われる男が言った。「マモル

とかいうすごい戦士はステラじゃないかってな。この戦争はやつの活躍次第で決まるとか言ってるやつもいる。」

「ステラは月の扉に落ちて、しばらく戻ってこないって言われてたのに、もう戻ってきやがってたとはな。」と、最初に話した男が言った。

「まあ、少しお手並み拝見というところだ。この戦争に手こずるようじゃ、少しがっかりというところだ。」と、リーダー格の男が言った。

「まったくだ。それじゃ、俺たちトリーキンダーの一人さえ相手に出来ないぜ。」と、二番目に話した男が言った。

「伝説の戦士ステラ。これからが楽しみだぜ。」リーダーと思われる男は呟いた。

「仙獣族が攻撃を始めたみたいね。」カオルが妖獣族の陣地から兵士たちが動き出しのを見て言った。

「そうだな。俺たちも中隊と一緒に突撃するぞ。」と、マモルは言った。

「了解！」と、カオルは興奮気味に答えた。

「ファル。おれはこのボスとの戦いでは特殊攻撃は出来るだけ使わないようにするつもりだ。」マモルはファルに向かって言った。

「マモル。そんなの危険だよ。」と、ファルは言った。

「これからの戦いが厳しくなるとすれば、ここで全力で戦って勝つても意味はない。自分の力がどれほどなのか知るためにも、ここで自信をつけたいんだ。」マモルは目つきを鋭くして言った。

「あまり無理はしないでね。目的は勝つことなんだから。」ファルは心配そうに言った。

「分かってる。死んじゃ、元も子もないしな。」と、マモルは言った。

「うん。」

その時、中隊の突撃の合図の軍鼓が鳴った。

マモルはカオルを抱き上げ、土埃を上げて突進して行った。中隊は追いついて来れない。一步で普通の兵隊の数倍の距離を風のように進んで行く。敵は仙獣族のほうを見ていて、マモルが接近しているのに気が付いていない。ようやく気が付いたときにはマモルはもうグラディウスを構えて突き掛かってくるところだった。その後方でカオルは既に魔法を念じ始めていた。一撃で三、四匹が両断されていた。そこでようやく、妖獣族の兵士たちも事態を察してマモルの攻撃に応じ始めた。

「人族の援軍だ！本隊は応戦しろ！」と、妖獣族の隊長が叫んだ。数百匹が既に残体にされたところで、やっと人族の先方隊が戦場に到着した。

妖獣族は人族が突撃して来たことを知り、本隊に総攻撃を命じた。挟撃作戦が成功し、妖獣族は完全に混乱していた。混戦の中、マモルとカオルは見事な連携攻撃でマモルが引き付け、カオルがその周囲の敵を次々と焼き、あるいは破壊していた。妖獣族は勝ち目無しと見て四散し始めた。混乱の中踏み潰された者、同士討ちを始める者、慌てて逃げ惑う者で戦場は大混乱に陥っていた。その中、マモルのいるほうを目指して突進してくる黄色い狼がいた。妖獣王ハイロウであった。

「来たな、小僧め。待っていたぞ。今こそ、弟の仇を討ってやるぞ！」

マモルは敵を焼き、斬り付けながらも何かこっちに向かってくるものがあるのに気が付いた。

「ハイロウだわ。」と、ファルが叫んだ。

「ハイロウ？」と、マモルは訊いた。

「あれがボスよ。前に倒した妖獣王バンロウの兄よ。」と、ファルは答えた。

「そうか。だが、そんなに大きくないな。」と、マモルはハイロウを見ながら言った。

「油断してはダメ。あれはバンロウなんかより、ずっと強いわよ

！」

「そうなのか！」

「彼の遠距離物理に気を付けて。得意の妙術よ！」と、ファル言った。「当たればマモルもただでは済まないわ。」

「よく分からんけど、やってみるぜ！」と、マモルは雑魚を力オに任せてハイロウに斬りかかった。

ハイロウはそれを頑丈な素手で払い除ける。マモルはすかさず左の拳をハイロウの首めがけて打ち込む、ハイロウはその拳を手で受け止めようとしたが、その手が吹き飛んでしまった。

「ぎゃああああ。俺の手がああああ。」ハイロウはなくなった手を反対の手で押さえて悶えた。その時、妖獣王は左の脇腹が焼かるような痛みを感じた。マモルの剣がハイロウの脇腹から体のほぼ中心まで食い込んでいた。

「うつつ。そんな馬鹿な・・・俺の体は剣など受け付けるわけないんだ・・・」と、ハイロウは呻いた。

マモルはそこから飛び退き、少し間を置いた。

ハイロウは残った手から石つぶてを放った。マモルはそれをみごとに剣捌きで薙ぎ払う。それと同時に飛び上がりハイロウの背後を取った。妖獣王は慌てて振り返ろうとした。しかし、ハイロウはもう二度とマモルを見ることはなかった。ハイロウの首は体から離れ、混乱している兵たちの中に飛んでいった。

それを見ていたファルは驚いていた。

「何、今のマモルの動きは私にもよく見えなかった。ハイロウをそんなに簡単に倒してしまうなんて。」と、ファルは思った。

「終わったぜ。ファル。」と、マモルはファルに向かって言った。「う、うん。見事だったわ。マモルがあそこまでやるとは正直思ってたかったわ。」ファルはマモルを見つめて言った。

「だが、硬い体だったな。腹を斬りつけて終わりだと思ったのに、あれ以上振り切れなかった。」と、マモルはこぼした。

「そうね。グラディウスももう限界かもしれない。新しい武器を

探す時期がきたのかもしれないわ。」と、ファル言った。

「新しい武器か・・・」と、マモルはグラディウスを見つめて言った。

既に妖獣族の残兵はボスがやられたことで戦場から逃げるのに必死だった。

「やったじゃない！マモル。」と、カオルがマモルのところに駆けつけて来て言った。

「ああ、ありがとう。みんなが必死に戦ってくれたおかげで王との戦いに集中出来たんだ。」と、マモルは言った。

仙獣族の部隊が人族の派遣軍と合流し、勝利を分かち合い喜び合っていた。

その様子を遠くから観察していた山の上の部隊のリーダーが言った。

「結構やるじゃないか。あいつはステラに間違いない。」

「そうだな、兄貴。あんな戦い方が出来るのは奴に間違いない。」

と、隣の男が言った。

「だけだよ。あれくらいじゃないと、俺たちの相手にもならないぜ。」と、もう一人が言った。

「そうだな。まあまあというところだ。」と、リーダーが言った。

「いつか会うことになるだろう。その時を楽しみにしてるぜ、ステラ。」

密使

密使

人族の派遣軍はしばらく仙獣族の主城安獣城で進軍の疲れを癒してから、帰るようにと仙獣族の王から申し出あり、その好意に甘えて中隊もマモルたちもそこに駐留することになった。マモルは仙獣王バンライの申し出で今回の戦争の凱旋パーティーに招待され、王に臨席を許された。

「まったく噂通りの強さじゃった。今回の活躍、このバンライ生涯忘れませんぞ。」仙獣王は喜悦に顔をほころばせていた。

「王からはこのようなご好意を頂き、身に余る光栄です。」と、マモルは今回の招待のお礼を述べた。

「いやいや、あの手強いハイロウを一人で倒した英雄には当然の報い。ワシからもお礼を述べさせてもらいますぞ。」と、王は頭を下げた。

「王、どうぞ頭をお上げください。そんなことされては恐縮です。」と、マモルは照れくさそうに言った。

「そうだ、お礼の品をどうか受け取ってください。我が仙獣族に代々伝わるパージレットという腕輪で、いつかきつと役に立つ時が来るじやろう。」と、バンライは言うど腕輪を自らの手でマモルの腕にはめさせた。

「そのようなものを賜り感謝の念に耐えませんが。生涯大切にします。」マモルはその黄金の腕輪を見つめながら言った。

次の日、マモルは城内を見物していた。自然に溢れている城内はマモルが知っているどの城とも様子が違っていた。人工的であつても決して自然を壊さないという仙獣族の人々の配慮が伺えた。

街の中を興味深く見回りながら歩いていると、マモルは何か足元

に衝撃を覚えた。トラの子供がマモルの足にぶつかって転んでいた。
「何すんだ、お前！痛いじゃないか。」その子供のトラは起き上がりながら叫んだ。

「何すんだって言われても、ぶつかってきたのはそっちだろう。」
と、マモルは言った。

「う、うるさい。あ、お前人族だな！」と、その子供が叫んだ。

「そうだけど、それがどうした？」と、マモルは目をぱちくりさせた。

「人族なんて、早く帰ってしまえ！」

「おいおい、いきなりなんだよ、それ。」

「人族なんて、自然を破壊することしか出来ないじゃないか。」
と、子トラは叫んだ。「自分たちのために森を壊したり、他の生き物を殺したり、そんなことしかない人族なんて大嫌いだ！」

「そんなこと言われても、困るなあ。人が暮らすのに必要なんだから、仕方ないじゃないか。」と、マモルは困惑した。

「うるさいわい。そんな・・・」と、その子が言いかけた時、遠くからこっちに向かって何か叫びながら走ってくる狼やハイエナやライオンの子供たちがいた。

「待てえ！」と、この子トラに向かって叫んでいるようだった。

「いつけね！また、来たのか！」その子は言うや否やその場から逃げ出した。

追いかけてくる子供たちが近くに来た時、マモルは彼らに言った。

「君たち、どうしたんだ？」

「あいつがボクたちの遊び場に落としかけたんだ。」と、彼らは言った。

「でも、そんなに大勢で追い掛けるなんて、卑怯じゃないのか？」
と、マモルは諭した。

「あいつはいつもそうなんだ。皆も頭にきてるんだ。」と、子供たちの一人が言った。

そう言うと、子供たちは子トラを追い掛けて行った。

「どこの世界にもいるんだな。ああいう子供って……」マモルは自分の子供の頃を振り返って思った。

その時、カオルとファルがマモルの方に向かって歩いてきた。

「あ！いたいた。」と、ファルがマモルを見つけた。

「マモル。ご飯の用意出来たわよお。」と、カオルが手招きした。

「オツケー、今行くよ。」マモルはそう言うと、カオルたちの方に歩き始めた。

人族の仮住居では食事をみんなで語らいながら、楽しんでいた。マモルたちもくつろいで楽しく食事をした。

すると、妖獣王からの使者がマモルたちの方にやって来た。

「ソルジャー、食事中申し訳ないのですが、王がお呼びです。」と、使者が言った。

「分かりました。すぐ行くとお伝えください。」と、マモルは応じた。

マモルが王のところに着くと、

「おお、すまなかつた。実はわざわざ呼んだのは、そなたに会わせたい者たちがおるのじゃ。」と、仙獣王は言った。

「会わせたい者たち？」と、マモルは首を傾げた。

「客人をお呼びしろ。」と、王は控えている衛兵に向かって言った。

間もなく、王の間の右側の扉が開き二人のエルフ族と思われる男女が入ってきた。

「シンジ！ハルカ！」と、マモルは歓喜に満ちた声で言った。

「マモル！」と、シンジとハルカは同時に叫んだ。

「実はこの二人は今回の戦いでエルフ族の派遣軍に加わっていたんじやが、途中妖獣族の襲撃に遭い、その大半が失われてしまったの。戦いには間に合わなかったんじやが、こうしてそのお詫びとエルフ族の長からの密命を持って参ったのじや。」と、バンライは経緯を説明した。

「密命ですか？」と、マモルは王に向かって尋ねた。

「うむ。そなたも今回の戦いを含め先の人族の戦争と、妖獣族の襲撃が活発化しているとは思わんかの？」と、仙獣王は言った。

「はい。そのことは少し懸念しておりました。」と、マモルは答えた。

「それをエルフ族の長も懸念しており、次はエルフ族の番ではないかと思っておるようじゃ。そこで今回の戦勝が成ったならば、エルフ族は襲われる前に先制攻撃を仕掛け、エルフ族の周辺に棲息しておる妖獣族のアジトを殲滅したいと申しておるのじゃ。」と、仙獣王は言った。

「なるほど。」

「じゃが、そなたも存じておる通り、我が軍は今回の戦闘で主力軍の大半を失ってしまい、とても援軍を送れる状態にない。」と、バンライは悔しそうに言った。

「ただ、今回の救援軍のエルフ族の被害を思うと無視するわけにも参らん。そこで我が軍の中でも選り抜きの者を二人付けることにした。そして、実はこのエルフ族の密命の中にそなたの力も是非借りたいという申し出も含まれている。人族の方にもエルフ族から別にこの件の使者が向かっているそうじゃ。どうじゃ。判断はそなたにお任せするが、考えてみては？」と、仙獣王は言った。

「考えるまでもありません。エルフ族と人族は同盟を結んでおり、先の人族への救援軍のことを思えば、人族の長老は喜んで協力することと思います。それに長老がダメだと言ったとしても私は自分の判断でこの申し出をお受けします。」と、マモルは言った。

「そうか、そなたならそう言うと思っていたわ。では、早速出発の準備を整え、この者たちと同行するがよからう。」と、仙獣王は嬉しそうに言った。

「はい。」とマモルは返事すると、王の間を後にした。

新たな旅路

第六章 冥塔の三王

新たな旅路

マモルたちは出発の準備を終えた。そして、シンジとハルカと再会の喜びに浸った。

カオルもハルカとの再会に歓喜した。マモルはシンジにカオルを紹介した。

「いや、これほど似てるとは驚いた。もし同じ種族だったら、見分けるのが大変だったな。これは。」と、シンジは彼女たちを見比べて言った。

「そうだな。こうして揃って見るのは俺も初めてだけど、マテリアにいたら困ったことになってたな。きつと。」と、マモルは言った。

「あら、困ったことって何かな？」と、カオルは目を細めてマモルに言った。

「え・・・それはあれだよ・・・」と、マモルは答えに窮した。

「オーオー、モテる男は大変だなあ。マモル。」と、シンジが笑った。

「人事だと思つて・・・助けてくれよ。シンジ」と、マモルはシンジに困惑顔を向けた。

「ま、仕方ないな。カオルちゃん、ここは勘弁してやってくれないか。マモルも軽い冗談のつもりだったんだよ。」と、シンジが助け舟を出した。

「私も冗談よ。ちよつと、遊んでみただけよ。」と、カオルは笑った。

「まったく、冗談にもほどがあるわ。最近、怖いからなカオルは

「と、マモルは胸をなで下ろした。

「これは、結婚でもしたら尻に敷かれるな。マモルよ。」と、シンジが苦笑いを浮かべた。

「結婚かあ、それもいいかもね。浮気出来ないように。」と、カオルはニコニコして言った。

「カオルはまだ、知らないんだ。」と、ハルカは思った。「でも、いつかは分かってしまうだろう。」

その時、

「やあ、初めまして。」とマモルたちに近づいてくる二人の仙獣族の姿があった。

「あなたたちは？」と、マモルが訊いた。

「私たちはバンライ様の命で、あなたたちと行動をと共にするようになられたの。私は人型のアイルって言うの。こっちが獣型のテイグリス。」と、アイルは隣の大きな男を指して言った。

「話は聞いてます。これから一緒に頑張りましょう。」と、マモルが言った。

「どうぞよろしく。」と、二人は声を揃えて言った。

「あなたがソルジャーね。噂は聴いてるわ。とても強いんだってね。頼りにしてるわよ。」と、アイルは言った。

「いえ、こっちこそ助けてもらうことも多いと思うし、よろしくです。」と、マモルは丁寧に言った。

「なんか、とても強いつて聞いたから、屈強な大男でイカツイ人なのかと思ったけど、若くてかわいい顔してるのね。食べちゃいたい。」と、アイルはサラッと言う。

「おいおい、初対面なのにそんな失礼なこと言ったらダメじゃないか、アイル。」と、テイグリスが言った。

「あら、いけない。ついいつものくせで。エヘヘ。まあ、気にしないでね。私っていつもこうなの。」と、アイルはニコニコしながら言った。

「いえ、気にしないでください。あなたみたいな人がいてくれる

と、旅も楽しく行けそうだ。」と、マモルが言った。

「あら、うれしいこと言ってくれるじゃない。そういうことならお互い楽しく行きましょ。」と、アイルはマモルにウィンクした。

カオルもハルカもこの女性を呆然として見つめていた。

新しく加わった二人にマモルは仲間を紹介してから、エルフ族の樹海城への旅に出発した。

しかし、マモルたちの後を付いてくる者があることには誰も気が付かなかった。

プエル

プエル

マモルたちは樹海城までの長い道のりを遠回りではあるが、出来るだけ安全なルートをとることにした。妖獣族が出そうな場所を通らず、途中集落に立ち寄りそうな道を選んだ。

「平坦な道をただ歩いて行くっていうのも、つまらないわね。」
と、仙獣族のアイルが言った。

「でも、皆の安全を考えると、これが一番いい。」と、ティグリスが言った。

「まあ、そうなんだけどさ。」と、アイルが言った。

アイルの視線はマモルのそばにびったりとくっつくようにして、歩いているカオルとハルカに向けられていた。

「なんで、あんなにくっついてるんだらう。」と、アイルは不思議に思った。

その時、アイルが何気なく近くの森の方に目を向けた時、何か動いているものがあることに気が付いた。

「付けられてる。」と、アイルは思った。

そして、何気ない素振りでもモルのところに近づき耳打ちした。

「ね、何か私たちの後を付けてるみたいよ。」

「うん。そうみたいだな。でも危害を加える気はなさそうだ。」

と、マモルは言った。

「あら、気が付いてたのね。さすがだわ。」

「俺もさつき、気が付いたばかりだけどね。」

「皆には言わないでいいの？」

「もう少し様子をみてからにしてもいいんじゃないかな。」

「私がそつと、皆から離れて逆に後を付けてみるわ。」

そう言うと、アイルはわざと一行から遅れて頃合を見て、その森

に入ってしまった。

アイルは森に入ると、もう一つの姿である白豹に変身した。そして、その後を付けていると思われる影に近づいて行った。アイルはそれをよく観察してみても少し驚いた。

「何だ・・・仙獣族の子供じゃない。」

相手が子供なら気にすることはない。近づいて問い詰めてやる。

「おい、ガキンチョ。そんなところで何してんのさ。」

その子供は慌てて逃げ出そうとする。しかし、アイルは素早かった。すかさず逃げ道を塞いだ。

「おい、何も逃げなくても取って食いやしないよ。」と、アイルは言った。

「な、何だ、お前は!？」と、そのトラの子供は声を震わせて訊いた。

「それはこつちのセリフだよ。何、こそこそ後を付け回してんのさ。」

「べ、別にいいだろう。」

「子供がこんなところでうろろしてると、襲われてたべられちゃうよ。早く家に帰んな!」と、アイルは凄みを利かせて言った。

子供は怯えているようだった。

「帰る場所なんかないやい!ボクのはほつといてくれ!」と、子トラは言った。

「なんだ、孤児か。仕方ないね。ちょっと、こつち来な。」と、アイルは子供を促すと、一行の歩いている場所まで連れて行った。

アイルはマモルのところにその子を連れて行くと、

「ね、マモル。後を付け回してたのはこの子だったよ。」と、アイルは言った。

マモルはアイルの足元に隠れている子供を見つめた。

「お前は、あの時の子供だな。」マモルは仙獣族の城での出会いを思い出した。

その子トラはそっぽを見た。

「この子、孤児らしいよ。帰るところがないんだってさ。」と、
アイルはその子を見ながら言った。

「わあ、かわいい！」と、カオルがその子のところに来て言った。

「ほんとね。かわいい！」と、ハルカも近くに寄ってきた。

「ねね、マモル。この子も一緒に連れて行ってあげようよ。」と、
カオルが言った。

「でも、この旅は危険なんだぞ。何かあったら、どうするんだ。」
と、マモルは言った。

「帰るところもないんじゃ、このまま放っておくのもかわいそう
だわ。」と、カオルはその子トラの頭を撫でながら言った。

「そうね。どこかで妖兽族にでも襲われたらかわいそうだね。」
と、ハルカも言った。

「だけど困ったなあ。戦いにでもなったら守りきれないぞ。」と、
マモルは頬を掻きながら言った。

「まあいいじゃないか、マモル。出来るだけ安全な道を選んで歩
いてるんだから、そうそう襲われることもないだろうし、とりあえ
ずこの子を預かってくれるところを探しながら行っても。」と、シ
ンジが言った。

「仕方ないなあ。それでお前はどうかんだ。それでいいのか？」
と、マモルはその子に尋ねた。

「お前じゃないわい。ボクにはプエルってちゃんとした名前があ
るんだ。」と、その子トラは言った。

「まったく。かわいいげのないやつだな。お前は。」と、マモルは
言った。

「お前にかわいいなんて思ってほしくないわい。」と、マモルの
足に噛み付いた。

「いつてええ！何すんだ、こいつう！」と、マモルはプエルを追
い回した。

皆は二人の様子に声をあげて笑った。

優心村の伝説

優心村の伝説

マモルたちは優心村という村に立ち寄ることにした。その村にはありがたいことに旅人のための宿があった。彼らはそこに旅の荷物をおくと、少し散歩を楽しむことにした。まだ仙獣族の地ということもあり、仙獣族の人々が多いが中にはエルフ族も混じっていた。ここはめずらしく他種族同士でも仲良く暮らしている村らしい。

「ここは戦いとは無縁の土地って感じね。」と、カオルは道端の花を楽しみながら言った。

「そうね。これくらい平和な場所にいると何か戦争があったことなんて嘘みたいだね。」と、ハルカが答えた。

「あーあ、あたいは城を出てから平和すぎてボケちゃいそうだね。」と、アイルがこぼした。

「何言ってるんだ。皆が無事ならそれでいいじゃないか。」と、マモルが言った。

「一番ボケてる奴にしてはいいこと言うわい。」と、プエルが言った。

「誰がボケだ。このガキンチョめ！」と、マモルがプエルを追いかけて行ってしまった。

「まったく、あの二人はいつも喧嘩ばかりね。」と、カオルは笑いながら言った。

「そうね。でも、プエルはいつもマモルのそばにいて、寝るのも一緒なのよ。きっとプエルは本当はマモルが好きなんじゃないかな。」と、ハルカが言った。

「まあ、あいつは自分のことよりも他人を優先するところあるかな。子供にはそれが分かるのさ。きっと。」と、シンジが言った。「そうかもね。」と、カオルが同意した。

カオルとハルカは皆が宿の方に帰った後、二人して買い物をしに出かけた。そして、いろいろと村の中を歩き回っていると、村の中央と思われる広場に石像があった。仙獣族と思われる男性の両脇にエルフ族の女性が二体立っている。

「なんて綺麗な像なんだろう。」と、ハルカがその像を見上げて言った。

「そうね。まるで生きてるみたいね。」と、カオルが言った。

「それは当然じゃよ。」と、いつの間にか近くにあった老人が言った。

「あら、あなたは？」と、カオルが訊いた。

「別に名乗るほどのものじゃないがの。この像は生きていた者たちがそのまま石になったんだよ。」と、その老人が言った。

「なんですって！」と、カオルもハルカも驚いた。

「少しお話をして差し上げよう。」と、老人は話を始めた。

今から、五百年も前のことこの村に勇者がおった。その頃、この村は今のようによやかかなところではなく、妖獣族の襲撃がしょっちゅうあつての。その勇者のおかげで村はなんとか無事に済んでおった。そして、その勇者にエルフ族の二人の娘が恋をしたんじや。その二人は村でも評判の美しい双子の姉妹だった。だが、お互いに同じ男性を好きになってしまったことに気が付き、いつしか彼を巡って相争うようになっていった。

そして、ある時彼女たちはその‘思い’を打ち明けた上で、それぞれ同じ日時に違う場所に彼を誘って、彼が来なかった方は諦めるということにした。そして、その勇者は悩んだ。自分のせいで姉妹が争い、自分がどちらかを選んでしまえばどちらかが傷つく。彼は悩んだ結果、ひとつの決心をした。

二人の姉妹は約束の場所にいつまで経っても彼が現れないので、自分が負けたと思った。じゃが、後でどちらのところにも彼が来な

かったということが分かった。そして、彼にその真意を確かめるため彼を探したが、ついに彼を見つけることは出来なかった。二人はどちらも振られたものと思い、彼が去って行ってしまったことを悲しんだ。しかし、お互いにその振られた痛みによって痛みを分かち合い、元の仲の良い姉妹に戻った。村人たちは勇者を失ったことで再び妖獣族によって苦しめられることを懸念したが、妖獣族が村を襲うことはなかった。

それからしばらくして、ある村人がその勇者の住んでいた家に行つたとき、ほのかな光がその床下からもれていることを発見した。そして、勇気を出してその床下を開けてみるとそこには大きな穴が掘ってあり、あの勇者が石となって立っていた。彼は自分の妙術を使って自らを石に変えこの村に妖獣たちが襲つてこないように結界をはっていたのじゃ。そのことを知った村人たちは悲しんだ。彼が自らこの村を守るために守石もりいしとなり、しかも姉妹を争わせないようにしてくれた。その心に村人は敬意を表した。そして、村の中央に広場を作り彼の石像を安置することにしたのじゃ。それから、その姉妹も自分たちのせいで彼を苦しめ、守石にさせてしまったことを嘆いた。そして、二人で永遠に彼のそばにいたいことを願う自分たちも自らの力を使い、守石になってしまったのじゃ。

カオルとハルカは老人の話を黙って聞いていた。そして、老人は最後に、

「この守石のおかげでそれからこの村も周囲も平穏になり、今に至っているというわけなのじゃ。どうじゃ、お二人も違う種族の割には双子のように似ておるが、何かいわくがありそうにも思える。この話を聞いて少し自分たちのことも振り返ってみるのもいいかもしれんで。いや、年寄りのたわごとが過ぎたようじゃ。じゃ、ワシはこれで失礼するとするかの。」と、言う^とと老人は去って行った。

二人ともこの話を聞いて、しばらくそれぞれ自分のことを考えていた。そして、皆が待っていることを思い出し、買い物を早めに済

ませると宿へと帰っていった。

宿に帰ると、マメルたちはお腹をすかせて待っていた。

「おお、やっと帰ってきた。お腹すいちゃってさ。」とマメルは言つと二人の持ち物を受け取って運んでやった。

カオルとハルカは食事の支度にかかっている間、さっきの老人の話を読み出した。

「あの話を私たちにしたあの老人は一体誰だろう。何か心を読まれているような感じだった。」と、カオルもハルカも思った。「きつと、私たちのことを分かって言ってたんだわ。明日、もう一度会って確かめたい。」

ファルはマモルのそばでカオルとハルカの様子を見ていた。何か二人が起こつたような気がした。

「おい、マメルこの村に広場があるだろう？」と、シンジが訊いた。

「ああ。石像があつたところだな。」と、マメルが言った。

「あれ見てどう思う？」

「あれはきつとこの村の守石だな。不思議な力を感じる。」と、マメルが言った。

「お前も感じてたか。」

「守石って何だ？」と、プエルが訊いた。

「魔力や妙術を持つものの中には自分の力を結界に変えられるものがあるんだ。しかし、あまり大きな結界をはる場合はものすごくたくさんの力を必要とするため、自分の肉体が石化してまうんだ。石化してしまえば、もう戻ることは出来ないのさ。」と、マメルが言った。

「ふうん。お前見かけによらず、物知りじゃの。」

「見かけによらずとは何だ！これでも白仙城でちゃんと勉強してたんだ。お前も勉強せんと、野良トラになっちまうぞ。」と、マメルは言った。

「なんじゃと、お前と一緒にするな。」

「なんだ。やる気か。」と、マモルは言うと、構える振りをした。

「はいはい。二人ともやめなさい。食事の用意が出来たわよ。」

と、カオルが食事を運んでくると、皆は待つてましたとばかりに喜んで。

その夜、老人から聞いた話のため、カオルもハルカもあまり眠れなかった。

翌日は雨だったので、マモルたちは出発を延期することにした。

そして、マモルとシンジは昨日の夕食の時に話していた守石を見に行くことにした。カオルとハルカは昨日の老人を探すため、マモルたちとは別行動をとった。

マモルたちは守石の近くに行くと、それをよく観察した。

「間違いないな。ここから結界が出ているみたいだ。」と、マモルが言った。

「ああ、それもかなり強力なやつだ。これほどの力を持っていて、何でわざわざ石化するまで力を使ったんだろう。」と、シンジが言った。

「それもそうだな。これだけ力があるなら、生きている状態でも十分戦えるはずだ。」と、マモルが言った。

その時、石像から赤い光が発した。マモルは意識が遠のくを感じた。

「おい、マモル！しっかりしろ、マモル！」

マモルはシンジの叫び声が遠くなっていくのを感じ、やがて何も聞こえなくなった。

マモルが気が付くとそこは石だらけの山の上だった。彼から少し離れたところで一匹の白く大きなトラがこっちをみている。

「気が付いたか。私はお前を待っていた。」と、その白いトラが言った。

「あなたは？」と、マモルは立ち上がりながら訊いた。

「私の名はモト。優心村の守護を司っている者。」と、そのトラは言った。

「あの守石の方ですか？」と、マモルは尋ねた。

「そうだ。そして、お前のような者が来るのを長いこと待っていた。」と、モトは言った。

「待っていた？」

「そう。ある物を託すため、相応しい者を探し求めていた。」

「ある物？」

「これだ。」と、白いトラは赤く光る剣を差し出した。

「これは？」マモルは剣を受取りながら訊いた。

「それはエンシャソードという剣だ。」と、モトは言った。

「エンシャソード？」マモルは剣を眺めながら訊いた。

「その剣はその持つ者を守護する剣、相応しい者が持てばまさに無敵の剣だ。」と、モトは言った。

「なぜ、これを俺に？」と、マモルは訊いた。

「お前が最も相応しいと思ったからだ。」と、モトは言った。「アルビトリウムは危機に瀕している。この世界はにこのままでは消滅してしまうだろう。」と、モトは言った。

「消滅って・・・どういうことですか？」

「妖獣皇帝サムン・マールムの力が世界の崩壊をもたらす。奴を滅ぼさなければ、世界の平穏は保たれないであろう。そして、お前はこの世界の崩壊を食い止める鍵となる。お前の役目を果たせ。それが出来るのはお前しかいない。もし失敗すればお前がいたマテリアも消滅することになる。」と、モトが言った。

「マテリアも？」と、マモルは言った。

「そうだ。アルビトリウムとマテリアは同じ世界の表と裏。表がなくなれば、裏もまたなくなる。」

「そんな・・・そんなすごいこと俺にやれっというんですか？」と、マモルは叫んだ。

「力を取り戻せ。そして、それを超える。そうしなければ、世界は滅ぶ。」と、モトは言った。

「そんなの無理だ・・・出来きっこない。超えるなんて・・・」と、マモルは言った。

「エクリクスを取り戻せ。」と、モトが言った。

「エクリクスって、俺の名前だ・・・」

「そうだ。その名前は剣の名前。お前がステラであった時に持っていた剣。この世界最強の剣だ。お前が月の扉に落ちた時に失われ、お前が力を完全に取り戻した時、再び現れる。」と、モトは言った。

「力を取り戻した時・・・」

「そう、エクリクスの剣は形を持たず、その力が形になる。究極の力の剣。」と、モトが言った。「探しても見つからず、求めても得られない。それがエクリクスだ。」

「俺はどうすれば、いいんです。取り戻すって言っても、どうすれば・・・」と、マモルは叫んだ。

「諸族の城に行くがいい。そこでお前は見出すだろう。かつての自分を。」と、モトは言うのと、姿を消した。

マモルが目を開けた時、そこは優心村の宿の寝室だった。ファルが心配そうに自分のことを見ていた。

「ファル・・・」と、マモルが呟いた。

「マモル、気が付いたのね・・・よかったあ。」と、ファルがマモルの胸に顔を埋めた。

「俺は一体どうしたんだ？」と、マモルが訊いた。

「あなたはあの守石の前で突然倒れて、シンジがここに運んでくれたの。」と、ファルが言った。

「そうだったのか。」と、マモルは言った。

「あなた三日も目を開けなかったのよ。ハルカがエイレネしたり、私が浄化しても全然動かないんだもん。このまま、目を覚まさないのかと皆心配してたのよ。」と、ファルは涙目で話した。

「そつか。心配かけさせちゃったな。ごめん。」

「ううん。マモルが悪いわけじゃないんだし、目を覚ましたんだから皆も安心するよ。」

「そう言えば、皆はどうした？」と、マモルは訊いた。

「皆、今村の長老のところと呼ばれて、出かけてるわ。」と、ファルが言った。

「そうか。」

「プエルだけは隣の部屋にいるわ。」

「手が熱い。」と、マモルはそう言って右手を布団から出した。

マモルの手が赤く光っていた。そして、赤い光がだんだん長くなりやがて剣の形になった。

「これは・・・」と、マモルは夢の中で見た出来事を思い出した。

「これは、エンシャソードだ。」

「マモル、それは伝説の武器よ。エンシャソードは選ばれた者にしか持つことは出来ない剣。もし、それ以外の者がその剣を使えば、剣によつて焼かれてしまう。」と、ファルが説明した。

「これをモトという白いトラから夢の中でもらったんだ。」

そして、ファルに彼の見た夢のことを話した。

「あなたはサムン・マールムを倒すことを託されたんだわ。それはきつとその夢の中に出てきたモトという勇者の目的でもあったんじゃないかな。だけど、彼はそれが果たせなかった。」と、ファルが言った。

「そうかもしれないな。だが、そのサムン・マールムっていう奴はどこにいるんだ？」

「あいつは簡単には見つからないわ。奴のいる場所は古代からの謎とされている。今までにも勇者と呼ばれた何人もの戦士たちがその居場所を探してきた。しかし、誰も見つけることは出来ず、多くの命が失われてきた。」と、ファルは説明した。

「そうか。だが、俺にそんなことが出来るかな。」と、マモルは言った。

「おそらく、あなたの命と引き換えになるかもしれないわ・・・」
ファルは心の中でそう呟くと顔を俯けた。

その時、寝室の扉が勢いよく開いたかと思うと、小さい物体がマモルのところに飛び込んできた。

「わあああああ！目を覚ましたんならそう言え！」と、プエルがマモルに抱きついて泣いていた。

「プエル。心配かけたな。」と、マモルがプエルの頭を撫でながら言った。

「お前のことなんか、心配してないわい。」と、泣きながらいつまでそうしていた。

樹海の木漏れ日

樹海の木漏れ日

マメルたちは優心村を後にした。マメルはエンシャソードを手にし、自分の使命を見出した。カオルとハルカは二人の‘思い’がもたらす漠然とした不安を胸に抱くことになった。

ファルはマモルの未来に置かれた使命と彼の運命の行き着く先に、当然自分も共に歩む覚悟を決めていた。それで例え自分の命が失われることになつたとしても。

マメルは自分に与えられた重大な使命を皆には話さないことに決めていた。皆に話してしまえば、きつと負担をかけることになつてしまう。これは俺の問題なんだ。モトが一人で戦つたように俺も一人で成し遂げなければならない。ただ、ファルだけは俺と行動をともしなければならぬのが、哀れに思えた。契約の重さを改めて思い知つた。彼女はどう思っているんだろう。これは義務とか責任とかいう問題を超えてしまっている。彼女を犠牲にするわけにはいかない。

ハルカもカオルも優心村で出会つた老人を見つけることは出来なかつた。村の長老のところでも聞いた話によると、その老人はきつとあの守石の化身であろうと言つた。五百年の間、守石となつてこの村を守り続け、人々が相争つて村の安定を乱さないように必要な時には仮の姿をとり、教え諭しに現れる。そう言つた話も村に伝わっているという。

もし、それが本当だとすれば私たち姉妹が相争う可能性があつたのではないか。そう思えてくる。実際、二人とも既に過去の出来事と現状の間で苦しんでいたのではなかつたか。それは十分に争いの

危険をはらんでいた。それを見かねて勇者が老人の姿となって、二人に何かを伝えに来た。

それを自分に起こった昔の悲劇を話すことで、彼女たちに何かを悟らせたかった。争わずに済む方法が他にある。そう言いたかったのではないか。それは教えられるものではなく、自分たちで見出しに行くしかない。だから、話をした上でたしなめるような言い方をして去って行ってしまったのではないだろうか。そんな風にも思えてくる。

「そんな方法があるのだろうか。今は想像もつかない。でも、今は焦って取り返しのつかないことにならないようにするしかないわ。今は任務もあるし、それが最優先だ。」と、ハル力は思った。

「ハル力は昔の自分のことを思い出したのかしら。あの老人の話の時も、村の長老のところまで聞いたことについても随分と真剣に聞いていた。あれは思い当たることがあったから、聞いていたんじゃないかしら。でなければ、あれほど熱心に聞き入ることもないはずよ。」と、カオルは思った。

皆は村の長老から旅の目的や行き先について尋ねられた。これほどの人数があんなに平穏な村に訪れれば、誰でも怪しいと思うだろう。しかし、それは密命である以上、話すわけにもいかず、仕方がないので自分たちはある村から警護を頼まれて、そこに向かっているとどこだと言った。それで長老は納得してくれたようだった。

それから、皆で話し合っただけからは必要な時以外はキャンプして行った方がいいということになった。それは、あまり他の人を驚かさないうようにという配慮からだ。

「まあ、仕方ないんじゃないかな。皆で物騒な武器持って行ったら、びつくりするもんね。」と、アイルが言った。

「そうだな。こんな世の中だ。何がおこるか分からんしな。」と、ティグリスも同意した。

「あそこの樹海に入れば、もうエルフ族の地に入るわ。」と、ハルカが遠くに見える森を指して言った。

樹海に入ると、そこは神秘的な雰囲気にもまれていた。何か神々しいものを感じる。木々に覆われているわりに暗さを感じさせない不思議な森だった。

「すごい神秘的な感じのところだな。何か安心感を感じる。」と、マモルが言った。

「そうエルフ族の霊力は癒しの力そのものよ。」と、ハルカが言った。

「あたいたち仙獣族の地とは全然違うのね。何か平和そのものって感じ。」と、アイルが言った。

「あ、誰かいるわ。」と、カオルが言った。

道の先に二人の人影が見えた。彼らはこつちに近づいて来た。彼らはエルフ族の者だった。

「ハルカ、シンジ。二人とも任務ご苦労様でした。ここからは我々が皆さんを樹海城までご案内します。」と、彼らのうちの一人が言った。

ワタマの甦り

エルフ族の決意

マモルたちは樹海城に到着した。さっきの二人のエルフ族の案内人にその長エルフィナがいる大広間に案内された。その中央には高いオベリスクのようなものがあり、その頂きに大きな水の塊にも見える球体の玉が置かれていた。そこからまばゆい光が部屋全体を照らしている。その前にエルフィナが女王然として椅子に腰掛けしていた。

「ようこそ樹海城へ。あなたたちが私たちの勝手な要請に答え、ここへいらしてくれたことに感謝します。」と、エルフィナは透明感のある声で言った。

「いえ、エルフ族の方たちには先の戦争でも助けて頂いており、人族においてはその恩に報いなければなりません。その上、盟約においても要請に答えるのは当然のことです。」と、マモルが答えた。

「我々、仙獣族においてもエルフ族の今回の救援軍の派遣において、多大な被害を受けさせてしまったことに対し、お詫びを申し上げます。しかし、仙獣族の被害甚だしく軍を派遣出来るほどの兵力が残っておりません。我々二人が微力ながらご助力することでお許し頂きたいとの我々が王の仰せであります。」と、ティグリスが言った。

「今回の人族と仙獣族の災難は我々にとっても悲嘆に耐えない事態でした。そこで我々もこのままにしておくのは憂慮に耐えないことでもあります。今度は妖獣族の専横に対し、我々が結束し、目にもみせてやらなくてはなりません。それがエルフ族全体の意思です。そこで妖獣族が二度とこんな暴挙に出ないように彼らのアジトを撃滅してしまおうと思っています。」と、エルフィナは威厳に満ちた声で言った。

「それは諸族にとっても幸いなこと、是非協力させて頂きたい。」
と、マモルは言った。

「長旅の疲れも残っておろう。出撃までまだ時間がある。少し休息し、この樹海城をゆっくり見物でもしておくといいでしょう。日時と襲撃場所は後で使者を通して知らせます。」エルフィナはそう言つと、奥の間に去って行った。

その後、皆であてがわれた宿舎に行った。少し休んでからアイルが樹海城を見物しに行こうと言出し、皆は出かけて行ったが、マモルとカオルはもう少し休みたいと思い、それぞれの部屋に残った。シンジとカオルは樹海城にある自分たちの家にそれぞれ荷物を整理しに行ってしまった。ファルは部屋に飾る花を摘みに一人で出かけて行くと言つてマモルを残して出かけて行った。

マモルはしばらくベッドに横になつて考え事していると、カオルがそつと彼の部屋に入ってきて、

「わっ！」と、言つて彼を驚かせた。

「わあ！なんだ、カオルか。びっくりさせるなよ。」と、マモルは胸に手を当てて言った。

「何か、ぼーっとしてるから、いたずらしてみたくなつちやつた。あは。」と、カオルは舌を出して言った。

「なんかエルフ族っていうのは威厳に満ちてるんだなつて考えたのさ。あのエルフィナっていう長も綺麗で何か逆らえない魅力を感じたよ。」と、マモルが言った。

「エルフ族はかつては今とは比べ物にならないくらいの勢力を誇っていたみたいだからね。その種族としての誇りみたいなのがあるんじゃないかな。」と、カオルが言った。

「そうなんだ。それは知らなかったな。」

「まあ、かなり昔のことだけどね。西の砂漠以東のほとんどの地域をエルフ族が治めてたつて記録を見たことがあるわ。」と、カオルは宿舎のカーテンを開けながら言った。

「まだ、この世界のことは分からないことが多いな。」

「そうだ、ここから南方は少数種族の地が広がっているの知ってた？」とカオルが言った。

「ああ、それはこの世界の地図を白仙城で見ても何となく知ってたよ。」

「そこはまだ、知られていない種族もたくさんいる。そして、ずっと東には諸族の城、さらに東は海があり、西の砂漠を超えていくと妖獣族の国が乱立してると言われてる。でも、その砂漠は歩いて超えることが出来ないくらい広い。まだ、誰も越えて行って帰ったという記録がないらしいわ。」と、カオルはテラスから外を眺めながら行った。

「妖獣族の国か・・・そこに行けば皇帝というやつもいるのかな。」と、マモルが何気なく言った。

「かもしれないけど、伝説によると皇帝は天破城てんぱじょうというとても大きな城にいるとか書いてあるのを見たことがあるわ。」と、カオルが言った。

「それは本当か？」と、マモルは身を乗り出した。

「うーん。でもこれは伝説だし、出どころもわからないから、どこまで本当なのか分からないわ。だって、これがもし本当だとしたらその書いた人はどうやってそれを知ったのか不思議に思わない？」と、カオルが言った。

「まあ、それはそうだけど手掛かりが全くないよりはいいんじゃないかな。」と、マモルは言った。

「何か気になることでもあるの？」と、カオルは不思議そうに訊いた。

「いや、ただ少し興味があっただけさ。」と、マモルは頬ほおを掻かきながら言った。

「あなたが頬を掻く時は何かあるのよね。」と、カオルは横目でマモルを見た。

「あ、いやこれは単なる癖くせだよ。」マモルは心を見抜あわかれて慌あわて

ていた。

「私はマモルのことなら、何でも分かるのよ。」と、カオルは両手を腰に当てて言った。

「こわい。こわい。」

「何ですって。もう一度言ってみなさい。」と、カオルは手を振り上げると、マモルは逃げる振りをした。カオルはそれを追いかける。その時、マモルは部屋のテーブルにつまづいて、床に倒れそうになった。だが、カオルはそのマモル目掛けて突っ込んでしまった。二人は重なって倒れた。マモルは重なってきたカオルごと立ち上がると、カオルはおんぶした状態でマモルの首に腕を回して抱きついてきた。

「なんだ、カオル。子供みたいなことして。」と、マモルが言った。

「だって、いいじゃないの。二人きりになるの久しぶりなんだし、たまには甘えさせてよ。」と、カオルが甘え声で言った。

「まあ、いいか。最近はずっと皆も一緒だったしな。」と、マモルは言った。

「マモル。愛してるよ。どこにも行かないでね。」と、カオルは言うと、後ろからマモルの頬にキスをした。

マモルはそれに力なく

「うん。」と、答えた。

だが、彼はいつかは別れる日が来るかもしれないと漠然とした予感を感じていた。モトから託された使命がマモルに重くのしかかっていた。

ファルは樹海城の外にある湖のほとりで一人花を摘みながら、考えていた。こんなことはアルビトリウムに来てから始めてのことだった。だが、優心村ゆしんむらで聞いたマモルの夢はファルの心にも重くのしかかっていた。

マモルはきつと託された使命を果たすつもりなのに違いない。そ

して、きつと一人でやり遂げようとするだろう。でも、私は彼の幻
霊として彼を助けなければならぬ。マモルがもしそれで死ぬこと
になったら、主と一体の私も死んでしまう。でも、それは大したこ
とじゃない。マモルのいない世界にいても、意味はないのだから。
だけど、彼もかなり力を取り戻しているのは確かだ。それはあの
ハイロウとの戦いでも明らかだわ。でも、まだ完全になるまでには
時間がかかるわ。

これから、戦う敵はおそらく冥塔めいとうの三王だろう。あそこは生ける
者たちが行って帰って来れない場所。邪悪に満ちた冥塔の奥にいて、
強力な魔法を駆使する冥塔の三王。あれを倒す力が今のマモルにあ
るだろうか。あの王たちは今までの敵と違う。皆の力を合わせない
と倒せないだろう。

ワタマの甦よみがえり

諸族の城から東遠方には海が広がっている。その海上で今異変が
起ころうとしていた。

東の果ての海

東の海遠く

万年の時を経て甦り

千年の間世界を統治する

それがワタマ

その力にアルビトリウムはおののく

すべての種族はその前にひれ伏す

驚くべき力と強さ

その威勢は世界を席卷する

誰が立ち向かえるだろう

誰がとめられよう

アルビトリウムに伝わる詩の一節である。それは単なる伝説に過ぎないと誰もが思っていた。しかし、今それが現実に起ころうとしていた。謎の種族ワタマの住む浮遊大陸が復活し、遙か東の海上に現れようとしていた。しかし、この事実を知る者はまだ誰もいなかった。

小魔人の洞窟

小魔人の洞窟

エルフ族は今回の奇襲にあたって標的をひとつに絞った。樹海城から西方に位置する骨片の土漠にある妖獣族のアジト瘴地の冥塔である。そこは冥塔の三王と呼ばれるこの一帯の妖獣族を支配する王たちのアジトであった。冥塔は高い城壁に囲まれた堅固な要塞だが、ここを落とすことで、この辺の妖獣族は大打撃を受け、勢力を大きく後退せざるを得ないことになる。しかし、エルフィナもこの王たちの手強さも十分承知している。この作戦には何としても、ソルジャーたちの協力が必要なのだ。マモルは協力部隊として単独での行動を許可されていた。

射型は得意の強弓と弩部隊で塔の前方と側面から集中的な射撃を仕掛け、霊型は空中から魔法攻撃を繰り出すという展開でここ数日はエルフ族に有利に展開していた。しかし、まだ大打撃を与えるに至らず戦闘は膠着状態になっていた。

マモルたちはキャンプで夕食をとっていた。

「なあ、シンジ。この城はなかなか落ちそうにないな。」と、マモルがシンジに話しかけた。

「そうだな。攻城戦というのは元々戦争では最も難しい戦法だからな。まして、これだけの堅固な城となると、そう簡単には落ちないだろう。相手も馬鹿じゃないだろうから、こういう場合に備えて準備は怠りないだろうしな。」と、シンジが言った。

「うーむ。攻城戦がこれほど難しいとは思わなかった。」

「エルフ族は接近戦が不得意だから、地上に降りて戦うと相手の思いつぼというところだしな。何とか空中戦で小ダメージを与えつつ、相手の疲れを待つしかないだろうな。」

「俺たちである城門から何とか中に入れれば、城の中に入らせて

混乱させることもできるんだけどな。」と、マモルは言った。

「そうだな。お前ならそれくらい出来るかもな。翼でも持っていれば飛んで行けるんだろっけ。お前みたいな重い奴を運べる力のあつたエルフはいないだろうな。」と、シンジが残念そうに言った。

「なんとか地下からでも城の中に入れればいいんだがな。」と、マモルはしみじみ言った。

「地下か・・・そうだ。ひとつだけ方法がある。」と、シンジが嬉しそうに叫んだ。

「ここから北の方に小魔人の洞窟というのがあつた。そこはこの冥塔の地下に通じているという噂があつた。だが、そこは妖獣族とは違ふ。魔人族がうようよして居る。入つた者は生きて出られないという話があつた。行けるとすればそこからしかあつない。」と、シンジは言った。

「小魔人の洞窟か・・・少し試してみるか。シンジ、明日そこに案内してくれ。」と、マモルが言った。

「分かつた。」と、シンジが言った。

次の日は朝から雨が降つて居た。マモルたちは全員で洞窟に向かつた。不気味な感じの森を抜けていくと、大きな洞穴の入口が見えつた。中は真つ暗だつた。

「マモル。パーティー全員にクシアをかけるわ。」と、ハルカが言った。

「クシアって何だ？」と、マモルが訊いた。

「クシアは支援魔法の一種で全員の今持つて居る力の全てを増幅することができるの。これを掛けておけば全員が持つて居る力以上戦い出来るわ。時間が経つと効果はなくなるけど、またかけることも出来るから大丈夫。」と、ハルカが言った。

マモルは白仙城での出来事を思い出した。エルフ族の兵士からたしか、ラーボという魔法をかけられたことがあつた。

「そういえば、前にラーボとかいうものをかけてもらったことあ

ったけど、それと同じものなのか？」と、マモルが訊いた。

「ラーボは同じ効果があるけど、単体にしかかけられない。複数にかける場合はクシアを使うの。」と、ハルカが説明した。

「そうなのか。なんかエルフが一緒だといろいろと助かることが多いな。」と、マモルは喜んだ。

「まだまだ、私たちの力はこの様なもんじゃないわよ。私と戦うの初めてでしょ。きつと、驚くよ。うふふ。」と、ハルカは笑った。

「じゃ、やるわよ。」

ハルカは目を瞑こむって、

「シルバアルバスルーメンクシア」と、靈句を唱えた。

すると、全員の頭上に光の粒が降り注いだ。そして、それらがそれぞれの体の中に入っていった。

「すごいきれい。何か言葉に表せない美しさね。」と、カオルが驚いた。

「なんか、体が軽くなった感じがするね。」と、アイルが言った。アイルの言葉に皆も頷うなづいた。

「じゃ、行くとしますか。」と、マモルが促した。

「待つてくれ。」と、ティグリスが皆を呼び止めた。

「どうしたの？ティグリス。」と、アイルが言った。

「この洞窟では俺を先頭で行かせて欲しい。」

「ああ、なるほど。それがいいかもしれないわ。」と、アイルが同意した。

「別にいいけど、何かあるのか？」と、マモルが不思議そうに言った。

「我々獣型の体は他の種族よりも頑丈に出来てる。この暗い洞窟で何かあっても私が盾代わりになる。」と、ティグリスは言うのと、白いトラに変身した。

「じゃ、後に付いてきてくれ。」と、言うのとティグリスは洞窟の中へと進んで行った。

ファルは自分の体を発光させた。それが周囲を照らし、松明代わ

りになった。

「ファルにこんな力があつたなんて、俺知らなかつたな。」と、マモルはファルに微笑みかけた。

「便利でしょ。」と、ファルはマモルに微笑みを返した。

しばらく進むと洞窟の入口の明かりも小さくなりやがて彼らの周囲を完全な闇が覆つた。

炸裂する力たち

炸裂する力たち

マモルたちの足音だけが洞窟内に響きわたる。進むに連れて、異様な気配が強くなっていくのが分かる。その時、何か近づいてくる足音が響いてきた。それも大勢だ。

「何か来るぞ！気をつける。」と、ティグリスが叫び、パーティーの全面に体を横にして障壁になろうとしてる。マモルはエンシャソードが赤く光っているのに気が付いた。

「この剣は敵を感知することが出来るのか。」

そして、剣を鞘から抜き構えた。足音が大きくなってくる。他のメンバーも戦闘態勢に入った。プエルはハルカの後ろに隠れた。ハルカは目を瞑り、何かを感じているようだった。

「テンペスタス！」と、ハルカが叫ぶと、風の渦が洞窟の奥に向かって飛んで行った。

「ぎゃああああ！」と、何か断末魔の叫び声が聞こえた。

今度は足音が遠くなっていく。おそらく、逃げて行ったのだろう。足音が聞こえなくなったところで、再び皆で進んで行くと、何体かの小さな残体が転がっていた。マモルたちはそれを見て思わず背筋が寒くなった。顔の色は緑でシワだらけだった。目は異様に大きく腫がなかった。口は耳の当たりまでに達し、鋭い牙がその中に納まっている。何とも言えない形相に皆は閉口した。あまりにもおぞましい光景に早々にその場を後にした。これから行くところにこんな者たちがいるかと思うと、皆も自然と足が重くなった。

どれくらい進んだらうか、何かの唸り声が聞こえてきた。全員でおそろおそろ近づいて行った。すると、突然何か襲いかかって来た。

「ぎよいいいいい！」と、その唸り声の主が飛びかかってくる。

すかさず、ティグリスが足の爪でそれを殴った。すごい力で叩かれて、それが洞窟の壁に叩きつけられ体が潰れていた。みんなはティグリスの力に驚いていた。仙獣族の強さを皆が思い知った。

さらに進んで行くと、前方に薄明かりが見え始めた。そこは部屋のように大きく広がっているように思えた。近づくとつれ、そこにはたくさん生き物が動いているように見える。最初にマモルたちを襲った異様な小人たちが、その部屋の中央にある丘の周りを走り回っている。その部屋の入口に群れているダチヨウのような生き物がマモルたちに気が付き、彼らに向かって襲いかかってきた。皆は急いで武器を構えた。シンジが矢をつがえ、一気に三本放った。矢は放電しながら、その生き物に刺さると丸こげになった。生き残っている鳥たちがマモルたちに襲いかかる。ティグリスはそれらを爪で次々と殴り払って行く、それをすり抜けて来たやつらをマモルがエンシャソードで斬りつけると黒い影となって消し飛んでしまった。

「なんだ、この剣は!？」と、マモルはびっくりしてしまった。「その剣は斬ったものを消滅させる力を持つ剣。そして、持つ者を生かす力のある剣。」と、ファルが説明した。

「すごい!なんてすごい剣なんだ。」と、マモルは叫んだ。「マモルその剣にグラディウスの時のように力を送ってみて、そして剣を腰に構え、そのまま横に振り切つて。」と、ファルが言った。

「分かった!やってみる。」マモルはファルの言う通りに剣を振るった。

すると、剣から数多の光の刃が放たれ残っている鳥たちは粉みじんに砕け散った。それを見ていた全員が啞然とした。

「すごい!こんな力があるなんて、信じられない。」と、マモルは剣を見つめながら驚いていた。

「これがルーメンエッジというエンシャソードの妙術よ。」と、ファルは言った。

「よし、次はあたいの番だよ。あのとっちゃん坊やの集団を片付

けてあげるわ。」と、アイルは言うつとティグリスの前に進み、両腕を大きく広げた。そして、自分の胸の前で手を合わせると、

「鳳魔召喚！」と叫んだ。

すると、銀色の鳳凰がアイルの頭上に表れ、高く舞い上がったかと思うとその嘴を大きく開け、青白い炎を小魔人に向けて吐き出した。小魔人たちは青白い炎に包まれ焼失してしまった。

「どう、あたいたち人型も結構いけるでしょ？」と、アイルは皆にウインクした。

「皆凄すぎだよ。」マモルは感動していた。

「これなら、この洞窟も大して恐ろしいこともないかもね。」と、カオルが言った。

「ハハハハ。ボクもやつと安心したわい！」と、ハルカの後ろに隠れていたプエルが急に元気になったのを見て、皆は笑った。

小魔人たちの生き残りを片付けると、マモルたちはその薄明るい部屋を偵察した。

「ここで何かの儀式をやってたみたいだな。」と、マモルが言った。

「そうね。きっと私たちを生け贄にでもしようと思ってたのかもしれないわ。」と、カオルが言った。

「あんな奴らに捕まるなんてゾツとするな。」と、マモルは身震いした。

「そうね。」と、カオルも身震いした。

「さて、先を急ごうか。」と、マモルは皆を促した。

部屋から反対側の通路に差し掛かった時、マモルは異様な気配を感じた。エンシャソードが赤く光っていた。

「何かいるぞ。皆気を付ける！」と、マモルは叫んだ。

その時、大きな石のつぶてがマモルたちに向かってきた。マモルは急いでエンシャソードを構えた。マモルの前方にティグリスが横向きに立ち入った。石つぶてはティグリスの体に次々と衝突した。

しかし、ティグリスは傷一つ負っていないかった。

「なんて硬い体なんだ。」と、マモルは驚いた。

「私の体はこれくらいではビクともしませんよ。」と、ティグリスは微笑んだ。

第二波が襲ってくる、その後ろから小魔人の群れが怒涛のように押し寄せてきた。

ハルカがテンペスタスで最前列の小魔人を吹き飛ばし始めた。カオルも負けずにコキュートスで敵を凍らせていく。アイルは鳳魔を召喚し、残った敵を炎で焼いている。マモルは一蹴りして、小魔人の頭上を飛び越え赤光の戦士となり、空中から敵を次々と消し飛ばしに掛かった。ティグリスの爪が炎を帯び、押し寄せてくる敵を次々と殴り飛ばしている。殴られた敵は炎に包まれて焼け死んでいく。シンジは翼で舞いながら、空中連射している。矢が当たると敵は黒こげとなり地面に転がる。敵も数に任せ続々と襲ってくる。マモルは空中からルーメンエッジで一気に敵を破碎して行く。小魔人の後ろから灰色の巨人の大群が押しせてくるのが見えてきた。マモルはそこを目掛けて突進して行った。ルーメンエッジで次々と消し飛ばす巨人たち、その時マモルの背後から石つぶてが襲ってきた。マモルは気が付いていない。しかし、石つぶてはマモルの体に当たる前に碎け散って行く。

「剣が守ってくれたのか。」と、マモルは剣の力に感嘆した。

小魔人たちは数がどんどん減っていく。灰色の巨人たちも相当数倒されていた。その時、巨大な火の玉が洞窟の奥からマモル目掛けて飛んできた。マモルは巨人を斬り下ろすと、素早くルーメンエッジを放ち、その玉を粉碎した。火の粉が辺りに飛び散った。その火をもろに浴びた巨人たちが炎で焼かれていく。残った巨人は退散を始めた。

「逃がすかよ！フレキンベルいくぜ！」と、シンジは叫びながら弓を頭上に構え洞窟の天井に向かって空矢を連射した。

次の瞬間、巨人たちの頭上に青白い大きな穴が広がり、そこから

矢の雨が降り注いできた。矢に当たった巨人たちが次々と倒れていく。矢の雨は立っている巨人たちがいなくなるまで落ち続けた。

「すごいな、シンジ。あんな技が出せるなんて。」と、マモルはシンジの肩を叩きながら言った。

「いや、お前のすごさにはかなわんよ。ただ、お前の足でまといにはなりたくないからな。俺なりに修練は積んでたのさ。」と、シンジは照れくさそうに言った。

「大したもんだ。お前の技は最高だよ。」と、マモルはシンジを抱いた。

「やめろよ。そんなことされたら、俺がカオルちゃんに睨まれちまうぜ。」と、シンジはマモルに耳打ちした。

「あははは。」とマモルは和やかに笑った。

マモルたちが小魔人の洞窟を進んでいる頃、樹海の中を進む十人の男たちがいた。

「ステラが今回のエルフ族の助っ人をやってるっていうのはほんとうだろうな。」と、先頭を歩いている男が言った。

「間違いない情報だ。奴は自ら買って出たって話だぜ。」と、顔に傷のある男が言った。

「まったく兄貴はまだ手を出さなと言ってるが、奴を倒せなくなる前に俺が倒してみせる。わざわざ兄貴の手を煩わすまでもない。俺たちだけで始末してしまえばいい。」と、先頭の男が言った。

「あいつにやられた仲間の仇討ちがやっと出来るぜ。」と、顔に傷のある男が言った。

「奴が力を取り戻す前にやつつけねえと、前みたいな無様な戦いにならないとも限らねえ。」と、先頭の男が言った。

「だが、兄貴に知れたら、ただじゃ済まないぜ。」と、別の男が怯え顔で言った。

「安心しろ。偵察に行ったら、偶然鉢合わせて仕方なく戦いになっちまったって言えば、兄貴も納得するさ。」

「待ってるよ。ステラ。」と、先頭の男は不気味な笑いを浮かべた。

赤い魔人

トリーキングダー

トリーキングダーは諸族の城で任意に結成されたユニベストである。諸族の城ではトリーキングダーという部隊の他にも独自の目的を持ったユニベストと言われる組織がある。それらは独自の活動を行なっている。ユニベスト同士で模擬戦を行い、お互いの能力の向上を図ったり、あるいは妖獣族の討伐を独自に行なったりしている。大きなものになると、百人を超えているものもある。それらはポルソアメオのように公認の組織ではない。それぞれのユニベストは統士と呼ばれる組織の長を頂点として組織されている。統士は組織の長であり、統括者である。そして、いつかはポルソアメオに入ることが誰もが夢見ている。だが、ステラをはじめポルソアメオのメンバーが次々と姿を消した事件の後、ポルソアメオは事実上解体されてしまった。実力的にも後継適任者がいないことから、有名無実の組織となっている。そして、ユニベストの中で最高実力と目されているのが、マモルを追跡しているトリーキングダーなのである。その統士として君臨しているのがドルスという戦士である。

ドルスはポルソアメオの選考にあたり、諸族の城の選考委員会で素行の悪さと能力に欠けているという理由で最終選考で落選した経歴を持っていた。そして、英雄ステラをライバル視していた。

数十年前、ステラに対し果し合いを申し込んだことがあった。ステラは妖獣族以外の者とは戦わないと断った。しかし、彼は執拗にステラを追い掛け回し、ついに彼を決闘に引きずり込んだ。ステラはそれでも相手の攻撃を軽くかわし続け、反撃をすることはなかった。やがて、ドルスは力が尽き、勝負は事実上引き分けということに落ち着いた。

その屈辱的な引き分けをドルスは根に持ち続けた。後日、彼は仲

間を率いてステラを襲撃した。それでもステラは相手にならず、反撃することはなかった。だが、ドルスと仲間たちは罫を仕掛け、ステラを呪詛の沼と呼ばれていた場所に誘い込んだ。その沼に足を取られたらもう逃げることは出来ない呪われた沼と言われていた。ステラはうまく攻撃をかわしていたが、その沼に浮いていた枯れ木に過って足を付いてしまった。その時に剣の力を使って、沼に足を取られることを避けようとした。その時に発せられた炎の欠片がドルスの仲間にあたってしまった。その男は沼に落ちてしまった。

ステラは必死に助けようとしたが、沼は彼を地底に引きずり込みついに帰らぬ人になってしまった。そのことでドルスはステラをさらに憎み、ずっと復讐の機会を狙っていたのだった。

その後、ステラが月の扉に落ち込んだことで彼は復讐を遂げるこゝとが出来た、と思い込んでいた。だが、そのステラが戻ってきたとの噂が諸族の城にもたらされた時、ドルスは今度は自分の手で仇を討ちたいと思った。しかし、彼の心は力を戻しきれしていないステラを襲うことに躊躇した。せめて自分と互角に渡り合えるくらいの力を取り戻すまで待とうという気持ちになっていた。彼は悪党で卑劣ではあったが、他の仲間とは違い多少なりとも戦士としての誇りを持ち合わせていたのだ。

だが、副統士のハンブラ、セト、アルビオスを中心とした十名はかつての無様な戦いの戦いの教訓とソルジャーの力を見せつけられていたことから、そんなドルスの煮え切らない態度に不満を持ち偵察にかこつけ、今のうちにステラを亡きものにしてしまおうと画策していた。

赤い魔人

マモルたちは洞窟の最奥部にたどり着こうとしていた。マモルたちを異臭と殺気に満ちた気配が襲った。何かがあることを感じ始めていた。マモルのエンシャソードは赤い光を帯びていた。ティグリ

スを先頭にパーティー全員が気を張り詰めながら進んで行った。突然、数多の緑色の火球がマモルたちに向かってきた。マモルはエンシャードを構えた。ティグリスは盾となり、それを体で受け止めた。ティグリスは体が焼けるような痛みを感じた。痛みのため気を失いそうだった。

「ぎゃああああ！」と、彼は思わず絶叫した。

「ティグリスううう！」と、マモルが叫んだ。

マモルはエンシャードの結界でパーティーの全員を守った。火球は次々とはじかれていく。攻撃が止むと同時に、マモルは洞窟の奥へと突進した。

「ファル、俺と融合してくれ。」と、マモルは言った。

「わかったわ。」ファルは姿を消した。

彼は赤光の戦士になり、洞窟の奥が見えるようになった。敵の姿が見え始めた。全身が血のように赤く、身長は大木を思わせるくらい大きかった。太い腕の先に鋭い爪を持った大きな手がマモルを待ち構えるように向けられている。その掌から緑の火球がマモルに向けて発せられた。マモルはそれらを左右にかわしながら高く飛び上がり、その巨体の胸目掛けて剣を刺突しに行く構えになる。

「なにっ！」と、マモルは叫んだ。

彼を巨人の掌が横殴りに襲ってきた。それをマモルは体をねじりながらかわす。もう片方の手が迫って来る。

「くそっ！体が大きいわりに動きが早いぜ。」

マモルは体を回転させ、巨人の腕を斬り捨てた。巨人の左腕が肘から先にかけて黒い影のように変貌し、消え去った。マモルは左手にグラディウスを握り、巨人目掛けて薙ぎ払う。炎渦が巨人に向かって行く。胸を焼き抜かれ巨人が悶えた。マモルはその胸目掛けて両の剣を左右平行に構え、刺突しに行く。剣が巨人の体に突き立った。巨人の絶叫が響き渡る。そして、残る右手でマモルを摘み取るうとする。マモルは素早く巨人の胸から剣を抜き、そこを蹴り飛ばすと巨人から離れ、地面に降り立った。巨人は失われた左腕と胸の

痛みとで悶えている。マモルは地面を蹴って、右足目掛けて突進した。

「これで終わりだ！」と、マモルが叫ぶ。

巨人は右足でマモルを蹴りあげようとする。マモルは蹴りを右にかわしながら体を回転させ、巨人の左ももにグラディウスとエンシヤソードを次々に斬り付け消し飛ばしてしまった。巨人は左足がなくなり態勢が崩れる。マモルは巨人の体の倒れる勢いを利用して右下から剣を振り上げる。巨人の体は巨大な肉塊となり、地面に転がっていた。

マモルは皆のところに戻り、ティグリスの様態を窺った。ハルカがエイレネで彼を治療していた。だいぶ痛そうだが、苦しみはだんだん薄らいでいくように見えた。

「なんとか大丈夫みたいだな。」と、マモルが言った。

「いやあ、すまん。心配かけさせてしまったな。」と、ティグリスが言った。

「そんなことは気にしないで、少し休むことだ。」

「だいぶ楽になったよ。ハルカのおかげだ。」

「もう少しすると元のように動けるわ。」と、ハルカが言った。

「ハルカの霊力はすごいな。重症でも直せてしまうんだから。」と、マモルは感心した。

「まさにエルフさままだね。」と、アイルが言った。

「ところでマモルのほうは大丈夫だった？」と、カオルが訊いた。

「ああ、なんとかな。たぶん、今倒したのがこの洞窟のボスじゃないかな。」

「すごいな。一人でやつつけるなんて。」と、シンジが感心した。

「相手が大きかったから、少し手こずったけどな。」

「これでこの洞窟を抜けられるかもしれないわね。」と、カオルが言った。

「いよいよ、これから本番ね。」とファルが言った。

罅

瘴地の冥塔しよじち

マモルたちは洞窟の上に向かって長い階段を発見した。それがこの洞窟の出口に違いない。その先がどうなっているのかは誰も知らない。十分に警戒をしながら、ゆっくりと階段を登り始めた。もう長い間、誰も登った形跡がないように見える階段は端が崩れかけていて、一段登る度に土埃ちほちが立ち上がる。出来るだけ中央を通るように注意しながら、見通しの悪い暗闇の中、階段を上って行った。先に小さな明かりが見えてきた。その先が一体どうなっているのか誰も知らない。登ったところに敵がいなくても限らないので、全員が攻撃に備えた。

出口の外に出てみると、そこにも洞窟が広がっていた。ただ、洞窟に沿って火が灯されていて、中央を地下水が流れている。何者かがいるような気配はない。洞窟の片側は金属の格子が嵌はめ込まれていて先に進むことが出来ない。もう一方はまっすぐに洞窟が伸びていた。マモルたちは待ち伏せに警戒しながら、進める方に向かって歩き始めた。立ち込める異様な空気がここが冥塔の中に通じていることを思わせる。マモルたちの前に再び階段が現れた。それも上へと向かっている。さっき登ってきた階段とは違い、これは使われている階段である痕跡が見られた。何かの足跡がいくつも残っている。階段の両側は洞窟の壁が迫っていてここで襲われたら、逃げ道は後ろにしかない。全員の注意が前に注がれていた。しばらく進むと出口が現れた。姿は見えないが、そこに何者かがいる気配を感じる。足音を立てないように静かに進んで行く。

「誰だ！」と、その出口から一角の妖獣が顔を見せた。

「敵だ！突つ込むぞ。」と、マモルは皆に向かって叫んだ。

先頭にいたティグリスはマモルの叫び声と同時に敵の方に向かって

て突進していた。彼の姿が出口で見えなくなると、絶叫がこだました。そして、再び沈黙が洞窟を覆った。マモルたちがそこに着くと、既にテイギリスによつて悲惨な最期を遂げた妖獣たちの残体が転がっていた。

畏

今いるところが牢獄なのは明らかだった。通路の両側には金属の格子で仕切られた部屋が所々に設置されている。その格子の中は空っぽだった。おそらく今回の戦闘に中にいた者たちも駆り出されたに違いない。そのためにここは警戒が緩くなっているのだろう。マモルたちは少し歩を速めて進んだ。三つ目の階段が見えてきた。そこを上つて行くと明るい部屋に出た。そこには石が敷き詰められた通路があり、壁はレンガのようなもので積み上げられていた。そこを進んで行くと突き当りに扉があり、マモルたちは警戒しながらその扉を開いた。目の前に大きな広間が広がっていた。ここが冥塔の中心なのではないかと思えた。そして、右側に階段があり、そこを上ると二階へと上れそうだった。広間には誰もいないところを見ると衛兵もエルフ族との戦闘に参加しに行ってしまったらしい。

「敵もまさか内部から攻撃されるとは思ってたらしいな。」と、マモルが言った。

「そうみたいね。こんなに手薄だとは思ってなかったわ。」と、カオルが言った。

「だが、王はどこにいるんだろう。」と、マモルは首を傾げた。「とりあえず、二階に上がって片っ端から部屋を見て行くしかないわ。」と、カオルが意気込んだ。

「おし、やってみるか。」マモルはそう言うと、階段の方へ向かった。

マモルが階段に差し掛かった時、他の皆はまだ広間の真ん中あた

りを歩いていた。

その時、広間の床が突然開いたかと思つたと夥しい妖獣たちが現れた。床にはいくつもの地下へ通じる扉があつたのだ。その扉が次々と開きマモルの仲間たちを取り囲んだ。

「マモル！俺たちに構わず早く行け！ここは俺たちに任せろ。」と、シンジが叫んだ。

さすがにここまで強敵を倒してきた仲間たちだ。既に不意打ちに對してためらわずに戦闘態勢に入っている。

「マモル。今はシンジの言う通りにするのよ。ここは彼らに任せましょう。」と、ファルが言った。

「わかつた。」と、マモルは言った。「皆すまない。俺が戻るまで無事でいてくれよ！」

「まかせなよ。こんな雑魚どうつてことないよ。」とアイルは言うと、全身が炎に包まれたライオンを召喚した。彼女はそれに跨るまたがと妖獣たちを蹂躪こみつぶし始めた。

「あれなら、大丈夫かもな。行くぞ、ファル。」と、マモルは言った。

「うん。」ファルは頷いた。

マモルは階段を上り、一番近い扉を開け、中に入った。そこは何もないただの広間だつた。そして、通路に沿つて走り順番に扉を開けて行つた。三つ目の扉を開けた時、妖獣たちが群れをなして踊りながら走り回つていた。

「ぎやははは。今日の獲物はおいしいぞ。今日の獲物は人族の子。」と、言いながら部屋の中を走つていた。そしてマモルに気が付くと、

「来たぞ。来たぞ。人の子だ。」と、叫びながら襲つてきた。

彼らの体は緑色の液状のものに覆われていた。目は黄色に光っている。マモルは鳥肌がたつたが、グラディウスの炎でそれらを焼き払つた。

「ぎゃあああ！」それらは炎に包まれて呻き声を上げた。

「気持ち悪いんだよ。お前ら！」マモルは叫びながらグラディウスの炎を繰り出した。

部屋の中は焦げ跡だけが残った。そして、ここに王がいるのを確信した。今のはきつと、王を守る衛兵だろう。マモルはさらに部屋の奥に進んだ。

「やっと、来たな。ステラ。」不気味に響く声が部屋の中にこだました。

「誰だ。どこにいる！」マモルは叫んだ。

「私の名はアンブラー。昔、お前によって封印された冥塔の三王の一体だ。封印は解かれた。お前に復讐するのを待っていたぞ。今こそ、かつての恨みを果たす時。」と、その声は言った。

「姿を現せ！どこにいる！？」と、マモルは叫んだ。

「うはははは。ここだよ。」と、アンブラーは言った。

「その部屋の奥に姿を現したのはマモルの足の長さにも及ばない小さい黒い肌の生き物だった。人間のように二本足で歩いているが、顔は真つ黒で白い目と口だけの化け物だった。

その王は歩きながらマモルに向けて黒い火球を放った。マモルはエンシャソードの結界でそれをはじいた。

「ほほう。エンシャソードか。だが、私に勝てるかな。」と、その黒い王は言った。

「やってみろよ。受けて立つぜ。」と、マモルは言った。

「あはははは。威勢だけはいいな。」その王はそう言つと、高く飛び上がりマモル目掛けて、黒い火球を次々と放った。マモルは右に飛び退き、左手のグラディウスを横に振るつてその王に炎を放った。王も炎を左にかわしながらマモルを追いかける。黒炎をマモルに放ちながら、マモルに近づいて来る。マモルは王の右手に回り込もうと切り替えした。妖獣の王はその動きを察知し、右の手から黒い針のようなものをマモルに向けて射ち放った。マモルはエンシャソードの結界で受け止めようとした。だが、針のいくつかがマモルの体に刺さった。

「うわああああ！」と、マモルは絶叫した。

その針には毒が含まれていた。マモルの体は痺れ、急いで王から体を後退させた。

「マモル。大丈夫？」と、ファルが心配そうに言った。

「くそ。すぐく頭がくらくらする。痺れて体が思うようにならない。」と、マモルは苦しそうに呻いた。

「マモル。今浄化するね。」ファルはそう言って念じ始めた。

マモルの体は光に包まれた。そして、マモルの体から黒い煙が出て行く。マモルは体が沸いてくるのを感じた。

「ありがとう。ファル。助かったよ。」と、マモルは言うてから、アンブラーに向き直ると、

「これをお見舞いしてやるぜ。」と叫んだ。

エンシャソードを腰に構え、そのまま横に振るった。

「ルーメンエッジ！」

数多の光の刃が王に向かって飛んで行った。王はよけきれず粉微塵に砕けた。

「ふう！手こずっちゃった。」マモルはため息を吐いた。

そして、彼はファルに顔を向けて、

「ファル。ありがとう。お前のおかげで倒すことが出来た。」と

感謝した。

「ううん。当然のことをしたまでよ。」彼女は笑顔で答えた。

消えた剣

消えた剣

マモルは残る二王を探して、部屋を次々と調べて行ったが王のいるなかなか部屋を見つけることが出来なかった。そして、最後の扉を開け放った。

「ヒヒヒヒヒッ。来たな。ステラ。」と、中から声がした。

「見つけたぞ！」と、マモルが叫んだ。

「お前はここで死ぬのだ。」と、不気味な声が言った。

部屋の奥から体中が羽に覆われた獣がゆっくりとマモルに向かって歩いて来る。

「我が名はエクスーロ。久しぶりだな、ステラ。もつとも、今のお前は記憶を失っていて覚えておらんだろうがな。昔、お前に封印されてからこの日が来るのが待っていた。お前に復讐出来る日をな。」

そう言う口から炎を吐き出した。マモルは右にかわして、グラディウスを抜いた。

「バゼラード！」と、剣をかざして叫んだ。

炎の剣の雨がエクスーロの体に降り注いだ。しかし、その獣はビクリともしない。

「ワツハハハ。ワシには火炎攻撃は通じんぞ。ワシは火属性の体を持っているのだ。この勝負は面白くなるぞ。」と、エクスーロが言った。

「なんだと！火が通じないだって。」マモルは焦りを覚えた。

「マモル。こいつにはグラディウスの攻撃は通じないわ。」と、ファルが言った。

「そうか。火が使えなくても、倒してみせるぜ！」マモルはそう言うのと、エンシャソードも片手に握り二剣を構えた。

「いくぜ！」

マモルは叫ぶと同時に敵に向かって突進した。獣もマモルに向かって来る。彼はエンシャソードをエクスーロに向かって振り下ろす。獣はそれを左にかわすと、マモルの体に足の爪で切り付ける。それを彼はグラディウスで受け止める。すかさず獣の腹部にエンシャソードで刺突しようとする。しかし、後ろ足で剣を蹴り払われる。マモルは足で獣の脇腹を蹴り上げた。

「ぐっ！」と、獣がうなり声を上げた。

一度、お互いに後退して組み直しの構えになる。

「なかなかやるな。少しは力を取り戻してるようだが、完全とはいかないようだな。」と、エクスーロは言った。

「そんなの関係ない。お前を倒してからでも力は取り戻せるさ。」と、マモルは言った。

「アツハハハ。お前はここで死ぬんだ。力を取り戻してる暇などないわ。」

そう言うと、獣は飛び上がり両前足で交互に火炎弾を放った。マモルはそれを剣で吹き飛ばすが、獣はそのまま彼に向かって突進して来る。マモルは体当たりをまともに食らった。しかし、痛みを感じない。そして、エンシャソードでその足に斬り付ける。獣の左足から黒い血が飛び散った。

「なに！」と獣は苦痛に顔を歪ませながら叫んだ。「お前のその鎧はなんだ。」

「これは炎者鎧だ。それがどうした。」と、マモルが言った。

「そうか。道理でワシの攻撃が効かんはずだ。」と、妖獣王は言った。「ならば、戦い方を変えるしかないな。」

「お前の言っていることは俺には分からねえぞ。つべこべ言わないで掛かって来い。」と、マモルは叫んだ。

「なんだ。お前知らんのか。その鎧の力を。かつてのステラが聞いたら悲しむぜ。」。

「そんなのどうだっていいだろう。いいから掛かって来い。」と、

マモルは言った。

「そうか。ならば言う通りにしてやるう。さっさと死にやがれ！」
妖獣王はそう言うと同時にマモルに襲い掛かった。彼はグラディウスで横に斬り払おうとする。エクスーロはそれを口で受け止める瞬間、エンシャソードがエクスーロの首に振り下ろされる。

「させるか！」エクスーロは叫びながら長い炎の尻尾でエンシャソードの剣筋をそらした。エンシャソードがグラディウスにぶつかった。

「うわっ！」マモルとエクスーロが同時に叫んだ。

剣同士がぶつかり合った瞬間、辺りに光弾が飛び散り目が開けていられなかった。

「なんだ、これは！」と、エクスーロが叫んだ。

マモルが目を開けると左手に持っていたグラディウスの感覚がなくなっていた。

「剣が消えた。」と、マモルは呟いた。

カリバーン

カリバーン

マモルは右手にあるエンシャソードを見て驚いた。赤い剣がオレ
ンジに輝きを放ち、鏢つばからブレードが平行に二本出ていた。

「どうなってるんだ!？」マモルは何が起こったのか分からな
かった。

「マモル危ない!」ファルが叫んだ。

マモルが驚いてる隙にエクスー口は大きな口を開けて、マモルの
顔に喰らい付こうとしていた。

マモルは反射的に剣を獣の顔目掛けて斬り付けた。

「ぎゃあああ!」妖獣王は頭から真つ二つに切り裂かれてしまっ
た。

「そんな馬鹿な・・・ぐっ。」エクスー口は息絶えた。

マモルはしばらく動くのを忘れていた。一体何がどうなっている
のか分からなくなっていた。

「ファル。ありがとう。おかげで助かったよ。」マモルは感謝し
た。

「戦闘中に呆然としてたら、危ないわよ。びっくりしちゃった。」
ファルはほっとしていた。

「でも、この剣どうなってるんだ。」マモルは変貌を遂げたエン
シャソードを眺めていた。

「この剣は聖剣カリバーンに違いないわ。私も見るのは始めてだ
けど、このブレードが二本並んでいる剣はカリバーン以外に考えら
れない。」ファルはその剣を見つめながら言った。

「エンシャソードでもグラディウスでもなくなったということな
のか?」

「そうねえ。詳しくは分からないけど、二つの剣が持つ力同士が

相乗作用によって、カリバーンを誕生させたと思っ
ていいんじゃないかしら。この剣のことは詳しい伝承がなくて、実際にあったという記録もないし、
どういう力があるのかもわかっていないの。ただブレードが二本平行に並んでいる、
ということしか伝わっていない」と、ファルは説明した。

「そうなのか・・・どう使っているのかわからないのか。」「マモルは腑ふに落ちな
そうな顔で言った。

「まあ、いずれにしろ今はこの剣を使う他ないわ。」

「そうだな。頼みますよ。カリバーンさん。」と、マモルはおどけた口調で言った。

「はい。マスター。」

「剣がしゃべった!!」マモルとファルが同時に驚いた。

「私は剣の精カリバーン。」と、剣は言った。

「剣の精?」と、マモルは問い返した。

「そうです。私は長いことあなたを探していました。」と、カリバーンは言った。

「探していた?」

「私の契約者は昔も今もステラ殿のみ。」

「昔も今もって言われても、俺は始めてあなたに会ったんだけど・・・」

「いいえ、あなたは私の最初で最後の主です。」

「どういうことだ?ファル、俺がステラだった時はこの剣を持っていたのか?」マモルは腑ふに落ちない様子で言った。

「ううん。ステラはエクリクスしかもってなかったよ。」と、ファルが答えた。

「よく分からないな。カリバーン、昔っていうのはどれくらい前のこと?」マモルが訊いた。

「私にはそれがいつだと特定出来ません。」と、剣は答えた。

「それはどういうこと?」

「私には時間というものが分かりません。」と、カリバーンは答

えた。

「そうなのか。だとしたら、契約した主を間違えてるっていうことではないのか？」

「いいえ、私は契約者を間違うことはありません。あなたは私を生み出し、私と契約を交わしました。」

「生み出したって、俺が君を作ったのか？」

「そうです。力ある二つの聖剣を合し、あなたのアニマの力によって、私は誕生し、マスターは私をカリバーンと名付けてくれました。そして、あなたの命が果てるまで忠誠を尽くす契約を結びました。」と、カリバーンは説明した。

「そ、そのアニマっていうのは何だ？」と、マモルは訊いた。

「簡単に言うなら、物に命を吹き込むことです。」

「うーむ。まだよく分からないけど、とりあえず俺は君の主人とということなのか？」

「はい。マスター、再びあなたに仕えることは私の幸せです。」と、剣の精カリバーンは答えた。

闇の王ウンブラ

闇の王ウンブラ

「奴らはここに入って行ったのか。」と、ハンブラが言った。

「ああ、エルフ族の連中が言ってたんだから間違いないさ。」と、セトが言った。

「やっと奴と勝負出来るのか。楽しみだぜ。フッフ」と、ハンブラは笑った。

「俺たちの強さに驚いて、逃げることにならなければいいがな。」と、アルビオスが言った。

「逃がしはしないさ。ここで奴を仕留めてやる。」
ハンブラはそう言うと小魔人の洞窟に入って行った。

マモルは三人目の王を見つけられずにいた。もう二階の全ての部屋は探し終わっていた。「どこにいるんだ。」と、マモルは叫んだ。

「もう残ってる部屋はないわね。」と、ファルが言った。

「しかし、この塔は外から見るとかなり高いのに二階で終わってるといいうのも変だな。」

「そうね。まだこの上に何かあるのかしら。」

「とりあえず、隠し階段でもないか、もう一度部屋を探してみよう。」

マモルはそういうと最初の扉をもう一度開けて中に入って行った。

カオルたちは妖獣族の兵士たちと死闘を繰り広げていた。

「一体こいつら何匹いるんだ。キリがないぜ。」と、シンジが言った。

「ここの囲まれてたら、逃げ場もないしね。マモルがいてくれれば、

何とかなるんだけどな。」と、カオルは魔法を繰り返しながら言った。

「だけど、あたいたちが頑張らないとマモルだって王との戦いに集中出来ないよ。泣き言は言ってるんじゃないよ。」と、アイルが言った。

「そうだ。とにかくここは奴らを引きつけておくしかない。そのうち、マモルも王を倒して戻ってくるさ。」と、ティグリスが襲ってくる敵を殴り飛ばしながら言った。

「そうだね。私がインスタウロで体力を回復させるから、皆も頑張つてよ。」と、ハルカが言った。

「ありがたいぜ。霊族の力はさ。」と、シンジが笑顔で言った。

「まかせておいて。」と、ハルカはウィンクした。

その時、妖獣族の兵士たちに異変が起こった。カオルたちから離れた奥のほうで何か騒動が起こったらしい。妖獣たちの中には慌てて逃げ出す者もいる。

「何だ。妖獣たちの動きがおかしいぞ。」と、シンジが飛びながら言った。

「シンジあそこで何が起こってるのを見てきてくれる？」と、ハルカが言った。

「オッケー！」

シンジはその騒ぎの近くにゆっくりと近づいて行った。

そこには戦士と思われる男が十人ほどで妖獣たちを相手に戦っていた。

「人族の派遣軍でも来たのか？」と、シンジは思った。

シンジはともかく妖獣たちを倒してるのなら味方に違いないと思いい、ハルカたちのところに戻って行った。

「どうだった？」と、ハルカがシンジに訊いた。

「どうも人族の応援がきたみたいだ。ひとまず助かったぞ。皆も一緒に戦ってこの場を早く切り抜けるんだ。」と、シンジが言った。

「分かった。やるよ、皆！」と、アイルが叫んだ。

アイルは炎のライオンに跨り、妖獣族の中に突撃して行った。カオルたちも攻撃を強化して、敵の混乱を突き始めた。

「ここに妖獣たちが集まっていたとは計算外だったな。」と、ハンブラが言った。

「少し油断してたぜ。」と、セトが唾を吐いた。

「ここは一気に片付けちまおう。」と、アルビオスが言った。

「よし、行くぜ！」と、ハンブラは叫ぶと、「デイメントフラマ！」

瞬間、ハンブラから炎の束が妖獣たちに向かって飛び散った。その炎でハンブラたちの周りにいた妖獣たちは吹き飛んでいく。妖獣たちは慌てて逃げ出していく。それを容赦なくハンブラの仲間たちは追い掛け回して、斬り倒していく。

「おらおら！早く逃げねえと、膾にしちまうぞ。」とセトが叫びながら得意の槍を振り回した。その広間の敵は慌てて部屋から逃げ出していく。しかし、逃げ惑っている妖獣たちは斬り倒される数のほうが圧倒的に多かった。

「一体、今のは何だったんだ？」と、シンジが言った。

「妖獣たちが吹き飛ばされたように見えたけど、皆慌てて逃げて行くわ。」と、カオルが言った。

「あの人たちがやったのかしら。」と、ハルカが言った。

既に辺りには妖獣たちがいなくなり、十人の男たちの姿がよく見えるようになっていた。

「でも、あの倒し方、少し残酷なようにも見えるけど・・・」と、カオルが言った。

「まあ、でもあの人たちのおかげで助かったわ。」と、ハルカが言った。

「そうね。お礼言わないといけないね。」と、アイルが言った。

「そうだな。あの人たちのところに行ってみよう。」と、ティグ

リスが言った。

その男たちは既に妖獣を追いかけのをやめて、一塊りひとかたまりになつて集まっていた。

「おかげで助かりました。ありがとうございます。」と、ティグリスが言った。

「あんな雑魚相手に手間取ってるようじゃ、お前らも大したことねえな。」と、セトが言った。

「何ですって!」と、アイルが目くじらを立てて怒った。

「あなたたちは見るところ人族の方とお見受けしますが、今回の戦争の救援部隊の方ですか?」と、ティグリスが言った。

「そんなことは俺たちには関係ない。」と、ハンブラが言った。

「それより、ステラはどこだ?」

「ステラ? マモルのことか?」と、シンジが言った。

「そうだ。俺たちは奴を探しにここまで来たんだ。」と、ハンブラが言った。

「マモルをどうする気なの?」と、カオルが言った。

「俺たちは奴を倒しに来た。昔の仲間の仇を討つために。」と、ハンブラが言った。

「何だと! そんなことさせるものか。」と、シンジが怒りをあらわにした。

「なんだ、お前! 俺たちとやろうつてのか?」と、セトが意気込んで。

「やめろ! 余計な争いはするんじゃない。」と、ハンブラがセトを押し止めた。

「マモルはここにはいないわよ。」と、カオルが言った。

「奴がここにいることは分かってる。あんたたちが教えてくれないういうなら、自分たちで探ささ。」と、ハンブラが言った。

「止めて! 彼は今、妖獣の王たちを探してるの。邪魔しないで!」と、ハルカが言った。

「そうか。フフフフ。だったら、この塔のどこかにいるというこ

とだな。」と、アルビオスはニヤつきながら言った。

「あんたたち卑怯よ！そんな大勢でマモルを倒そうなんて。」と、カオルが言った。

「お嬢ちゃん。ずいぶんと奴をかばうじゃねえか。ひよっとして、奴に惚れてんのか？」と、セトがからかうように言った。

「あんたたちには関係ないわ。どうしても、マモルをやるっていうなら、私たちが相手になるわよ。」と、カオルはセトを睨めつけた。

「俺たちはあんたたちと争うつもりはない。それにあんたたちでは俺たちを倒すのは無理だ。やめておいたほうがいい。」と、ハンブラが言った。

「マモルの敵は私たちの敵よ。敵^{かな}わなくても、戦うわよ！」と、カオルが構えた。

「まあ、どうしても言うなら相手になってやってもいいが、俺たちが何者か分かったら、きっと後悔することになる。」と、ハンブラが言った

「そうだ、ハンブラ。聞かせてやれよ。俺たちが何者なのかさ。」と、アルビオスが言った。

「俺たちはトリーキンダーのメンバーだ。」と、ハンブラが言った。

「トリーキンダーだって？」と、ティグリスが驚いた。

「ティグリス、何なの？トリーキンダーって。」と、ハルカが訊いた。

「諸族の城で独自に結成されているユニベストという組織があるんだ。それはエリート兵士たちを集めて、妖獣退治や自分たちの能力を高めるために活動している。そして、その中でも最強とされているのがトリーキンダーだという噂を聞いたことがある。」と、ティグリスが説明した。

「どんなに強いかわからないけど、あたいたちはそんなことじゃ、怖気ついたりしないよ。」と、アイルが言った。

「そうか。それなら、仕方ない。まずはあんたたちを倒してから、ゆっくりとステラを探すことにしよう。」と、ハンブラが言った。

「ぎゃあああああ！」と、急に叫び声が響いた。

「どうした!?」と、アルビオスが後ろを振り向いた。

トリーキングダーの仲間の一人が槍で串刺しにされていた。黒い馬に乗り、黒いフードを被っている不気味な男はその槍を人を刺したままの状態で上に持ち上げた。

「ワシの名はウンブラ。この冥塔の王だ。お前らを待っていたぞ。」と、その黒い男が言った。

「ウンブラだと！まずい、こいつは手ごわいぞ。お前たち油断するなよ！」と、ハンブラが叫んだ。

「ステラはどこだ？出てこい。」

ウンブラはそう言うと、持ち上げていた槍から刺した人間を振り落とした。

「ステラはここにはいないぜ。」と、ハンブラが言った。

「フフフフ、嘘を付くな。奴が戻ってきているのは分かってる。

既に二王はやられてしまった。奴の仕業に間違いはない。どこにいるんだ、ステラは!?」と、ウンブラは槍を振り回しながら言った。

「二王を倒しただって！奴は一人で倒したのか。信じられねえぜ。」と、セトが言った。

「まあ、かつての奴ならそんなに驚くほどのことはない。だが、今はまだ力を完全には取り戻してないはずだ。今のうちに倒しておかないと、兄貴の言う通りにしてたら倒せなくなっちまうぜ。」と、ハンブラが言った。

「そうか。どうやらここにはいないのは本当らしいな。まあいい。お前たちを先に八つ裂きにしてやる。ステラはその後でゆっくりといたぶつてやるわ。」と、ウンブラが言った。

「生憎あいにくだったな。お前はステラには会えないぜ。なぜなら、ここに俺に倒されるからだ。」と、ハンブラが言った。

「ハハハハハ。面白い奴だ。俺の恐ろしさが分かってないらしい

な。では、少し遊んでやろう。お前の泣き顔を見たくなってきたわ。

ウンブラはそう言うと、槍をしごき始めた。槍が緑色に光り始める。そして、その槍を頭上でグルグルと回している。すると、そこから無数の刃が放たれた。

「ぎゃ！」と言う悲鳴が聞こえ、トリーキンダーの三人が刃の餌食になってしまった。

「散らばれ！固まってる奴の範囲攻撃の餌食になるぞ。」と、ハンブラが叫んだ。

「なんだ。もうくたばってる奴がいるのか。まだ、攻撃のつもりじゃなかったんだが、お前らの素性がしれるわ。ワハハハハ。」と、ウンブラが不気味に笑った。

「くそっ！油断してるからだ。こいつは普通の妖獣王とは違うんだ。物理も魔法も兼ねた混合攻撃が出来る奴なんだ！」と、ハンブラが言った。

「じゃ、軽く相手をしてやろう。」と、妖獣王が言った。

そして、乗っている馬でセトを目掛けて突進した。セトは槍を構え、ウンブラの馬をかわしながら、横から突きかかる。ウンブラはそれを槍で受け流し、素早く槍を回転させセトの喉を突き刺した。

「ぐっ！」と、何か押し潰したような呻き声を上げ、セトはその場に倒れた。

すかさずウンブラは左の掌から黒い炎を発し、逆にいた男に向けて放出した。彼はそれをうまくかわし、反撃に移ろうとした時、反対側から飛んできた槍で体が両断されてしまった。十人いたトリーキンダーは戦闘開始からそれほど経たないうちに半分足らずになっ

てしまった。
「何だお前ら、ワシはまだ全力を使ってないのに、もうこんなになくなってるのはか。少し弱すぎるんじゃないのか。」と、ウンブラは言った。

それを見ていたカオルたちは驚いていた。

「あいつの動きが早過ぎてよく見えないわ。騎乗ではそれほど動いてないように見えても、槍筋が早すぎて、あれじゃよけられないのも無理ないわ。」と、カオルが言った。

「このままじゃ、奴らがやられるのも時間の問題かもしれないな。」と、シンジが言った。

「少し手伝ってやった方がいいのかな。」と、カオルが言った。

「何言ってるんだ。あいつらはウンブラを倒したら、今度は俺たちをやるつもりなんだぞ。」と、シンジが言った。

「だけど、このままじゃ、私たちだってやられちゃうわよ。」と、ハルカが言った。

「まあ、どちらが勝つにしても俺たちは安全じゃないってことだな。」と、ティグリスが言った。

「どうすんのよ。もう残ってるのは後二人だけになっちゃったよ。」と、アイルが言った。

「なんて奴だ。相手が悪過ぎるぜ。」と、シンジが言った。

マモルは全ての部屋を回って中を調べたが、隠し通路はどこにも見当たらなかった。夢中になって探していたせいで、辺りの様子に気が付かなかったが、いつの間にか異様な静けさを感じた。

「カオルたちはどうなってるのか、気になる。様子を見に行こう。」と、マモルは言うのと、全速力で走り出した。

階段を下りて行くと、妖獣たちはいなくなっていた。その代わりに、広間の中央の方でカオルたちと見慣れない格好の戦士が一人で、黒い妖獣と戦っていた。

「どうなってるんだ。妖獣たちはどこ行ったんだ。」と、マモルは呟いた。

その戦士は既に体にいくつもの傷を負って、動くのがやっとという感じだった。

「おい、皆大丈夫か？」と、マモルは叫んだ。

「マモル！助けて、この黒いのが妖獣王よ。」と、カオルが叫ん

だ。

「なに！こんなところにいたのか。」と、マモルはそう言うところからリバーンを抜いた。

「お前がステラか。以前とは少し姿が変わってるな。マテリアに落ちていたというのは本当だったらしいな。どうだワシを覚えてるか？」と、ウンブラは訊いた。

「お前のことなんか、知らないな。」と、マモルは言った。

「そうか。覚えてないなら教えてやろう。俺は冥塔の三王の一体、ウンブラだ。ステラだったお前に、その昔封印され、こうして甦ったのだ。お前に復讐するためにな。」

「もう二王は倒したぞ！残ってるのはお前だけだ。これでお前もおしまいだ。」と、マモルが言った。

「フフフフ。あの二王を倒したくらいでいい気になるな。ワシはこの塔で最強の王だ。お前がどれくらい力が戻っているか試してやろう。行くぞ！」

ウンブラはそう言うと、マモルに向かって来た。マモルもウンブラに突進した。カリバーンと槍が組み合い、力比べになった。

「ほほう。なかなかの力だ。だが、まだまだだ。」と、ウンブラが言うと槍から衝撃波が発せられ、マモルは吹き飛ばされた。

「おもしろい剣を持っているな。ステラならエクリクスを持っていたはず。そんな剣では俺には勝てんぞ。」と、妖獣王は言いながら、槍を振り下ろした。

すると、槍から黒い火炎の渦が放出され、マモルに向かって来た。マモルはそのあまりの早さに逃げ切れない。その時、カリバーンからオレンジの光が広がりマモルの周囲を取り囲んだ。渦は光にはじかれて消え去った。

「なんなんだ！その剣は？」と、ウンブラは驚いていた。

「これは、聖剣カリバーン！」

マモルはそう言うと同時に高く飛び上がり、ウンブラの頭上からカリバーンを振り下ろした。妖獣王はそれを槍で受け止めようとす

た。しかし、カリバーンは炎を帯び、ウンブラに向けて剣の形の炎弾を放った。槍はその刃を真つ二つに断たれ、さらに炎弾がウンブラの頭から馬の胴体ごと両断してしまった。二つになったウンブラの体は黒い灰と化していった。

「ふう……。カリバーンありがとう。おかげで助かったよ。」と、マモルは剣に向かって言った。

「いいえ。マスター、私はあなたと共に戦えてうれしい。」と、カリバーンは言った。

マモルはニコリ笑うと、カリバーンを鞘に収めた。

「皆、大丈夫だったか？」と、マモルはカオルたちのところに近づきながら言った。

「マモル、よかった。なかなか帰ってこないから、心配したわ。」と、カオルはマモルの胸に顔を埋めた。

「ごめん。少し手こずってて、最後の王がここにいたとは思わなかったよ。」と、マモルは黒い灰を見つめながら言った。

「でも、まあよかったじゃない。王も無事に倒せたことだし、全員無事だったんだしさ。」と、アイルが言った。

「そうじゃ、そうじゃ。ボクも一時はどうなるかと心配だったぞ。」と、ハルカの足元に隠れていたプエルがひよつこりと出てきた。

「何だ。お前そんなところにいたのか。まさかもらしてないだろうな？」と、マモルはプエルをからかった。

「なななな、何を！誰がそんなことになるかい。」と、プエルは慌てた。

「あはは。」と、皆が笑った。

「ところで、あの人は誰なんだ？」と、マモルは片膝をついてしおれているウンブラを指して言った。

「あ、あの人はあなたを追いかけてきたらしいよ。」と、カオルは埋めていた顔をマモルに向けて言った。

「そうなのか。一体、どういうことなんだ？」と、マモルは言った。

「ステラ。」と、ハンブラはやっと立ち上がりながら言った。「俺はお前を倒すために追いかけて来た。仲間の仇を討つためにな。」
「どういうことだ？俺にはあんたにそんなことをされる覚えはない。」と、マモルは言った。

「まあ、いい。俺を殺すなら、今の内だぞ。」と、ウンブラが言った。

「俺にはあんたを殺す理由はない。それに同じ人族同士なのに何で戦う必要があるんだ。」と、マモルは言った。

「ふん。そういうところは全く変わってねえな。もし俺をやる気がないのなら、癩しかだが今日のところは退散するぜ。今度会ったら、お互い生死をかけて戦うことになるだろう。その時まで勝負はおあずけだ。また会おう、ステラ。」と、ハンブラはそう言うど体を引きずりながら去って行った。

沈黙の大陸

第七章 諸族の城へ

沈黙の大陸

諸族の城はアルビトリウムに存在する友好的な全ての種族に開放されている城砦である。その昔、人族、エルフ族、仙獣族、幻霊族、水獣族が妖獣族に対抗して大同盟を結成した時期があった。その時に諸族の平和と安定のために建てられたのがこの城の起源である。そして、この城はその五族の代表者によって今でも運営されている。それぞれの種族のエリートたちはこの城に集まるようになり、情報の交換や能力の向上に努めるようになっていった。今ではさまざまに任意の団体や秘密結社も結成されたり、いろいろな研究も行われている諸族の一大拠点となっている。

そして、今この城の運営上の最高機関、五族評議会の議長の元にある噂がもたらされていた。

「なに！静かの大陸が占拠されたというのか。」と、議長が大声で叫んだ。

「はい。これは噂なのですが、静かの大陸に行っている交易船の船員たちが大陸は封鎖されていて、上陸出来なかったということですよ。」と、使者が言った。

「して、何者に占拠されているのか分かったのか？」と、議長が訊いた。

「それも今のところ何もわかりません。」

「うーむ。これは調べなければならんな。早速、臨時評議会を召集する。代表者たちに通達するのだ。」と、議長は言つと顎をなぞりながら考え込んだ。

麗威の湖

麗威れいの湖い

大鈴山たいりんさんに面している麗威の湖に行くには樹海城から北へかなりの道のりを歩かなければならない。マモルたちは今日はそこに仲間たちと息抜きにやって来ていた。

空は湖の青さに負けないほど澄み渡り、気持ちのいい風が湖岸を通り過ぎていく。湖岸には水を飲みに来る動物たちがちらほら見受けられる。

「あー、何か久しぶりにゆっくり出来るって感じね。」と、カオルが両手を上に伸ばして気持ちよさそうにして言った。

「そうだな。こここのところ毎日パーティーばかりでなかなかゆっくりする暇なかったからな。」と、シンジが言った。

「そうね。大した被害もなく冥塔を落としちゃったんだから、長も今までにない喜びようだったからね。司士たちも個別にパーティー開くなんて今までになかったことよ。」と、ハルカが言った。

「でもさ、三王を倒したことでこの辺の妖獣たちのほとんどは砂漠に撤退して行ったらしいよ。これで数年は妖獣たちもこの辺には現れることはないだろうって言ってたわ。」と、アイルが言った。

「何にしても、マモルのおかげだよ。一人で三王を倒しちゃったんだからな。あんなに強いんじゃない、妖獣たちだってもう三族の周辺をうかつに襲うことは出来なくなるだろうな。」と、ティグリスが言った。

「そう言えば、マモルはどうした？」と、シンジが言った。

「一人で散歩して来るって言って、さっきどこかに出かけたけど、どこ行ったのかしら。」と、カオルが辺りを見回しながら言った。

「トリーキンドーの奴らのこともあるし、マモルにとっては不安材料が残ってるわけだ。しばらく、一人にしておいてあげるのが親

切つてもんだ。」と、ティグリスが言った。

「そんな他人事みたいに言ってるけど、あたいたちだつてマモルのために何かしてあげられることだつてあるんじゃないの？」と、アイルが言った。

「もちろん、傍に居る間はマモルと一緒に戦い続けるさ。だけど、俺たちの任務は今回の奇襲作戦で終わってしまうんだ。バンライ様だつて、一体でも多くの助けが欲しい時なんだ。安獣城に早く戻つて力になってあげないと、仲間だつて首を長くして待つてるぞ。」と、ティグリスが言った。

「そうか・・・そうだつたね。」

そう言つと、アイルは故郷へ思いを馳せていた。

「大丈夫よ。マモルには私がついてるから安心してよ。」と、カオルが言った。

「そうだね。マモルは一人じゃないんだし、カオルがいてくれるなら安心出来るよ。あのトリーキンダー相手に一步も引かずにいた姿は頼もしかったもんね。こんなにかわいい顔してるのに、すごいなつて思ったよ。」と、アイルが言った。

「いやだ。あれは私も必死で自分でもよく分らないうちに言葉が出て来てしまったのよ。もう、アイルったら。」と、カオルは顔を赤らめた。

「あははは。」と、カオルの照れた様子に皆が笑つた。

知られざる過去

知られざる過去

マモルは一人で考えたかった。今度の戦いで自分の知らない過去が今のマモルに重大な影響を与えて来る恐れが出てきた。

冥塔の三王がどうやって封印から開放されたのか。

トリーキングダーと自分との関わりはどういうものなのか。

そして、カリバーンの言った契約についても身に覚えのないことだった。

それらをひとつひとつ調べる必要がある。

「なあ、ファル。今回の戦いで俺の知らない過去のことでお前の知ってることってあるのか？」

「私には分からないことばかりだったよ。私とステラが契約する以前の出来事よ。」と、ファルが言った。

「そうだよな。何か今回の戦いは俺にいくつかの謎を残していった。それはいつか分かることになるのか、それともずっと謎のまま残るのか、それがこれからの俺にどういう影響を与えることになるのか。それが気になるよ。」と、マモルは言った。

「ねえ、マモル。モトが言ってたんでしょ？ 諸族の城に行けば、かつての自分を見出すって。」と、ファルが言った。

「うん。そうだった。諸族の城に行けば、何か分かるかもしれない。俺は行くよ。諸族の城へ。」

マモルはそう言うと、仲間たちのいるほうへと歩いて行った。

シンジとハルカ

シンジとハルカ

「シンジ、話って何？」と、ハルカは訊いた。

「君はマモルと一緒に旅するつもりなのか？」と、シンジが訊いた。

「うん。マモルとカオルは白仙城の長老から諸族の城に行く許可を得たらしいわ。後数日でこの城を出発するみたいよ。私もエルフィン様からマモルたちと同行する許可がもらえたの。だから、一緒に旅に出るつもりよ。」と、ハルカが言った。

「それは何のために？」と、シンジが訊いた。

「それは・・・マモルとカオルだけではこの先大変でしょ。だから、少しでも助けられればいいかなって、思ったの。」と、ハルカが言った。

「顔に嘘だつて書いてあるぞ。」と、シンジが真剣な目をした。

「え？」ハルカはシンジを見つめた。

「好きなんだろ、マモルのこと。見てれば分かるよ。」

「・・・うん。」と、ハルカは顔を俯けて答えた。

「だけど、マモルはカオルちゃんを好きなんだぞ。一緒に旅したからって、それは変わらないだろう。一緒に行けば、辛くなるのは君のほうだ。」と、シンジが言った。

「それは分かっている。だけど、私はそれでも一緒に行きたいの。マモルのことを忘れることが出来ないのよ。それに本当はカオルよりも私のほうが先に気持ちを伝えるはずだったのよ。」と、ハルカは涙を浮かべながら言った。

「昔の記憶のことか？何か思い出してたんだな。」

「うん。だいぶ前からね。」

「そうか。それは知らなかった。辛かっただろう。マモルにはも

うそのことは伝えたのか？」

「うん。」

「マモルはなんて？」

「まだ、返事は聞いてないわ。いろいろあったしね。それにマモルは記憶が戻ってないのに、昔のこと持ち出しても混乱してどうしていいか分からないだろうと思うの。だから、私たちにはもつといういろいろとお互いを知り合うことが必要なのよ。そのためにも私はマモルと一緒に行く。」と、ハルカは真剣な眼差しで言った。

シンジは少し考えてから、

「俺が行くなつて言ってもだめか？」と、言った。

「え？」ハルカはシンジを見つめた。

「君のことが好きだ。誰よりも。」と、シンジはハルカを見つめ返した。

夕暮れの紅と生い茂る緑のコントラストが美しく二人を照らしていた。

それぞれの道

それぞれの道

マモルとカオルは樹海城のエルフィナに別れの挨拶を済ませ、諸族の城へと出発しようとしていた。そして、ティグリスとアイルは前日マモルたちより一足先に安獣城へと旅立って行った。そして、プエルはマモルたちと共に諸族の城へ行くと言い張り、マモルたちを困らせた。だが、諸族の城で子供を預かってくれるところもあるだろうということで、彼らと共に旅をすることになった。

「さあ、シンジとハルカにもお別れをしに行こうか。」と、マモルが言った。

「うん。」

カオルはそう言ってマモルと共にシンジたちの家に向かった。

「あら、ハルカだわ。それに、シンジ君も一緒よ。」と、カオルが言った。

「よお、シンジ。ちょうどよかった。今、別れの挨拶に行くところだったんだ。」と、マモルがこっちに近づいて来る二人に向かって言った。

「そうか。だが、残念だがその必要はない。」と、シンジが言った。

「なんでよ?」と、マモルが訊いた。

「俺たちも一緒に行くことにした。」と、シンジが言った。

「なんだって?」と、マモルは驚いた。

「どうした、不満なのか?」と、シンジが口を尖らせた。

「いや、それはうれしいけど、城に帰れるか分からないんだぞ。」と、マモルが言った。

「まあ、その時はそのとき。仙獣族と違ってここは被害がほとんどなかったしな。いても特に急ぐ用事もないってわけさ。それなら、

親友を助けるほうが役に立つだろ。」と、シンジは軽く言った。

「そうか。だが、この旅は個人的な目的で行くんだぞ・・・それに、もしかすると危険も伴うかもしれない。」と、マモルは言った。「だから行くのさ。危険がないならわざわざ一緒に行く必要もないだろ?」と、シンジが言った。

「分かったよ、シンジ。ほんとありがとな。お前にはいつも助けてもらってばかりだ。」と、マモルは感謝した。

「気にするな。そんなことより、諸族の城に行く目的って何なんだ?それくらいは教えてくれてもいいだろ?」と、シンジが言った。「それは自分の過去を知るためだ。城に行けば何か分かるはずなんだ。」と、マモルが言った。

「どういうことだ?城に何かあるのか?」と、シンジが訊いた。

「それが何なのか、分からない。だけど、俺が優心村でエンシャソードをもらった夢の中で諸族の城へ行行って言われたんだ。」と、マモルは答えた。

「なるほどお。それじゃ、なおさらだ。俺だってお前と一緒にポルソアメオにいたんだ。俺の過去だって何か分かるかもしれない。」と、シンジが言った。

「そうだったな。もしかすると、ここにいる全員の過去が明らかになるかもしれないな。」と、マモルが言った。

「よし、そうと決まれば皆で出発だ。」と、シンジが張り切った。一人カオルだけは素直に喜べない気持ちになっていた。

「マモルが過去を知ることによって現在の自分を失う可能性はどれくらいだろうか・・・」

そんな不安が彼女の心をよぎった。

恐怖の伝道者

恐怖の伝道者

諸族の城から遠く離れて南方に広がる沃野よくやにはいくつもの少数種族の国が存在している。彼らは三族と言われる人族、仙獣族、エルフ族と緩やかな友好関係を保ちながら、その独自性を維持している。そして、その最南端に位置し、海に面しているところに水獣族と呼ばれる種族がいる。彼らは海洋種族で海底と沿岸部に都市を建設し、少数種族の中では比較的大きく豊かな国である。そして、海外へ交易するための船や防衛のための艦隊を多く所持していた。

今日も交易船が港を出発して南方の海上を航行していた。それに乗船している船員たちが会話を交わしているところだった。

「今日もいい航行出来そうだ。波も穏やかだし、天気もいい。」
「そうだな。こここの所、妖魚獣も見当たらなくなつたしな。毎回こうだと楽なんだけだな。」

「たまに雑魚獣が集団で襲つて来ても、軽く水系術で倒せるくらいだ。艦隊を要請するほどのことは最近はめつきりなくなつた。」

「でも、おかしいと思わんか？突然、妖魚獣がいなくなつたのはどうしてなんだろう。」

「うーむ。あいつらは執念深いからな。簡単にはあきらめないはずなんだが……」

その時、少し離れた前方に赤く光るものが宙に浮いているのが見えた。

「何だ、あれは？」

「何か人のようにも見えるな。こつちに向かつてくるぞ！」

その光は一瞬の間に船の舳先に降り立った。

見ると、体全体が赤く光りを帯び、赤い目と炎を思わせる髪の毛を持っている。

「誰だ。あんたは？」

「私はワタマの者、お前たちの国を貰いに来た。」と、その赤く光る人型が言った。

「何言ってるんだ？こいつ頭がおかしいんじゃないのか。」

「どうも、仲良くなりに来たわけじゃなさそうだぞ。やってしまおう。」

「ああ、そうだな。こんな変な奴、早くやつつけたほうが安全だ。」

「ヴァータル！」

船員がそう叫ぶと、海水が持ち上がり、その赤い人型に無数の水しぶきが矢じりとなって突き刺さった。

「どうだ。これで動けんだろう。」と、船員が勝ち誇った。

「フッフ。馬鹿め。こんなものがお前たちの攻撃なのか。」と、赤い人型が笑い飛ばした。「攻撃というのはこうやるのだ。」

その赤い目がさらに輝きをを増し、体の光が放射された時、船は跡形もなく吹き飛んでいた。

泰天の宮殿

夢のモノローグ

封印を解くのだ

その時、私は現れる

俺はどうなる

お前は私の裏の姿

私の復活と共に一体となり
意識体として残る

他に方法はないのか

カリバーンが鍵になる

これからどうなる

世界は崩壊への道をたどっている

泰天の宮殿

マモルたちが樹海城を出発してから、数十日が経とうとしていた。途中で襲われることもなく平穏な旅が続いていた。

「ほんとにどこ行っても襲われることがなくなったな。これも冥搭の三王を倒した影響だろうな。奴らの勢力範囲はかなり広がったってことだろうな。」と、シンジが言った。

「そうだね。何にしてもありがたいわ。このまま諸族の城まで戦わないで済めばいいんだけどね。」と、カオルが言った。

「まあ、そうもいかないだろうな。諸族の城までまだかなり距離があるし、三王とは違う勢力もたくさんいるはずだ。」と、マモルが言った。

「あ、川だわ。川幅結構あるね。」と、ハルカが言った。

「そうね。ハルカとシンジ君はプエルと一緒に先に飛んで行ってもいいよ。マモルと私は橋か船を探してみる。」と、カオルが言った。

「カオル、そんな心配いらないぞ。忘れたのか。俺はもう飛べるんだ。」と、マモルが言った。

「あ、そうだったね。赤光の戦士になれば、飛べたんだね。忘れてたわ。」と、カオルはちよこつと舌を出した。

「仙獣族の戦争に向かう時、お前はあのせいで……うわっぷ！」と、マモルが言いかけた時、カオルがマモルの口を慌てて手で押さえた。

「なんだ、どうかしたのか？」と、シンジが不思議そうに訊いた。

「ううん。何でもないの。気にしないで。」と、カオルが苦笑いしながら言った。

「うん？どうなってんだ。お前たち。」と、シンジが首をかしげていた。

五人は難なく川を飛び越えた。そして、再び歩きはじめた時、

「おい、あんたたち。ちよつと、待ってくれ。」と、遠くから誰かに呼び止められた。

「誰だろ？」と、マモルがその人のほうを振り向きながら言った。「今、赤く光りながら飛んだのはあんたかね？」と、その男性は訊いた。

「そうですが、それが何か？」と、マモルが不思議そうに尋ねた。

「もしかして、あんたはステラとかいう名前じゃないかね？」

「そうです。」

「やはりそうか。もしかして、これから泰天の宮殿にいかれるのでは？」

「いいえ。違いますけど。」

「おかしいな。ここまで来て、フェミナ嬢には会っていかれないのですか？」

「誰ですか？その人は・・・」

「誰ですか？ご自分のお姉さんの名前を忘れるなんてことあるんですか？」

「え、いま何て言ったんですか？」と、マモルは慌てて訊き返した。

「あなたのお姉さんですよ。宮殿に住んでらっしゃる。」

「それって、もしかして、ステラのお姉さんのことですか？」

マモルは必死になっていた。ステラに姉がいたなんて、今まで聞いたことがなかったのだ。

「ステラって、あなた自分のことじゃないですか。そうですよ。」

あなたのお姉さんです。」

「その宮殿ってここから近いんですか？」

「あんた本当にステラさんですか？自分で建てた宮殿が分からないなんて、おかしい人だな。」

「ともかく、その宮殿がどこにあるのか教えてもらえませんか？」

不審な目で見られながらも、何とか宮殿の場所をその男性から聞きだし、その人から届け物を渡すように頼まれたので、マモルたちはそこに急いで行くことにした。

「ファル。ステラにお姉さんいたの知ってたか？」と、マモルは訊いた。

「ううん。私も初耳だったわ。」と、ファルは首をかしげた。

「どういうことなんだ。そう言うことは一番身近にいたファルになら話しても良さそうなものだけだな。」と、マモルはよく分からないという素振りと言った。

「ステラは身内のことも自分の過去も全然話そうとはしなかった

わ。何か話せない事情があつたんじゃないかしら。」と、ファルは何かを思い出すように言った。

「ステラのことを知れば知るほど謎が深まっていくような感じだ。彼は一体何を隠そうとしてたんだろう。」

「彼は一度だけこう言ったことがあつたわ。自分は自分の過去に追い掛け回されてる気がする時がある。いつか追い詰められるかもしれない、ってね。」と、ファルは言った。

「うーむ。ステラは謎の多い人物だな。だけど、そのお姉さんに会えば、いろいろ分かつてくるような気がするよ。」と、マモルは意気込んだように言った。

泰天の宮殿は高原の上に建てられていた。険しい断崖を登って行かなければならなかった。

「近いと言つても道らしい道がなくて、険しいところにあるんじゃない、あの人が行きたがらないのが分かる気がする。」と、マモルが言った。

「そうね。これでわざわざ私たちに届け物を託した理由が分かつたわ。」と、カオルが言った。

「ほら、頂上が見えてきたわよ。」と、ハルカがうれしそうに言った。

頂上にはすばらしい光景が広がっていた。一面彩り鮮やかな花に覆われた平地がどこまでも続いていた。そして、その遠方に白く大きな建物が見える。マモルたちはその光景に目を奪われながら、そこに向かって歩いて行った。ファルは飛びまわりながら花の香りを楽しんでいた。プエルもその辺を駆け回りながら、はしゃいでいた。宮殿に近づくとつれ、マモルたちはその宮殿に人が感じられないことに気が付いた。

「こんな大きな建物なのに見張りもおいてないなんておかしいわね。」と、カオルが言った。

「ちよっと、中に入ってみよう。」と、マモルはみんなを促した。

中がまだきれいなところをみると、人がいなくなつてからそれほど経つてないことが分かる。だが、たくさんあるどの部屋を調べても人を見つけることが出来なかった。

宮殿は三階建てになつていて、その最上階にひときわ目立つきれいな扉があつた。これがおそらくこの宮殿の主の部屋だろうと思われた。

中に入つてみると明らかに女性が住んでいたと思われる装飾品と調度類がきれいにおかれてあつた。だが、それらを使つていた肝心の主の姿はどこにも見当たらない。

「一体、どうしたんだろう。何か急いでこの宮殿を出て行つたつて感じだな。荷物を持たずに逃げて行つたんだろうか。」と、シンジが言つた。

「うーむ。全く分からん。とりあえず、ここにいっても何も分からん。近くに誰かが住んでるような場所じゃないしな。仕方ない。ここはこのまま引き上げて旅を続けるしかないな。重要な手がかりが見つかったと思つたのにな。残念だ。」と、マモルは氣落ちした声音で言つた。

宮殿を後にして諸族の城の方角へと足を運んでいると、遠くのほうに誰かが倒れているのが分かつた。急いでそこに走つていくと、それは鎧を身に付けた男性だつた。

「まだ、生きてるぞ。」と、マモルは言つた。

「だが、ひどい怪我だ。何かに襲われたのか。」と、シンジが言つた。

「おい、どうしたんだ。しっかりしろ。」と、マモルはその男性を抱え起こしながら言つた。

「あ、あなたは？」と、その男性は息も絶え絶えに言つた。

「俺の名はマモル。あなたはあの宮殿の関係者か？」

「はい。私はフェエミナ様の近衛兵をしていました。」

「彼女はどこに行つたんだ？」

「お嬢様は諸族の城へと向かわれました。どうか、お嬢様を助け

て上げて下さい。彼女は奴らに狙われています。」

「奴らって誰のことだ？」

「サムン・マールムの手下たちです。」

「なんだって！」

「早くしないと、奴らにつかまってしまい・・・。」と、その男性は言つと息を引き取つた。

「皆で彼女を追いかけるぞ！」と、マモルは言つと同時に全身が赤い光を帯び始めた。

ワタマのこと

ワタマのこと

諸族の城の臨時評議会と静かの大陸に関する調査結果により、東の海上に現れた浮遊大陸が何らかの関わりを持っているらしいことが分かって来た。だが、浮遊大陸には境界が巡らされていて上陸することすら出来ないということであった。

そして、さらに南方の水獣族の国が占拠されたとの報告がもたらされ、至急調査団が派遣された。その結果明らかにされたことはワタマという謎の種族が関係しているらしいということであった。

今、五族評議会の議長が評議会会堂で調査団の団長から調査の最新の結果報告を受けているところだった。

「浮遊大陸に関しての伝承が現実だったということか。」と、議長が言った。

「あらゆる記録を調査した結果、ワタマという種族は一万年という周期で何度もあらわれているということが分かってきました。そして、千年の間全地上を支配し恐怖をもたらして来たということも明らかになっています。」

「千年というのはかなり長い期間だな。ちょうど二世代に渡るということか。」

「はい。それをワタマの種族は千年支配と呼んでいたということです。その千年が経つと、彼らは大陸ごと忽然と姿を消し、地上には廃墟だけが残される。」

「だが、なぜ千年間だけなのだ。その理由は？」

「それは詳しく分かりませんが、二万年前の記録によると大陸は次元大陸という特殊な陸地だということです。本来はこの世界とは違う空間との間にある歪みの中に不安定に存在している陸地だということです。」

「どうもよく分からん。それから、その種族の特性については？」
「それもはっきりしたことは分かっています。ただ、現にあるどの種族にも勝る強靱な体と力を持っていて、破壊と戦闘を好むということが分かっています。何しろ、彼らが去った後には文明の痕跡すら残されないため、記録も断片的に散在しているために、これだけでも集めるのに大変な苦勞を要しました。」

「うーむ。至急さらに調査を進めてみてくれ。分かったことは私に報告するように。そして、許可あるまでは他言してはならんぞ。」

「はい。早速調査を進めます。」

調査団の団長はそういって会堂を出て行った。

そして、議長は守衛を呼び、評議會を招集する手はずを整えた。

フェミナ

フェミナ

フェミナは力を消耗しきっていた。宮殿にもたらされた突然の凶報に取るものも取り敢えずに逃げて来た。長い間、高原の僻地に隠れ住んできたがとうとう見つかってしまった。私がああ皇帝に捕まってしまうえば、ステラが困るだけではない。妖獣にとってはこれ以上ない人質として利用され、この世界に混乱を招く可能性がある。だから、どうあっても捕まるわけにはいかない。

ステラはどこにいるのだろう。数十年の間、一度も顔を見せていない。風の噂ではどこかに姿を消したらしいということだが、何があつたのだろう。私には唯一人の血を分けた弟なのだ。ステラに何かあつたら、私も死ぬ他ない。ステラがいたから私はここまで無事にいられたのだ。

もし、ステラがいなかったらどうなっていただろう。それを考えるだけでも恐ろしい。あそこにはもう帰りたくない。あそこは冥府よりも恐ろしい。あそこは滅びるべきなのだ。どうせ滅び行く種族なのだから。

このまま誰にも捕まらなければいいのだ。逃げ抜くことが大切なよ。

安獣城落ちる

「アイル。さあ、急ぐんだ。早くしないと、逃げ遅れるぞ。」と、ティグリスは言った。

「なんだってのさ。こんな辺境にヘルホースの大軍がなんでやってくるのよ。」と、アイルは荷物を急いでまとめながら怒りをあら

わにした。

「ともかく泣きごと言ってる場合じゃない。バンライ様のご指示なんだ。この城にはもうあれを迎え撃つだけの力はないんだから。」

「分かってるわよ。だけど、こんな急に砂漠越えして来るなんて、一体どうなってるの。」

アイルは準備が終わり、白虎に変身したティグリスの背中に急いで跨った。

「さあ、諸族の城に行くぞ。あそこに向かっているマモルたちと合流するんだ。」

呪詛の沼

呪詛の沼

辺りは静まり返っていた。ここには生けるものの気配は感じられなかった。

マモルたちは逃げたフェミナを追って、呪詛の沼の地帯を通っていた。沼と沼の間にあるわずかな小道を注意を払いながら一列に歩いていった。この地帯は広いため迂回して行くと、かなり時間が掛かってしまう。しかし、沼地を突っ切ればその三分の一の時間で抜けられるのだ。今はフェミナを追っているため、危険を承知でここを通ることにした。沼は時折、不気味な音を立てていた。ここに落ちたら最後、そのまま沼の中に引きずり込まれてしまう。生きているものはどんなものであれ沼の餌食になってしまうのだ。

「こんなところをフェミナさんが通ったなんて思えないんだけど。」と、カオルが言った。

「まあ、可能性としては低いけど、もし通っていない場合は先回りが出るし、通ったとしたら、ここで会わないとも限らない。そういう理由さ。」と、シンジが言った。

「まあ、確かにそうかもしれないわね。」と、ハルカが言った。

「だけど、ここで何かに襲われたら、大変ね。」と、カオルが言った。

「そんないやなこと言わんでくれ。そうじゃなくても、ボクはこんなところ怖くて仕方ないんだから。」と、プエルが言った。

「ごめんね、プエル。そうよね。大人だって怖いんだから、子供じゃなおさらね。」と、カオルが沼を見渡しながら言った。

「さあ、こんなところ早く抜けてしまおう。」と、マモルが言った。

そこからはばらく進んで行った時、

「きゃあああ！」と、女性の叫び声が聞こえた。

「どこだ？フェミナじゃないのか！？」と、マモルが叫んだ。

「マモル、とりあえずこの道に沿って飛んで行こう。」と、シンジが言った。

「そうだな。」

そう言つと、マモルたちは飛び急いだ。

どれくらい進んだらうか。マモルたちの目の前に大きな荒地が広がっていた。その中央付近に地下に向かう大きな穴が開いていた。

マモルたちはそこに降り立ち、地下へと進んだ。どこまで降りても一向に地面らしきものに行き当たらなかった。

「かなり深いな。こんなところに落ちたら、飛べない種族は死んでしまふな。」と、シンジが言った。

「フェミナはステラと同じで飛べるのかしら？」と、ハルカが疑問を口にした。

「どうだろうな。ただ、ここに落ちたのかどうかも分からないしな。」と、マモルが言った。

「やつと、地面が見えて来たぞ！」と、シンジが叫んだ。

全員がそこに降り立ち、辺りを見回したが、誰かがいるという気配はなかった。そして、前後に通じる通路が作られていた。明らかに加工された洞窟だ。上を見ると遠くの方にさっき通ってきた入り口が小さく見えていた。

「ともかくどつちかに向かつて進んでいくしかないな。」と、マモルが言った。

「そうだな。じゃ、こつちに行ってみるか。」と、シンジが指さした。

中はかなり湿っぽくジメジメした空気が漂っている。マモルたちの足音だけが異様に響き渡っていた。道はかなり広めだが、曲がりくねっていた。

しばらくすると、何かを引きずっているようなカサカサという音

がして来た。

「何かいるぞ。」と、マモルが声を落として言った。

「少しゆっくり進もう。」と、シンジが言った。

「ファル発光を消しておいたほうがいい。」と、マモルはファルに言った。

「うん。」

洞窟の壁に手を当てながら、手探りで進んで行くと、音がだんだんと近くなってくるのが分かる。そして、少しカーブしてる道が前のところで広い部屋に通じているのが分かった。その部屋から薄明るい明かりが道のほうにもれていた。マモルは気付かれないように部屋を覗きこむようにした。

そこには何人も美しい女性が部屋の中を行ったり来たりしていた。そして、壁際には大きな妖獣たちが長い槍を持って立っている。部屋の奥にある大きな椅子に腰掛けているのは大きな二本の角をはやした馬みたいな頭をもち、体は人族の大人の数倍はあるだろう。その後ろには何か緑色に光っている入口のようなものが見える。ここで見つかってしまっただけは大変なことになる。ひとまず引き上げてから、対策を練ろうと思ひ、後ろの仲間に手振りで合図を送ろうとした時、

「ハックション！」と、プエルがくしゃみをした。「しまった！」

「何者だ!？」と、大きな声とともに部屋の中にいた妖獣たちがこつちに向かつて走ってくる。

「ごっこ、ごめんなさい。」と、プエルが慌てている。

「仕方ない。行くぞ！」

マモルは叫ぶと同時にカリバーンを抜き放ち、迫る妖獣たちに斬りつけた。

「ぎゃっ！」と言う声とともに妖獣は灰になっていく。体が赤く光を帯び、部屋の中へと飛び進んだ。

中にいた美しい女性たちだと思っていた姿が、急に変貌し緑の鱗の体をもつ大きなトカゲになっていた。マモルはその生き物に向か

つてカリバーンを振り切る。トカゲは素早く飛び退く。右から襲ってくるトカゲに剣を切り返し、頭から斬り下ろした。

カオルたちも襲ってくる妖獣たちを撃退していた。シンジが弓矢を素早く構え妖獣に三射し、丸焦げにする。ハルカはテンペスタスで切り刻む。カオルはコキュートスで一気に敵を破壊していった。

しばらく部屋の中が騒然となっている間、大きな椅子に座っているボスは平然と薄笑いを浮かべながら成り行きを見守っている。やがて、マモルたちはボス以外の敵を全て片付けていた。

「お前は何者だ？」と、マモルは言った。

「ワシは妖獣王ラルエクウス。」と、マモルは言った。

「ここで何をしている？」

「ワシは時空の扉の番人。お前たちのような奴らからこの扉を守るのがワシの役目だ。」と、ラルエクウスは言った。

「なに、時空の扉だつて？」と、マモルは訊いた。

「知らばつくれるな。お前もこの扉が狙いだらう。」

「その扉のことなんか、知らない。俺たちは人を探してここに入っただけだ。」と、マモルは言った。

「人だと？そんなものはここにはいない。いずれにしろ、お前たちはここで終わりだ。」と、妖獣王は言うと、大きな斧を傍らから取り上げ、立ち上がった。

マモルは妖獣王目掛けて、突進した。カリバーンが炎を帯びる。

剣の形をした炎弾が飛び出す。妖獣王はその炎を斧で払い飛ばした。

「なに！かわされた。」と、マモルは叫んだ。

「フフフフ。なかなか面白い術を使うな。だが、俺には通用せんぞ。」と、妖獣王は言うつと持っていた斧をマモルに振り下ろした。

マモルはそれを右にかわすと、すかさずカリバーンで妖獣王の足目掛けて刺突しに行く。ラルエクウスの左手がマモルに振り下ろされる。彼は素早く左にかわし、その右足に斬り込んだ。しかし、右足の膝蹴りをまともに受けて、マモルは蹴り飛ばされた。

「うわあああ！」と、マモルは洞窟の壁に激突し地面に落ちた。

マモルはそのままうつ伏して、呻いている。

「インスタウロ！」と、ハルカが叫ぶとマモルの体が光り輝いた。

「ありがとう、ハルカ。おかげで痛みがとれたぜ。」

ハルカはマモルに笑顔で答えた。

マモルは立ち上がると、剣を構えた。

「さあ、マモル。今こそカリバーンの力をみせてやろう。」と、

頭の中で声がした。

「誰だ？」と、マモルは叫んだ。

「どうしたの、マモル？」と、ファルが訊いた。

「今、声が聞こえた。」

「私の言う通りにするんだ。剣を横に持ち、八方斬で空を切れ、

そして剣を頭上にかかげるがいい。」と、その声が言った。

「わかった。」

マモルは言う通りに剣を振るい、頭上に掲げた。

その時、ラルエクウスの周りに火炎の竜巻が巻き起こり徐々に部屋いっぱい炎が舞った。マモルは結界に守られ、火を回避している。

「うぎゃああああ！」と、妖獣王の悲鳴が響き渡った。

マモルを始め、仲間たちは自分の目を疑った。今起こったことが信じられなかった。

炎は妖獣王がそこにいたという痕跡をとどめなくなるまで焼き尽くした。

「これはイグニートテクスというカリバーンの妙術だ。」と、そ

の声が言った。

「あなたは？」と、マモルはその声に訊いた。

「私はステラ。」

「え？ステラ。どこにいるんです？」

「私はお前の傍にいつもいる。そして、カリバーンの封印が解かれた時、私は現れる。さあ、時空の扉を開ける。全てはそこにある。」

「

マモルは我に返った。何か夢を見ているような感覚だった。

「どうしたの、マモル？」と、ファルが心配そうに訊いた。

「今、ステラと話してたんだ。」と、マモルは答えた。

「え？」

「よく分からないけど、頭の中でステラが話してかけてきた。」

「彼はなんて？」

「カリバーンの封印を解けて。そして、時空の扉を開ける、と言ってた。」

「カリバーンの封印・・・時空の扉なら、その光ってる入口のことね。」と、ファルが言った。

「妖獣王はこれの番人、と言ってた。何かあるんだろう。誰にも触れさせられない理由が・・・」

滅び行く世界

滅び行く世界

五族評議会は相次ぐ凶報に連日連夜、会合を開くことを余儀なくされていた。まず、最初にもたらされたのが、安獣城の落城である。そして、次に白仙城、樹海城と三族の主城が次々と陥落したという。既に三族の難民が諸族の城を目指して落ちてくると言う報告がもたらされている。

今、五族評議会は口角泡くしかくを飛ばしている最中であつた。

「一体、どうなってるんだ。こんなことは聞いたことがないぞ。」と、議長がテーブルを叩きながら言った。

「報告によると、遙か西域の種族国家及び妖獣族の国々が既に滅亡しているということらしい。」と、評議会議員の一人が言う。

「それもあのワタマの仕業なのか？」

「どうやらその可能性が濃厚ですな。奴らはこの大陸の主要な港を全て占拠し、この大陸から逃げる事が出来ないようにした上で、内陸部に向けて攻撃を開始したらしい。」

「つまり、大陸封鎖を行ったと言つのか？」

「どうも、そうらしいですな。」

「だが、いくら強力な軍隊でもこの大陸をこつも安々と攻略していくことなぞ、不可能だ。」

「現に起こっていることが証明しているということしか言えませんな。そのせいで妖獣たちがわざわざあの広い砂漠を越えてこの大東原と言われる地域に大移動して来てるのですから。」

「どうなってるんだ、一体。これからこの城も安全ではなくなってくるかもしれん。」

「今、斥候兵を各地に派遣して、事実確認に向かわせているところです。」

「緊急事態に備えて、正規軍とユニベストによる連合軍を組織し、治安と防衛の任にあたることを提議する。それから工兵は難民の居住地、病院の建設にあたり、衛生兵には大量の患者に対する薬品、器具を確保すること、それから籠城に備え糧秣りょうまっの確保も怠るな。早速準備を整えておくように指示を出しておくのだ。それから、五族評議会のメンバーはこのまま会堂に拘束し、緊急事態の処置に当たれるように命ずる。以上だ。」

別離

別離

「皆はこのまま諸族の城へ向かってくれ。」と、マモルは仲間と言った。

「どういうこと？」と、カオルが訊いた。

「この入口の向こうに何かがあるのか分からない。もしかすると、二度と帰ってこれないかも知れない。だから、ここで別れよう。」

「なに言ってるの？ここまでずっと一緒に戦ってきて、ここに来て危ないから別れようって言っの？私は嫌よ。」と、カオルは涙を流した。

「そうよ。私も嫌。あなたと一緒に行く。」と、ハルカが言った。

「ボクもだ！ボクがついてないとマモル一人では危険じゃ。」と、プエルが言った。

「俺も行く。お前一人でさっきみたいな強い奴と戦うことになったらどうする？皆でいたほうが何かと助かるはずだ。」と、シンジが言った。

「ありがとう、皆。だが、ここは俺一人で行かせてくれ。実はここに入れとステラが言ってるんだ。」と、マモルが言った。

「ステラが？」と、カオルが訊いた。

「ああ、きつとこの中には何か特別なことがあるんだ。それは俺とステラに関する何かだ。今はステラを信じて、俺だけを行かせてくれ。」

「だけど、マモル。何かあったらどうするの？私あなたにもしものことがあったら・・・」と、カオルは顔を手で覆って泣き始めた。「カオル、俺にはステラがっている。何かあっても、きつと助けしてくれるはずだ。だから、心配するな。」

見ると、ハルカの目からも涙がこぼれ落ちていた。彼女はカオル

を前にして言葉をのみこんでいるのだろう。そんなハルカの様子を察したのか、マモルはハルカに目で頷いてみせた。そして、彼はシンジに向かって

「シンジ、いつも世話かけてすまない。皆をよろしく頼む。この洞窟の出口は入ってきたところにしかない。そこまで皆と一緒に行く。そこで別れよう。」と、言った。

「分かった。皆のことはまかせてくれ。諸族の城に無事に送り届ける。マモル、きつと帰って来いよ。待ってるぜ。」と、シンジはマモルの肩を叩いて言った。

「ああ、もちろんだ。」

戻る途中でマモルはファルに話しかけた。

「ファル、気の毒だが俺と一緒にいてくれ。お前はステラと俺を繋ぐ重要な存在だ。俺を導いて欲しい。」

「もちろん。あなたと私は一心同体ですよ。」

ファルはニコリと笑った。

マル・ラクリマ

マル・ラクリマ

「サルウエ・レギナ！」と、ワタマの宰相グラキエスは女王に拝謁する時の挨拶を述べた。

「宰相、その後の情勢はどうなっております？」とワタマの女王マル・ラクリマは尋ねた。

「はい。間もなくアルビトリウム全域を手中に収められるでしょう。」

「そうか。計画は順調のようだな。」と、女王は笑顔で宰相に向けた。

「はい。今度の作戦にはワタマの命運がかかっております。万事怠りなくいかねば済みません。」

「うむ。我々もいよいよ最後の上陸を果たさねばならん。ワタマの未来がかかっておるのだ。くれぐれも失敗は許されんぞ。」

「はつ。」と、グラキエスは頭を下げると、女王の間に後にした。「早くあれを見つけ出さねば、私の命にも関わる。」

記憶の欠片

マモルは時空の扉の前に立ち、ファルに約束したことを伝えるのは今しかないと思った。

「ファル。」と、マモルは呼びかけた。「この先に行けば言えなくなってしまうかもしれない。だから、今のうちに伝えておく。」

「どうしたの？」と、ファルは首をかしげた。

「前にステラの記憶を少し思い出したって言ったろ。」

「うん。」

「約束だ。それを今、君に伝えておく。」

「それは、うれしいわ。ずっと気になってたのよ。」と、ファルは笑顔で応えた。

「ファル、ステラはずっと君のことを愛していたんだ。初めて会った時から、ずっとね。そして、今でも。」

ファルの目は信じられないという眼差しと、うれしさからこみ上げてくる涙でこの上なく輝いていた。ファルは人の大きさになると、マモルの胸の中に飛び込んで行った。そして、二人は口付けを交わした。そのまま、時間が止まったかのような静けさの中、時空の扉の輝きだけが二人を祝福し、照らしていた。

ワタマの力

ワタマの力

マモルはファルに融合しているように言い、一人扉に足を踏み入れた。目の前に光が近づいてくる。やがて、マモルを光のベールが包み込んだ。目の前に現れてくる光景は日常では同時に捉えることの出来ない歪みを出現させながら、瞬く間に幻想のように過ぎて行く、あらゆるものが同時に起こり、過ぎ去って行く。物体という物体が歪められている。現実世界の法則の通用しない、生物の認識能力では捉えられない、奇妙な世界がマモルの目に映っては消えていく。自分の体も上下の感覚が失われている。前と後ろが消え去っている。「これは一体、なんだ。何が起こっている。」と、マモルは言った。

「これはこれからアルビトリウムに起こることだ。よく覚えておくといい。あらゆるものが混沌の中に飲み込まれる。」と、頭の中の声が言った。

「どうして、こんなことになるんだ？」

「それは大きな問題じゃない。問題はこれが起こるのを阻止出来るかどうかだ。さあ、行こう。今からお前に見せたいものがある。」

気が付くとマモルは奇妙な陸地にいた。地面は黒い岩肌で覆われ、見渡す限り荒涼とした世界。遠くにかすかに明かりが見える。

「あの光に向かって歩いて行くがいい。」と、声が言った。

どれほど進んだか分からないが、かなりの距離を歩き続けた。その光は高い塔から出ているものだと分かった。塔に近づくと大きな入口がぽっかりと口を開けている。

そこから、百人ほどの戦士らしき男たちが姿を現した。

「出撃する！」と、一番凛々しいリーダーらしき男が全員に呼び

かける。

メンバー全員が頷き、その男たちの目が赤く光り始め、髪が炎のように逆立ってくる。そして、体が赤く光り始めた。

「なんだ！どうなってるんだ！あれは・・・」と、マモルは自分と同じ姿の戦士たちがこれほどの数いるのを始めて見、またこれがどういうことを意味してるのか見当がつかず混乱していた。

「そうだ。お前と同じ種族の者たちだ。」と、声があった。

「なんだって！俺は人族じゃないのか？」と、マモルは怒鳴った。

「そう、お前はワタマの者だ。」

「ワタマ？」

「そう、彼らはアルビトリウムの次元の歪みの中で誕生した特異な種族だ。」

「そうだったのか・・・」

「では、次のところに向かおう。」

マモルは緑豊かな土地に立っていた。見たことのない風景だった。遠くで仙獣族の人々が畑を耕している。多くの人々が幸せな顔をしていた。

突然大きな風が巻き起こった。風が急に止んだかと思うと、頭上にさっきのワタマの戦士が現れた。

彼は一人で不気味な笑顔を浮かべ、地上に降り立った。

「この土地をいただきに来た。」

彼は一言そう言うのと体から何か衝撃波のようなものを発した。一瞬のうちに辺り一体は焦土と化した。生きているものの痕跡はどこにもなかった。

「一体、あいつらはなんであんなことするんだ。」と、マモルは歯噛みした。

「破壊こそが目的なのだ。やつらにとって戦争は手段ではない。目的なのだ。なぜなら、彼らは戦い続けなければ、生きていられないからだ。」

「なんだって！？どういうことだ。」と、マモルは握り拳をつくって訊いた。

「それは動元という体の性質のせいだ。お前も分かっている通り、彼らの体の構造はほぼ人族と同じだ。ただ、ひとつだけ大きく異なるのが動元と言われる性質だ。その性質が他種族に大きく差をつけているのだ。ワタマの者の体は戦闘態勢になると、体全体が赤く光る。それが動元だ。彼らは戦うことによって、体に命の力を溜め込んでいる。その力を爆発させると、さっきのような動元爆発という現象を引き起こす。少しでも溜めすぎ場合はさっきのようにして、爆発させるのだ。彼らは動元を溜めて生きているのだ。逆に言うと、動元がなくなれば、死んでしまう。だから、戦い続ける。いや、戦い続けなければならぬ。」

再び景色が変わった。一面の焼け野原だった。ワタマの戦士たちがその焼け野原に立っていた。見渡す限り煙と炎が地面を埋め尽くしていた。

「くそっ。こんなこと許せるか。」と、マモルは自分も赤光の戦士になるうとした。

「無駄だ。これは今起こっていることではない。過去の出来事だ。」と、ステラの声があった。

「なんだって。これはいつ起こったことなんだ。」

「数日前にあったことだ。」

「なに！じゃ、こいつらは今、この世界を荒らしまわっているのか？」

「そうだ。そして、既にほぼ世界中を手中に収めてしまっている。」

「なんだと。なんで今まで黙ってたんだ。すぐに行かなければ・・・」

「と、マモルは胸の前で拳を掌に打ちつけた。

「無理だ。今のお前では勝てない。ただの一人にさえ。」

「じゃあ、どうすればいい？」と、マモルは歯噛みした。

「奴らと戦い、勝つために私と一体になれ。そのためにここに連れて来た。お前はまだ不完全な力しか持っていない。私と一体となることで、ワタマの力を凌駕することが出来る。」と、ステラが言った。

「でも、どうやればいい？」と、マモルは訊いた。

「今から私の辿ってきた道を見せよう。甦った記憶の中に私は現れる。そして、カリバーンの中に封印した、私の本当の力と魂をお前と融合させる。その力は恐るべきものとなる。さあ、記憶の部屋に導こう。」

大戦勃発

生きとし生けるものがその存在をかけて戦う。そこには何の利害もない。ただ、自分たちが生きるため、生き延びるための戦い。それは野生そのものの姿。全ての生物に定められた、弱肉強食の世界。アルビトリウムはもはや野獣の戦場と化した。混乱する諸族、生き場所を求めて彷徨う者たち、ただ殺戮するために暴徒化する者共。そこには何の秩序も存在しない。

諸族はその存在をかけて、妖獣たちと戦った。わずかに秩序らしきものがあるとすれば、彼らの組織だった戦法と結束の中に、それが有利に働いているうちに見出せるものだろうか。最後の理性と本能との衝突は今、世界の様相を一変させつつも行きつくところまで行くしかなかった。そして、弱者たちはその混乱の中でわずかな希望にすがりつきながら、必死の抵抗を試みる。

今や、世界は終焉の瀬戸際でその最期の決着を待つしかなかった。

廃墟のあとで

第二部

第八章 碧光の戦士

荒天使いの詩

星々が鼓動をとめた夜空に
月の天井が現れたとき
その息遣いはすべてを
呑み込むかのよう
気を付けなさい
その目を見てはならない
気を付けなさい
天破埋没の口があいてるよ

廃墟のあとで

全ての種族が死を賭して戦った大戦は戦場となった大東原を廃墟へと変貌させた。美しい森も川も緑豊かな草原も、そして荘厳を誇った城館も今は虚しい焼け跡の中にわずかな痕跡を残すだけとなった。ここはその繁栄の中心地であったと語り継ぐ者は今はもういない。

あれから一年、廃墟の至るところには朽ちた残体が散在している。そこを通り過ぎるまばらな旅人はその無残な光景に目を背ける。どれほどの命が失われていったのだろうか。例えば見渡す平野の中に

吹き抜ける風はその残体の下にある地面を恋しがっている、と言え
ば分かるだろうか。それとも、かつてあった城砦は今もせいぜい小
動物たちが織り成す無邪気な喜劇の舞台に過ぎなくなつたと言え
ばいいだろうか。

だが確かに、生き残つたわずかな者たちもいた。この大戦の無残
さの中で、この戦いが実は生き残るための戦いではなく、単に生き
ることを焦つた愚かな野獣たちの殺し合いに過ぎなかつたことを悟
り、その愚に気が付いた者たちは戦場を去つて行った。どこを指
して行けばいいのかわからないままに。

残された者たち

残された者たち

「あなたもポルソアメオのメンバーだったんですか？」カオルは驚いて訊き返した。

「そう。私はポルソアメオの仙獣族代表の一体よ。あなたたちのこともステラのこともよく知ってるわ。」と、その仙獣族の女性は言った。

「わあ。こんなところで会えるなんて、なんてラッキーなんだろう。」と、カオルは喜んだ。

「失礼ですが、お名前を伺ってもいいですか？」

「私の名はケラスス。よろしくね。」と、その女性は言った。

「こちらこそ、よろしく。」と、カオルは笑顔で答えた。

「でも、ほんとに久しぶりね。顔は少し変わったけど、面影が残ってるわ。昔から美人だったからね、フロースは。」と、ケラススは言った。

「フロースって、何ですか？」と、カオルは訊いた。

「あら、自分の名前知らなかったの？」

「私の名前？」

「うんうん。あなたはアルバム・フロース・ソムニウムっていう名前だったのよ。」

「ずいぶん長い名前ね。自分で言うのもおかしいけど。」と、カオルは苦笑した。

「長い名前と言うのはポルソアメオである証なのよ。とても名誉なことなのよ。称号つきだしね。」と、ケラススは少し真剣になつて言った。

「そうなのね。じゃ、大切にしないと。」

「うん。そうよ。」

「ところでいろいろと訊きたいこともあるんですけど、少し時間もらえますか？」

「そうね。夜になったら、時間取れるから、その時にどう？」

「ありがとう。私の宿舎知ってますか？」と、カオルは訊いた。

「うん。仮設宿舎よね。じゃ終わったら、行くから待っててね。」

「はい。テルティウムゲートから入ってすぐのところですよ。」

「分かったわ。」

ケラススはそう言うのと去って行った。

カオルはあの大東原で起こった戦争、生存者からは大移動紛争と呼ばれている戦いの中、マモルとの約束通り、シンジとハルカとプエルとの四人で諸族の城に辿り着いた。既に押し寄せてくる妖獣たちで城は騒然となっていた。第一波は数千の規模の妖獣たちで諸族連合軍は難なく押し返した。しかし、そのうち第二、三波と押し寄せ、次第に数が膨れ上がる妖獣たちに連合軍も次第に押し返されていった。そして、最後に妖獣王たちの着到があり、もはや軍の力だけではどうすることも出来ない事態となるに至った。一般の者たちも任意に攻撃に参加し、籠城戦となった。しかし、攻撃側の妖獣王たちはこれまでにないほど強力な一派だった。誰も見たことも聞いたこともない種類のそれらは特異な攻撃をして城壁を破壊しに掛かって来た。難攻不落の城砦として三千年の歴史を持つ城が遂に妖獣たちの侵入を許し、城内は逃げ惑う者たち、飽くまで抵抗を試みる者たちで混乱状態に至った。

もちろん、カオルたちも戦闘に参加し、その力を見せつけ、正規軍に勝る活躍ぶりだった。そして、もうひとつ異常な活躍ぶりを見せている味方もいた。それが、あのトリーキンダーだった。彼らはあの冥塔で九人の仲間を失ったとはいえ、統士のドルスをはじめ主力は健在であった。彼らは城内の攻防の中で、得意とする組織だった攻撃で妖獣王たちを次々と倒していった。やがて、圧倒的であった妖獣たちも内部分裂を起こし始め、異支族間の抗争へと戦局が移

り始め、紛争は泥沼化していった。

諸族の正規軍は軍としての働きは既に失っており、もはやゲリラ戦の様相を呈して来た紛争に救いの道はなかった。カオルたちも戦いの中、テイギリスとアイルと再会し、かつての結束をもってゲリラ部隊の一派として激しく抵抗した。しかし、組織として機能していないゲリラ部隊は次々と数を減らしていき、遂に諸族の城が城としての役割を失った時、もはや守るものを持たない諸族のゲリラ部隊はそれぞれの思惑で戦場を去って行った。

カオルたちも戦闘の意味を失い、城の跡を留めていない城から退城した。

誰が勝ったのだろう。この紛争は勝者のいない戦争だった。生き場所を求めてやって来た妖獣たちも生き残りをかけて戦った諸族も、結局目的を達せられないまま戦闘力を失い、紛争は終結した。

カオルたちはマモルの行方を捜した。時空の扉の場所に行き、中に入ろうとまでした。しかし、それはあまりにも危険を伴うと仲間から説得され断念し、マモルとそれまで辿って来た道を逆に辿り、彼の消息を尋ねた。だが、どこにも彼を見出すことは出来なかった。カオルたちはマモルの出発した地点、白仙城跡、僻地にあつたため被害のほとんどなかった桜花村を訪れた。だが、そこにも何の手がかりも発見できず、彼らは行き場を失った。彼らはマモルを探すことを諦め、待つことにした。この桜花村にいれば、いつか人族の地を目指してくるであろうマモルと再会出来るのではないか、その希望に全てを託した。

やがて、生き残ったわずかな者たちは町を再建し、未来へ向けての活動を開始した。カオル以外の仲間たちは再会を期し、それぞれの故郷へと帰っていった。子供のプエルだけはカオルの元に残り、彼女とともにマモルの帰りを待つことになった。

「実を言つとね。私、あなたが帰って来てるのは知ってたのよ。」

と、ケラススは言った。

「そうなの？」と、カオルはケラススに焼きフングスと又クステイーを差し出しながら言った。

「ありがとう。とてもおいしそうでいい香りね。」と、ケラススはカオルから皿を受け取りながら言った。「でもね、マテリアに行ったあなたの前に現れてもどうせ忘れてるだろうから、会いに行かなかっただけ。うん、これおいしいわ。」

「ありがとう。たくさん食べてね。そうね。現に今でも思い出せてない。」と、カオルは苦笑しながら言った。

「でしょう。そのあと、ステラが帰ってきた時、私は任務でステラとは会ったのよ。だけど、彼も私のことは全然覚えてなかったけどね。」と、ケラススは言った。

「へー。そうだったんだ。でも、あなたに会うことが出来たのはうれしかった。」

「私もこの大変な時期に昔の仲間と会えたなんて、すごくうれしいわ。」

「でね、訊きたいんだけど、昔の私ってどんな感じだったの？」「うーん。そうねえ、とても強い魔道士だったわ。」と、ケラススは当時を思い出すように指を口に当てながら言った。「一番印象に残ってるのは、ちょうどステラがいなかった時に、ヘルボーン集団に私たち六人が囲まれちゃった時があつてね、その時あなたは一撃でヘルボーン集団を蒸発させてしまったことがあつたわ。」

「私ってそんなにすごかったの？信じられない。」
「なに言ってるのよ。あなたの魔法はポルソアメオで最大火力って言われてたくらいよ。今の話は一番印象に残ってる話っていうだけで、ピンチになればあなたの魔法はメンバーの頼みの綱だったんだから。もちろん、ステラにとつてもね。」

「なるほどねえ。ところで今、六人って言ったけど、あなた、私、ステラ、シンジ、ハルカの他には誰がいたの？」と、カオルは訊いた。

「シンジとハルカっていうのは誰？」

「あ、そうか。知らないのか。えつとね、二人ともエルフ族のポルソアメオメンバーだった人。昔の名前は知らないけど。」

「それなら、おそらくパツシオとルキオラのことね。そうか、彼らもマテリアに落ちたんだったね。」

「パツシオとルキオラか。なんか名前のイメージが全然違うな。まあ、仕方ないわね。」と、カオルは上目遣いになって言った。

「あとは仙獣族の獣型のティグリスと、水獣族のエブルね。」
「ティグリスですって？」と、カオルは驚いた。

「そうだよ。何で驚くの？」と、ケラススは不思議に思った。
「だって、彼ならこの世界に戻ってからマモルと私とずっと一緒に戦ってきた仲間なのよ。」

「え？それはおかしいよ。」

「どうして？」と、カオルは首をかしげた。

「だって、彼はあなたたちが月の扉に落ちた後、皇帝と戦って相討ちで死んじゃったんだから。」

「え？うそ・・・」カオルの顔から血の気が引いていた。「どういふことなの？全然分らない。うそよ。そんなの。」

「うーん。どういふことか、私にも分からないわ。でも、死んだのは確かよ。あなたたちがいなくなって、私たち残された三人はステラによってほぼ全滅しかけてた妖獣たちの残存部隊を倒して、最後に皇帝と戦ったのよ。皇帝もステラによって傷つき弱りきっていたわ。私たちは残る力を振り絞って全力で戦ったわ。でも、弱っていても皇帝は強かった。最初にエブルがやられてしまったの。そして、ティグリスと私は一緒に最後の突撃を掛けたの。私の召喚術で皇帝の目を引き付けている隙についてティグリスは皇帝に止めを刺した。でも、皇帝は最後の力で彼の喉笛を切ったの。そして、それが元で間もなく死んでしまったのよ。」

ワタマの野望

ワタマの野望

「グラキエス。フェミナの行方はまだ分からのか？」と、女王マル・ラクリマは怒りをあらわにした。

「はい。目下のところ捜索中ではありますが、一向に行方が知れておりません。」と、宰相グラキエスは言った。

「うーむ。まさか捕まってしまったのではあるまいな。」

「大東原にいたのは間違いありません。住んでいたと思われる宮殿も発見されております。しかし、中はもぬけの殻でした。それから、宮殿の付近にて彼女の近衛兵と思われる残体が見つかり、その様子から死後かなりの時間が経過していると分かりました。もしかすると、奴らに追われて逃げ去ったのかもしれない。」と、グラキエスは弁明した。

「もし、フェミナに何かあれば、ワタマの未来は失われる。どんなことをしても探し出せ。そして、もし捕まっていることがはっきりした場合は、かまわん奴らを血祭りにしろ。ワタマに逆らえばどうなるか、目にももの見せてくれるわ。」

西域の明かり

西域の明かり

麗しの大陸、すなわち大東原を含むアルビトリウム最大級の大陸は西と東の間に横たわる骨片こつぺんの土漠どぼくと言われる砂漠によって分断されていて、ほとんど文化的物質的交流がなかった。しかも、砂漠の付近には妖獣たちの国がひしめいており、それが東西の交流をさらに困難にしていた。そして、今その砂漠を東に向かって越えようとする一行があつた。

「西域諸国の状態は悲惨なものだったの。あれはしばらく立ち直るのは難しいだろうの。」と、その一行の者が言った。

「まあ、ワタマが一掃されたおかげで、ようやく再建が可能になったんじゃない。何にしてもめでたいことよ。」と、別の者が言った。

「そのことよ。何でワタマは急にいなくなつたんだ？それが分かるん。」

「何でも、徐々に姿を消していったということらしい。」

「うーむ。不思議なことがあるもんだなあ。あんな奴らだから、しばらく居座るつもりかと思つたんだがの。」

「ワシは別の噂も聞いた。何でも、ワタマは消えたんじゃない、殺されたと言う話だ。」と、また別の者が言った。

「殺された？あんなに強い奴らを殺せる奴なんているのか？」

「それを見たという者がいて、何でも見たこともない戦士が現れて、ワタマの戦士と戦っていたという話だ。」

「まあ、こういう時勢になると希望を持ちたい連中がでまかせを言っているのかもしれない。」

「その戦士というのが、輝く碧眼へきがんと銀髪で、全身が青く光ると言う話じゃ。ワタマの戦士が全く歯が立たなかつたと言つておつたぞ。」

「そんなことは信じられんな。あのワタマを倒せるような種族がいたら、この世界がこんなになるまで何で放っておいたんじゃ。」

「それもそうだの。だが、この世界にはまだまだ謎も多いからの。ワタマにしたって、伝説だったのが本当になってもうたんだから。」

「それも一理あるの。まあ、ワタマがいなくなったおかげでこうして旅が出来るようになったんじゃ。よかったよかった。」

砂漠の中に時折見られる、妖獣の残体や廃墟がこの地域を襲った災禍がどのようなものであったかを語りながら、砂風に吹きさらされていた。

安獣城跡

安獣城跡

安獣城は元々自然にある森を加工して作った仙獣族の精神を具現化した建造物であった。しかし、その城のあった地域にはもう加工すべき自然も残っていない。仙獣族の者たちは先祖から受け継いできたこの地を放棄することにし、この地がいつか自らの生命力で自然を回復した時、再び戻ってくることを誓った。そして、生き残ったわずかな者たちは種族の新天地を探すため長い旅に出かけた。

「ティギリス、この旅はいつ終わるのかな。」と、アイルは訊いた。

「おいおい、まだ始まったばかりなのにもう終わりの話か。」と、ティギリスは笑った。

「だつてさ、こんな当てのない旅じゃさ。これからが心配だよ。」
「うむ。だが、これは我々種族の将来を決める大切な旅だ。皆で無事に新しい土地に辿りつけるように頑張らないとな。」と、ティギリスは遠くを見つめながら言った。

その時、ティギリスの視線の先に何か赤い光が見えた。それが物凄い速度で近づいて来る。

「アイル、あれを見る。」と、ティギリスは大きな声で叫んだ。
その声に驚いて周りの者たちもティギリスの指す方向を見た。赤い光がだんだんと大きくなるにつれ、それが人の形だと分かってきた。

「あれは、マモルじゃない！マモルが帰ってきたんだわ。」と、アイルは喜びに顔を輝かせた。

「ちよつと待て、アイル。どうも様子がおかしい。」と、ティギリスはアイルをたしなめた。

その赤光の人型は仙獣族の人々の近くに来るとピタリと止まった。

「どこへ行くのだ？」と、その人型が訊いた。

「この土地を離れるのさ。」と、誰かが叫んだ。

「誰が行っていいと言ったのだ。」

「皆の意見で決まったことだ。」

「勝手なことは許さん。」

「誰だ。お前は？」

「俺はワタマの者。この地域の支配を任されている。」

「支配だって？一体何を言っている。」

「お前たちは俺たちワタマの物だ。」

「何だ、それは。勝手に決めるな。」

「言葉で分かなければ、分かせてやろう。」

その赤光の男は今話していた仙獣族の者に向けて掌を差し向けた。次の瞬間、その者は体ごと粉々に砕けた。

「きゃあああああ！」と、仙獣族の女性たちが悲鳴を上げた。

「まだ、逆らう者がいれば、同じ目に合うことになる。」

「くそっ！お前、なんてことするんだい。」と、アイルが挑みかかった。

「よせ！アイル。」と、ティグリスがアイルを押しとどめた。

「ほう、まだ逆らうのか。では、お前も死ぬがいい。」と言って、赤光の戦士が掌をアイルに差し向けた。

目がくらむほどの光が周囲を照らした。仙獣族の者たちは誰もが目を瞑つむった。しばらくして目を開けた時、誰もがアイルのほうに視線を送った。彼女は無事だった。

しかし、先ほどの赤光の戦士が跡形もなくなっていた。そして、ちょうどその戦士のいた少し離れた場所の後ろに青く光る男が宙に浮いていた。

「どうなってるんだ。」と、誰かが言った。

「お前は誰だ？」と、別の仙獣族の男が言った。

「私はソルジャー。」

そう言うと、その戦士は消えるように姿が見えなくなった。

しばらくの沈黙の後、アイルはやつと口を開いた。

「あたい、助かったみたいね。」

「ああ。よかったな、アイル。助けてもらったみたいだな。」と、テイグリスが言った。

「うん。でも今確かに、あの人、ソルジャーって言ったよね？」

「ああ、そう言ってたな。」と、テイグリスはそのソルジャーと名乗る男のいた辺りを眺めながら言った。

「どう思う？」

「分らん。ただ、今はソルジャーと呼ばれてる者はただ一人しかいない。」

「マモル・・・だね。」

「ああ。だが・・・」

「そうだね。もし、あれがマモルなら、もうあたいたちのこと忘れてるかもしれないね。」

エルフの吐息

エルフの吐息

エルフ族の住んでいた樹海は比較的被害が少なかった。樹海の木々が自然の障壁として働き、小妖獣たちはここを迂回うかいして行ったためだろう。その代わり樹海をものともしない巨大な妖獣たちの通ったあとは樹海城にも大きな爪跡を残した。

「シンジ、ここは他の地域と比べると再建が早く済むかもしれないね。」と、ハルカが言った。

「そうだな。といつても、完全に元に戻るまでには二、三年は余裕でかかりそうだ。」と、シンジが言った。

「そうだね。」ハルカは少し物思いに耽るような表情になった。

「なあ、ハルカ。まだ、マモルのこと忘れられないか？」シンジはハルカの表情を見つめながら言った。

「うん。でもね、今はマモルに会ってもそつとしておいてあげたい。そう思ってる。今のマモルはいろいろなものを抱えてしまっていて、かわいそう。これ以上、重荷になりたくないの。彼のやさしさは私一人のものにしておくには大きすぎるかなって、そんな風にも思ったりするの。」と、ハルカは奏鈴樹そうりんじゅの葉からこぼれる日差しを眩まぶしそうに眺めながら言った。

「それって、前よりも悪くないか？」と、シンジが口を尖らせた。

「どういう意味？」

「だって、そう言う気持ちって、ある意味自分の気持ちだけ考えて相手を好きだっと思う気持ちじゃなくて、相手の気持ちも思い遣やって好きだっことだろう。一段階上の好きって感じじゃないか。」

「あはは。そうだそうだ。シンジも頑張れ。私を振り向かせてみなさい。」と、ハルカは笑いながら走り去った。

「このやろう。人をからかいやがって。絶対に捕まえてやる。」

と、シンジはハルカを追いかけて行った。

カオルの思い

カオルの思い

「昔のステラってどんな感じだったのかしら。とても気になる。」
と、カオルは焼きたてのパネムと、ウィーヌム酒をテーブルへと運びながら言った。

「すごくおいしそう。頂きませす。うん、すごくおいしいわ。」
と、ケラススはパネムを頬張りながら言った。「そうだなあ。ステラはポルソアメオのリーダーとして申し分ない人だったわ。常に仲間のことを思い遣って、それを自分のことよりも優先してるみたいなどころがあったわ。そして、何よりもその卓越した強さね。あの赤い目が光った時、その前にいる者は死を覚悟しなければならぬ。」

「そうね。あの赤くなった時のステラはちょっと異常なくらいの強さよね。ねね、彼はどうやってあんな力を手に入れたのかしら？」
と、カオルはウィーヌムを飲みながら言った。

「うーん。それが謎なのよね。私も彼に直接訊いたことがあったんだけど、生まれた時からこうさ、って彼は冗談めかして言ったからなあ。本当なのかどうか分からないわ。それに彼は自分の過去を話すのを故意に避けてたみたいなどころがあって、自分からは決して話そうとはしなかった。」

「なるほどねえ。彼は何を隠そうとしてたのかしら。そうだ、彼にお姉さんいたことは知ってた？」

「へえ、それは初耳ね。そう、お姉さんいたんだ。彼には家族はいないのかと思ってた。」

彼の唯一心許せる相手はファルだったからね。まあ、家族と言えば彼女くらいかと思ってた。」

「え？」と、カオルは持っていたグラスを落つこととした。「きや

あ、ご、ごめん。今拭くから待ってて。」

「大丈夫？服汚れなかった？」と、ケラススは立ち上がりながら言った。

「う、うん。大丈夫、少ししか残ってなかったから。」カオルはテーブルを拭きながら言った。

「そうか、あなたステラのこと好きだったからね。でも、マテリア行って来てもそれは忘れなかったの？」と、ケラススは不思議に思った。

「ううん。全く違う理由でそうなっちゃったの。」と、カオルは布巾を片付けながら言った。

「そっか。まあ、そうだとしたら、きっと運命かもね。」

「そう・・・かもね。」と、カオルは窓のほうに顔を向けながら言った。

「そう言えば、パツシオとルキオラはどうなったの？」と、ケラススは急に思い出したと言わんばかりの口調で言った。

「え？・・・あ、シンジとカオルのこと？」と、カオルは名前がまだ頭の中で一致しないので戸惑っていた。

「そうよ。彼女たちもマテリアから帰って来て、昔のことはどうなったのかなって思ってた。」

「なに？昔のことって。」

「だって、パツシオはルキオラを好きだったのよ。」

「エエツ？パツシオって・・・シンジ君のことよね？」

「そうよ。射族のパツシオのこと。彼はルキオラをずっと好きだったのよ。気持ちは彼女には言っていなかったみたいけどね。ただ、あなたとルキオラが月の扉に落ちた時、彼女の後を追いかけて自分も落ちて行っただけだから、相当好きだったみたいね。」

「何ですって？シンジ君がハルカを好きだったなんて・・・」

「あなたがそんな風に驚いてるところを見ると、もうお互いに忘れてるのかもしれないね。」

「たぶん。」

カオルは少し考え込むような顔つきになっていた。

明かされる秘密

明かされる秘密

その夜、カオルはあまり眠れなかった。昔のステラとファルの関係は自分が思っている以上に深いものがあつたのだと、思い知らされたことが響いていた。それにハルカとシンジの関係にも意外な過去があつたのだ。

「だけど、マモルがどこにいったのか分からないんじゃない。どうにも前に進めない。」と、カオルは思った。

そんなことを思つて、寝ることを諦めバルコニーの椅子に座つて、夜空を眺めることにした。

「今日も星がきれいね。変わらないのは空だけだわ。地上はあんなことになつて、元に戻るまでは大変な時間がかかりそう。」と、カオルは一人ごとを言った。

「カオル、眠れないのか？」と、プエルの声がした。

「あ、プエル。ごめん、起こしちゃったね。」

「いや、ボクもあまり寝れなかつたからいいんじゃない。」

「そうか。プエルもそこに座つたらどう？星がきれいよ。」と、カオルは再び夜空に顔を向けた。

「うん。」と、プエルは言うのとトラらしく身軽にテーブルを飛び越し椅子に座つた。

その時、

「カオル、元気だったか？」と、急に声がした。

それは間違いなくマモルの声だった。

「マモルなの？どこにいるの？」と、カオルは立ち上がりながら叫んだ。

「ここだよ。」と、声がしたと同時に青い光に包まれた人間が頭上からバルコニーに降り立った。

「マモル。マモル。」と、カオルは叫ぶと彼に抱きついた。

「マモル、どこ行ってたんじゃ。」と、プエルもマモルの足に抱きついた。

「心配かけたな。少しやることがあって、いろんなところを旅してた。」と、マモルは言った。

「あれ、マモル・・・顔が・・・」と、カオルはマモルの顔を間近に見ながら呟いた。

「そう。今の私はステラ。だが、正確にはステラでもマモルでもない。」

「一体、どういう意味？」と、カオルは訊いた。

「ステラとマモルは今でも私の一部だ。今の私は二人の意識の集合体、碧きソルジャー。どちらも違う意識体として独立して私の中にある。ここにきたのはマモルとしての意識がお前に会いに来たがったからだ。」

「そうだったの。長いこと行方が分からなくて、心配だった。时空の扉に行っただけ、どこにもいなくなっちゃったもん。」と、カオルは涙を流した。

「すまなかった。だが、今日はお別れを言いに来たんだ。」と、マモルが言った。

「え？」カオルは呆然とした。「どうして？」

「少しゆっくり話そう。今日はお前に全てを話すつもりで来た。」

「その椅子に座って、マモル。」

「どこから、話せばいいかな・・・そうだ。时空の扉に入ったところからがいいか。」

「うん。」と、カオルは頷いた。

そう、私は时空の扉に入って、これからこの世界で起こることを見せられた。

これから起こること？

そうだ。この世界はこれからさらに恐ろしいことになっていくかもしれないのだ。

カオルはワタマのことは知ってるか？

ワタマ？知らないわ。

そうか。今回の大移動紛争は全てワタマという種族が引き起こしたものだ。既にこの大東原を除く全世界はワタマの支配下にある。

エエツ？それ本当なの？

残念ながら本当だ。彼らは一万年周期で現れる浮遊大陸の住人なんだ。そして、千年間アルビトリウムを支配する。今までこの世界は破壊されては再生するというのを延々と繰り返してきたのだ。

そんな・・・そんなことって！

そして、今その大陸が既に現れ、ワタマがこの地上を席卷している。ワタマの者は戦争のために戦争をする種族なのだ。そうしなければ、彼らは生きていけない。

何て種族なの・・・自分たちが生きるために他の種族を犠牲にするなんて・・・

そして、私もワタマの者なんだ。

え？・・・うそよ・・・そんなの・・・どうして・・・

だが、安心してくれ。私は決して彼らの仲間としてここにいるん

じゃない。むしろ、奴らと戦うためにここに来た。彼らをアルビトリウムから消し去るために・・・彼らは戦うことで半永久的に生きることが出来る。しかし、彼らは自分たちの業くわいによって滅びに瀕している。

どうして？

それは彼がここにいる千年の間に、同族間での戦いも行われているからだ。そのために彼らの個体数は激減し、その上、種族維持の手段としての女性がいなくなってしまったのさ。

なんてことなの。自分たちの性質が種族を滅亡に追い込むなんて

彼らは種族としては滅び行く宿命を背負っているのだ。そして、驚くだろうがこの世界を支配しているワタマの者は百人ほどしかない。

なんですって？そんな人数でどうやって・・・

彼らの強さが異常だからだ。彼らの持つ動元というものは戦えば戦うほど強くなる。その力でこの世界を破壊してるのさ。

だけど、どうしてここだけが襲われないの？

彼らは襲わないんじゃない。襲えないんだ。

どづいつことなの？

彼らの種族の最後の女性である、私の姉のフェミナがいるからだ。

なんですって・・・

奴らがフェミナを探している間、この大東原が破滅的に破壊されることはない。

私は一万年の昔、彼らのリーダーとしてワタマにいた。だが、ワタマの種族としての先行きもよく分かっていった。いずれは滅び行く種族。だが、奴らは私の姉を種族維持の手段として利用しようとしていることが分かった。私は姉をそんなことに利用されたくはなかった。私は姉を連れて逃げた。そして、来る次の一万年後、私自らの手でワタマを葬り去ろうと思った。だが、私とほぼ同じ力を持つ彼らを私一人で倒すのは無理だ。だが、ワタマを倒せるとすれば私しかない。そこで思いついた。自分の力を越える方法を。

それはどういう方法だったの？

私の持っている動元の力を何かに蓄積しておけばいいと思った。アニマという力を使って魂の欠片の中に動元を封じ込め、その魂が動元によって成長し、いつか二つの生命体として融合し、相乗作用を引き起こさせて対抗出来るはずだと考えた。そして、あのカリバーンという剣を誕生させたのだ。そのために必要な時間は十分にあった。ただ、私の生命としての限界は早まることになる。しかし、それ以外に方法はなかった。

だが、妖獣皇帝が私を倒しに来たことで誤算が生じた。そのせいで私はマテリアに落ちることになってしまった。

奴はワタマと手を組んで彼らが復活するまでの間に私を葬り去る約束をしていたらしい。それを条件に皇帝は命の保障をされていたんだ。だが、奴はワタマを裏切り、私の姉を連れ去った。それでことを有利に運ぶつもりなのだ。ともかく今、私の姉は奴の手元にいる。そして、ワタマもそのことを知っているはずだ。私はワタマが姉を奪う前に姉を取り戻さなければならぬのだ。

でも、皇帝はステラがマテリアに落ちた時にポルソアメオの他のメンバーに倒されたって聞いたわ。

いや、奴は生きている。それは間違いない。

カオルはステラの輝く碧い瞳を見つめていた。彼の秘密が今、明らかになったのだ。今まで誰にも話さなかった、いや話せずに彼だけが一人持ち続けてきた秘密だ。自分に話してくれたうれしさと同時に悲しみもあった。それは、これが彼にしか出来ないことだと彼自身が言っている。このことを彼女にはつきりと告げることで彼女にはついてくるな、と暗黙のうちに言っているのだ。

「さあ、これで全て話した。長い間、自分だけの秘密だったから、なんかすつきりした気分だ。」と、マモルが言った。

プエルはいつの間にか椅子の上で安らかに寝息を立てて眠ってしまった。マモルと会えてホッとしたのかも知れない。

「話してくれて、ありがとう。今まで誰にも話したことはない秘密を最初に話してくれたことがうれしい・・・けど同時に悲しい。」
そう言うと、カオルは顔を俯けた。

「分かるか？」

「うん。」

「もう・・・会えないの？」

「もし、戦いが全て終わって私が勝ったら、ここに必ず帰ってくる。そして、お前に最後に伝えるべきことを伝えるつもりだ。」

「そう・・・なの。何となく・・・分かっているつもり。でも・・・その時までにはつきりさせたくない。あなたの口からそのことを聞けるのを待つわ。」カオルは俯いたまま言った。

「それから、ここに昔の仲間がいただろう？」

「うん。ケラススっていう人ね。どうして、わかったの？」

「ここに俺が戻ってきた時、白仙城まで案内人となっている
教えてくれたこと、ありがとっつて伝えておいてくれ。」

月の扉の秘密

第九章 サムン・マールム

月の扉の秘密

「ステラ。皇帝のいるところはここに間違いないの？」と、ファルが訊いた。

「ああ。私の記憶が確かなら、奴の天破城てんぱじょうは月の扉の中にある。アルビトリウムとマテリアとの次元の狭間に隠れてるんだ。古代から奴の居所がはつきりしなかったのもそのせいさ。実は私は一度だけ行ったことがあるんだ。その時に奴の近くまで行きながら、そこに住んでいるのがまさか皇帝だったとは知らなかった。その時は奴に見つかって、アルビトリウムにはじき返されてしまった。だが、今度は奴のいることも分かってるし、なんとか見つけてやる。」と、ステラは拳を握りしめながら言った。

「月の扉が桜花村の近くにあったなんて知らなかったわ。」と、ファルが言った。

「まあ、これは秘密とされているからな。他にも何箇所かアルビトリウムには月の扉が存在している。だけど、どれも秘密になっていて、はつきりと場所が分かってないのさ。私はこの場所だけは大分前から知っていた。私がここに戻った時もこの扉を通って来たしな。気を付けないといけないのは、この扉を通った時に生じる次元圧力によって意識がなくなることだ。その衝撃に耐えられれば、次元の狭間に留まることが可能だ。もし、なくなったらまま通ってしまつと、またマテリア行きだぞ。」と、ステラはおどけた口調で言った。

「もう、やめてよ。」と、ファルはむくれて言った。

「大丈夫だよ。私を誰だと思ってる。この体の強さは伊達じゃないぞ。」と、ステラは胸を反らして言った。

「まあ、せいぜい気を付けてくださいね。私はあなたに付いて行くしかないんだから。」と、ファルが言った。

「いや、お前はここに残るんだ。」と、ステラが真剣になって言った。

「なに言ってるの？私だって行くわよ。あなたの幻霊なんだし。」

「ダメだ。この先は私にも危険な場所なんだ。そこにお前を連れて行くわけには行かない。お前はここで待っていてくれ。必ずフェミナを連れて戻って来る。」と、ステラは真剣な眼差しで言った。

「何言ってるのよ。危ないならなおさらじゃない。あなたの危険を軽くするために私はいるのよ。」と、ファルも真剣だった。

「だが、ここは普通の危険とはわけが違うんだ。命の・・・」と、ステラが言いかけた時、ファルは人の姿になり、ステラに抱き付いた。

「お願いよ。一緒に行かせて。あなたにもしものことがあったら私はどうすればいいのよ。あなたの傍にずっといさせて、お願いだから。」ファルは涙まみれの顔をステラに向けた。

「そうか。分かったよ・・・もうお前を一人にはさせない。一緒に行こう。」ステラはそう言ってファルを強く抱きしめた。

ワタマの陰謀

「なに！ステラが生きていたと？」と、女王マル・ラクリマは大声を張り上げた。

「はい。皇帝はステラ抹殺に失敗し、月の扉でマテリア送りにしたらしいのです。しかし、ステラは最近になってこの世界に戻って来たようです。」と、宰相グラキエスが言った。

「なんと言うことだ。それでサムン・マールムがフェミナを誘拐

したわけが分かったわ。抹殺失敗の責任をとらされ、自分に禍が及ぶ前に先手を打ったのか。おのれえ。よりによって、奴を生かしておくとは・・・」と、女王は齒嚙みした。

「ですが、マテリアに行ったとなれば、今の奴は力がまだ完全に戻っていないのではないかと思われます。今の内に倒しておけば、それほど脅威にはならないのではないかと推察します。」

「うーむ。奴が力を取り戻してしまつてからではやっかいだ。早速、搜索の手はずを整えろ。抹殺するのだ。」

「ははっ。」と、グラキエスは一礼すると、女王の間を退いた。

「しかし、西域方面の部隊に連絡が取れなくなったのはどういうわけなのだ。」と、グラキエスは廊下を歩きながら考えた。

次元の狭間

次元の狭間

「さあ、行くぞ。ファル。」と、ステラは言った。

「うん。あなたに融合してるね。」と、ファルは言った。

ステラの瞳が碧く光輝を放ち、銀髪が輝きながら逆立ち始めた。体が青い光で覆われ、さらに手が金色に輝きを帯びる。これが碧光の戦士、碧きソルジャーの真の姿なのだ。

ステラは月の扉の中に入った。次元圧力が意識に重圧を加えて来る。ステラはアニメの力で意識を防御する。それは力と力のぶつかり合い。並みの者ならば、既に意識など飛んでしまい。しばらくは目を覚ますことが出来ないほどの圧力なのだ。そして、目の前に黄色い月が現れてきた。そこが次元の狭間の陸地なのだ。ステラはそこを目指して飛び込んだ。

「さあ、ここまで来れば安心だ。」と、ステラは月の表面に立った。

「お疲れさま。ステラ。」と、ファルは姿を現した。

「ここが次元の狭間、そして天破城というところだ。」

「え？この月みたいなのが城なの？」

「そう、これは皇帝の力によって生み出された幻覚城なのだ。既に私たちは皇帝の意識に監視されているはずだ。いつ奴の攻撃がやってくるか分からない。ほら、早速攻撃が始まった。」と、ステラは言った。

どこからともなく突然黄色い炎がステラに向かって飛んでくる。

「危ない！」と、ファルは叫んだ。

「そのまま、動くな。ファル。」と、ステラは言った。

炎はステラの体を覆っている青い光によってはじき返されている。それでも次々と雨のように降り注いでくる。ステラはそれをものと

もせず、歩き続けている。

「すごい。こんなことがどうして出来るの？」と、ファルは思った。

「ファル。私の力は長い間に溜め続けた動元の力とマモルの力、そしてステラの力によって皇帝の力を既に凌駕している。以前のステラならこれでいい勝負も出来ただろうが、これくらい精神波では私にはもう通用しない。」と、ステラは笑いながら言った。

しばらくすると、炎が止み今度は電撃が襲ってきた。しかし、それでもステラの光はそれを受け付けない。

「いい加減にしたらどうだ！サムン・マールム。」と、ステラは叫んだ。「こんな攻撃では私はビクともしない。もう分かっているだろう。姿を現したらどうだ。私と決着をつけよう。」

すると、電撃波が止み、ステラの周りに無数の妖獣たちが現れ始めた。

「まだ、こんな小細工を弄もよほするのか。」

そう言うと、ステラは空に舞い上がり妖獣たちを見下ろした。見ると、遙か地平線の彼方までが妖獣たちに埋め尽くされている。

「ステラ。こんなにたくさんの敵に囲まれちゃったよ。どうするの？」と、ファルは心配そうに言った。

「心配するな、ファル。こんなものは何でもない。見てるがいい。」と、ステラ言った。

ステラの碧眼の輝きが一段と増し、銀髪が大きく揺れる。

「うおおお！」と、ステラが叫ぶ。

次の瞬間、彼の体から閃光が迸ほとばしり、見渡す限りの地が碧い光に覆われながら吹き飛んでいく。そして、妖獣たちは絶叫と共に消え去っていく。終わってみると、地平線の彼方までが閃光によって吹き飛んでいた。

「すごい。こんな動元爆発は見たことないわ。」と、ファルは目を丸くした。

「私のはただの動元爆発ではない。真動元爆発だ。これはここで

しか使わない。地上で使えば、辺り一面が廃墟になつてしまふ。サムン・マールムの幻覚世界を破壊するためにやっていることなのさ。」と、ステラは笑顔で言った。

再び辺りが静かになつたかと思うと、何か大きな塊かたまりが地下から現れた。それが徐々に四足の妖獣の姿になつた。全身が黄色い毛に覆われ、頭には三本の角が生えている。目は赤く血走り、口からは大きな牙が突き出ている。体はステラの十倍はあるかと思うくらい大きい。そして、四本の足は炎に覆われていた。

「まだこんな攻撃を続ける気なのか。最強の妖獣王エレバケノースを召喚してくるとはな。だが、どんな召喚術も私には通用しないぞ。」と、ステラは言った。

「あつははは。久しぶりだな。ステラ。」と、エレバケノースは言った。

「ああ。何百年ぶりかな。私がお前を倒して以来だな。」と、ステラは言った。

「フフフフ。幻獣としてサムン・マールム様に召喚されたのだ。今度はお前に死の傷をつけてやろう。」と、妖獣王は言った。

妖獣王は土煙を撒き散らしながら、突進してくる。その速さはかつてのマモルを思わせた。数歩地面を蹴っただけで、ステラにその爪が届くほど近づく。空を切るブウンという重い音とともにエレバケノースの右の前足がステラに迫る。ステラは微動だにしない。

何か鈍い音がしたかと思うと、ステラは妖獣王の顎に拳を打ち込んでいた。あまりの速さに避けるどころではなかった。妖獣王は空振りした足の勢いと打ち込まれた拳の衝撃で横倒しに倒れた。

「うぐっ……な、なにが起こつたんだ。」と、妖獣王は苦痛に顔を歪ませながら呻いた。

「もう倒れてしまったのか。今のはほんの挨拶代わりさ。」と、ステラは笑った。

「一体、お前……本当にステラなのか？」と、エレバケノースはよろよろと立ち上がりながら言った。

「ステラと言っても、以前のステラじゃない。私はワタマの力の権化として誕生した碧きソルジャーだ。もはや、お前など相手にならない。早く皇帝に出て来いと言っておけ。時間の無駄だ。」と、ステラは言った。

「くそっ！このワシをあまりなめるなよ。」と、妖獣王は言う口から黒い炎を吐き出した。ステラはそれを体の光ではじき返す。

「あははは。馬鹿め。これでおしまいだ。」

妖獣王はそう叫ぶと、後ろ足で立ち上がり前足を広げステラに向けて火炎弾を放った。さらに三本の角から電撃を放出し、ステラのいた地面とその周囲は完全に地面ごとえぐり飛ばされていた。

「あつははははは。あつははははは。消し飛んだか。ワシに逆らうところなるのだ。」

「そうだな。大したことにはならないということだ。」と、ステラの声がした。

「なに！」と、妖獣王は自分の頭上から聞こえてくる声のほうを見ようと顔を上げ、碧き光の戦士が見えた瞬間、今までに感じたことのない鈍い痛みを感じた。だが、妖獣王はそれ以上何も感じることはなかった。エレバケノースの体は地響きと共に地面に倒れた。そこから少し離れたところには地面から半分だけ覗かせている妖獣王の頭が埋まっていた。

サムン・マールムの謎

サムン・マールムの謎

妖獣皇帝サムン・マールムは謎の多い妖獣である。古代からその存在はアルビトリウムに知られていた。しかし、実際に見た者はいない。伝説のベールに包まれ、恐怖の伝承だけが伝わっている。月の扉を自在に操ることが出来、幻獣を召喚する、その力は山を吹き飛ばし、魔法を使えば廃墟だけが残る。姿を見た者を必ず死に至らしめる。そうした現実とも伝説ともつかない話ばかりが伝わっている。

ステラは月の扉から入り、彼の幻獣による攻撃を受けながら、不自然なものを感じていた。なぜ皇帝は姿を現さないのだ。彼がこうした攻撃を続けるのは理由があるはずだ。彼は数十年前、アルビトリウムに初めて現れたと思われる。ステラを月の扉へ落とし、その後ポルソアメオの仲間によって殺されたというが、それは皇帝の実体ではなかった。あれは皇帝の魔力によって、召喚された幻獣であった。それは戦っていたステラにはよく分かっていった。

幻獣と言うのは、実体があっても魂を持たない獣族のことだ。サムン・マールムも仙獣族の人型よりも遙かに強力だが同じ召喚術を使う。魂のない幻獣が魂を持つ獣族と決定的に違うのは生命に欠かせないものを必要としないことだ。呼吸、飲食、睡眠をせずにいっまでも戦い続けられる。そして、幻獣にとって死ぬということとは、戦闘不能になること。つまり、動けなくなることなのだ。さっきのエレバケノースのように動けなくしてしまえばいい。

だが、この皇帝の居城にやって来ても同じような攻撃しかして来ないのはなぜなのだ。ここに来れば実体と戦えると思っていたが、期待は裏切られている。

「もしかすると・・・いや、それはあり得ない。だが、もしそう

だったとしたら・・・これは調べてみる必要があるな。」と、ステラは思った。

「ステラ。どうしたの？」と、ファルが訊いた。

「ファル。この天破城を破壊する。」と、ステラが真剣な眼差しで言った。

「どうして？あなたのお姉さんがいたらどうするの？」と、ファルが心配そうに言った。

「ここに皇帝はいない。私の推測が誤っていた。」

「どういうこと？」

「私に対する幻獣召喚は通用しないことを知りながら、さっきからその攻撃を繰り返すばかりだ。奴はきつとここにいないのだ。そして、フェミナも。きつと違う場所・・・それも意外なところにいるんだ。」と、ステラは言った。

「そうか。ここにはいないのか。それは残念だ。」と、突然声が聞こえた。

「誰だ？」と、ステラは声の方を振り向いた。

見ると五人の赤光の戦士がいつの間にか後ろに立っていた。

「ここでお前に会えるとは俺たちは運がいい。久しぶりだな、ステラ。いや、元百人隊長さん」

「お前たちは・・・百人隊。」と、ステラは言った。

「ああ、かつてはあなたの元で働いていた者さ。」

「ステラ・・・」と、ファルがステラを見て呟いた。

「そうだ。私はかつてこのアルビトリウムを恐怖に陥れた、百人隊の指揮を執っていたんだ。ワタマの宿命だったとは言え、罪もない人々の命を奪い、苦しめたのだ。」と、ステラは涙をこぼしながら俯いた。

「おっと、こんなところで泣いている場合じゃないぜ。隊長さんよ。これからあなたはこの世からおさらばするんだからな。」と、百人隊のメンバーが言った。

「もし、私を倒そうと思っているなら、止めておいたほうがいい。

「と、ステラは涙をぬぐいながら言った。

「どういう意味だ？」

「お前たちに勝ち目はない。」

「おっと、大きく出たな。いくらあんたが強いと言ってもほぼ同等の力を持つ五人が相手なんだぜ。それでも勝つ自信があるのか？」

「私の言うことが信じられないというのなら、やってみることだな。遅かれ早かれお前たちは死ぬんだ。」

「なんだと、このやろう！」

その男の全身の光が放射し当たり一面を吹き飛ばした。しかし、ステラは微動だにしない。

「まあ、これくらいじゃ、あんたをやれるとは思ってないさ。じゃ、本気で行くぜ。」

彼はそう言うと同時に地面を一蹴りすると、あっという間にステラに近づく。彼の拳がステラの顔を襲おうとする。

「うっ！」と、その男はうつ伏した。体から血が滴っていた。

「どうしてだ。剣を持ってないのに……」

彼の体は剣で斬られたように左肩から右脇腹にかけてまっすぐな筋が付いていた。

「私の剣が見えないのか。ではお前らに分かるように見せてやるう。」

ステラはそういうと、右手を広げた。そこに黄金色の剣が現れた。

「一体、どういうことだ？」と、その倒れている男はやっこの思いで顔を上げながら言った。

「これがエクリクスだ！」と、ステラが言った。

「これが……あの伝説の力の剣なのか。」

「そうだ。この剣は力が形になる、究極の力の剣。お前たちでは触れることさえ出来ない。」

「おのれえ。そんなものがあっても、我々全員を倒すことはできませんぞ。」

後ろの方で腕を組んで立っていた男がステラのほうに近づいて来

た。

「いいか、四人で一斉にかかるんだ。やつの逃げ場を塞げば、やつだつてどうにもならんさ。いくぞお！」

その男は口でいうだけあって、今やられた男よりも動きが速かった。ステラのほうにワタマの四人が襲い掛かる。ステラは動かない。

「おしまいだあ。ステラああ！」

彼の蹴りがステラの首を狙い、他の三人も上半身、下半身とそれぞれが空気を切る重い音を響かせながら、攻撃する。

何か鈍い物音とバタバタと人が倒れるのが一緒だった。一人は完全に事切れて倒れた。もう一人はうつ伏してその近くに倒れた。残りの二人はステラの拳と蹴りを体に受けたまま、動けないでいる。

「う、うそだろ・・・こんなに早い攻撃が出来るなんて・・・理解出来ないんだよお！」と叫びながら、蹴られた男は何とかステラに一撃を加えようと腰の剣を抜き放ち、飛び上がった。

ステラの碧眼が光を増した。辺りを青い閃光が覆いワタマの者たちは絶叫と共に消し飛んだ。

辺りは静けさを取り戻し、ステラは青い光に包まれて天破城の上に立っていた。そして、彼の近くをワタマの者たちが身に付けていた服の破片が次元風の中で宙を舞っていた。

ティグリスの憂鬱

ティグリスの憂鬱

ティグリスは仙獣族の新天地探索の旅に同行していた。彼は歩きながら物思いに耽っていた。

あの碧光の戦士はマモルに違いない。そして、姿はかつてステラと呼ばれていた頃のものだろう。だが、彼のあの様子だとアイルと俺を覚えているようにも見えなかった。後は可能性にかけるしかない。俺のティグリスという名前に疑問を持ってくれればしめたものだ。そうなれば、近い内にそのことで私に会いに来るだろう。やっとな、待ちに待った時が来るのだ。ステラはきつと皇帝の居場所が分からないに違いない。俺はこの時のためにそれを秘密にしてきたんだ。必要な情報はもう調べてある。実際、大変な苦勞をした。だが、やっとそれが報われるのだ。後はステラが来るのを待てばいい。俺の目的は復讐なのだから。

ドルスのこと

トリーキングダーは悲惨を極めた大移動紛争の中、生き残った数少ないゲリラ部隊のひとつである。統士のドルスを始め、副統士ハンブラ以下十一人が生き残っている。ドルスはその紛争で生き残ったことにより、自分の実力にさらに自信を付けていた。あれほどの妖獣王の大軍と戦いながら、生き残った。実際、何度か死ぬかもしれないと思った場面がいくつもあった。だが、こうして生き残っている。あのステラでも生き残るのは難しかったはずだ。あれだけの大軍は今まで目にしたことはない。

「もう、俺はかつてのステラを越えたかもしれない。」ドルスはそう思っていた。

そして、今度ステラとあった時は決着をつけなければならぬ。もう、ステラも力をかなり取り戻してる頃だ。だが、肝心のステラは大移動紛争の最中行方をくらましてしまっている。戦闘に参加してなかったのは確かだ。あの赤光の戦士が戦っていたら、すぐに分かるだろう。だが、そんなものはいなかった。彼がどうしてあの紛争に参加しなかったのか不思議だった。常の彼なら間違いなく諸族の危機を見過ごすことはない。

「なにかで死んでしまったのか。いや、まさかな。そんなことはあり得ん。」

そして今、彼はこの大東原の荒地の中で始まった諸族回復活動の義勇軍の司令官として参加している。義勇軍と言っても形ばかりで生き残り部隊をただ結集した寄せ集めに過ぎない。しかし、彼はそれで満足していた。いつか諸族が力を取り戻した時、自分が軍の統率者として君臨することが出来るはずだ。それは軍関係者として、最高の誇りなのだ。今はこの地の治安と平和回復が自分の任務だ。

「フフフフ。」

「隊長。いつまで用足ししてるんですか。また、妖獣が襲ってきました。早く来てください。」と、トリーキンドーのメンバーが彼を呼びに来た。

「ふっ、うるさいやつらだ。」と、ドルスは呟いた。

皇帝の正体

皇帝の正体

ステラは仙獣族のキャンプ地を訪れていた。そこでティグリスを見つけ、話しかけていた。

「やっぱり来たか。来るんじゃないかと思ってた。」と、ティグリスは言った。

「そうか。分かってたんだな。」と、ステラは言った。

「ああ。この間、お前を見て、もしかすると来るかもしれないと思っていた。」

「君はなぜティグリスと同じ名前を名乗ってるんだ。君は私の知ってるティグリスとは違う。その名前は獣族の中では珍しいものだ。偶然とは思えない。」と、ステラはティグリスを睨み付けた。

「そうだ。俺はあのティグリスではない。彼は俺の父だ。」と、ティグリスはステラを見つめて言った。

「なんだって！君があのだティグリスの息子？」と、ステラは驚いた。「そう言えば、いつか言ってたことがあった。自分には二人の子供がいるって。確か・・・娘もいたとか言っような・・・もしかして！」

「そうだ。アイルは私の姉だ。」

「そうだったのか。こ、これは失礼した。私はてつきり・・・」と、ステラはうるたえた。

「てつきり？・・・まさか、私をサムン・マールムだと思った、なんて言わないだろうな。」

「い、いや。実を言うとそうだ。」と、ステラは白状した。

「おいおい。よしてくれ。あいつは俺の仇だぞ。一緒にしないでくれ。」

「すまんすまん。だが、私は今皇帝の行方を捜している。皇帝の

住処が天破城だと思ってた。だが、そこにはいなかった。奴は今まで誰の前にも決して姿を現さなかった。それはどうしてなのか。そこで私は結論した。彼は元々実体など持っていないんじゃないかと。そして、テイギリス、君のことを思い出した。君がなぜ私の昔の仲間の名前を使っているのか。いつかは訊こうと思っていたことだが、行き掛かり上こうして確認に来たと言うわけだ。」と、ステラは説明した。

「なるほどな。だが、いい線いってるぞ、ステラ。お前は皇帝の正体をほぼ見破っている。そうだ、奴は実体がない妖獣だ。俺が長い時間かけて調べ上げたことをよく推理だけで到達したもんだ。奴の正体は寄生生命体だ。」と、テイギリスは説明した。

「寄生生命体ってなんだ？」と、ステラは訊き返した。

「フフフ。そこまでは分からんか。じゃ、説明してやろう。奴の実体は気晶体きしよつたい、つまりこの世界の持つ妙術や魔力の結晶体なのだ。言い換えれば、力そのものの集合体だ。実体がないのは当然なのだ。そして、生き続けるためには何か別の生命体に寄生しなければならい。だから、お前が私を疑ったのもまんざらの外れでもなかったのさ。だが、奴が他に寄生するためには契約を結ばなければならぬ。つまり、俺に寄生する場合は俺の同意なしに寄生することが出来ないのさ。これで納得してくれたか？」と、テイギリスは説明した。

「そうだったのか。疑って悪かった。だが、奴の正体があったのはいいが、居場所が分からないんじゃない、どうにもならないな。」と、ステラは声音を落とした。

「いや。それが分かっているのさ。」と、テイギリスはうれしそうに言った。

「おお。それはありがたい。それで、奴はどこにいるんだ？」

「教えてもいいが、条件がある。」と、テイギリスは意味ありげに笑顔を浮かべた。

「何だ？条件っていうのは？」と、ステラは不思議そうに言った。「父は生前こう言っていた。『もし私に何かあった時は、ステラ

と行動をともしろ。彼の足となり、彼を助ける。お前が仕えるに足る主人となるだろう。』と。つまり、条件と言うのは俺をお前の騎乗として仕えさせて欲しい。そういうことだ。』と、ティグリスは少し照れながら言った。

「おい。それは・・・本気なのか？」と、ステラは訊いた。

「冗談でこんなことが言えるか。お前が全てを思い出し、皇帝と戦える力を取り戻したら、そうしようと決めてたんだ。そして、サムン・マールムを俺たちで倒すのさ。』と、ティグリスは喜悦に顔をほころばせた。

「そうか。まあ、私としてもそれは心強いが、危険なことに巻き込むことになるからな。気が引けることには変わりはない。』と、ステラは言った。

「何を言ってるんだ。この戦いは俺にとっては復讐でもあるんだ。お前一人の戦いじゃない。俺たちの戦いのさ。』

「そ、そうだったな。分かった。そういうことなら、是非よろしく頼む。』と、ステラは握手の手をティグリスに差し出した。ティグリスはその手を両手で包み固い握手を交わした。

「ちよつと、待った。あたいを忘れてないかい。』と、アイルが言った。

彼女はいつの間にか、近くに立っていた。

「アイル。いつの間に・・・』と、ステラは言った。

「あたいをおいて行くなんて言わないだろうね。』と、アイルは法杖を肩に担ぎながら言った。

「どうする？ティグリス。』と、ステラは困惑顔で言った。

「聞かれてしまったんじゃ、ダメとも言えんな。アイルは言ってる聞き分けるような性格じゃないしな。』と、ティグリスは手振りでもうにもならないという仕草をした。

「そうだよ。皇帝の件なら、あたいだって親父の仇なんだ。一緒に連れて行ってもらうわよ。』と、アイルは笑顔で言った。

「仕方ないな。一緒に行こう。』と、ステラが言った。

「やったあ。さすがにマモル・・・じゃなかった、ステラね。話せる。」と、アイルはステラの頬に口付けした。

ステラの近くを飛んでいたファルが、少しむくれ顔になったのに気が付きステラは苦笑した。

契り

契りちぎ

諸族の城跡は諸族回復活動に参加している者たちによって、少しずつ整備されている。トリーキングダーの副統士ハンブラは義勇軍の副司令官として、整備活動の指揮を直接執っていた。毎日が腐敗した残体処理と瓦礫の処分の繰り返しだった。たまに襲ってくる妖獣がいるが、大した被害を及ぼすほどではない。

ハンブラはマモルであった時のステラとの決着を心待ちにしている。だが、彼と冥塔の三王との戦いを見る限り、自分一人ではとても太刀打ち出来るとは思えなかった。

「既に奴は俺の力を越えてしまっているだろう。ドルスがもつと早く手を打っていれば奴を倒すことが出来たのだ。」と、ハンブラは密かに悔しがった。

「ハンブラ、ちょっと来てくれるか？」と、トリーキングダーのメンバーの一人が叫んだ。

「ああ、今行く。」と、ハンブラは返事した。

ハンブラは仲間の後を付いて行った。彼はかつて諸族の城の中央広場のあった付近に連れて行かれた。

「ここがどうした？」と、ハンブラは訊いた。

「はい。ここでちよつと妙な地下道を見つけましたね。それで確認する前に副司令官に知らせておこうかと思ひまして。」と、そのメンバーが言った。

「ふむ。ここがそうか？結構広いな。何でこんなところに地下道があるんだ。」

「それを確認するために中を調査しておいたほうがいいかもしれないと思ひまして。」

「そうだな。よし、中に入ってみよう。」と、ハンブラが言った。

「了解です。」

地下道は長い階段がどこまでも続いていた。時折聞こえる雫が滴り落ちる音が不気味にこだまする。かなりの距離を進んで行くと、ようやく平らな廊下に行き当たった。廊下は奥に向かって真っ直ぐに伸びていた。二人は廊下に沿って進んで行つた。二人の足音だけが響き渡り、先導しているメンバーの松明だけが唯一、辺りを照らす明かりだった。

突きあたりに大きな扉が見えてきた。

「なんで、こんなところにこんな大きな扉があるんだ。」と、ハンブラが呟いた。

「薄気味悪いですね。」と、メンバーが答えた。

「ともかく、中に入ってみよう。」

「はい。」

扉が軋みながら開いていく。中はかなり大きな部屋が広がっていて、部屋の奥に大きな椅子が置かれてあった。誰かがいる気配は全くない。急に前にいたメンバーが地面に倒れた。

「おい。おい。」と、ハンブラは助け起こそうとメンバーを仰向けにした。「死んでる。一体、どうしたんだ。」

ハンブラは驚きのあまりしばらく動けなかった。

「我と契約を成す者は世界を統べる。」と、突然部屋に響き渡る声が出た。

「だ、誰だ!？」と、ハンブラは叫んだ。

「我は世界の覇者。妖獣を統べ、世界を支配する者。猛き者よ、我と契らんか。契れば世界はそなたの物だ。」

「誰なんだ。そんな言葉信じられるか。姿を現せ。」

すると、急に緑色の火球が現れ、たちまち緑の炎に包まれた獅子に姿を変えた。

「どうだ。我と契らんか。契れば世界がそなたにひれ伏す。」

皇帝のアジト

皇帝のアジト

「ところで皇帝の居所を知っているって話。一体奴はどこに
いるんだ？」と、ステラは訊いた。

「奴は絶対に誰からも疑われない場所にずっと昔からいたんだ。
と、ティグリスは言った。

「誰からも絶対に疑われない場所？」と、ステラは不思議そうに
言った。

「そう、奴は諸族の城に住んでいる。」

「なんだって！そんなことが可能なのか？」

「普通では無理だ。だが、そこが奴の巧妙なところさ。諸族の城
に四神官の像があつたのを覚えてるか？」

「ああ。覚えてる。城の中央広場を取り囲むように立ってた巨像
のことだろう？」

「そうだ。あれの一体は地下室への通路の上に立っていたらしい。
その地下室は皇帝のアジトだったと言うことだ。」と、ティグリス
は言った。

「うーむ。そんな近くにいたとは。だが、そもそもどうやって、
そんなことが出来たんだ？」

「奴は寄生生命体だと言つたろう。諸族の城建設時に施工管理委
員のメンバーになりすますことだつて出来ただろう。」

「なるほど。それはあり得ることだ。確かにそんなところに皇帝
のアジトがあるなんて、誰も思わないだろうからな。確かに最も疑
われない場所つてわけだ。しかも、危険があつても諸族の城の軍隊
が黙つても守ってくれるというわけだ。奴はそういう奸智にかけ
ては一流だからな。」ステラは虚空を睨みながら言った。

「まあ、この情報を手に入れるためにさまざまな文献をあさり、

人伝ひとつてに聞いて大変な労力を要したんだ。この日のためにな。役に立つことが出来てこんなうれしいことはない。」

「テイギリス、君の情報はすごくありがたい。おかげで皇帝を早く見つけられそうだ。すぐに諸族の城跡に出発しよう。」

「じゃ、俺の背中に乗ってくれ。今からお前は俺の主人だ。仙獣族では主のことを兄貴と呼び習わす習慣がある。これからはお前を兄貴と呼ぶことにする。」

ステラは頷いて、テイギリスに跨った。白虎に跨った碧光の戦士の姿はまさに英雄そのものだった。

エルフ族のレガトウス

樹海城は今紛争で最も被害の少ない城であった。復興作業も順調に進んでいたが、他の諸族の惨状は目に余るものがあり、かつての大東原の覇者たる種族としても感情の上からも復興のために諸族に対する支援を行うべきことが司土円卓会議で決議された。人員を募ったところ千人を超える希望者が出た。

そして、それは諸族復興派遣隊 レガトウスと命名された。早速、支援物資と道具などの準備が整い次第、各地に派遣されることになった。そして、その中にシンジとハルカも含まれていた。彼らは人族の地域への派遣を希望していた。彼らはカオルとの再会を期し、またマモルと出会えることを期待した。

崩壊のトリーキンダー

崩壊のトリーキンダー

「お前、本気でそんなこと言ってるのか。」ドルスは怒りをあらわにした。

「もちろんだ。強い者が頂点に立つ。それがトリーキンダーの掟だ。」と、ハンブラが言った。

「ほほう。すると、お前は俺より強い、そう言いたいのか。」

「そうだ。お前よりもあのステラよりもだ。だから、今日から俺がトリーキンダーの統士になる。」

「おもしろい。大そうな自信じゃないか。それじゃ、俺と勝負して証明してもらおうか。」そう言いながら、ドルスはセクリスという戦斧を構えた。

「フフフフ。ならば、見せてやろう。俺の力を。」

すさまじい風が吹いたかと思うと、ハンブラの前に緑色の巨大な一角鬼が現れた。手と足は黒い炎に包まれている。

今の暴風で周囲で働いていたトリーキンダーの他のメンバーと作業員たちが何事かと集まって来た。彼らはそれが統士ドルスと副統士ハンブラとの果たし合いだと分かると、どうなることかと固唾かたすを呑んで見守った。

「貴様、妖獣を召喚するとは一体どういうことだ。そんな力はお前にはなかったはずだ。」と、ドルスは訊いた。

「フフフフ。そうだ。昔の俺にはなかったが、今は力を手に入れたのだ。すばらしい力をな。」と、ハンブラは薄気味悪い笑顔を浮かべて言った。

「力を手に入れただと？一体どうやって。」

「そんなことはどうでもいいことだ。重要なことはこれから世界は私のものになるということだ。そして、ドルスお前はここで死ぬ

ことになる。」

「おのれえ。よくも裏切ったな。今まで片腕と見込んで目を掛けてやったものを。」

ドルスはそう言うのと、セクリスを構えてハンブラに斬り込んで行った。

「一角鬼ベーゼ、少し遊んでやるがいい。」と、ハンブラが言った。

ベーゼはドルスとハンブラの間に割って入った。ハンブラはかまわず一角鬼に薙ぎりつけた。その斧をベーゼはよけもせず体で受け止めた。

「なに！」と、ドルスは驚いた。斧が刃こぼれし、斬り付けられた妖獣のほうは傷ひとつ付いていない。

「あつはっはっはっは。そんな斧は薪割り用にでもしておくんだな。そんなものはこのベーゼには通用せんぞ。さて、今度はこつちの番だ。行け、ベーゼ！」と、ハンブラは叫んだ。

妖獣王ベーゼは全身が炎に包まれ、ドルスに突進して行った。ドルスは巧みにそれをかわし、ベーゼの背後を取り、攻撃に移ろうとする。しかし、ベーゼの背中から出ていた二本の触手がドルスの持っていた斧を手から叩き落とした。そして、ドルスをそのまま絡め取ってしまった。

「くそっ、しまった！」と、ドルスは叫んだ。

その時、光の刃が次々と飛んできてベーゼの触手を切断した。

「うぎゃあ！」と、ベーゼは触手を切られた痛みで絶叫した。

「誰だ！？」と、ハンブラが刃の飛んできたほうに振り返った。

ハンブラは驚いた。白虎に跨り青い光を体から放つ戦士が黄金に輝く剣を構えてこつちを見ている。その隣では四足が炎に覆われた白豹がハンブラを睨んでいた。

「お前は誰だ？」と、ハンブラが訊いた。

「私は碧光の戦士ステラ、碧きソルジャーだ。」と、ステラが名乗りを上げた。

「なに！ステラだと・・・ステラなら赤光の戦士と言われてたはずだ。嘘をつくな。」と、ハンブラは叫んだ。

「フフフ。私はただのステラではない。ステラとマモルの融合体であり、青い光は真動元の輝きのさ。」

「そうか。とうとう、ステラの手を取り戻したわけだ。」

「そういうわけだ。」と、ステラが言った。

「フフフフ。アハハハ。」と、ハンブラが大声で笑った。

「どうした。何がおかしい？」と、ステラが訝しんだ。

「分らんか？私のことが。」

「うん？・・・まさか・・・」ステラは驚愕していた。

「そうだ、ステラ。ワシがサムン・マールムだ。」

「なんだと・・・ハンブラの体をどうやって・・・？」と、ステラは声を荒げて訊いた。

「こいつはハンブラじゃないのか？サムン・マールムって、あの妖獣皇帝のことか？」と、それまで黙って聞いていたドルスは血相を変えて尋ねた。

「どうやら、そうらしい。それで、この妖獣王を召喚した力のことも納得出来る。」と、ステラが神妙な口調で言った。

「このハンブラという男は、力を欲しがっていた。ステラを倒したがっていた。それにワシが力を貸して上げたというわけだ。」

「なるほど。弱味に付け込んだというわけだ。まさにお前の思う壺だったということか。」と、ステラが言った。

「そう言うわけだ。さあ、これでとうとうお前と決着が付けられるぞ。これは面白いことになりそうだ。」と、ハンブラが言った。

「それはどうかな。私の力がどんなものか知ったら、そのほくそ笑みも消えてなくなるぜ。」と、ステラが笑みを浮かべて言った。

「あはははは。それが面白いのさ。お前はまだ分かっていないよ。うだな。ワシが死ぬということは、この男も死ぬということなのだ。ぞ。それが、ワシと契約を交わした者の末路なのだ。」

「なに！」と、ステラは動揺した。

「フフフフ。お前に妖獣族以外の者を平気で倒すことが、出来るかな。ワシは知っているぞ。お前はかつてワタマとして、諸族を苦しめてきた。その罪の意識がお前に妖獣とワタマ以外の者を倒せない戦士にしまっているのだ。」

「ステラ。気にすることはない。ハンブラはお前を倒すために皇帝と契約を結んだんだ。」と、ドルスが言った。

「そう割り切ることが出来るかな。もし出来るなら、さあやってみるがいい。」と、皇帝は不気味な笑いを浮かべた。

傷心の戦士

傷心の戦士

ステラは焦燥シヤウサウに駆られた。サムン・マールムの言う通り、彼はかつての罪の意識から、もう誰も倒せない戦士となっていた。ただ、せめてもの罪滅ぼしとして諸族を苦しめる妖獣族とワタマだけは諸族の敵として認識し、戦うことが出来ている。片端かたわの戦士と言えばそれまでだが、それが彼の背負ってしまった業しごなのだ。

彼のその苦悩を察したのか、ティグリスが救いの手を差し伸べた。「兄貴、ここは俺たちに任せて、フェミナを捜しに行ってくれ。

おそらく、地下室に匿かくわれているはずだ。」

「す、すまない。フェミナを連れ戻したら、必ず戻る。」と、ステラは言うのと立ち去ろうとした。

「おっと、フェミナなら地下室にはいないぞ。」と、ハンブラは言った。

「なんだと。彼女はどこにいる!?」と、ステラは叫んだ。

「では、会わせてやるう。」

ハンブラは手を頭上に掲げると、その上空の空間が開き亜空間が現れた。そこでフェミナが結界の中でステラを悲しそうに見つめていた。

「フェミナあああ！」ステラはそう叫びながらその結界に向かって飛び込もうとした。だが、結界はステラをはじき返した。

「フフフフ。その結界はワシを倒さぬ限り破ることは出来ない。

どうだ、これで決心がついただろう。さあ、勝負だ。」

ハンブラはそう言うと、ベーゼをステラに向けて突進させた。ステラは身動きしない。ベーゼはステラにその鋭い爪で引き割こうとする。ステラはその爪をいとも簡単に腕で受け止めた。その瞬間にベーゼは口から黒い炎をステラの顔目掛けて吐き出した。ティグリ

スはステラを乗せたままその炎をかわした。ステラはベーゼの側面に回り込んだところで黄金の剣でベーゼの首を斬り落とした。

「なに！ベーゼが剣で斬られた！？」と、ハンブラが驚いた。「そんな馬鹿な。ベーゼの鋼玉体が剣で斬れるわけないんだ。」

「私の剣は究極の力の剣、エクリクス。この剣は私の力そのものが顕現した剣。どれほど硬いものであろうと、斬れないものはない。」

ステラはそう言うと、剣を消した。

「剣が消えた！」と、ハンブラが驚いた。

「この剣は剣にして剣にあらず。お前にはどんなに頑張っても手にすることも触れることも出来ない。」と、ステラは神妙な口調で言った。

「だがな、ステラ。どれほど、立派な剣を持っていようが、ワシを倒せなければ意味がないのだぞ。では、今度はワシの力を見せる番だ。」

ハンブラはそう言うと、空中に浮かび上がった。

「さあ、受けてみる。マグナアター！」

その叫び声と共に地面が揺れ始め、轟音と共に辺りの地面が割れ始めた。そして、割れ目から何かが噴出し始めた。

「ぐっ！苦しい・・・」と、ドルスが悶えた。

周囲にいる者たちも苦しみ倒れている。ステラたちは結界を張り、身を守った。

「くそつ。瘴気か。」と、ステラは言った。

「どうやら、他の者たちがやられてしまいそうだ。なんとかしなければ。」と、ティグリスが言った。

「ステラ。今こそ私の力を見せましょう。」と、ファルが言った。

「ファル、何か出来るのか？」と、ステラは訊いた。

「幻霊族の力、それは、清霊の鎮め^{せいれいしずめ}の力。」

ファルはそう言うと、手に赤黄色に輝く法器を現し、それを顔の前で両手で横に持った。それから念じるようにしてから腕を広げ頭

上に掲げ、下に扇あおぎ下ろした。

すると、空間の一部が割けそこから光の渦が竜巻のように辺りの瘴気を巻き込み吸い込んでしまった。そして、割れた大地がたちまちのうちに閉じた。

「これが清霊の鎮め、ルシフェル。」

「す、すごい。すごいよ、ファル。お前にこんな力があつたなんて。」と、ステラは喜びに満ちた顔で言った。

「ウフフ。ちよつとしたもんでしょ。」と、ファルはウィンクして言った。

「ちよつとしたもんどころか。皆が救われたぞ。ありがとう、ファル。」

「いえいえ、どう致しまして。」と、ファルは笑顔で言った。

死闘

死闘

サムン・マールムに体に乗っ取られているハンブラは、ファルによつてマグナアタを封じられて口惜しそうにしていた。

「おのれ、幻霊にこんな術が使えるとは思つてなかったぜ。少し見くびつてたようだ。それでは、本気で戦わせてもらうぞ。」と、ハンブラは言った。

ハンブラは抜剣して構えた。そして、地面を一蹴りしステラに突進して行く。ステラは剣筋を巧みにかわしていく。ハンブラはステラの死角を作ろうと攻撃するが、ステラの動きが速すぎて死角が来ない。そのうち、ハンブラのほうが打ち疲れてしまった。

「くそお。このハンブラの動きではステラの動きに付いて行けない。」と、サムン・マールムは思った。「この肉体を選んだのは失敗だったか。」

「サムン・マールム。どうやら、ハンブラの肉体の持つ運動能力はお前が乗っ取っても変わらないようだな。」と、ステラが笑いながら言った。

「どうやら、接近戦はこの体では無理のようだ。仕方ない。打つ手を変えよう。」

そう言うつと、ハンブラは両手を体の前で上下に組み合わせると、腕をそれぞれ逆に回転させた。すると、空間が引き割かれ、それが球体となってステラを襲った。

「なんだ、これは！なんか、当たったら、やばそうぞ。」と、ステラは攻撃をよけながら言った。

「これは亜空間攻撃だわ。これに当たると、亜空間に引きずり込まれるよ。」

「なるほど、得意の空間攻撃か。」

「だったら、こっちもいくぜ。」と、ステラは言うのと球体攻撃をうまくかわしながらハンブラとの間合いを徐々に詰めて行く。

ステラの拳がハンブラの腹部を捉え、彼が痛みで体を縮めたところを右の膝蹴りを顔面に打ち込んだ。ハンブラも剣でステラを捉えようと斬り下ろしたが、ステラは彼の左側に素早く回りこみ左腕の攻撃を封じた。

「フフフフ。ステラ、そんな手ぬるい攻撃ではワシを倒すことは出来んぞ。」

「ステラ、遠慮はいらねえ。そいつを斬り殺してしまえ。」と、ドルスが言った。

「アイル、ステラが攻撃している間に、奴に止めを刺すんだ。」と、ティグリスが言った。

「あいよ。まかせといて。」と、アイルは言った。

「そうはいかすか。これでどうだ。デイメントモリ。」と、ハンブラが叫んだ。

ハンブラは両手を体の前で合わせ、何かを念じている。

「うわあ。あああああ！」と、ステラが身悶えしだした。

「どうしたの。ステラ。」と、ファルがステラの様子がおかしいのを心配して言った。

「心が苦しい。頭がおかしくなりそうだ。」と、ステラは汗をたらしながら、苦しんでいる。

「ステラに何をしたの!？」と、ファルが叫んだ。

「フフフフ。ワシの精神攻撃だ。奴はこのまま放っておくと、やがて悶死する。」と、ハンブラは勝ち誇って言った。

「ステラ、しっかりして。頑張つて、ステラ!」と、ファルは人間の姿になってステラを抱きかかえた。

「よし、今だ。」と、ハンブラは言いながら、亜空間攻撃を繰り返そうとする。その時、アイルがハンブラに噛みついた。

「うぎゃあああ!」と、ハンブラは叫んだ。

すかさず、ティグリスもハンブラの足を噛み砕く。

ドルスを始め、トリーキンダーの仲間たちも攻撃態勢を整えている。

「おのれえ。貴様ら、お前にもディメントモリをお見舞いしてやるぞ。」と、ハンブラはアイルに向けて手を合わせて、念じ始めた。その時、ドルスを始め、十人の仲間たちがハンブラに斬りかかり、彼の攻撃を封じようとする。

「ファル、ステラが持っているパージレットを使え。それで彼は元に戻るはずだ。」と、ティグリスが叫んだ。

「パージレット？この腕輪のこと？」と、ファルは訊いた。

「そうだ。それは仙獣族に伝わって来た秘宝、癒しの腕輪だ。持ち主を守護してくれるはずだ。」

「これにそんな力があつたなんて。でも、どうやって使えばいいの？」

「腕輪は真ん中で分解出来るようになってる。片方をファル、君の腕にはめるんだ。」

「分かったわ。」ファルはそう言うと、腕輪の中央のところを少し回してみた。すると、腕輪が中央で二つに分かれた。片方を自分の腕にはめると、ファルの細めの腕にぴったりのおおきさになる。

「そうしたら、彼の腕を取り、君のパージレットと彼のを合わせろのだ。」と、ティグリスが言った。

ファルは言う通りにした。すると、二人を光が包み込みファルは自分の体と心が軽くなったような感覚に包まれた。驚いたことに、それまで苦悶に満ちたステラの表情が次第に穏やかなそれに戻っていく。

「ティグリス、ステラが元に戻っていくわ。もう大丈夫みたいよ。」と、ファルは喜びに顔を輝かせて言った。

「よし、彼が回復するまで俺たちに任せろ。」と、ティグリスは言うと、トリーキンダーの加勢に向かった。

しかし、トリーキンダーは皇帝の敵ではなかった。皇帝は幻獣を召喚し、トリーキンダーを寄せ付けなかった。アイルはトリーキン

ダーが幻獣を引き付けている間に、皇帝との格闘に傷つきながらも奮戦している。

「ステラはハンブラの身体を持った皇帝を攻撃出来ない。このままでは皇帝に致命傷を負わせることは出来ないわ。何とか、ダメーシを与えていかなければ、勝つことは無理だ。」と、ファルは思った。

ワタマ親衛隊

「何だと！西域方面の部隊が壊滅しただと。」と、ワタマ女王マル・ラクリマは怒気を含んで言った。

「はい。今までに調査で分かったところでは見たこともない戦士によつて、次々と倒されたようです。体が青い光に包まれ、瞳は碧光を帯び、髪は銀髪だったとか。いろいろと証言に相違もあります。が、共通する特徴をあげるとそんなところです。ただ、そのような兵士は今までに発見例がなく、どの種族の特徴にも見られず、また行方も皆目分かっていません。」と、宰相グラキエスは説明した。

「その兵士の発見を急げ、似ている者があれば全て抹殺しろ。おのれ、これでは私たちの計画も水泡に帰す。ああ、ワタマが滅びる。」と、女王は涙を流しながら言った。

「親衛隊の出動が必要かと思われます。どうぞ、ご認可頂きたいと思ひます。」と、グラキエスは言った。

「そうだな。親衛隊メルセスの出動を許可する。かまわん、アルビトリウムを恐怖に陥れる。見てるがいい。メルセスの恐ろしさをアルビトリウムの者たちに味合わせてやれ。その青い光の兵士というのもそれに釣られて現れよう。」女王はそう言つと席を立ち、自室へと向かった。

皇帝死す

皇帝死す

「どうした。ドルス、ワシに手を触れることすら出来んのか。こんなに弱い統士の元で働いていたかと思うと、我ながら情けなくなるわ。」と、ハンブラは言った。

「強くなりたいために自分の体を売り渡すとはお前も落ちたもんだな。そんな奴はトリーキンダーには不要だ。」と、ドルスは言った。

「あははは。トリーキンダーなどという小さな組織にはもう用はない。ワシには世界が待っている。」

「お前は昔から大きなことを言っつて、実現した例がない。今回もそうだ。お前は世界など手に入れることは出来ん。」

「そこまで言うなら、ワシを倒してみろ。ワシに手を触れることさえ出来ない奴に、そんな説教をたれる資格はない。」

「それなら、俺と勝負してみる。」と、ティグリスが叫んだ。

「なんだと。お前も同じだぞ。ワシを倒すことは出来ん。」と、ハンブラは笑いながら言った。

「それはどうか。俺の力を侮るなよ。アイル、俺の背中に乗れ。共に奴を倒すんだ。」と、ティグリスはアイルを促した。

「あいよ。あたいたちの親父の仇をとってやるわ。」と、アイルは法杖を斜に構えて態勢を整えた。

ハンブラは二人に向かって火炎弾を放った。ティグリスは左右にかわしながら、ハンブラに詰め寄る。そして、爪の届く範囲まで寄った時、ティグリスは両脚をハンブラの顔目掛けて飛び掛かろうとする。だが、ハンブラはそれを右にかわす。同時に剣でティグリスの脇腹を刺そうと剣を繰り出す。

「そうはさせないよ。」アイルは言いながら、法杖で剣筋をそら

した。

「フフフフ。なかなかやりおるな。だが、この攻撃をかわすことは出来んぞ。」

そう言うと、剣を体の脇に構え薙ぎ払った。すると、剣から黒い炎の渦が二人に向かって放出される。その時、光刃の束が渦をかき消した。

「なに！」と、ハンブラは叫んだ。

ようやく回復したステラがエクリクスでルーメンエッジを放ったのだ。

「うぐっ！」と、ハンブラは何かを喉に詰まらせたような声を発した。

ドルスが妖獣の攻撃をかわしながら、いつの間にかハンブラの間に合いに入り込み彼の脇腹に仲間から借りた槍を突き刺していたのだ。

「お、おのれえ……よくも……よくも……」と、ハンブラは呻いた。

「これで終わりだ。ハンブラ死ぬ。」と、さらにもう一突きしながらドルスは言った。

「うっ……」と、ハンブラは最後に小さく呻くと動かなくなった。

そして、ハンブラの体が緑色の炎に包まれ、再び起き上がると、

「ハハハハハ。アハハハハ。こうなったら、お前たちもろともこの世界を終わりにしてくれるわ。」と、ハンブラは物凄い形相になって言った。

ハンブラが手を体の前で平行に立てると、その手と手の間から黄色に光る玉が現れた。

「さあ、行くぞ。これで世界は終わる。」

そうハンブラは言うと、その光の玉を空に向けて放出した。その玉はやがて見えなくなった。

「一体、何をしたんだ。今のは何だ。」と、ステラが言った。

「アハハハ。ワシの究極の召喚術、こうてん荒天使いだ。もう、終わ

りだ。世界は『月の天井』に呑み込まれるだろう。アハハハ・・・
うっ！』と、ハンブラは言いながら息絶えてしまった。

ハンブラの体から緑の火の玉が出て言ったのを見て、ステラはイグニートテクスでその火の玉を焼失させた。

「やったぞ。とうとう、皇帝を倒した。ドルス、お前のおかげだ。
」と、ステラは笑顔で言った。

「まあ、ハンブラは俺の部下だった男だ。俺が始末するのは当たり前前だ。」

ドルスはハンブラの残体を見ながら悲しそうな目をした。

「だが、奴が最後に言った言葉が気になる。『荒天使』とか、『月の天井』とか言ってたな。一体、何なんだ？』

空を見上げると夕暮れの紅がさし始め、地上にも美しい彩を投げかけていた。

再会のフェミナ

第十章 最後の戦い

再会のフェミナ

「フェミナ。長いこと、会いに行けなくてすまなかった。」

ステラは無事に姉を救い出して、今は諸族の城の諸族回復活動の宿舎にいた。ティグリス、アイル、ドルスたちはしばらくステラたちを二人きりにしてあげようと他の部屋で待機していた。

「ううん。あなたが無事ならそれでいいの。私のミスで皇帝に捕まってしまったわ。ごめんなさい。」と、フェミナは申し訳なさそうに言った。

「いいんだ。私をもっと早く気が付いていれば、こんなことにはならなかった。だが、皇帝も倒すことも出来た。これでひとつ脅威がなくなった。だが、まだワタマがいる。彼らに姉さんを捕まえられたら大変だ。姉さんをこれから安全な場所に連れいてく。永泰仙えいたいせんの峡谷に。」と、ステラは言った。

「永泰仙の峡谷・・・それはどこ？」

「人族の地の西側にある巨大な峡谷だ。そこに永泰仙と呼ばれる俊英しゅんえいが住んでいる。そして、私とは昔からの友人で信頼できる者だ。そこなら、ワタマもやって来ないだろう。来たとしても、永泰仙の強力な結界で居場所を突き止められないはずだ。」

「分かったわ。あなたの言う通りにする。ステラ、決して無茶はしないでね。あなたが心配よ。」と、フェミナはステラを見つめながら言った。

「大丈夫さ。安心して戻るのを待っていてくれ。これがおそらく最後の戦いになるだろう。」と、ステラは真剣な口調で言った。

仲間たち

仲間たち

ステラはテイグリスたちが待つている部屋に入ると、

「ドルス、今回はお前に助けられた。礼を言いたい。ありがとう。」と、ステラは言った。

「今回は俺の部下の不始末の後片付けをしたまで、礼を言うには及ばん。俺はずっとお前の命を狙っていた。いつかは決着を付けたと思っていた。だが、俺はお前が諸族と戦わない理由を今度の戦いで知った。戦えない相手に剣を構えるほど俺は落ちぶれてはいない。もう、お前を追いかけるのは止めることにした。お前にはまだやるべきことがあるようだが、お前は自分のやるべきことをやれ。そして、必ず成し遂げるんだ。」と、ドルスは言った。

「ありがとう、ドルス。お前からそんな言葉をもらえるなんて思ってもいなかった。私の闘いはこれからだ。お前の気持ちをうれしく思う。」と、ステラは言った。

「でも、これからどうするんだい？」と、アイルは訊いた。

「ひとまず、フェミナを安全なところに匿かくまうことにした。そして、ワタマとの最後の戦いに臨むつもりだ。アイル、お前はもう父の仇は取ったのだ。仲間の元に帰るんだ。」と、ステラは言った。

「何言ってるんだい。あたいの仲間はあるたちさ。これからが大変だと言うのに、ここでお別れなんて出来ないよ。」

「お前もワタマの強さを知っているだろう。これから戦う相手は今までのどの敵よりも強い。そんなところにお前を巻き込むわけにはいかない。」

「あたいは親父の仇を取っただけで満足さ。もう思い残すことはないよ。ワタマは諸族の敵だ。あたいもあんと戦って死ぬんなら本望さ。あんたがダメだと言ったって、あたいは付いて行くよ。」

と、アイルは必死になって言った。

「兄貴、アイルは一度言い出したらきかない性格だ。どうだ、一緒に連れて行ってみては？」

「うーむ。仕方ないな。あんまり気は進まないが、アイルの気の済むようにしてくれ。」ステラは根負けして言った。

「やったあ。ありがとう、ステラ。」と、アイルは喜んだ。

永泰仙

永泰仙

ステラたちは永泰仙えいたいせんの峡谷にある大きな森林の中に入って行った。その奥にある大木の近くに永泰仙の住む小さな館があるのだ。そこはきれいな花々に囲まれていて、ここだけが何か別の空間のように感じられた。館の近くできれいなストラというドレスを着ている女性がいた。

「久しぶりだな、永泰仙。」と、ステラが言った。

「あら久しぶりね、ステラ。」と、その女性が応えた。

「え？このきれいな人が永泰仙なの？」と、アイルが驚いた。

「そうだよ。」と、ステラは言った。

「なんと。もっと、年取った爺さんだと思ってた。」と、アイルはその女性を見つめながら言った。

「これこれ、またアイルのわるいくせだ。失礼なこと言うんじゃない。」と、ティグリスがたしなめる。

「ああ、またやつちゃった。ごめんなさい。」と、アイルが謝った。

「ウフフフ。いいのよ。最初は皆そう思うらしいわ。気にしないでね。」と、永泰仙は言った。

「ところで、永泰仙。今日来たのは、お前に頼みたいことがあるからなんだ。」と、ステラが切り出した。

「あら、何かしら？」と、永泰仙は不思議そうに言った。

「私の姉をしばらく預かって欲しいんだ。」

「ステラにお姉さんがいたなんて知らなかったわ。」

「まあ、今まで誰にも話したことなかったからな。だが、事情があつて秘密にしておけなくなったのさ。他に隠すところもなく、ここに匿かくまってもらいたいと思ったのさ。」

「私のほうは構わないわよ。ここはめったに他の者が来ないから、安心して大丈夫よ。」

「すみません。よろしくお願いします。」と、フェミナは挨拶をした。

「こちらこそ。よろしくです。」と、永泰仙は言った。「ステラにこんなきれいなお姉さんがいたとはね。」

「ほんとよね。あたいたちもついこの間知ったばかりで、びっくりしたわよ。」と、アイルが言った。

「まあ、面目ない。別に騙すつもりはなかったんだ。やむを得ない事情つてやつさ。」と、ステラは頬ほおを掻きながら言った。「ところで、永泰仙。訊きたいことがあるんだ。」

「なにかしら?」

「うん。実はサムン・マールムを倒した時に、奴が妙なことを最後に言ってたんだ。'荒天使'とか'月の天井'とかつて。一体、どういう意味があるのかわかって思ってた。」

「'荒天使'・・・'月の天井'・・・。」そう呟くと、永泰仙の表情は急に驚愕きょうがくに変わった。「ステラ、どうやら皆お仕舞いらしいわ。世界の終わりよ。」

空が厚い黒雲に覆われ、嵐を思わせる強い風が吹き始めていた。

荒天使いの伝説

荒天使いの伝説

最初はポツポツと降っていた雨も次第に雨脚が激しくなってきた。「とりあえず、中に入りましょう。」と、永泰仙は皆を館の中へ誘った。

皆は黙ってただ頷き、永泰仙の後に続いた。

館の中にはいると、大きな広間があり、綺麗に磨かれた石張りの床と美しい花々が飾られていた。永泰仙は広間を通り過ぎ、奥にある扉へと向かった。扉を開けると、中は客間らしく中央にテーブルが置かれその周囲には長椅子がいくつも置かれてあった。永泰仙は皆に椅子に座るように促し、自分は扉から出て行った。

しばらくすると、人数分の飲み物を持って現れた。それらを皆に配り終わると、静かに話し始めた。

荒天使い、というのは天上界に住む荒神なの。それは普通は地上界に干渉することはない。だけど、もしその神が地上界に降りて来たらこの世界に破滅をもたらす。それが、月の天井、と言われる魔術なの。アルビトリウムにはもう忘れられてしまったけど、荒天使いにまつわるいくつかの詩が残されているわ。

星々が鼓動をとめた夜空に

月の天井が現れたとき

その息遣いはすべてを

呑み込むかのよう

気を付けなさい

その目を見てはならない

気を付けなさい

天破埋没の口があいてるよ

荒天使いが唄ったら

覚悟を決めるがいい

息づく者たちの墓場

月の天井が舞い降りて来る

ああ、全ては水の波紋のように

瞬く間に消えて行く

この荒神がもたらす、月の天井、は、天破埋没、によつて、次元を歪曲させるの。分かり易く説明するわ。一枚の紙がこの世界だと仮定しましょう。それは二次元の広がりを持つているわよね。それを丸めて行くと表と裏が合わさりながら、三次元的に歪められていく。二次元に知的生物がいたとしたら、三次元という世界を認識することは出来ないの。上下に広がりを持つ立体空間を通常では認識出来ないからね。このことが私たちの三次元世界で起こるのよ。私たちはアルビトリウムとマテリアが表裏一体となった世界に住んでいる。それが四次元的に歪められるということなの。裏も表もなくなり、あらゆる時間がひとつところに集められる。それが、天破埋没、なの。つまり、あらゆる法則が通用しなくなり、生物の認識では理解出来ない世界が出現するの。もちろん、生きていらればの話よ。だけど、そんな世界ではおそらく誰も生きていられないでしょうね。体さえ中と外、上と下、前と後ろがなくなり、生物としてのあらゆる生態がめちゃくちゃになってしまふから。あらゆる意識はその空間の中で分散され、混沌に？み込まれてしまふ。

そんな・・・なんで、そんなことが起こるんだ？

おそらく、サムン・マールムは太古からこの世界に生きていて、
'荒天使い'とどこかで接触をしたことがあるんでしょね。'荒

天使い'は滅多なことでは契約に応じないはずなの。だけどサムン・マールムは自分の死が訪れた時、召喚出来る権限をもらっていたんだわ。

止める方法はないのか？

それは私にも分からない。おそらく私たち地上界の者では止めることは出来ないかもしれない。ただ'荒天使い'は召喚されてから、この地上界に降りてくるまでに、しばらく時間がかかるはず。その間に何か打つ手が無いか調べてみるわ。何か分かったら、すぐに知らせる。

頼む。皆を救えるなら、どんなことでもしよう。

ステラ、あなたに指輪を渡しておくわ。この指輪は私の力の欠片と血で作られているの。この指輪が赤く光った時、私が会いたいという合図だと思ってね。何か分かった時はこれで知らせるから。

分かった。永泰仙、何とかいい方法を見つけてくれ。私たちはこれから人族のところに向かい、仲間たちにこのことを知らせることにする。

ステラたちはフェミナを永泰仙に預け、峡谷を後にした。荒天使いとワタマ、いずれにしても世界にとって暗い未来をもたらす事態に仲間たちの心理にも影を投げかけてくる。だが、どちらも避けて通るわけにいかない。ステラたちはカオルが待ち受ける場所へと急いだ。

迫る暗影

迫る暗影

アルビトリウムはその九割が海域に覆われている。そして、残り一割の陸地には三つの大陸が存在している。すなわち、最大とされている麗しの大陸、静かの大陸、想森そうしんの大陸である。ワタマには百人隊という外地占領を目的とする軍隊がある。その当初の計画では、麗しの大陸には四十人、静かの大陸、想森の大陸にはそれぞれ十人が配されていた。そして、大陸以外の島々に残り四十人を派遣していた。そして、麗しの大陸に配された四十人は大陸を二分する骨片の土漠を境に西域に三十人、そして東域には十人が当てられていた。しかし、東域にはフェエミナがいることから当面は実質的な攻撃を避け、骨片の土漠に存在する妖獣国家群を襲撃と東域の監視のみに任務を限定していた。だが、麗しの大陸の西域方面の部隊が壊滅したことを受け、ワタマ女王は親衛隊メルセスを麗しの大陸に差し向けると共に、各大陸と島々に派遣している部隊の一部を割いて麗しの大陸の完全制覇とフェエミナ搜索に全力を上げることが命じた。

こうして、ワタマの当初の計画は暗礁に乗り上げることとなり、麗しの大陸は騒乱の渦中に巻き込まれることとなった。ステラたちはまだその事実を知らなかった。

孤独な戦士

孤独な戦士

シンジとハルカはカオルがいる桜花村の仮設宿舎にいた。

「以前来た時よりも随分いろいろなものが増えあがって来てるわね。人族はここに新しい城を建設するつもりなの？」と、ハルカは訊いた。

「そうらしいわ。ここは高地にあるし被害も少なかったことから城砦には適していると言う人が多くてね。長老修道会も皆の意見を入れて、ここに新城砦を建てることに決まったの。でも、何にもないところからの出発だから城らしくなるまでには、まだ相当な時間が掛かるでしょうね。」と、カオルは答えた。

「そうね。でも、新しい城なんて素敵ね。なんか期待しちゃう。」と、ハルカが言った。

「でも、エルフ族の支援はほんとにうれしいことだわ。いつまで滞在する予定なの？」

「その地の復興の目処が着くまでの間、滞在してもいいことになっているの。だから、しばらくはいられると思う。」

「それはよかったわ。二人と一緒に働けるなんてうれしい限りよ。」と、カオルは笑顔で答えた。

「ところで、マモルとはまだ連絡つかないのか？」と、シンジが訊いた。

「この間ね、彼と会ったわ。でも、もうマモルじゃなかった。彼は記憶と力を完全に取り戻してステラになっていたの。」と、カオルは答えた。

「そうだったのか。戻っていたのか。とにかく、無事で良かった。」と、シンジが言った。

「うん。でも、なんか寂しい気持ちもするわ。なんか以前と比べ

て変わっちゃって、マメルらしくなくなっただけという感じもしてね。」と、カオルは少し落ち込み気味に言った。

「そうなの。でも、無事でいてくれてこんなにうれしいことはないわ。」と、ハルカが言った。

「うん。私も安心した。どんな風が変わろうと、彼は彼なんだし、この世界を救えるのは彼以外にいないんだもん。新たな敵もいるらしいから、彼は強くなってもらわないと皆の期待に応えられない。」

「新たな敵って、何だ？」と、シンジが訊いた。

カオルはステラから聞いたワタマのことをハルカたちに説明した。

「そんな奴らがいたのか。だけど、いくらステラが強いと言ってもそんな奴ら相手に一人で戦うっていうのは無理があるんじゃないのか？」と、シンジが言った。

「うん。でも、彼以外に彼らと対等に戦える者がこの世界にはいないのも事実よ。」と、カオルは深刻な表情で言った。

「でもさ、一体そいつらは全部でどれくらいいるんだ？」と、シンジは言った。

その夜、カオルは夢を見た。ステラが暗闇の中でファルと共にいた。そして、二人はカオルのほうを見て泣いていた。それはカオルに別れを告げているような、そんな感じの表情だった。しばらくそうしてお互いに見つめ合い、やがて二人はその暗闇の中に向かって飛び去って行った。

目が覚めても、カオルは見た夢をはっきりと覚えていた。そして、一人呟いた。

「これはこれから起こることを暗示しているの？」

ワタマとトリーキンダー

ワタマとトリーキンダー

静かの大陸から麗しの大陸へと緊急移動させられた百人隊は五人だった。そして、その五人が今、大東原の諸族の城跡でフェミナ の消息を追っていた。当然、諸族回復活動のメンバーと接触すること となった。

「この辺りでフェミナという女性を見かけなかったか？」と、百 人隊のメンバーの一人が活動中の者たちに向かって話しかけてきた。 「あんたら誰だ？名前も名乗らん奴に何も教えてやるつもりはな い。」と、活動中のメンバーが言った。

「フフフフ。虫けらに教えてやる名前はないな。訊いたことにお となく答えたほうが身のためだぞ。」と、百人隊のメンバーが言 った。

「虫けらだと！？お前ら痛い目に合いたいのか。俺はトリーキン ダーに所属している者だ。」

「なんだそれは、そんな名前など知らんな。痛い目に合うのはど っちか試してみるか。いつでも掛かって来い。お前に合わせて剣で 勝負してやるう。」百人隊のメンバーは剣を抜いた。

「くそつたれ、なめやがって！」と、トリーキンダーのメンバー は言いながら剣を抜いた。

彼は百人隊のメンバーに刺突しに行くが、軽く受けられてしまう。 すかさず回転しながら、薙ぎを入れるが百人隊のメンバーが彼の懐 に飛び込み、剣の持ち手に拳を入れ、剣を落とさせる。

「ぐあああ！」と、トリーキンダーのメンバーは激痛のあまり叫 ぶ。彼の腕はあらゆる方向に曲がっていた。骨が折れてしまっている。

「フフフフ。どうやら、もう剣は使えんようだな。そんな腕なら もういらんだろう。」と、百人隊のメンバーは言いながら、彼の腕

を剣で斬りおとしてしまった。

「うぎゃあああ！」と、トリーキンダーのメンバーはのた打ち回った。

「どうだ。教える気になったか？」

「やめる。一体何をやってる！？」と、ドルスが騒ぎを聞き付けて走って来た。

「どうやら、助けられたな。片腕一本で済んで良かったな、虫けら。」と、百人隊のメンバーはほくそ笑みながら言った。

「お前たちは何者だ、ここで何をやってる！？」と、ドルスは怒気を含んで言った。

「質問するのは俺たちのほうだ。お前たちはただ答えればいい。フェミナという女性の行方を追っている。知っている奴はいないのか？」

「彼女はここにはいない。」と、ドルスは言った。

「なんだと。その口振りからすると、ここにいたのは間違いないようだな。どこに連れて行かれた？」

「それは俺たちも知らない。」

「だが、妙だな。お前たち皇帝と会ったのか？」

「皇帝は死んだ。」

「なに！？サムン・マールムが死んだだと？」

「ああ。俺たちが倒した。」

「あははは。冗談はよせ。あいつがお前たちのような虫けらに殺されるわけがなかるう。」と、百人隊のメンバーが笑った。

「本当だ。まあ、俺は止めを刺したただけだが、ステラという強い戦士とその仲間たちが加勢してくれたおかげで倒せた。」

「なに？ステラだと。すると、フェミナを連れていったのは奴か。奴はどこに行った？」

「それは俺も知らん。」

「本当だろうな？」と、百人隊のメンバーは探るような目つきで言った。

「本当だ。」と、ドルスは真実を言った。

「どうやら本当のようだな。おとなしく教えてくれたご褒美に今日はここを破壊せずにおいてやる。まあ、いずれはここも焼け野原になるがな。」と、百人隊のメンバーは言っていると、立ち去ろうとした。

「待て。お前たちはワタマとかいう奴らなのか？」

「まあ、それくらいは教えてやってもよかるう。そうだ。俺たちがワタマだ。いずれはこの辺りも俺たちのものになる。覚えておくがいい。」

そう言っていると、五人のワタマたちは赤い光に身を包みどこへともなく飛び去って行った。

秘話

秘話

ステラが桜花村おうかむらに着いた時、シンジとハルカは既に復興の手伝いに参加していた。ステラも二人がいることに驚いた。だが、仲間たち全員にこれからこの世界で起こることを伝えることが出来るのでステラにとっては都合が良かった。シンジとハルカはかつてのマモルと現在のステラの姿が変わっていることに驚いていた。ステラはそれほど以前と比べ様子がより戦士らしく、そして凜々しくなっていたのだ。彼はカオルたち三人に、'荒天使'と、'月の天井'について自分が知っている限りのことを教えた。三人は絶望の表情を浮かべて聴いていた。だが、現在のところそれに対して何の手立てもない以上、どうすることも出来ない。とりあえずワタマの脅威をこの世界から一掃することがステラに課せられている使命だと皆も納得した。

カオルはハルカから二人きりで話がしたいと、呼び出されていた。カオルは作業が終わってから、ハルカとの待ち合わせ場所に向かった。その場所は桜花村から少し離れたところにある人気のない場所だった。

「ごめんね。突然呼び出したりして。」と、ハルカが言った。

「ううん。別にこれといった用事もないし、気にしないで。」と、カオルは笑顔で言った。「ところで話してなに？こんなところで話さないといけないことなの？」

「あまり人に聞かれなくなかったし、ゆっくりと二人で話したかったの。」

「そう。じゃあ、久しぶりに姉妹だったころみたいに語り合いましょう。」と、カオルは喜んで言った。

「そうね。こんな時間はこの世界に来てからは滅多になくなったもんね。カオルが樹海城に使いで来た時以来かな。」

「うん。後は何かと忙しくて、心を割って話すような状態じゃなかったからね。」

「じゃあ、早速本題に入るね。実はね、私さ、この世界に来てから間もなく少しだけ過去の記憶を取り戻していたの。」

「え？そうだったのね。知らなかった。」と、カオルは少し驚いた表情になった。

「このことはカオルにはどうしても言うわけにはいかなかったの。」と、ハルカは少し俯うつむきながら言った。

カオルはこの時、それがどういう意味かを察していた。

「そう・・・なの。」と、カオルも少しハルカから視線を逸らした。

「私ね。ステラのこと好きなの。愛してるのよ。」ハルカは涙を浮かべていた。

「うん。何となく・・・ううん、実はそれはずっと前から私知っていたの。」

「え？」と、今度はハルカが驚いた。

「実はステラと再会して間もなく彼とファルが過去の私たちについて話していたことを偶然立ち聞きしてしまったの。その時の話でハルカがステラのことを好きだったという話をして、その時に始めて知ったの。」と、カオルも涙を流しながら言った。

「あれをカオルも聞いてたの？私も実を言うとそれをやっぱり偶然に立ち聞きしていたのよ。」と、ハルカはカオルのほうに顔を向けながら言った。

「エエツ！何で気がつかなかったのかしら・・・でも、あの時は私も話の内容があまりにもショックで周りのことにあまり気を配ってなかったからかな・・・」と、カオルもハルカを見返して言った。

「ウフフフ。それは私も同じだった。過去の気持ちのことは思い出せても、実際どんなことがあったかなんて知らなくて、自分の過

去に驚かされていたから・・・」と、ハルカは苦笑して言った。

「そうか。それじゃ、お互い様だね。」と、カオルは少し間をおいてから「でも、私の場合はただ驚いただけじゃなくて、マテリアでステラとは付き合っていたという事実があつて、それが過去の自分はそうじゃなくてハルカもファルも同じ気持ちでいたことを知つて、そつちのがシヨックで実際怖くなつた。過去に怯えていた。そして、ステラがいつ自分から離れていってしまうかということが一番怖かつた。」と、カオルは涙で顔がびしょ濡れになっていた。

「そうよね。カオルにとっては私よりも辛い思いだつたらうと思つよ。あなたはかわいそうだつて、その時思つてたの。」と、ハルカはカオルに同情しながら言った。

「うっ・・・」と、カオルは嗚咽に喉を詰まらせながら、「でもね・・・つく・・・それも・・・もうおしまい。わあああ。」カオルはとうとう泣き崩れてしまった。

「どうしたの、おしまいってどういうこと？」と、ハルカはカオルを抱きかかえるようにして言った。

カオルは嗚咽が止まらず、話が出来る状態になるまでしばらくかかつてから、

「ステラはもう記憶を取り戻してしまった。私を愛してない過去を思い出してしまった。彼はおそらくファルを愛している。だから、もうおしまいなの。」と、カオルは顔を覆いながら言った。

「そ、そんな・・・本当なの？ファルを・・・カオル・・・どうして・・・あなたがそんなかわいそうなことになつてるなんて知らなかつた。」と、ハルカも涙で頬を濡らしていた。

しばらく二人は抱き合うようにして、ハルカはカオルの頭を撫でながら彼女の頭に頬を当てていた。

大木の梢がそよ風の中で揺れながら、二人の悲しみを和らげようと話しかけているようなサワサワという優しい音を奏でていた。

ケラススとの再会

ケラススとの再会

その夜、ステラはケラススに会おうと彼女のいる桜花村へと向かった。村は以前と全く変わっていないかった。

「ここはいつ来ても落ち着くところだな。」と、ステラは思った。彼は村に入るとアルビトリウムに最初に来た時に滞在していたケラススの家へと向かった。久しぶりに見たその家に彼は何か郷愁に似たものを感じた。ここに来て最初に目が覚めた時に見たこの世界にある事物を今でもはつきりと思い出せた。何もかも新鮮味をもって眺めていたあの頃。まだ何も分からず、戦い方も知らずにいたあの頃。まだここに来て数年にしかならないのに遠い昔のことにように感じられる。ステラの肩に座っているファルも同じ思いかもしれないな、とステラは思った。

ケラススの家が見えてきた。彼女が家にいるといいな、とステラは思った。家の様子はステラが来た時とそれほど変わっていないかった。比較的広い庭から玄関へと通じている通路は周りに植えられている花々によつて仕切られていた。ファルはその花を眺めて楽しんでいるように見える。玄関の前に立ち、ノッカーを叩いた。間もなく玄関の扉が開き、懐かしい顔が現れた。

「やあ、久しぶりだな、ケラスス」と、ステラは笑顔で言った。

「あら、ステラじゃない。久しぶりね。」と、ケラススは少し驚いた顔をしていたが、すぐに笑顔を返してきた。

「突然押しかけてすまなかつたな。」

「ううん。別に用事があるわけじゃないし、ちょうどよかったわ。私もカオルからあなたのことを聞いて、会いたくなって思ってたわ。どうぞ、中に入って。」と、ケラススは玄関を全開にしてステラたちを促した。

「ここに来た時は世話になつたな。あの時は記憶もなくて、実にすまないことをした。」と、ステラは照れくさそうに言った。

「ううん。気にしないで。マテリアに行つてたんだもん。仕方ないことよ。」と、ケラススは笑顔で言った。

「ケラスス、お久しぶりね。」と、ファルも挨拶した。

「ファル、久しぶり。あなたがいたおかげでステラもここに帰ってきてから随分と助かったはずよ。私もおかげで安心出来たしね。あの時は事情が事情だったからあまり話すことも出来なかったけど、今日はゆっくりしていつてね。」

「うん。ありがとう。」と、ファルは笑顔で答えた。

家の中の様子も以前と変わらず綺麗に整えられていた。ケラススに従つて家の奥へと向かつていった。案内された部屋の椅子に座り、ケラススが飲み物を取りに行つたのを待った。間もなくして、戻ってきたケラススはステラの向かいの椅子に座り飲み物をステラとファルに配った。

「どうしたの、今日は、何か私に用事でもあったの？」と、ケラススは切り出した。

「いや、特に用事と言うほどじゃないんだけど、知らせておきたいこともあったし、久しぶりにいろいろと話したかったんだ。」と、ステラは言った。

「そうなの。私もカオルがここに来た時にいろいろと話したけど、昔の仲間と話せるのってやっぱりいいわね。なんか故郷に戻った気分になつたわ。」

「そういえば、仙獣族の城皆はずいぶんとやられたみたいだな。」

「うん。そうみたいね。私ももう何十年も行つてないけど、仲間のことを思うと胸が痛むわ。」と、ケラススは少し悲しそうな顔をして言った。

「手伝いに行かなくて良かったのか？」

「うん。私は人族のところに来ていろいろと助けられてきたし、ここは私にとって第二の故郷みたいなものよ。これからもずっとこ

ここで暮らしていくつもりよ。」

「そうか。カオルも君がここにいてくれたほうがいろいろと心強いだろうし、私もそのほうが安心出来る。」

「うふふ。カオルとは昔から仲良かったし、そう言ってもらえると私もうれしいわ。」と、ケラススは笑顔で言った。

「ところでもうカオルたちには伝えただけど、お前にも伝えておいたほうがいいと思ってることがあるんだ。」ステラは少し真剣な顔をした。

「何かしら？」

「実は、この間とうとうサムン・マールムを倒したんだ。」

「ほんと？すごいじゃない、さすがステラだわ。これでこの世界も平和になるわね。」

と、ケラススはうれしそうに言った。

「だが、手放して喜べないことが起こった。奴が死ぬ寸前に召喚術を使ったんだ。それもこの世界に破滅もたらしてしまうような。」

「なに、それ？そんな召喚ってどんな奴を呼び出したの？」と、

ケラススは興奮気味に言った。

「『荒天使』ってやつらしい。」ステラは悔しそうに顔をしながら言った。

「『荒天使』・・・あんなやつをどうやって呼び出したの？あれは召喚に応じるような奴じゃないのに。」

「詳しいことは誰にも分からない。ただ、推測として皇帝は過去にその荒神を呼び出す権限を得たんじゃないかってことだ。お前もその荒神のことを知っているなら、どういうことになるか分かるのか？」

「うん。あれがこの世界に現れたら、この世界の者たちは誰一人として助かる者はいない。それどころか世界そのものが消えてしまうことになるわ。」ケラススは悲嘆にくれた顔をした。

「そうみたいだな。だが、今のところ打つ手立てが見つからない。このことをお前に知らせておきかった。知らせてどうなるものでも

ないがな。」と、ステラは両手をテーブルの上で握り締めながら言った。

「そうだね。知ったところでどうなるものでもない。ただ、ひとつだけ方法と言うか・・・いや、これは試してみないと分からないことだけど、やってみる価値があることがあるにはあるんだけど、これには犠牲が伴うからあまりお勧めは出来ないわ。」

「なんだって！？方法があるなら、教えてくれ。どんなことでもいい。可能性があるなら、試してみたい。」ステラは身を乗り出していた。

浮遊大陸の宿命

浮遊大陸の宿命

「なに、サムン・マールムが倒されたというのか？」と、マル・ラクリマは言った。

「はい。百人隊の情報によると、ステラとその仲間たちとで奴を討ち取ったということです。捕らわれていたフェミナは、ステラがどこかに連れ去ったらしいのです。」と、グラキエスは答えた。

「うーむ。ステラめ、力を取り戻したか。その後の奴の消息は分からののか？」

「はい。ただいま、百人隊が全力で捜索に当たっていると聞いています。大東原は完全に包囲するように手はずは整えておきました。いずれは見つかるものと思われませんが、女王、いかが致しましょうか？この大陸も次元閉塞がかなり切迫した状態にあるかと思われませんが、浮遊大陸総退去命令を出す時日をお取り決めにならないといけませんな。」と、グラキエスは言った。

「うむ、この大陸が永久に次元の狭間に？み込まれてしまうことは、既に数万年前から予想されていたこととはいえ、いざとなると故郷を捨てるのは忍び難いものよ。我がワタマが滅びに瀕している時に二重の痛手じゃ。それに加えてステラめが、掻きまわしよるとは・・・我らが本拠とすべき場所は大東原じゃ。退去命令を出す前にその地域に生き残っている者共を一人残らず一掃するのじゃ。ワタマの未来はこの一戦に掛かっておる。宰相、失敗は許されんぞ。」と、女王は顔つきを厳しくして言った。

「ははっ。既に親衛隊は西域地方を既に手中に取り返し、百人隊の補充部隊がその地域の監視に当たっております。これから、東域に向けて出発するはずですよ。これが成功した暁には、ワタマ大移住計画がほぼ完成することになります。全力を上げ、計画の大詰めに

出したいと思ひます。「グラフィエスはそう言つと、女王の間を退出した。

ステラたちの旅立ち

ステラたちの旅立ち

「なんで、私だけ行っちゃいけないの？ テイグリスもアイルも、そしてケラススも行くんでしょ？ 私は仲間じゃないってこと？」と、カオルはすごい剣幕で言い立てた。

「そんなこと言ってるだろ。だが、彼らには事情があって同行してもらったことになったんだ。それにカオルだけじゃない。シンジもハルカも一緒には行かないんだ。」と、ステラは言った。

「おいおい、ステラ、そんなことは聞いてないぞ。俺たちだけ置いて行くなんて、そりゃないぜ。」と、シンジが言った。

「そうよ。私も納得出来ないわ。私たちも連れて行きなさいよ。」と、ハルカも抗議した。

「ちよつと、そんなこと言ったって、もう決めてしまったことなんだ。それに命の保障は出来ないんだぞ。」と、ステラは必死になつて言った。

「まあ、三人の気持ちも分からないではないな。どうだ、ステラ三人も一緒に連れて行っては？」と、テイグリスが言った。

「テイグリスまでそんなこと言って、参ったな。」と、ステラは困惑顔になつて言った。

「じゃあ、こうしたらどう？一緒に連れて行くとして決して無理はしない。自分には無理だと分かった時点で即刻メンバーからはずれて帰還する。その際は誰も文句は言わないっていうのはどう？」と、ケラススが言った。

「うーむ。仕方ないな、いいか絶対に無理するんじゃないぞ。ほんとに今までの敵とは質が違うんだ。戦闘のプロ集団で、しかも殺戮を何とも思わない奴らなんだ。」と、ステラは厳しい顔になりながら言った。

「やったあ。そう来なくちゃ。」と、カオルは笑顔で言った。

「俺もそれでかまわないぜ。」と、シンジが言う。

「ステラ、決して邪魔にはならないようにするからよろしくね。」
と、ハルカが言った。

「じゃあ、出発の準備を整えてくれ。明日出発することにする。」
と、ステラは言う。と自分の宿舎へと帰って行った。

ステラは外にでた時、ふと空を見上げた。月の色がほのかに赤く染まっていることに気が付いた。

「『荒天使』が来るのもそう遠くないはずだ。」と、ステラは
呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8972t/>

アルビトリウム

2011年10月9日07時54分発行